

蠶業家文彙  
上



A
3
125

紅印  
蘇州府衙門



自序

今ヤ宇内ノ大勢ヲ觀察シ來レハ、博愛慈善ヲ説クノ宗教アリ、人權擁護ヲ論スルノ法律アリ、陽ニハ宇内一家ヲ装ヒ、四海兄弟ヲ唱フト雖トモ、而モ陰ニハ虎吞狼嚙、苟モ隙ノ以テ乘スヘキアレハ、無名ノ師ヲ興シ、不義ノ利ヲ貪リ、弱者ノ肉ハ强者ノ食タル滔々是レ然矣、當是時强者ノ權力ヲ握リ、優者ノ位置ヲ擅ニシ、宇内ニ雄飛シテ而モ列國ノ侮蔑ヲ被ラサルモノ、夫唯富國強兵ノ四字ニ存矣、然リ而シテ富實ハ一國實業ノ發達ニ因テコレヲ得、強兵ハ富實ノ増進ニ因テコレヲ得ヘシ、嗚呼今ヤ我邦新勝ノ餘勢、世界ノ強國ト譽キ並ヘテ競走場裡ニ上レリ、然リ、既ニ競走場裡ニ立ツ、勝テハ則チ愈々嫉忌セラルヘク、敗レハ則チ益々侮蔑ヲ被ルニ至リ、勝敗何レカ世界ノ反目嫉視ヲ免カルヘケムヤ、於是乎一國



ノ威嚴ヲ保チ、同等ノ權理ヲ全フセント欲スルモノ、宜シク  
富強ノ根蒂ヲ培養セサルヘカラス、果シテ然ラハ、我邦富強  
ノ根蒂コレナ何ニ求ムヘキヤ、曰ク宜シクコレヲ蠶業ニ求  
ムヘシ、吁嗟蠶糸カ我邦輸出品中第一ノ價值ヲ占有スル、今  
更吾人ノ喋々ヲ要セサル所、然レトモ、蠶業ニモ亦伊佛二國  
ノ優勢ナル強敵アリテ、日ニ我輸出地ヲ侵略蠶食シ、今ヤ欲  
ント旗色ノ動キツ、アルハ世人ノ業既ニ稔知スル所、事ニ  
斯業ニ從フ者、豈ニ夫レ深戒猛省セスシテ可ナランヤ、編者  
大ニ茲ニ見ルアリ、本書ヲ印行シテ以テ同好ノ士ニ頌テ、以  
テ大ニ斯業ノ改良發達ヲ畫策セントス、若夫レ當業家諸君  
坐右ニ一本ヲ備ヒ、幸ヒニ餘力ヲ以テ專心講究セラル、ア  
ラハ庶幾ハ斯業ノ改良發達上ニ於テ亦幾分ノ裨補ナシト  
センヤ、聊カ卑見ヲ開陳シテ以テ自序トナス

明治三十年四月梅花飛テ紛々黃鳥鳴テ  
階々タルノ日

編者識



凡例

一本書ハ有名ナル養蠶家ノ經驗ニ據ル飼育法並ニ諸法律規則及茨城長野群馬三縣中蠶業家諸君ノ氏名住所ヲ集拾シ以テ一冊子トナシタルニアリ

一姓名ハ總テ(いろは順)ニ記載シタルモノナレハ前後ヲ以テ人士ノ階級ヲ論スル勿レ大字別ケニ至テハ彼此錯雜セシモノナキニアラス然レトモ務メテ是レヲ整列セリ

一蠶種ノ製造高掃立桑園數並ニ蒸氣釜數ノ如キハ其年月ヲ經ルニ隨ヒ異動ヲ生スルハ數ノ免カレサル所故ニ本書ハ材料蒐集時ノ現在ヲ附シ其開查シ得サルモノハ之レヲ未詳ト記シタリ看者之レヲ諒セヨ



# 蠶業必携上編

## 目次

養蠶論	一頁
春蠶飼育標準	三九
養蠶實行録摘要	六一
こがひのてつる	一〇五
節高病論摘要	一一五
蠶種ノ貯藏及催青ノ時期ノ必要ヲ論ス	一四二
殺蛹法	一五三
秋蠶元種飼育法	一五七
秋蠶飼育法心得書	一六九
秋蠶飼育心得書	一八三



秋蠶飼育法

秋蠶及風穴蠶飼育實驗法

性來虛弱ノ秋蠶種ノ多キ理由

秋蠶種ノ撰ヒ方並ニ購入

かな手本

養蠶飼育都々逸

養蠶富國いろは歌

英國土產養蠶穴さがし娘義太夫

蠶ト馬トノユカリ

蠶種商ノ改良文明的運動

生糸検査所法令

蠶種検査規則

茨城縣製糸用蠶種検査施行手續

一九〇

二一〇

二一七

二二四

二四九

二五三

二五七

二六一

二六三

二六七

一

二七

二九

茨城縣蠶糸業組合取締所規約

●長野縣蠶種家

小縣郡

埴科郡

更級郡

東筑摩郡

南安曇郡

北安曇郡

●器械製糸家

小縣郡

北佐久郡

南佐久郡

諏訪郡

三四

一

四七

五二

五三

一〇三

一一九

一二三

一二五

一二七

一三八



上伊那郡  
 下伊那郡  
 東筑摩郡  
 北安曇郡  
 更級郡  
 埴科郡  
 上高井郡  
 下高井郡  
 上水内郡  
 碓氷郡  
 西群馬郡  
 前橋市

●群馬縣器械製糸家

一三九  
 一四二  
 一四四  
 一四五  
 一四六  
 全  
 一四七  
 一四八  
 全  
 一五一  
 一五二  
 一五三

吾妻郡  
 北甘樂郡  
 前橋市  
 利根郡  
 北勢多郡

●坐繰製糸家

一五四  
 全  
 一五五  
 一五八  
 全



# 蠶業家必携上編

## 春蠶之部

### 養蠶論

長野縣東筑摩郡宗賀村大字洗馬

奈良井勘治男

奈良井勘市

#### 一 養蠶法ノ定義

古來ヨリ現時ニ至ルマテ世ニ行ハレタル養蠶法ノ性質ヲ觀察スルニ則チ二主義アリ  
左ノ如シ

甲 蠶兒ハ元ト野生蟲ナリ故ニ之レヲ養フニ於テモ自然ニ任セサルヘカラス

乙 蠶兒ハ既ニ野生ノ性ヲ去ツテ人育ノ慣習ヲ得タリ故ニ之ヲ養フコトニ於テモ  
人爲的ヲ專ラトセサルヘカラス



斯ノ如ク甲乙ノ二主義ハ全ク相反對スルヲ以テ此二主義ヨリ湧出スル所ノ議論ハ氷炭水火ノ如ク互ニ相容レス甲ハ自然ヲ主トスルヲ以テ其主張スル所ハ曰ク天然育曰ク清冷育曰ク放任育ト又乙ハ人爲ヲ專ラトスルヲ以テ其主張スル所ハ曰ク火力飼曰ク溫暖育曰ク密閉飼ト而シテ甲論者ハ其研究ノ精神一ニモ二ニモ自然チ之レ專ラトスルヲ以テ人爲ニ由テ蠶兒ノ性ヲ進メサル可カラサルノ理蠶兒ノ發育ハ專ラ光熱ノ作用ニ關スルノ理蠶兒ノ成長ハ桑葉ノ性質ト關係チ有シ蠶ノ性若シ柔ノ性ヨリ劣弱ナルトキハ爲メニ其進化ヲ妨ケラレ退歩ノ變化ヲ起スノ理溫度ノ平涉ヲ務メ蠶兒ノ一齊ヲ謀ラサレハ好果ヲ得ル能ハザルノ理又溫度ハ内外大ニ異ニスヘキノ理等凡ソ是等ノ諸點ニ付テハ全ク意ヲ注カサルヲ以テ其爲ス所施ス所道ヲ失ヒ理ニ戻リ其極ヤ終ニ蠶兒ヲ矮少ナラシメ絲量ヲ減却シ絲質ヲ粗惡ニシ其結局ニ至テハ論者自ラモ成繭ノ善良ナルハ火力飼ニ如カスト懺悔スルニ及フモ尙ホ且(獨リ空氣ノ融通ノミハ蠶性ニ適ヘリ)ト主張スルカ如キハ實ニ盡サ、ルノ說至ラザルノ論ナリ乙論者ハ又其研究ノ精神一ニモ二ニモ人爲ニ是レ從ハント欲シ敢テ他ヲ顧ミサルナリ人爲ハ

自然ノ大法ニ則ラサルヘカラザルノ理ヲ悟ラズ又蠶性ハ虛弱ナルモノト誤認スルヨリ火力ヲ用ユルノ要ハ即チ蠶兒ノ虛弱ヲ庇護スルニ過ギズト爲シ所謂蠶兒ハ神經性ニシテ虛弱質ノ動物ナリト云フガ如キ姑息ノ考ヨリシテ其施ス所ハ僅カニ寒冷ノ蠶鉢ニ觸ル、ヲ防クニ止マリ彼ノ太陽ノ光熱ヲ補翼シ發育ヲ十分ナラシムルノ理蠶兒ノ成長ヲ桑樹ニ勝メシメテ以テ進化ノ度ヲ進メザルヘカラサルノ理蠶兒ノ胃腸ハ光熱ノ度ニ隨テ昇降スルノ理冷熱交々感觸セシメサレハ鉢育ヲ害スルノ理等ヲ知ラサル爲メ終始溫和ヲ主トシ暑モ厭ヒ冷モ忌ミ晝夜溫度ヲ平均シテ嘗テ氣候ノ變動ヲ起サザレバ自然空氣ノ融通ヲ妨ケ又蠶兒ヲ取扱フニ於テモ危險ナル物ニ手ヲ着クルカ如ク戰々兢兢トシテ之ニ從事スル所ヨリ徒ニ煩勞ヲ増スヲ以テ本意トシ却テ天法ニ戻リ道理ニ背キ其極ヤ不具ノ變化ヲ起シ體育ヲ害シ性質ヲ麻弱ニシ以テ蠶病ヲ多カラシメ遂ニ自ラ嘆シテ蠶兒ノ強壯ナルハ天然飼ニ及ハスト云フニ至ルモ猶濕氣ノ害アルコトヲ論シテ養蠶ノ秘訣トナスカ如キハ實ニ盡サ、ルノ說至ラサルノ論ナリ以上二說ノ如キハ我國ニ重要ナル此養蠶事業ヲ支配スルニ足ラサルモノナリト謂ハサ



ルヲ得ズ然ラハ即チ余カ懐ク所ノ定義ハ如何ン曰ク

我定義ハ自然ノ大法ニ則トリ人爲ヲ以テ蠶性ヲ完フセシムベシ

ト云フニアリ即チ之ヲ復言スレバ天意ヲ承ケ紹テ進化ノ化育ヲ贊助スルモノナリ即チ其蠶ヲ養フヤ萬物ノ父母タル造化ノ大法ニ基テ聰明ナル吾人々類カ其化育ヲ贊助シ以テ蠶兒ノ一生ヲ完全無缺ナラシムルニアリ是故ニ我養蠶法ノ名稱ハ天然飼ニモアラズ火力飼ニモアラス今之カ名稱チ下サバ家尾飼トモ云フヘク又養蠶ハ必ス此法ニ由ラザルヲ得サルヲ以テ養蠶法ト稱シテ毫モ不可ナキ所タリ去レバ我定義ニ據ルハ火力ヲ用弗ルニモ太陽ノ光熱ニ則リ陽氣ヲ與フルニモ自然ノ法ニ由リ蠶兒ヲ取扱フニモ桑葉ヲ給スルニモ皆悉ク蠶性ニ循ヒ以テ進化ノ度ヲ高カラシム是ヲ以テ蠶躰ハ健全ニ糸量ハ多量ニ糸質ハ好美ナラザルハナシ故ニ凶蠶ハ我法ノ殆ト知ラサル所ト云フモ不可ナキナリ夫レ人一タヒ手ヲ下シテ之レヲ行フハ種藝ニマレ牧畜ニマレ其他如何ナル事ニセヨ自然ニ從フテ人爲ヲ加ヘサレバ決シテ其目的ヲ達スヘキ者ニアラズ所謂天意ト人カト相和合シテ茲ニ始メテ全キヲ得ヘキ者ナリ去レバ養蠶

ノ如キモ今若シ其一サ欠クトキハ眞ニ人間ノ飼養法ト云フヲ得サルナリ故ニ彼レ甲乙兩主義ノ如キハ共ニ今日ニ至ルマテ我養蠶社會ニ大ナル妨害ヲ與ヘテ常ニ養蠶ノ發育ヲ抑ヘ開暢ヲ制シ進化ヲ妨ケ進歩ヲ害シ遂ニ現時ノ如キ不祥ナル有様ヲ馴致シタルモノナレバ是非ニ是等ノ説ハ盡ク之ヲ破壊シ以テ新ニ自然ノ原則ヲ發見シ之レニ從フテ人爲ヲ加フルニアラサレバ決シテ我養蠶社會ノ發達進歩ヲ期スヘカラス今茲ニ我養蠶法ト從來ノ養蠶法トヲ比較センニ彼レニアリテハ徵驗的ニ養蠶ヲ研究シ我ニアリテハ原理ヲ究ムルニアリ彼レハ其法ヲ暗記スルニ止マレトモ我ハ之レヲ解得スルヲ主トス彼レハ所ニ從テ其法ヲ替フレトモ我レハ必ス其道一ナルニアリ彼レハ糸育躰育ノ兩全ヲ得ヘカラズト唱フレレ我ハ必ス兩育ヲ全フスヘキモノトス又之レヲ養フニ於テモ彼レハ厚飼ハ甚タ蠶兒ニ害アリトナセ我レハ却テ蠶性ニ適フモノトス彼レハ氣候ノ變動ヲ欲セサレトモ我ハ最モ温度ノ昇降ヲ好メリ彼レハ晝夜ノ温度ヲ立テサレレ我ハ晝夜ノ別ヲ立ツルヲ主要トス彼レハ高温ヲ恐ルレトモ我ハ却テ之ヲ利ノ大ナルモノトス彼レハ南風ヲ慘毒アルモノトスレトモ我ハ却テ蠶性ニ



適スルモノトス彼レハ乾燥ノミヲ可トスレトモ我ハ時ニ濕氣ヲ欠クヘカラサルモノト  
 ス彼レハ冷度ノ禁セサルヘカラサルヲ主張スレトモ我ハ却テ自然ノ性ニ基クモノナ  
 ルコトヲ稱道ス彼レハ桑葉ノ新鮮ナルヲ好マサレトモ我ハ強テ新鮮ナル者ヲ撰ブ彼レ  
 ハ桑樹ノ肥エタルヲ忌メトモ我ハ飽マテモ滋養分ノ多キモノヲ好シトス彼レハ桑葉ノ  
 莖ヲ去ルヘキモノトスレトモ我ハ苳莖共ニ去ル可カラサルモノトス其他種類ノ撰定法  
 ト云ヒ蠶病ノ原因ト云ヒ蠶室ノ構造ト云ヒ凡テ我主義ト反對ノ點ニ向ハサルハナシ  
 是ヲ以テ人或ハ我主義ノ意表ニ出テ餘リニ奇ナルニ驚キ甚タシキハ我ヲ目シテ暴論  
 邪説ヲ傳フル者ト爲スニ至ル然レモ果シテ我説ノ邪ナルカ我論ノ暴ナルカ實際ニ我  
 論我説ヲ適用スルアラバ我論説ノ正邪ヲ證スルニ於テ思半ニ過ルアラシ

二 蠶兒ノ性質

蠶兒ハ野生蟲ニシテ寒暑雨ナカラ之レヲ恐レズ  
 蠶兒ハ桑樹ト成長ヲ共ニシ桑樹ノ地ニ冷熱ニ堪ユ  
 夫レ蠶兒ハ元來野外ノ桑樹ニ發生シタル蟲類ニシテ桑葉ト成長ヲ共ニスヘキモノナ

レハ桑葉ノ成長ニ適スル温度ハ蠶兒ニモ亦適スヘク桑樹ノ發育ニ害ナキノ冷度ナク  
 バ蠶兒モ亦其冷ニ堪ユヘキナリ然リ而シテ桑樹ノ適温ヲ顧ミルニ野外ニ在テ直下ニ  
 太陽ノ光熱ヲ受クルトハ百二十度位ノ温度ヲ受ルト往々之アルモ更ニ妨ケナク又夏  
 霧朝露ニ際シテハ四十度乃至三十八度位ノ低度ニ遇フト雖モ是亦害アルヲ見ス然ラ  
 ハ則チ蠶兒モ亦左ノ冷暖ニ耐ユヘキモノナレバ冷ニモ恐レス暑ニモ恐レスト云フモ  
 決シテ不可ナキナリ是レヲ以テ試ミルニ蠶兒ヲ野外ノ桑樹ニ放ツトハ百二十度ノ高  
 温ニ遇フモ更ニ害ナク反テ桑ヲ喰フト甚ダ活潑ナリ又冷度ハ四十度前後ニ及フモ更  
 ニ痛苦ヲ感スルノ狀アルヲ見ス唯生活運動ヲ停止スルヲ見ルノミニシテ更ニ氷ノ度  
 ニ至ラサルノ間ハ死セサルモノナリ依是觀之蠶兒ハ桑樹ノ地ニ限リノ冷熱ニ堪  
 ヲルモノタルト甚タ明ナリ

三 蠶兒ノ生活機能

蠶兒ノ食慾ハ光熱ノ(即チ陽氣)昇降ニ由テ増減スルモノニシテ蠶兒ノ冷濕ニ遇フテ  
 靜息スルハ一時生活運動ヲ止メ恰モ眠レルカ如キモノニシテ決シテ害アルモノニア



ラズ又蠶兒ノ暑熱ニ遇フテ其運動ノ活潑ナルハ胃腑ノ働キヲ盛ニシ食慾ノ度ヲ増加シタルノ徴ナリ

蠶兒カ冷度ニ遇フテ静息スルヲ見テハ冷氣ニ苦ムモノナルヘシト思ヒ高温ニ遇フテ活潑ナルハ炎熱ノ爲メニ痛苦ニ堪ヘスシテ動搖スルモノナルヘシト妄想シタルニ過サルナリ恰モ人間ノ眠レルヲ見テ死セリトナシ晝間勞働スルヲ見テ苦悶セルト想フト一般ナリ何ソ知ラン蠶兒ノ静息スルハ一時生活運動ヲ止メ恰モ眠レルカ如キモノニシテ決シテ害アルモノニアラズ又蠶兒ノ活潑ナルハ其性ニ適シテ以テ消化器ノ運動ヲ速カニスルモノナリ

世ノ往々時間ヲ計リテ桑ヲ與ヘシモノ其給桑ノ爲メニ濕氣ヲ増シ遂ニ害ヲ醸スコトアリタレバ即チ其害アルヲ見テ冷氣ノ害アリト認メ又蠶兒ハ高温ニ遇フテ食慾玆ニ遞加スルモノナルコトヲ知ラズ豫メ一定ノ食料ヲ計リ以テ之ヲ給シタルカ故ニ其俄カニ高温ノ爲メニ發シタル食慾ノ度ヲ滿スコト能ハズ遂ニ不足ノ害ヲ蒙ルコトアルハ其害ヲ見テ高温ノ害ナリト誤認シタルニ過キサリナリ去レハ今日ニ至ルマテ養蠶

ニ冷度ヲ忌ミ高温ヲ嫌ヘタル理由ハ眞ニ冷熱ニハアヲズシテ已レノ未ダ蠶兒ノ性ヲ知ラサルノ致ス所ナリ

#### 四 陽氣ト蠶兒ノ關係

抑モ蠶兒ハ陽氣蟲類ニシテ陽氣ニ感シテ發生シ陽氣ニ隨テ成長シ陽氣ニ誘ハレテ生命ヲ終ハルモノニシテ陽氣ノ緩急ハ蠶兒ノ發生ニ遲速ヲ來タシ陽氣ノ浮沈ハ蠶兒ノ成長ニ消長ヲ起シ陽氣ノ盛衰ハ蠶兒ノ生命ニ長短ヲ與フルモノナリ之ヲ要スルニ蠶兒ノ身軀生命ハ陽氣ニ左右セラル、モノニシテ陽氣アツテ蠶兒アリ陽氣ナクンバ蠶兒ナシト謂フモ不可ナシ譬ヘハ草木ノ太陽光熱ノ陽氣ニ遇ハサレバ發芽成長セサルト一般ナリ

蠶兒ヲ野外ニ放ツテ試ミルニ桑樹光熱ニ感シテ成長スルトキハ蠶兒モ亦成長シ桑樹冷氣ニ感シテ成長ヲ止ムルトキハ蠶兒モ亦隨テ成長ヲ止メ死セルカ如ク眠レルカ如ク常ニ桑樹ト進退ヲ共ニスルヲ見ルヘシ是ニ於テカ蠶兒ハ太陽光熱トハ大ニ關係アルヲ知ルヘキナリ



然レトモ茲ニ習慣性ヨリシテ柔弱ニ至リタルノ一事ハ爭フ能ハサル所ナリ是故ニ野  
 外ニ放チ養フトキハ害物ノ爲メニ侵サレテ其生ヲ遂ケシムルニ難キコトアリ是レ即  
 チ進化ノ理ニヨリ人間ノ手ニ養ハレテ以來人間ノ保護ニ依頼シ嘗テ已レハ害物ノ爲  
 メニ防禦スルノ勞ヲ採リシコトナキヲ以テ自然防禦性ヲ失ヒ又之ヲ避クルノ性ヲ薄  
 弱ナラシメタルニ外ナラス是故ニ今若シ此ノ不足ナル處ヲ助ケテ以テ養フトキハ野  
 外ニ之ヲ放ツモ決シテ妨ケアルモノニアラズ

去レバ蠶ヲ養フニハ專ジ太陽ノ光熱ヲ受ケシムルヲ良トス故ニ夕陽ノ熱モ恐ルハニ  
 足ラズ百度ノ高温モ意トスルニ足ラサルナリ又蠶室ノ如キモ敢テ方位ヲ撰マズ唯太  
 陽光熱ヲ受クルヲ以テ良トナスヘシ又夕日中ノ如キモ戸ヲ開キ障子ヲ放ツテ光熱ヲ  
 入レ自然ノ温度ヲ活用セシメ其不足ナルトキハ間接光熱(即チ火力)ヲ用ユルヲ可ト  
 ス

去レバ今日マテ天下一般ニ太陽光熱ノ蠶兒ニ害アルカ爲メニ失敗ヲ招キタリト云フ  
 ハ其養法未ダ蠶性ヲ知ラズ原理ヲ詳カニセズ從テ食慾ノ度ハ光熱ノ度ニ隨伴スルコ

トチ知ラサルカ爲メ其光熱ノ度ト其給桑ノ量ハ適合セサルヨリ遂ニ其害ヲ招キタル  
 モノニシテ決シテ太陽光熱ノ罪ニハ非ラサルナリ

五 火力ノ使用

太陽光熱ハ蠶兒ノ發育開暢ニ大關係ヲ有スルモノナリトセバ飽迄モ蠶兒ハ太陽ノ光  
 熱ヲ受クルヲ可トス然レトモ如何セン蠶ヲ養フニハ必ス家屋内ニ行フヘキモノナレ  
 バ家屋内ニハ戸アリ障子アリ壁アリ屋根アリテ太陽ノ光熱ヲ遮キリ之レヲ充分ニ射  
 入セシムルコト能ハズ自然ニ内外ノ温度ヲ異ニス故ニ火力ヲ用弁スシテ之レヲ養フ  
 トキハ自然氣候ニ由テ成長スル桑樹ト併進スルコト能ハスシテ蠶兒ノ進歩ハ桑樹ニ  
 後ルハカ爲メニ勢ヒ進化ノ度ヲ低フセサルヲ得サルナリ進化ノ度ヲ低フスルハ養蠶  
 ノ目的ニアラザレバ是非ニ火力ヲ用弁テ其室内ニ於ケル光熱ノ不足ヲ補ヒ蠶兒ヲシ  
 テ常ニ幾分カ桑樹ヨリモ優等ノ位置ニ進メサル可カラズ  
 去レバ蠶室内ニ火力ヲ用弁テ蠶ヲ養フ所以ノモノハ其室内ニ於テ太陽ノ光熱ヲ直下  
 ニ受クルコト能ハズ自然ニ不足ヲ生スルヲ以テ其不足ヲ補充スルニ過キサレハ其火



力ヲ用ユルノ要モ火力的ニ火力ヲ使用セシテ太陽的ニ火力ヲ使用シ則チ火力ヲ用  
弗ルトキハ露時野外ニ在テ晴朗ナル天氣ニ遇フテ爽快ナルガ如クシ決シテ暑熱ニ遇  
フカ如ク快譁タラシムヘカラズ故ニ火力ヲ用弗ルトキハ務メテ空氣ヲ充分ニ融通セ  
シムヘシ若シ空氣ヲ融通セシメスシテ火力ヲ用弗ルトキハ濕氣ヲ帶ヒ腐敗ヲ促カシ  
且ツ炭酸瓦斯ヲ起シテ以テ大ニ蠶兒ヲ害スルノ恐アリ是レ所謂火力的ニ火力ヲ使用  
スルノ致ス所ナリ之ニ反シテ空氣ヲ融通セシメテ火力ヲ用ユルトキハ室内ノ鬱氣ヲ  
去リ惡臭ヲ除キ且ツ乾燥ヲ來シ風ヲ起シ氣ヲ清カラシメ蠶兒ヲシテ快活ニ其性ヲ進  
マシムルヲ得是レ所謂太陽的ニ火力ヲ使用スルノ致ス所ナリ加之ナラズ天氣ニ晴雨  
冷熱アルガ如ク必ス溫度ニ高低増減ヲ要スルモノナレバ火力ヲ用弗ルニモ必ス一定  
ノ法ヲ立ツ可カラズ

#### 六 溫度ヲ平均セサルノ理

養蠶ヲ行フニ一定ノ火力ヲ用弗ス又晝夜溫度ヲ平均セサル所以ノモノハ抑モ如何ナ  
ル理由ヨリシテ然ルモノナルヤ是レ徒ニ經濟的ヨリ輕便ヲ主トシ又ハ苦勞ヲ厭フテ

然ルニアラズ其然ラサルヲ得サルノ理由アルヲ以テノ故ノミ實ニ發育上ヨリ然ラザ  
ルヲ得ズ

凡ソ有機體ノ發育開暢スルハ其體ノ強健ニ基サルハアラズ而シテ其體ノ健康ハ寒暑  
ノ氣候ヲ受テ晝夜ノ陽氣ヲ稟ケテ始メテ全キモノニシテ若シ否ラサルトキハ決シテ  
其健康ヲ全フスルコト能ハサルナリ蓋シ寒熱ノ其身ニ加ハリ晝夜ノ氣候其身ニ感  
スルニアラサレバ其健康ヲ保ツ能ハサル所以ノモノハ抑モ如何ナル原因ニ基クモノ  
ナルヤト云フニ萬物皆一樣ノ刺激ニテハ決シテ化育ヲ全フスルモノニアラズ屈スル  
コトアルモノハ伸フルコトアリ伸フルコトアルモノハ屈スルコトアルモノニシテ人  
間ノ如キモ苦樂交々至ラサレバ以テ快然タルコト能ハズ勞働スルコトアリ棲息スル  
コトアルニアラサレバ其身ノ健康ヲ存ツコト能ハサルナリ又草木ノ如キモ春夏ノ之  
ヲ發育開暢スルアレバ秋冬ノ之ヲ收縮堅定ナラシムルアリテ始メテ其根幹枝葉ノ繁  
榮ヲ致シ以テ數十歳ノ久シキニ其生ヲ存スルコトヲ得ルモノナリ去レバ屈スルコト  
大ナルモノハ伸フルコトモ亦大ナルヘク收縮堅定ノ強キモノハ發育開暢スルニ於テ



モ亦速カナルベシ

去レバ蠶ヲ養フニモ晝夜寒暖ヲ同フセズ終始温度ヲ均一ナラシメズ發育開暢セシムルトキハ又温度ヲ高メ以テ發育開暢セシメ又收縮堅定セシムルトキハ又温度ヲ沈メテ收縮堅定セシムルヲ以テ始メテ發育ヲ全フシ健康ヲ保ツモノナリ然ルニ今日迄ノ如ク終始一定ノ氣候ヲ以テ飼育シ來リタルトキハ固ヨリ健康ヲ保ツコト能ハサレバ夫レガ爲メニ虛弱ニ至リ遂ニ進化ノ度ヲ妨ケ絲量ヲ減シ病痼ニ仆サレテ以テ年々其災ヲ蒙ルニ至ルベシ

七 日光ノ養蠶ニ必要ナルノ理

俗日光ノ養蠶ニ利益アルハ如何ト云フニ即チ健康ヲ保ツト發育ヲ助クルコト是レナリ凡ソ動植物ハ日光ヲ稟ケサレバ健康ナラサルモノニシテ彼ノ山野ニ生長スル草木ノ如キモ日光ニ逢ハサルトキハ葉ハ色ヲ失ヒ衰萎シテ淡青色ニ變スルハ人ノ能ク知ル所ナリ又高嶺ノ如キ寒冷ナル處ニ成長スル樹木ノ如キハ熱線ノ助ケナキモ光熱ノ助ケ得ルガ爲メニ其成長ヲ速ニス又人類ノ如キモ山野ヲ跋涉シテ身ヲ日光ニ曝露

スル農夫ノ如キ軍人ノ如キハ其身ヲ強健ニシテ些少ノ障礙ニ遭フモ其害ヲ蒙ラズ又富家婦人ノ如キ遊冶白面生ノ如キ常ニ日光ニ當ルコト稀ナル者ハ假令常ニ滋養分ノ食物ヲ食シ衛生ニ注意スルモ身ヲ虛弱ニシテ常ニ病ニ侵サル、ハ人ノ知ル所ナリ然レトモ是等ハ運動ノ足ラサル處ヨリ來リタル場合モアリトスルモ彼ノ金堀職ノ如キハ運動ニ於テ欠クル處ナキモ其天壽ヲ全フスルコト能ハサルハ日光ヲ受ケサルニ原因スルコト比々皆是レナリ是ノ故ニ養蠶モ之ヲ野外ノ桑樹ニ於テ試ミルニ室内ニ養フヨリハ其熱量ヲ稟受スル素ヨリ少量ナリト雖トモ其成長速ニ且ツ風雨寒暑ノ害ヲ受ケサルハ實ニ驚クヘキモノアリ

依之觀之室内ニ蠶ヲ養フトキハ直接ニ日光ヲ受ケシムルコト容易ナラズト雖トモ間接ニ成ル可ク日光ヲ受ケシムルヲ良シトス而シテ夜ノ如キ光線ヲ得ルコト能ハサルトキニ於テハ熱線ヲモ成ル可ク與ヘサル様ニ注意シ以テ蠶兒ノ健康ヲ保テ其發育開暢ヲ充分ニシテ其質ヲ美ニシ其性ヲ進メシメサルヘカラズ

八 夜間火力ヲ用ユレバ不揃ヲ來スヘキノ理



養蠶ナルモノハ一室内ニ數兆數億ノ蠶兒ヲ同一同時ニ養フモノナレバ其蠶兒ヲ一齊ニセシコトニ力ヲ用ユルハ最モ緊要ナリ

夜中ハ四面ノ氣皆清冷ナリ然ルニ獨リ一室ニノミ温熱ヲ起ストキハ他ノ清冷ナル空氣ハ之レニ向テ進入シ來リ專ラ内氣ヲ侵スカ故ニ室内平均ニ暖熱ヲ布滿スルコト容易ナラズ去レバ火力ニ近キ處ハ暖ナルヲ得ヘシト雖モ其火力ニ遠キ所ハ依然トシテ冷氣ノ間ニ狭マルガ故ニ獨リ火力ニ近クシテ暖ヲ受ケタルモノノミ食シ火力ニ遠クシテ暖ニ遇ハサルモノニ至テハ假令同一ニ食桑ヲ給セラル、モ更ニ之ヲ食セザレバ遂ニ不揃ニ至ラサルヲ得サルナリ

然シテ斯ノ不揃ヨリ來ル所ノ害毒程恐ルヘキモノハアラサルナリ而シテ此ノ不揃ヲ來ス原因ハ一ナラズト雖トモ夜中火力ヲ用テ桑ヲ給スルヨリ甚タシキモノハアラズ殊ニ夜間ハ清冷ナルハ是レ即チ自然ノ陽氣ナルニ於テラヤ故ニ夜間火力ヲ用ユルハ之ヲ嚴禁セサルヘカラズ

九 人間ノ勢力ニ限リアリ晝夜其職ヲ取ルヘカラサルノ理

俗養蠶ヲ爲スノ要ハ蠶兒ヲ統制スヘキモノニシテ蠶兒ニ統制セラルヘキモノハアツズ故ニ晝夜平均ニ火力ヲ用ユルトキハ亦從テ平均ニ其食桑ヲ給セサルヲ得ス此ノ如クナルトキハ所謂蠶兒ノ性ヲ以テ人間ヲ統制スルモノナレバ晝夜間斷ナク其職ヲ取ラサルヲ得ス晝夜間斷ナク其職ヲ取ルトキハ勢人間ノ便宜ヲ計ルノ違ナシ即チ蠶ノ性ヲ以テ人間ノ便宜ヲ制スルモノナレバ取モ直サズ蠶兒ニ統制セラル、モノト謂ハザルヘカラズ然レトモ蠶ノ爲メニ統制セラル、モ又ハ使役セラルルモ只一片ノ理屈ノミナレバ敢テ不可ナシト雖トモ其實ハ人間ノ勢力ニハ限リアリ限リアルノ勢力ヲ以テ限リナキノ業ニ從事スルハ固ヨリ人ノ能クセサル所ナリ已ニ人ノ能クセザル所ヲ爲サント欲ス之ヲ奈何ン健康ヲ害シ又ハ病ヲ起スコトナキヲ得ンヤ良シヤ勉強ノ人健康ノ人ハ忍耐以テ四五日間ノ勞ニハ耐ユベシト雖トモ養蠶ハ少クトモ三十日ヲ要セザルベカラザルモノナレバ到底此間絶ヘス其職ヲ全フスルコト能ハザルベシ特ニ養蠶期中緊要ナル時節即チ三眠以後ニ至リテ身神疲勞シ遂ニ其職ヲ充分ニ盡シ難キコトアラバ之レガ爲メ或ハ機ヲ失シ其度ヲ過テ失敗ヲ招キ或ハ遂ニ凶蠶ニ遭遇ス



ルコトナシトナサ、ルナリ

十 自然法ヨリ然ラサルヲ得サルノ理

抑モ蠶兒ハ自然ニ山野ニ發生シタルノ蟲類ニシテ寒暖氣候定マラサル天地ノ間ニ發  
生シタルモノナレバ其生命短ナリト雖トモ之ヲ自然ニ任カスルトキハ四十日乃至五  
十日ノ日子ヲ費サ、レバ其生ヲ遂クルコト能ハザルモノナリ去レバ其間天氣必ズ一  
定ナルモノニアラズ晴雨冷熱ハ勿論夜アリ晝アリテ決シテ同一ノ溫暖ナルコト能ハ  
サルナリ斯ノ如ク蠶兒ハ不定不同ノ大氣中ニ發育成長シテ敢テ妨ケナキガ爲メニ今  
日マテ生存シタルニ相違ナカルベシ已ニ然リ然ラハ其今日ニ至ツテ之ヲ室内ニ飼フ  
モ自然ノ法ニ基キテ不定ノ温度中ニ飼フハ實ニ道理ニ適シタルモノト言フベキナリ  
若シ其レ果シテ蚕兒カ不同ノ温度ヲ忌ミ晝夜ノ區別ヲ立ツルヲ以テ適合セサルモノ  
ナルトキハ決シテ蠶兒カ社會ニ發生スベキ者ニアラザルナリ殊ニ我國ノ如キ寒暖ノ  
差氣候ノ變晝夜ノ區別盡然タル所ニハ決シテ此蚕兒ノ適存スル由縁ナシ然ルニ寒暖  
不同晝夜判然タル日本ニ存在シ來リタルモノハ則チ不同温ヲ不可トセス又晝夜ノ

氣候ニ感觸スルモ妨ケナキ明證ナリ是故ニ彼レ所謂蚕兒ハ一朝ノ冷一タノ暖其ニ其  
度ヲ失フトキハ爲メニ大ナル傷害ヲ招キ或ハ斃蠶トナル云々ト云フガ如キハ實ニ事  
實ニ反スルモノト謂ハサルヲ得ス

十一 空氣ノ蠶兒ニ必要ナルノ理

生活物ノ爲メニ空氣ノ必要ナルコトハ今更余輩ノ喋々ヲ待タズト雖トモ其種類ニヨ  
リ性質ニヨリテ多少其必要ノ度ヲ異ニスルハ蓋シ之ナキニアラサルベシ今蚕兒ノ性  
質ト其成立ノ有様トヲ吟味スルニ特ニ清潔ナル空氣ヲ好ムモノ、如シ何ントナレハ  
蠶兒ノ呼吸スルノ速カナルヲ見ル且ツ蠶ハ元ト野外ノ桑樹ニ發生シタルヲ見テモ之  
レヲ知ルニ難カラサレハナリ去レバ世ノ養蠶ヲ講スルモノ皆空氣ノ必要ヲ説カサル  
モノアラサルナリ然レトモ其實地ニ就テ觀察ヲ下ストキハ却テ空氣ノ融通ヲ防クモ  
ノ、如シ彼ノ冷熱交々室内ニ起リテハ蠶病ノ原因ナリト云ヒ晝夜温度ヲ平均セサレ  
ハ豊作ヲ得スト云フニアラズヤ若シ果シテ此ノ如ク冷熱交入ト晝夜不平均ノ温度ト  
ヲ以テ養蠶ニ害アリトシ專ラ之レヲ防クアラバ空氣ハ何ニ由テカ融通スルヲ得ンヤ



蓋シ空氣ノ融通ハ風起リテ始メテ生スルモノナリ而シテ風ノ起ルハ冷熱交々起ルカ爲ナリ然ルニ一方ニハ空氣ノ必要ヲ説キナカラ一方ニハ之レヲ蠶病ノ原因ナリトシ深ク戒メ固ク禁シテ温度ノ不平均ヲ忌ミ且ツ晝夜ノ區別ヲ立テサルトキハ到底空氣ノ融通ヲ計ルヲ得ンヤ豈ニ前後矛盾ノ説ト謂ハサルヘケンヤ依之觀之養蚕ヲ爲スニハ冷熱交々生スルモ以テ恐ル、ニ足ラズ晝夜温度ヲ平均セサルモ意トスルニ足ラズ唯恐ルヘク戒ムヘキハ獨リ空氣ノ不融通ニアリ故ニ務メテ空氣ノ流通ニ意ヲ用テ蠶兒ヲシテ室内ニアルモ尙ホ常ニ曠々タル原野ニ在リテ爽快ナル天日ニ遇ヘルカ如ク快適ナラシメ決シテ室内ニアルノ感覺ヲ起サシム可ラズ是レ所謂自然ノ法ニ則リ以テ其性ヲ保護スルモノナリ故ニ毎朝起キ出ツレバ必ず上下南北ノ戸ヲ開キ鬱敗セル空氣ヲ排除シ新鮮ナル大氣ヲ注入シ日中ニ幾回トナク障子ヲ開キ内外ノ氣ヲ新陳代謝セシメ室内冷熱交々起リ温度ノ昇降屢々起ルヲ以テ目的トナスナリ去レトモ蠶兒ハ新鮮ナル空氣ヲ呼吸シ自然ニ心地好キヲ以テ綽々トシテ發育ヲ速ニシ悠々トシテ發育ヲ全フシ健康ヲ保チ活潑ナル現象ヲ呈シ進化ノ度ヲ強フスルコト

猶ホ野ニ在アリテ浩然ノ氣ヲ受クルト一般ノ有様ナリ而シテ空氣ヲ室内ニ流通スルノ要ハ獨リ此腐敗ヲ止メ臭氣ヲ掃フニ止マラズ專ラ空氣ノ運動刺激ヲ蠶兒ニ感觸セシメテ以テ發育ヲ健全ナラシムルニアレバ假令三眠以前ノ如キ蠶室内ニ腐敗ノ容易ニ起ラサル時ト雖トモ常ニ充分ニ空氣ヲ流通セシメンコトヲ欲スルナリ況ンヤ三眠以後ノ腐敗ヲ起シ臭氣ヲ生スルノ時ニ於テチヤ尙一層空氣ノ流通ニ注意ヲ加ヘサルヲ得ズ

十二 養蠶ハ餘リ薄飼ニ爲ス可カサルノ理

(還テ厚飼ヲ宜トス)

近來養蠶改良進步スルニ從ヒ益々蠶兒ヲ薄ク飼フニ至リタルハ如何ナル原因ニ出ツルカ想フニ世人ハ彼ノ狹隘ナル室内ニ多人數群集スルトキハ空氣腐敗シ爲メニ頭痛眩暈ヲ發スルノ事實ヨリ推想シ又養蠶中蠶室ヲ密閉シテ空氣ノ融通ヲ妨ケタルガ爲メニ蠶病ヲ醸シタルノ事實ヨリ臆度シ且ツ厚飼ニナセバ食不足ヲ生スルコトアルヘシトノ妄想ヨリ遂ニ薄飼ヲ尊重スルニ至リタルナラン彼レ密閉飼ヨリシテ蠶兒ヲ害



シタルハ飼方ノ厚薄ニ因ルニアラズシテ恐クハ空氣ノ不融通ヨリ其害ヲ惹起シタル  
モノナラン又其食ニ過不及ノ憂アルカ如キモ獨リ飼方ノ如何ニ關スルモノニアラズ  
シテ大ニ給養ノ多寡ニ係ルモノナレバ能ク其度ヲ知り其量ヲ詳ニシテ之ヲ與フルト  
キハ厚飼ナレバトテ決シテ妨ケアルモノニアラズ

一 蠶性ハ群ヲ好ム 凡ソ動物ノ強キモノハ群ヲ好マスト雖トモ弱キモノハ群ヲ好ム  
モノナリ試ニ見ヨ虎ノ如キ狼ノ如キ猛獸ハ敢テ群ヲ欲セスト雖トモ羊ノ如キ馬ノ  
如キ其性弱ナル者ニ至リテハ互ニ相頼リ以テ其身ヲ保護センガ爲メニ群ヲ欲スル  
ニアラスヤ其他鳥魚ノ如キ其性愈々弱其質愈々柔ニシテ其群ヲ欲スルコト愈々強  
キヲ常トス而シテ蟲類ニアリテハ吐糸ノ一族ハ特ニ群集ヲ好ムモノニシテ彼ノ早  
春ノ候ニ方リ草木ノ間ニ巢ヲ結テ蟲類ノ如キハ數千相關繋シ糸巢ヲ構ヘテ其身ヲ  
保護シ太陽ノ光熱來ルトキハ茲ニ始メテ食慾ヲ發シ此處彼處ニ這出テ、食ヲ求メ  
食飽ケバ又其巢ニ歸ル凡テ此吐糸族ハ消食機ノ働キ未タ充分ナラサル間ハ居テ糸  
網ノ上ニ占メ食機ノ運動ヲ促シ以テ自ラ健康ニ保ツノ計ヲ爲ス若シ此糸網ヲ離ル

トキハ其生ヲ保ツヲ得ズ實ニ此蟲類ニ取リテハ此糸網極至緊重要ナル護身具ハ  
アラサルナリ

去レバ蠶兒ハ動物界ニアリテハ其性至テ弱其質甚ダ柔加之ナラズ蟲類部ニアリテ  
ハ吐糸族ノ上部ヲ占ムルカ爲メニ其群居ヲ好ム最モ甚ダシク團繋ヲ望ム最モ強ク  
レバ群居スルヲ得テ始メテ其身ヲ安スルヲ得テ始テ其性ヲ全フスル  
ヲ得ヘキナリ是故ニ世人ハ薄飼ヲ是トスルニモ拘ハラズ先天ノ道理ハ犯スヘカラ  
サレバ識ラズ知ラズ實業家ハ數年ノ經驗ヨリ蠶兒ノ群集ヲ好ムモノナルヲ認メ  
兒寄リテ爲シタル蠶ナラバ必ズ豊蠶セサルコトナシト云ヒ

片寄スル蠶ナラバ満足セサルコトナシト云フニ至レリ  
去レバ蟲類部ニアリテ吐糸族ノ上位ヲ占ムル蠶兒ノ其身ノ健康ヲ保チ其身ノ安全  
ヲ保護セント欲シテ其糸ヲ吐クニ孤立シテ吐クハ便ナルカ群集シテ吐クハ便ナル  
カト云フニ孤立シテ吐クモノハ其力ヲ勞スルコト大ニシテ其効少ナク群集シテ吐  
クモノハ其力ヲ勞スルコト少クシテ其効大ナリ是ニ於テカ群集シテ其糸ヲ吐カン



ト欲スルニ至リシナリ殊ニ蠶兒ノ結繭以前ニ吐ク所ノ糸（即チ四度ノ就眠ニ吐出スルノ糸）ハ實ニ蠶兒ノ大寶物ニシテ之ニ由リテ以テ其生ヲ安ンシ其身ヲ保護ス若シ之ナキトキハ蠶兒ハ其性ヲ完フスルコト能ハスト言フモ不可ナキナリ是故ニ蠶ヲ養フニハ最モ注意シテ其糸ヲ保護セサルヘカラズ若シ此關係ヲ知ラスシテ其糸ヲ害スルトキハ蠶兒ハ再ヒ其糸ヲ吐クニ汲々タルモノナレバ愈々害スレバ愈々吐キ遂ニハ蠶兒ヲシテ疲勞ノ極ニ陥ラシムルニ至ル去レバ其糸ヲ保護スルハ實ニ養法ノ秘訣トスル所ナリ是故ニ其法ヲナシ蠶性ヲ完フシ其身ヲ保護セント欲セバ是非ニ厚飼ニアラサレバ其目的ヲ達スルコト能ハス是レ厚飼ヲ是トスル所以ナリ

二蠶兒ニ生存競争ヲ要ス 抑モ動物界ハ生存競争ノ理ニ基カサレバ其性ヲ進メ其質ヲ美ニシ以テ進化ノ度ヲ加フルコトヲ得サルモノニシテ若シ其理ニ基カサレバ身軀ヲ虛弱ニシ性質ヲ下劣ニシテ増々退縮セサルヲ得ズ去レバ養蠶ヲ行フニモ其理ニ基キ其道ニ據テ蠶兒ヲシテ生存競争ヲナサシメ以テ其性ヲ進メ其質ヲ美ニセサ

ルヘカラズ而シテ其競争ヲ爲サシメンニハ又隨テ厚飼ニアラザレバ其目的ヲ達スベカラズ

試ニ厚飼ヲナシタル蠶ト薄飼ヲナシタル蠶トノ結果ヲ見ルニ厚ク飼ヒタル者ハ活潑ニシテ運動甚々自由ニ其軀格モ亦甚ダ堅固ニシテ肌理堅緻ナリ之レニ反シテ薄飼ヒタル蠶ハ不活潑ニシテ運動甚々緩漫ニ其軀格モ亦柔弱ニシテ水腫ノ色ヲ含メリ而シテ其繭ヲ比較スルニ大ニ優劣ノ差アリ

抑モ生存競争ニ由リ優勝劣敗ノ起ル所以ノ物ハ元ト自然界ニ在テ其争フヘキ物件不足ナルカ爲メニ遂ニ優勝劣敗ノ結果ヲ呈スルト雖トモ人爲界ニ在リテハ然ラズ其争フヘキ物件ハ多寡意ノ如クナルヲ以テ其之ヲ與フルニ不足ナカラシメハ優者劣者共ニ其食ニ就クヲ得ヘシ只就食ニ前後ノ差アルニ過キズ去レバ劣者ト雖トモ自然界ニ於ケルガ如ク始終敗劣ヲ取ルヘキモノニアラザルナリ夫レ生存競争ナルモノハ唯物件ノ不足ナルヨリ起ルガ如ク思ハルレトモ動物界ニ競争ノ起ルハ獨リ其ノ争フヘキノ物件ニ不足ヲ生スルノ爲メノミニアラズ其競争ヲ起スモノハ即チ



動物界ニ存スル一種ノ性はナリ此性ハ先天ノ命ニシテ自然ニ存在スルモノナリ去レバ其性ハ因ニシテ物件ノ不足ハ果ナリ而シテ吾人人類ノ如キ動物ニ在リテハ情アリ智アルヲ以テ其物ノ過不足ヲ測度スルヲ得ヘシト雖トモ蠶兒ノ如キ下等動物ニ至リテハ嘗テ情ナク知ナク智ナケレバ如何ナル場合ト雖トモ遠慮會釋ナキヲ以テ假令其物ノ足ルモ足ラサルモ其邊ニハ頓着セサルナリ但同類ノ我傍ラニ其食ヲ爭フモノアルトキハ自然我劣ラズト競争スルニ過ギズ且ツ植物食ノ蟲類即チ蠶兒ノ如キハ嘗テ貪慾ヲ有セス只其陽氣ニ誘ハレテ發シタル食慾ノ度ヲ滿スニ足レバ常ニ其食ヲ止ムルヲ以テ有ルニ任テ一時ニ多食スルカ如キハ決シテ之レアラサルナリ

三經濟ハ養蠶ノ目的 養蠶ノ目的ハ專ラ利ヲ多カラシメ益ヲ増スニ在レバ養蠶法ヲ研究スルニハ須ク經濟ノ道ヨリ進マサルベカラズ借又其經濟ヲ謀ルニ於テモ種々ノ手段アリト雖トモ其内最モ關係ノ大ニシテ且ツ利益ノ多キモノハ厚飼ニ若クモノナシ茲ニ其利アル所ヲ掲クレバ

第一 蠶室ノ坪數ヲ減スルコト

第二 器具ノ數ヲ減スルコト

第三 人夫ヲ減スルコト

第四 桑葉ヲ損耗セサルコト

第五 食期ヲ促スコト

是ナリ

### 十三 蠶兒ノ食期ヲ論ス

倍テ蠶兒ニハ固有ノ体温ナキカ爲メニ消食器ヲ具フルモ自ラ之ヲ運轉活用スルコト能ハズ太陽ノ光熱ヲ借リテ始メテ之ヲ運轉活用スルコトヲ得ルモノナレバ光熱ノ之ヲ助クルナカリセバ死物ト何ソ撰ハン之ヲ譬フレバ蒸氣機關ヲ備フト雖トモ火力アリテ之レヲ助クルニ非ラサレバ其機關更ニ運轉スル所ナキト一般蠶兒ハ蒸氣機關ニシテ光熱ハ火力ナリ即チ火力ノ多寡ニ由テ蒸氣機關ノ運轉力ヲ増減スルカ如ク蠶兒ノ消食器モ光熱ノ多寡ニヨリテ消化力ニ強弱ヲ來スモノナレバ七十度ノ光熱ト八十



度ノ光熱トテ因テ發スル食慾ノ度ハ自ラ同シカラサルナリ是故ニ蠶兒ノ食慾ハ光熱ノ進ムニ隨テ増進シ光熱ノ度愈々加フルニ隨テ食慾ノ度愈々増進スル者ナリ然レトモ世ノ機械的ノ養法ヲ取ル蠶家ノ如キ豫メ食期ヲ定ムルニ蠶兒ノ胃腑ニ協議セスシテ唯時計ノ命ニ是レ從ヒ即チ規則的ニ食桑ヲ給スルカ故ニ自ラ蠶兒ノ需求力ニ反シ終ニ蠶兒ニ充分ノ食度ヲ滿ス能ハサルヲ以テ勢ヒ不満足ヲ呈スルニ至ル去レバ能ク其蠶兒ノ不定的ナル食慾ヲ察シ其機ニ應シ其度ニ從テ給桑セサレハ決シテ蠶兒ニ満足ヲ得セシムルコト能ハズ蠶兒ニ満足ヲ得セシメザルトキハ其結果決シテ満足ヲ期スヘキモノニアラズ是故ニ蠶ヲ養フニハ其機ヲ察シ其期ヲ計ルヨリ至緊至要ナルモノアラサルナリ蠶兒ハ暖ニ遇ヘバ食慾増シ冷ニ遇ヘバ食慾發セザルモノナルガ故ニ下ノ乾燥スルモ又食期ヲ促スモノナリ食慾ノ發スル頃ハ下ノ乾燥スルモノナレバ下ノ乾燥加減モ又食期ヲ察スルノ一方便ナリ

一就眠期ノ食期ヲ論ス 蠶兒ハ催眠前ニハ胃力至ツテ弱キモノニシテ濕氣勝ナルトキハ害ヲ受クルヲ以テ專ラ下ノ乾燥ニ注意シ胃腑ノ活動力ヲ盛ナラシムベシ若シ

蠶兒ヲシテ下ノ乾燥ヲツトメス且ツ腹中ニ未ダ食桑ノ沈滯スル時ヨリ蠶體ヲ給スルトキハ其結果ノ爲メニ一層濕氣ヲ増シ冷氣ヲ加フルガ爲メニ幾分カ消化力ヲ抑ヘサルヲ得ズ然ルニ前ニモ述ヘタル如ク元來蠶兒ナルモノハ光熱ノ力ヲ藉ラサレバ消食器ノ力ヲ増サレルモノナルニ其濕氣ト冷氣ノ爲メニ其働キヲ抑制セラルハチ以テ胃腑中ニ存在スル所ノ食桑忽チ消化ノ機ヲ失ヒ遂ニ腐敗ヲ醸シ以テ不眠蠶ヲ出スニ至ル去レバ此際ニ在テハ專ラ胃力ヲ健全ナラシムヘキモノナレバ能ク食期ノ來ルヲ察シテ給桑スルヲ肝要トス故ニ催眠前二三ノ就眠蠶ノ見ユルヲ見計ヒ裏抜キチナシ下ノ乾燥ヲ計ルベシ蓋シ蠶兒ハ眠ニ就キシ後ハ更ニ食セスシテ一日半モ其生命ヲ保チ得ラル、所以ノ者ハ如何ナル道理ニ基クト云ニ是レ蠶兒カ眠期ニ先チテ專ラ多量ノ桑ヲ食シ其内ヨリ養分ヲ吸收シ脂肪トナシテ之ヲ貯ヘ以テ營養スルモノナレバ一時口ヨリ食スルヲ止メタリト雖ドモ其實ハ決シテ食ヲ止メタルニアラズ所謂復食的ノ生活ヲ爲スモノナリ去レバ其性ヲ全フセント欲セバ眠起ニ先立チ多量ニ桑ヲ給シ彼レカ欲スル儘ニ食セシメ充分ニ復食ノ備ヲ爲サレ



メ以テ眠ニ就カシメサルヘカラズ若シ此際多量ニ桑ヲ給セズ絶食中生活ノ資ニ足  
 ルヘキ程ノ備ヲ爲サシメズシテ眠ニ就カシムルトキハ蠶兒カ共生ヲ遂クルニ於テ  
 不得已他物ヲ借りテ以テ其欠ヲ補ハサルヲ得ス他物トハ即チ筋肉皮膚ニ外ナラズ  
 已ニ筋肉皮膚ヲ借りテ其欠ヲ補フニ於テハ資本ニ缺乏ヲ告ケサルヲ得ス已ニ資本  
 ニ缺乏ヲ告クレバ勢ヒ氣力ヲ失ヒ起後必ス此害ヲ蒙ラサルヲ得ズ尤モ動物ニ在テ  
 蠶兒ノ如キ地位甚タ下劣從テ生活時間ノ短キモノハ一度其害ヲ受ケタルハ容易  
 ニ之レヲ恢復スルヲ得サルモノナルニ於テチヤ催眠後ハ濕氣ノ害ヲ恐レズ專ラ給  
 桑スヘキモノナリ此際給桑ヲ怠レバ眠蠶ヲシテ充分ニ食桑スル能ハズシテ終ニ就  
 眠セシムルニ至ル就眠ノ際ハ其時期食桑ノ不足ニ係ラズ壽命ヲ短縮シテ就眠ス  
 ルモノナリ

夫レ蠶ハ至テ不揃ナルモノニシテ如何ナル完全ノ養法ヲ取ルモ決シテ一齋ニ至ル  
 モノニアラズ然レドモ此一齊ナラサルモノチ一齊ニ滿腹セシメ眠起チ一齊ナラシ  
 ムルハ養蠶ノ秘訣トナサ、ル可ラズ去レバ其一齊ナラサルモノニ一齊ニ滿腹セシ

メヲ以テ眠ニ就カシムルニハ是非此際濕氣ヲ恐レズ桑ノ埋積ヲ厭ハズ前キニ眠  
 就キタル蠶ヲ顧ミズ未ダ眠ヲザル分ヲ目的トシテ桑ヲ給スベシ

二就眠中ハ決シテ濕氣ノ害ヲ蒙ラズ

夫レ蠶兒ハ時期ニ由テハ濕氣ノ害ヲ蒙ルモノナリト雖ドモ催眠以後ハ決シテ濕氣  
 ノ害ヲ蒙ラサルモノナリ如何トナレバ催眠後ハ胃力俄ニ強勢ニ至レルヲ以テ桑ノ  
 爲メニ受クル位ノ濕氣ニハ更ニ何ノ妨クモナク食慾大ニ進ミ食機ノ運動チナスモ  
 ノナレバナリ猶ホ又就眠後ニ至リテハ已ニ滿腹シテ眠リタル蠶ナラバ尙更其害ヲ  
 受ケズ何ントナレバ蠶兒ガ眠ニ就クトキハ人ノ能ク知ル如ク腹中ニアル所ノ尿酸  
 ハ勿論無用ノ物ハ盡ク排出シ嘗テ一點ノ汚物ヲ殘サ、ルヲ以テ濕氣ノ爲メニ腐敗  
 チ醸シ胃力ヲ弱カラシムル媒介物ハ一モ之レナケレバ隨テ其害ヲ受クルノ理アラ  
 サレバナリ之レヲ要スルニ可燃物ノ存在セサル所ニハ燃燒ヲ見ル能ハザルト一般  
 ナリ

故ニ就眠中ハ決シテ濕氣ヲ恐レズ起眠ノ見ユル迄ハ不怠給桑スヘキモノナリ斯ク



スルトキハ大ニ收購チ多カラシムルモノナリ若シ濕氣チ恐レ桑ノ堆積チ忌ミ又良桑チ厭ヒ充分ニ飽食セシメスシテ眠ニ就カシムレバ爲メニ忽チ其害ヲ蒙リ或ハ斃蠶トナリ或ハ不脱皮蠶トナリ起縮トナリ或ハ膿蠶トナリ或ハ空頭蠶トナリ又ハ瀉蠶トナリテ患害百出復タ收拾スヘカラサルニ至ル夫レ蠶兒ハ桑中ニ埋メラルハトキハ起覺ノ遅延スルハ敢テ發育ニ妨アリテ然ル後ニ遅延スルニアラズ唯其進ムモノチ抑ヘタルニ過キササルノミ元來蠶兒ハ時間ニ依テ成長發育スルモノニアラズ光熱ノ度ニ從テ發育スルモノナリ故ニ桑中ニ埋マリタル蠶兒ハ其埋マラサルモノヨリハ幾分カ光熱ノ度ヲ受クルコト寡キチ以テ起覺即チ發育ノ度ヲ緩漫遅延セシムルノミ

#### 十四 蠶兒一齡間ヲ四季ニ譬フ

蠶兒一齡間チ春夏秋冬ノ四季ニ分テ論スルトキハ桑就ケヨリ二日間ハ春季ニシテ三日ヨリ四日目頃即チ喰盛ト唱フル頃マテハ夏季ナリ夫レヨリ桑止メニ至ルマテハ秋季ニシテ桑止メヨリ起蠶即チ蜕皮スルマテハ冬季ナリ去レバ春季ハ發育ノトキニ

シテ機關未ダ充分ナラズ夏期ハ開暢ノ期ニシテ專ラ機關ノ成長ヲ重トシ秋季ハ實効成効ノ時ナリ故ニ專ラ其開暢シタル部分ニ養分ヲ充滿セシメサルベカラズ冬季ハ即チ保藏ノ時ニシテ專ラ秋季ニ於テ收メ得タル養分ヲ以テ其期チ保チ春時ノ至ルヲ待ツヘキ者ナリ然ラハ則チ秋季ニ於テ充分ニ養分ヲ貯ヘシメ以テ冬チ越エ春ニ至ル迄不足スル所ナカラシムルニ非サレバ決シテ全キ好結果ヲ得ヘキ者ニアラサルナリ

#### 十五 給桑ノ分量ヲ論ス

蠶ノ一生中小壯其量チ異ニスルモノニシテ凡ソ動植物消食器ノ働キハ幼穉ノ時ニ弱クシテ壯時ニ強キモノナルハ人ノ常ニ疑ハサル所ニシテ彼ノ人類ノ如キモ小兒ノ時ハ其働キ弱キガ爲メニ物ヲ食スルコト能ハサレバ自然母ノ乳ヲ呑ムニ止マリ彼ノ植物ノ如キモ若キトキハ少シク濃厚ナル肥料等ヲ施ストキハ忽チ病チ起シ枯死スルト一般蠶兒モ一眠二眠ノ頃ハ胃力弱クシテ少シク濕氣勝ナルトキハ其害チ受テ不眠蠶等チ生スルモノナリ故ニ穉蠶ヲ養フニ當リテハ水分ノ多キ嫩葉等ハ之チ避ケ充分開綻シテ稍々瘦硬ナル若葉ヲ給スヘシ三眠以後ハ既ニ壯蠶ニ至リ消化器ノ働キハ強勢



ニ至ルヲ以テ蠶兒ノ食量大ニ進ムモノナレハ從テ排泄物多ク殊ニ糞糞ハ蒸熱ヲ發シ  
 易ク其蒸熱ノ臭氣ハ甚ダシク蠶兒ニ害アルモノナルヲ以テ日々裏抜ヲ怠ラズ注意シ  
 四眼後ノ如キ最モ肥料ノ多キ桑葉ヲ給與スベシ  
 倍テ又給桑ノ分量ノ如キ給桑期ト同シク豫メ一定シ得ヘキモノニアラズ其故他ナシ  
 給桑ヲ受クル所ノ蠶兒ハ種類ニヨリ性質ニヨリテ或ハ肥エタルアリ或ハ瘦セタルアリ  
 リ又桑樹其物ト雖ドモ種類ニヨリ地質ニヨリテ肥瘦アルノミナラズ時期ノ早晚ニヨ  
 リテモ亦各其性質ヲ異ニス然ラバ則チ其分量ヲ一定スヘカラサルヤ言ヲ待タスシテ  
 明カ也是ヲ以テ蠶兒ノ胃腸ニ協議シ彼レノ欲スル度ニ應シテ與フルヨリ善キハ十シ  
 然レドモ養蠶ノ主眼ハ社會ノ元資中即チ桑葉ヲ消費シテ其消費シタルモノヲ更ニ高  
 等ナル形骸即チ生糸ニ變製セシムルノ目的ニ外ナラザレバ其蠶兒ヲ養フニモ蠶兒ニ  
 食セシムルヲ得テレ、限リハ勉メテ之ヲ食セシメ高等ナル形骸物ヲ多量ニ製出セシ  
 ムルヲ以テ本意トス去レバ自然ニ放任スルトキハ十ヲ食シテ十ノ生糸ノミヲ製出ス  
 ルモノヲバ更ニ人爲ヲ加ヘテ二十ヲ食ハシメ二十ノ生糸ヲ製出セシメ増々利益ヲ増

進セシメサルヘカクズ是故ニ桑ヲ與フニハ胃腸ノ求メニ應スルヲ以テ主眼トスレド  
 モ一方ヨリ其胃腸ノ需求力ヲ盛ナラシメサルヘカクズ

世ノ機械的ノ規則ヲ以テ養蠶ヲナス者ハ常ニ蠶兒ノ自然ニ發作スル食慾ト相支吾假  
 觸シテ其度ニ適合スルコト能ハズ假令ヘハ五ノ食慾ヲ感シタルトキニ十ノ食桑ヲ給  
 シ十ノ食慾ヲ發シタルトキニ五ノ桑ヲ與フルガ如ク終始差違ヲ生セサルヲ得ザレバ  
 常ニ蠶兒ノ願望ト相違シテ不和ヲ取ラサルヲ得サルナリ是故ニ我法ニテハ彼ノ蠶兒  
 ナ死物的ト見做シ機械的ノ規則ニ由リテ蠶兒ニ食桑ヲ給スルガ如キ背戾ノ事ハ之ヲ  
 爲サズ專ラ蠶兒ノ需求力ニ視テ其機ニ應シ其度ニ適應スルノ法ヲ取ルニアルナリ去  
 レバ其蠶兒ノ需求力ヲ察シテ其度ニ適シ其機ニ應センニハ即チ一齡ナリ二齡ナリ凡  
 ナ何齡ニ拘ハラズ先ツ一回ハ大概ニ其分量ヲ見積リテ與ヘ後二時間モ經テ最早一食  
 ンテ偃息シタル頃之レヲ見渡シ猶殘桑アルトキハ前キノ給桑ハ多量ナルコトヲ知ル  
 ヘク殘桑ナクシテ全蠶靜ニ偃息スルヲ見ルトキハ其量適當ナリト知ルヘク又桑ヲ喰  
 ヒ盡シテ蠶兒ハ尙ホ蠢動シ居ルトキハ其量不足ナリト知ルヘシ而シテ其次同ヨリハ



之ニ増減酌量ヲ加ヘテ以テ其一日ヲ給シ又翌日モ此法ヲ取ルトキハ始終分量ヲ知ル  
ニ於テ誠ニ容易ナリ斯クスルトキハ蠶兒ノ性ニ違ハズ桑葉ヲ損セズ且ツ其分量ヲ記  
憶スルノ勞ヲ要セズ又分量ヲ衡ルノ煩ヲ取ラズ則チ「アテガイブチ」ノ弊ヲ生セズ能  
ク賓客ノ好ミニ應シテ響應ヲ爲スト一般ナリ

倍テ茲ニ注意スヘキハ催眠ヨリ桑止メニ至ルマテノ分量ナリ前節ニモ述ヘタル如ク  
此際蠶兒ハ滿腹セズシテ就眠スルトキハ大ニ害ヲ受クルヲ以テ此間ハ必ス桑ヲ幾分  
カ殘餘セシムルヲ程度トシ養フヘキモノナレバ此時ニ當テハ右ノ分度法ニ據テ與フ  
ヘキノ限リニアラズ其故他ナシ蠶兒ガ未ダ眠期ニ迫マテサル内ハ匍匐シテ食ヲ四方  
ニ求メ以テ其慾ヲ滿スト雖ドモ已ニ眠期ヲ催シタル後ハ之ヲ四方ニ求ムルヲ爲サズ  
偏ニ就眠スルニ安全ノ個所ヲ撰ンテ糸ヲ以テ我身ヲ纏フコトニ汲々スレバ一度眠期  
中我身ヲ保ツニ於テハ之ヲ安全ナル個所ナリト認メタル後ハ飽マテ之ヲ離ル、丁チ  
厭フテ其傍ヲニ食ノ在ラザル以上ハ遂ニ食セズシテ眠ニ就ク者ナリ此際鮮桑ノ口元  
ニ至ル時ハ少々ツ、之レヲ食スル者ナリ蓋シ此際蠶兒カ其眠期ニ迫マテラレテ專ラ其  
眠起中我身ヲ安スル個所ヲ撰ムニ汲々スル所以ノモノハ昔テ原蠶ガ野ニ居ル蠶樹ノ

枝ニ就眠スルトキ個所ノ適否ニ由テ風雨ノ爲メニ害セラレ且ツ蛻皮ノ際大ニ便毒ノ  
差アルガ爲メニ自然ニ其性ヲ具スルニ至リタルナルベシ加之少シク眠期ヲ催シテ後  
チ彷徨シテ其食ヲ求メ居ルトキハ未ダ其身ヲ纏ヘ付ケサル内ニ就眠スルノ憂アレバ  
寸時モ猶豫ノ出來サル時ニシテ此時ハ實ニ蠶兒ノ多事ニシテ其間髪ヲ容レザル所ナ  
リ去レバ蠶兒ヲシテ其個所ヲ離レズシテ充分ニ食セシムルニハ是非ニ桑ヲ多量ニ與  
ヘサルヘカラズ

十六 養蠶ノ要訣

抑モ蠶ヲ養フノ要訣ハ專ラ蠶兒ト一致和合シテ蠶兒ヲシテ快ク其生ヲ遂ケシムルニ  
アリ若シ蠶兒ヲシテ快ク其生ヲ遂ケシメサルトキハ其結果ノ満足ヲ期ズヘキモノニ  
アラザルナリ是故ニ蠶兒ト一致協和セントナラバ務メテ蠶兒ノ胃腑ニ協議シ其胃腑  
ノ請求ニ應シテ食桑ヲ與フルトキハ素ヨリ蠶兒ニ不足ヲ感セシメ不満ヲ懷カシメサ  
ルヲ以テ勢蠶兒ト協和セサルヲ得ス蠶兒ト協和スルコトヲ得ハ其結果ノ満足ヲ得サ



ラント欲スルモ得ヘカラサルナリ去レバ何齡ニ拘ハラズ此法ヲ以テ桑ヲ給スルトキハ多ク欲スルモノニハ多ク與ヘ寡ク欲スルモノニハ少ク與フルコト甚ダ自在ニシテ養蠶者ノ注意スヘキノ要訣ナリ

附 練木技手ノ養蠶豐作丸

養蠶豐作丸處方

- 一 蠶種ノ選擇 一 匭即充分
- 一 蠶種ノ貯藏 全
- 一 室内ノ清潔 全
- 一 新鮮ノ空氣 全
- 一 溫和ノ陽氣 全
- 一 飼育ノ熟練 全
- 一 家内ノ和合 全

右七味ニ臨機應變ノ所置ヲ加ヘ蠶室ト家族トノ割合ヨリ寡ク掃立テ蠶兒ヲ我子ト思

フテ其桑ヲ過不及ナク與フヘシ此内一味ヲ欠クトハ桑ヨリ日方一分ヲ減スルモ極ノ豊作ハ保證シ難シ

禁物一切ノ病毒及汚物濡桑、蒸桑、煙草、濕氣、寒熱、懶惰、不注意、不和

凡ソ養蠶ニ從事セントスルモノハ生涯コノ丸藥ヲ服膺シテ禁物ヲ堅ク守ルヘシ養蠶ノ豊作決シテ疑ヒアルヘカラス

春蠶飼育標準

長野縣小縣郡上田町

田中吉右衛門男

田中良太郎

一左表ハ余嘗テ西ケ原蠶業試驗場ニ入り實業ニ從事シ習得シタル飼育標準及ビ實業教師トシテ小縣蠶業學校ニ勤務中實地試驗飼育ヲナシ得タル標準並ビニ報國館蠶室ニ於テ實驗シ得タルモノ以上三者ノ飼育標準ヲ參酌折衷シテ以テ一ツノ標準ナ



作爲シタルモノニシテ各地ノ當業者之レニ則リ更ラニ幾分ノ斟酌ナシシ蠶兒ヲ飼育セバ大過ナカルベキナリ

茲ニ注意スベキハ本表ハ蠶量一匁ニ對スル給桑量及ヒ蠶座ノ廣狹等ヲ示シタルモノナルヲ以テ蠶量ヲ精密ニ計算セザレバ或ハ過不足ヲ來スノ恐レアリ而シテ本表ハ三者何レモ小石丸種ニ對スル者ノ標準ナルヲ以テ其他ノ種類ニ至ツテハ更ラニ又幾分ノ折衷ヲ要ス

○第一齡

日	一
時刻	一時
溫度	度一十七
濕度	度五十七
給次	六五四三二一
一回ノ量	二二二二二二 五〇〇〇〇五
一日量	匁三十
蠶座	坪數 除沙
蠶座	一坪
蠶座	寸劉桑ノ
蠶座	一分法

日	二	三	四
時刻	一時	一時	一時
溫度	度八十六	度七十六	度九十六
濕度	全上	全上	全上
給次	四三二一〇九八七	二二二一〇九八七六五	三二二二二二二二
一回ノ量	三二二二三三二二二 〇五五〇〇五〇五	五四四四四四三三 〇〇五五五〇〇〇	六五五五五五五五 五〇〇五〇〇〇〇
一日量	匁一十二	分五匁二十三	分五匁二十四
蠶座	坪數 除沙	坪數 除沙	坪數 除沙
蠶座	一坪	二	三
蠶座	寸劉桑ノ	寸劉桑ノ	寸劉桑ノ
蠶座	一分法	一分法	一分法



給桑回数四十九回 給桑之總量二百七十匁

○第二齡

日次時刻

日 一  
一八五二一八四時

温度 湿度

度 八 十 六  
度 五 十 七

回数

三二二一一九九  
〇〇〇〇〇〇〇

一回ノ量 一日ノ量

匁 七 十 七

坪數

六  
分 除 箱 沙

除 沙

寸 剉 桑 法

二分

日 八  
一八五三一〇七四

度 七 十 六  
度 十 八

日 七 日 六 日 五  
一八五三一〇七四 一八五三一〇七四 一八五三一〇七四

度 八 十 六 度 十 七 度 十 七  
上 全 上 全 上 全

四四四 四四四四四四三 三三三三三三三  
九八七 六五四三二一〇九 八七六五四三二一

五六八 〇九九〇二一〇〇 〇八八八七七六六  
〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇五〇五五

匁 九 十 匁 一 十 八 分 五 匁 一 十 六

停 熟 食 眠 除 催 眠 沙 四 分 箱

一、五 二、五



日 一  
 一八時 刻  
 度九十六 溫度  
 度三十七 濕度  
 三二 回数  
 〇六 量  
 匆六十五 量  
 坪數  
 除沙  
 寸劉  
 三分法

給桑回数三十一回  
 給桑量五百三十八匆  
 ○第三齡

日 六  
 五二一八四  
 度八十六  
 上  
 匆九十三  
 停熟食

日 五  
 一八五二一八四  
 度八十六  
 上  
 〇〇〇〇〇〇

日 四  
 一八五二一八四  
 上 全  
 上 全  
 一八〇七〇八七七  
 〇〇〇〇〇〇〇〇  
 匆七十七百  
 九  
 除催沙眠  
 二、五

日 三  
 一八五二一八四  
 上 全  
 上 全  
 二二二二二一  
 七五五二〇六五  
 〇〇〇〇〇〇〇〇  
 匆十五百  
 九  
 分除箔沙  
 三

日 二  
 一八五二一八四  
 度十七  
 上 全  
 一三四四三三三  
 〇〇〇〇〇〇〇〇  
 匆五十九  
 二、五



日次時刻  
 温度 湿度  
 回数  
 一日ノ量  
 坪數  
 除沙  
 寸到桑ノ法

○第四齡

給桑回数三十五回 給桑量二貫百四十八匁

日	八	七	六
時刻	三二九五	一七三二九五	一七三二九五
温度		度八十六	上
湿度		上	全
回数		全	上
一日ノ量		三三四 〇三四	四六七八〇〇 八〇〇七〇〇
坪數		匁九十九	匁五十七百四
除沙		停熟食	除催眠
寸到桑ノ法			四

日	五	四	三	二
時刻	一七三二九五	一七三二九五	一七三二九五	一七三二九五
温度	上	全	上	全
湿度	上	全	上	全
回数	上	全	上	全
一日ノ量	〇九九九九 五〇五五〇〇	九八八五五五 五〇五七四四	五四五五四四 四八一八八	四四四四三三 八〇四〇〇〇
坪數	匁五十六百五	匁五十二百四	匁百三	匁二十三百二
除沙		分除 箔沙		分除 箔沙
寸到桑ノ法		五		四



日 八 日 七 日 六 日 五 日 四 日 三 日 二 日 一

一七三二九五 一七三二九五 一七三二九五 一七三二九五

一七三二九五 一七三二九五 一七三二九五 一七時

度九十六 上 全 上 全  
上 全 上 全 上 全

上 全 上 全 度十七  
上 全 上 全 上 全

九九〇七〇五〇二四  
〇〇〇〇〇〇〇〇

〇八八二〇〇〇〇〇〇〇〇  
〇八八七五七〇〇〇〇〇〇〇

忽十八百二 忽八五一十百貫 忽七九一十百貫

忽八四一十百貫 忽十八〇貫一 忽十八百七

六〇

六〇

三六

二四坪

除催沙眠

沙中除

分除箱沙

切放

七

五分



給桑回数三十五回 給桑ノ量七貫三百五十匁

○第五齡

日次時刻 一日平均 溫度 濕度 回数 給一回ノ量 一量 坪數 除沙 到桑

天然ノ溫度ニ任ス

分切放

日三	日二	日一
一六二〇五	一六二〇五	一六一時
上全	上全	
八六六五五	五五五三四	三二二五
〇〇〇九九	〇〇〇〇〇	四九五匁
十百三貫	匁十八貫	匁九百八十
九〇	九〇	六〇坪
除沙	除眠起沙	
葉桑		

日七	日六	日五	日四
一六二〇五	一六二〇五	一六二〇五	一六二〇五
上全	上全	上全	上全
三五五四四	五四四三二	二一一〇〇	〇八八八八
五〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	二五五〇〇	〇九九〇〇
〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
十百七貫	匁百八貫六	匁二十七貫	匁八十四貫
九〇	九〇	九〇	
除沙	除沙	除沙	除沙
一熟ヲ催ス			



八	一〇五	九〇〇	二貫	六〇	除沙
日	一六二	七六五	七百	三六〇	全
	上	三六〇〇	四十	一二	全
九	五	一二〇〇	五	二	全
		八〇	八十		

給桑回数三十九回 給桑ノ量三十三貫百三十匁

合計給桑回数百八十九回 給桑全量四十三貫四百三十六匁

右ハ大体ノ標準ヲ示シタルニ過ギザレバ氣候ノ寒暖濕氣ノ多寡等ニ依リテハ多少ノ斟酌ヲ要ス

○備考

一 養蠶豊凶ハ蠶種ノ善惡貯藏良否温度ノ適否飼育ノ巧拙此四者其全キヲ得テ而シテ  
 圓滿ノ結果ヲ見ルヲ得ベシ就中注意スベキハ蠶種ノ選擇ニアリトス  
 一 蠶種ハ貯藏及ヒ取扱方ノ如何ニ依リ或ハ虛弱ナラシメ或ハ發生ノ時期ヲ誤ラシメ

甚シキニ至リテハ發生セザルガ如キ事アリク蠶種如何ニ健全其好ナルハ温度又其  
 宜シキヲ得ルモ飼育法幾程巧妙ナルモ終ニ好結果ヲ見ル能ハザルベシ貯藏不注意  
 ヨリ巨多ノ失敗ヲ蒙リタルノ實例世間尠ナシトセマ貯藏ノ大切ナルコト以テ知ル  
 ベキナリ故ニ是レガ要領ヲ左ニ記シ參考ニ供ス

一 蠶種ハ十一月頃(二三回四十度前後ノ寒氣ニ遭遇スルノ間)迄ハ閑靜ニシテ濕氣  
 ナク空氣ノ流通宜シク常ニ清涼ニシテ温度ニ劇變ナキ室内ニ吊シ置キ入ノ出入  
 多キ所又ハ火氣ノ來ルノ室及ビ日光ノ注射スル所ニハ置クベカラズ

二 十一月中旬頃ヨリ翌春催青前ニ至ル迄ノ間ハ尤モ留意セザルベカラズ即チ此期  
 中ニ於テ暖氣ニ遭ハシメバ遂ニ孵化スルニ至ルベク若シ孵化セザルモ一旦暖氣  
 ニ遭ヒ已ニ發生ノ氣ヲ催進シタルモノヲ再ビ冷氣ノ爲メニ抑止スルトキハ其害  
 タル實ニ尠少ナラザルナリ故ニ此ノ期中ハ成ル可ク氣候ノ劇變ニ感ゼシメザル  
 様注意スベシ之ヲ細言スレバ本期中ハ五十度以下ノ冷所ニシテ空氣ノ流通宜シ  
 キ室内ニ貯藏スルカ亦ハ貯藏器若シクハ貯藏箱(箱ハ一枚ノ種紙ニ付キ少ナク



トモ二寸余ノ余地アルモノヲ用ユベシ)ニ收メ置クヲ要ス

四ヒ込ミノ期節ハ豫メ蠶種ノ近傍ニ懸テ置キシ寒暖計ノ溫度四十度以下ニ降ル  
コト四五回ニ至ラバ天氣晴穩ナルノ日早朝之ヲナスベシ

## 三

寒水浴ヲナスニハ豫メ蠶種ノ全量ヲ調ベ置キ成ルベク寒サノ強キ朝六時頃ニ清  
潔ナル二個ノ容器ニ清水ヲ汲ミ暫ラクシテ一個ノ器中ニ種子ヲ浸シ凡ソ二十分  
間ヲ經テ極メテ柔カキ刷毛ニテ卵面ノ蛾尿汚物等ヲ洗滌シ後テ他ノ新タナル清  
水ヲ入レタル器中ニ之レヲ浸シ爾后大略十分ヲ經テ直チニ之レヲ引キ上ゲ箱上  
ニ藪ヲ敷キ靜ニ種紙ヲ上向ニ此上ニ置キ水滴ノ垂レ終ワルノ後ヲ種紙ノ上下ニ  
紐ヲ附テ北向キノ空氣流通良キ清冷ナル所ノ竿ニ掛ケ日毎ニ二三回位ハ失念ナク  
上下ヲ懸ケ替ヘ平等ニ乾燥セシメ種紙ノ目方浸水前ノ量ニ復スルヲ待チテ前ノ  
室若クハ器又ハ箱ニ收置スベシ

## 四

蠶種ヲ取扱フトキハ晴穩ナル日ヲ撰ビ毎回必ズ手ヲ洗ヒ成ルベク息ノ懸ラザル  
様注意シ不時ノ暖氣濕氣油氣香氣臭氣及ヒ煙草ノ類ハ注意シテ避クベシ

一催青ハ桑芽伸張ノ摸樣ヲ見計ヘ豫定ノ掃立日ヨリ凡ソ二三回前ニ蠶種ヲ貯藏室若  
クハ貯藏器亦ハ箱ヨリ取り出シ徐々ニ溫度ヲ與ヒ發生ヲ促スベシ決シテ急劇ニ溫  
度ヲ與フベカラズ又一旦與ヘシ溫度ヲバ成ルベク降下セザル様注意一度ビ青ミチ  
催シタル種ヲニタビ冷カナル所ニ移スガ如キ事ハ必ズナスベカラズ而シテ此際ハ  
應分ノ濕氣ヲ要スルモノニシテ乾燥ニ過グルトキハ爲メニ發生ノ不齊ヲ來シ亦ハ  
虛弱ニ陥ラシムルモノナレバ極メテ注意チナシ發生四五日前ニ至リナバ溫度ト濕  
度トチ加フル事ニ勉メ時日ヲ經テ數頭ノ蠶兒ノ發生ヲ見バ種紙ノ裏面ニ糸ヲ附シ  
新ラタナル紙ニ包ミ稍々温カニナシ置クベシ

一掃立テチナスニハ正午頃包紙ヲ開キ少時ノ後豫テ準備シ置キタル清淨ナル粟糠若  
クハ粉糠(三四片ニ細粉シタルモノ)ヲ種紙ノ上ニ(凡ソ一粒半並べ)振り掛ケ其上  
ニ剉ミタル桑ヲ與ヘ(之レヲ呼出シ桑ト云フ)蠶ノ桑ニ登リタル時分ヲ見計ラヒ前  
以テ種紙背面ノ中央ニ附ケ置キタル手掛紙ヲ持チテ打落シ尽クシ其上ニ少許ノ粟  
糠又ハ粉糠ヲ散布シ蟻ト共ニ靜カニ混交シ紙ノ上ニ羽根ニテ平等ニ散布シ居直リ



桑子與フベシ

蟻量ヲ檢スルニハ包紙ヲ開ラクノ際紙ノ儘々全量ヲ量リ(包紙ハ前以テ秤量シ記入シ置クベシ)打落シ終ハルヲ俟ツテ掃壳ノ量ヲ檢シ包紙ノ量ト共ニ全量中ヨリ引キ去ラバ差ヲ生ズ即チ其差ヲ蟻量トナス

一蠶室ハカメテ清潔ニ且ツ空氣ノ流通ヲ滑カニシ濕氣ヲ除去スルコトニ勉ムベシ蠶室不潔ニシテ空氣ノ流通惡シキ時ハ爲メニ病蠶ヲ生ズ

一蠶具モ亦清潔ヲ旨トシ乾燥ナラシムベシ而カシテ每養蠶ノ前及ビ後ニ於テ必ず清水ヲ以テ洗滌シ置クヲ要ス

一糊練ハ蠶座ヲ乾燥ナサシムルノミナラズ除沙分箔等ノ取扱ヘニモ最モ必要ナルモノニシテ蟻量一匁ニ付凡ソ一石五斗内外ヲ要ス

但シ稚蠶ノ際ハ二三片ニ碎キタルモノヲ用ユベシ若シ粟練ヲ用弁トスルトキハ焙リテ後用ユルヲ可トス

一飼育中ノ溫度ハ大凡華氏ノ七十度ヲ標準トシ室内ノ溫度之ヨリ下降スルトキハ火

力ヲ用弁テ之ヲ補足スルヲ可トス然レトモ室外ノ溫度非常ニ下降セル時ハも強ク室内ノ溫度ヲシテ七十度ニ上昇セシメントスルニハ勢ヘ夥多ノ火力ヲ要ス火力多キトキハ同時ニ室内ニ惡氣充チ之レガ爲メ蠶兒ヲ害スルニ至ルベシ故ニ之レガ用法ノ割合ハ大略左ノ如クセハ大過ナカルベシ

天然ノ溫度	火力	蠶室内ノ溫度
四十度	二十度	六十度
五十度	十五度	六十五度
五十五度	十二三度	六十七八度
六十度	十度	七十度
六十五度	五度	七十度
七十度		七十度
七十五度		七十五度

一火力ヲ用ユルニハ焚火ト炭火トヲ間ハズ可成給桑後ニ於テナスベシ而シテ炭火ハ



必ズ室外ニテ熟火トナシ用ユベシ

一給桑ノ分量ハ蠶ノ種類及ビ温度ノ高低濕氣ノ多少ニ依リ加減スベキハ勿論蠶ノ發育ニ順シ其量ニ過不及ナク給スルコトニ注意セザレバ蠶ノ發育桑ノ經濟其ニ宜シキヲ得テ養蠶ノ利ヲ收悉スルコト能ハス多キニ過クレハ貴重ノ桑葉ヲ徒費スルノ不經濟ノミナラズ蠶座ニ給桑堆積シテ濕氣ヲ醸シ發育ヲ遅緩ナラシメ病害ヲ招キ亦少キニ過クレハ蠶ヲシテ充分ノ發育ヲ遂ケシムルコト能ハザルモノナレハ注意セザルベカラズ

一桑葉ハ蠶兒ノ依テ以テ生命ヲ繫クモノナレバ是レカ取扱ヘハ尤モ鄭重ニセザルベカラズ決シテ蒸熱ヲ醸シ或ハ枯凋シタルモノ及ビ濡レ桑等ヲ給スベカラズ

一桑葉ハ蠶兒ノ掃立ヨリ第五齡二日目頃マデハ倒切シテ給與スルヲ良トス其大サハ蠶體ノ長サノ方形ニ倒切スルヲ適當トス亦長方形ニ倒切スルモ可ナリ此場合ニ在リテハ長邊ハ概テ蠶體ノ長サノ二倍短邊ハ蠶體ノ二分ノ一トナスヲ要ス

一催眠ニ際シテ除沙スルニハ其ノ時期ヲ誤ラザル様注意スベシ早キニ失スレバ蠶座

堆積シテ發育ヲ妨ケ通キニ失スルトキハ除沙スルノ困難ナルノミナラズ已ニ飼育シテ糸ヲ吐キ身体ヲ纏フモノ多キガ故ニ幾分ノ損害アリ而シテ適當ナル時期ハ八九分ノ蠶兒赤黄色ヲ帯ビ一種ノ光澤ヲ放チ一箱ノ蠶座内ニテ眠蠶二十頭位ヲ顯出セルトキヲ以テ好機トナス而カシテ除沙後多クモ四五回ノ給桑ヲ以テ桑止メトナサザルベカラズ万一幾分不揃ノ蠶ニテ容易ニ桑止メトナラザルトキハ網ヲ掛ケテ給桑ヲナシ他箱ニ遲蠶ヲ移シ取り就眠セシメ眠蠶ヲシテ青キ殘桑又ハ濕氣多キ内ニハ決シテ置クヘカラズ

一桑付ケモ亦大切ナルモノニシテ早キハ宜シカラズ成ヘク悉ク脱皮シタル後即起キ揃ヘタルトキニ於テ之ヲ行フベシ然ラザレバ蠶兒ノ不揃ヲ來スベキナリ但シ非常ノ高温度ニテ乾燥甚シキ氣候ニ遭會セシ場合ニハ一割位ノ眠蠶アルモ爲サザルヘカラザルコトアリ宜ク氣候ニ依リ臨機ノ所置ヲ行フベシ

一上簇セシムヘキ熟蠶ハ其体透明トナリ終尾二三ノ環節ニ排泄物ヲ存スルモノヲ適當トス之ヨリ未熟ナルモ亦過熟ナルモ不可ナリトス



- 一 上簇中寒冷ノ氣候ニ遭會セシトキハ火力ヲ以テ之ヲ補ヘ可成七十五六度前後ノ溫度ニテ結繭セシムベシ
- 一 上簇室内ハ空氣ノ流通ヲ滑カニシテ濕氣ヲ除去スルコトニ務ムベシ空氣ノ流通惡シク濕氣多キトキハ繭ノ光澤ヲ損シ解舒ヲ惡シクス
- 一 上簇室内一方明ニ他方暗黒ナル如キノ場合ニハ其明ナル方ニ覆ヲ設ケテ室内ヲ暗ニスベシ然ラザレバ偏層ノ繭ヲ作爲スベシ但シ此場合ニハ必ず空氣ノ流通ニ注意スベシ
- 一 殺蛹ノ時期ハ注意スベキコトニシテ早ヤキニ失スルモ晚キニ過クルモ害アリ其最モ好期トナスハ上簇後八九日目ニナスヲ以テ適當トナス
- 一 殺蛹ノ方法ハ數種アレトモ其最モ簡便ニシテ貯藏中ノ手數モ又從テ少ナキノ法ハ燥殺法ナリト
- 一 燥殺ノ溫度ハ華氏百七八十度ノ火力ヲ用ヒ三四十分ニシテ全ク殺蛹シ得ルモノナリ

一 蛹ノ生死ヲ知ルノ最モ確實ナル法ハ殺蛹器ヨリ數顆ノ繭ヲ取り出シ之ヲ切リテ蛹ヲ檢シ尾部ヨリ二三節目ノ縫レ込ムヲ見ハ其死シタルノ証ナリ尙之レヲ確知セントスルニハ其腹部ヲ割切シ胃ヲ檢スヘシ胃液柔塊トナリ恰カモ美羹ノ捻子リ加減ノ如クナルヲ見バ蛹全ク死シテ後チニ發生スル等ノ患ヒナシ

### 養蠶實行錄摘要

信濃小縣東塩田

横關式左衛門

#### 總論

夫レ人智進ムニ隨テ万物事足ル事足ランニハ財力是ニ先ンセン語ニ富國在養蠶(家ノ富國ノ榮ヲ圖リナバ養蠶ノ道ヲ勵メ世ノ人)ト誠ナル哉言ヤ富國ヲ圖ラント欲セハ農商業ニアフズシテ他ニ道ナカルベシ抑々養蠶ハ我國天賦ノ貴業ナレハ我輩常業者ハ共ニ圖リ共ニ進ンデ之ヲ改良シツ、擴張シ養蠶木ニ名譽ノ馨花ヲ國庭ニ輝ヤカ



シ益々利潤ノ果實ヲ結ビ得シコトヲ希望ニ堪ヘザルナリ茲ニ本業ヲ爲サンニモ第一其始終經濟ヲ算リ其用意ヲナスベキモノニシテ飼育適當シ長結果ヲ得ルト雖モ其精算上收支相償ハサルトキハ寧ロ本業ヲ爲サ、ルニ如カサルナリ又誤テ之ヲ違蠶シタルトキハ資本ト多日ノ勞ハ水泡ニ歸セン因テ單ニ名譽飼ト呼ハル、ヨリ寧ロ利益飼ト言ハル、ニ如カス然リト雖モ徒ラニ利益飼ノ目的ニ過ギ一舛ノ舛ニ一舛五合チ一手ニ量ラントスル如キ過分ナル山事業ヲ起シ一時ニ大利ヲ得ント欲スルトキハ其結果充分ナラズ甚シキニ至テハ違蠶スルニ至ルヘシ又飼育ニ對シ徒ラニ桑葉ヲ惜ムトキハ一文惜ミノ百足ラズトナリ又余リ人夫ヲ減スルハ終リニ至リ事意外ニ出デ、蠶ハ桑ノ喰ヒ逃チナシ違蠶ト改名シテ仇ヲ酬フルニ至ルヘケレハ勉メテ汰費ヲ除クニ如カザルナリ而シテ分限相當ト云フ事コソ大切ナレ養蠶家ニ向テ養蠶方ヲ説クハ孔子ニ對シ道德ヲ賣ル如キモノナレトモ如何ニ養蠶學者先生ニモ將來必スシモ誓テ養蠶ニハ失敗セサルトハ云ヒ難カルヘシ弘法ニモ筆ノ誤リ河童ニモ河流ト云ヘル諺アレハナリ況ンヤ吾輩幼稚ノ當業者ニ於テハ前車ノ覆ルヲ看テ後車ノ戒トシ人ノ振テ

見テ吾振テ直シ聽クハ一時ノ羞恥ヌハ末代ノ辱ナレハ自ラ研キ人ニ問ヒ失策ナキ

注意スヘキノ老婆心ナリ

茲ニ本業ヲ營マン家庭ニ附テ言ハン第一、一家ノ共同和合スルニ如カス男子ハ本業内外ニ心ヲ配リ其計畫ヲ全備シ女子ハ其全備チ内ニ實行スル等ハ自然分業ノ姿ヲ有ス是レ天稟ノ性ハ同シト雖トモ其質ヲ異ニス素ト男子ハ巨事ヲ主トリ女子ハ細事ヲ主ドル手技工ミニシテ相依リテ以テ其業ノ結果ハ得ラルヘキナリ

抑モ動物タルモノ天賦其性ト質トチ異ニスルト雖トモ總テ天地ノ際ニ生活セサルハナシ各種悉ク寒暑ヲ適宜ニシ居動自由ニ生育ヲ遂クル是レ自然ノ理ナリ夫レ蠶ハ關節動物部六脚虫類鱗翅族夜飛科中ノ紡績科蠶蛾屬ノ家蠶種ニシテ昔ニ沂テ之ヲ尋ヌレハ固ト山野ニ生長シ尺蠖(尺蠖ハ則チ蠶ト同類ニシテ種屬ノ異ナルモノ也)ト共ニ群化チナシ野桑ヲ食シ極メテ薄キ龜繭ヲ結ヒタルモノナリ后人之チ貴ミ漸々室内ニ飼慣シ次第ニ人手ニ安シテ慣レ染リ今ヤ人ノ産ミタル蠶ト云フモ然ルヘキモノ、如シ而シテ人智ノ工ミナル質類ニ撰擇改良ヲ積ミ多年、苦勞ヲ以テ其繭大ニ優美ヲ添



へタリ蠶業ノ進歩眞ニ思フヘシ

素ト蠶ハ人手ニ養ハル、ヨリ室内ニ生育シ來リタルモノナレハ家外ニ生長スル野蠶ト異ナリ今ヤ厚繭ヲ結ヒ從テ良絲ヲ吐ケトモ一利アレハ一害ハ免カレスシテ其體質柔弱ナレハ氣候ノ變動ヲ感スルコト速ニシテ爲メニ多クノ疾病ヲ起シ易キ者ナリ惟フニ其病ニ罹レルハ氣候變動ノ一途ノミニアラス桑葉給與ノ如何ト糞沙ノ除去ヲ怠ルヨリ遂ニ病原トナルモノナリ因テ蠶体ニ一度病ヲ稟ケシ上ハ治シ難キモノナリ而シテ輕症ナル者ハ幸ニシテ性命ヲ繋グト雖トモ其結果充分ナラサルモノナリ且ツ蠶病ニハ之ヲ治スル良藥ナキモノナレハ之ヲ驅除シ總テ蠶体ニ病ヲ稟ケシメサル様飼育ニ於テ倒レヌ前ニ注意ノ杖ヲ立ツルヲ親切緊要ナリトス

先ツ養蠶ヲ營マンニハ第一良種ヲ撰ミ良桑ヲ備テ良飼ヲ施セハ無論良結果ヲ得ヘキモノナレトモ如何ニ良種良桑ヲ以テスルモ一朝飼育ニ油斷アレハ其油斷ハ大敵ト化シ大仇ヲ爲スナリ人ハ氏ヨリ育チト云ヘハ蠶モ亦種ヨリ飼育ト云フナリ素ト蠶ハ幼稚ノ時ハ暖カニ養育シ恰モ慈母ノ赤子ヲ養フニ外ナラズ其生長スルニ從テ天然ノ氣

候ニ温カヲ賴ミ其寒暖ヲ折衷シ殆ント暑カラス寒カラズ中和シテ適度ノ氣候ニ飼育ヲ執リ蠶体ノ生理ニ適當スル様苦心スルヲ緊要トス總テ勉ムレハ効アリ勉メサレハ効ナシ濡手ニ泡ハ捉ミ難シトソ又体内ニ固有セル持病ノ如キハ是ヲ驅除セズンハアルヘカラス是レ先ニ原種ヲ撰擇スルニ外ナラサルトイフ所以ナリ

養蠶ノ業タル余カ年々歳々同法ヲ以テ同室ニ飼育シタルモ其年ニヨリ氣候ノ度合ニ幾分力遲速ヲ來シ二眠以前ハ勿論四眠前後ト雖トモ其寒暖ハ年々之ヲ前年ニ對等スルコト能ハス平均上下二度位ノ差ヲ生ス從テ眠起ノ時日モ亦幾分ノ差ヲ來セリ察スルニ東地ノ仕方ヲ西地ニ移スコトヲ得サレトモ其大同小異ナルニ至テハ之ヲ折衷應用スルヲ得ヘシ總テ地勢風土ノ異ナルニヨリ寒暖ノ遲速同一ナラサレハ其仕方亦別ナラサルヲ得ス其地其人ノ適當ノ養法ヲ執ルヘキモノニシテ必スヤ所換レハ品換ル郷ニ憑リテハ郷ニ從ハサルヲ得サルモノナリトス

蠶兒發生ハ年々五月七八日ヨリ十一二日ノ際ニ於テス六月十四五日マデニ熟蠶トナル總テ三十三四日間ニシテ上簇ス室内寒暖ハ六十八度ヨリ七十一度ノ間ニ位ス即チ



温涼折衷育トス以下項目ニヨリ養蠶始終ノ實行ヲ述ヘントス

○蠶卵種貯藏取扱ノ事

蠶種ヲ製造シ終レハ大氣ノ微通スル清良室ニ差架ヲ構ヘ卵面ヲ上向ケニシ扁フニ据置キ漸々卵面茶褐色トナリ後薄黒キ色ヲ呈スルヲ度トシ之ニ緒ヲ附ケ掛架ニ吊リ置キ大氣ノ靜通ヲ計ル其變色次第ニ止マレハ日ヲ重ネ冷氣ヲ感スルニ準ヘ卵中ノ内溶液體慥マリ外皮モ亦硬ク其呼吸力モ少クナレハ濕氣臭氣煙草氣ノ患ナキ良室ニ紙袋ヲ上覆ニシテ吊リ置クモノトス若シ此等ノ惡氣ニ相遇スルトキハ其發生期ニ至リ早晩其害現ハレテ遂ニ發生セサルモノ多シ又發生スルモノアルモ多クハ一眼前ニ斃ルモノナリ

大寒ニ至レハ卵ノ内部ハ益々慥カマリ外皮モ彌硬ク此時節ニ於テ寒水浴ヲ行フ是レ卵面ニ附着セル蠟尿此中ニ會々「バクテリヤ」混スルアリ及ヒ種々ナル汚穢物ヲ洗滌シ又此當時ハ萬物乾燥ニ過キ卵ニ含メル水分モ氣發シ幾分カ減少スレハ此不足ヲ水浴ニ補ヘ又天然ノ本性ヲ保持セントスルノ意ニアリ其方法ハ明朝之ヲ行ハント欲

セハ先ツ前夜ニ於テ其晴天ヲ候ヒ室外ニ甲乙二箇ノ大桶ニ清水ヲ注シ置キ原種ノ上下ニ系緒ヲ附ケ之カ量目ヲ量リテ記憶シ置キ明朝六七時(豫テ日光ノ直射ヲ防ク)ノ頃甲桶ニ水浴スルト三四十分ヨリ一時間ニテ筆ヲ以テ悉ク卵面ヲ洗タルハ桶ノ水濁色トナル而テ卵紙ヲ乙ノ桶水ニ入レ二三回他ノ筆ニテ再洗(劣等ノ種ハ護謨力弱クノ此時大ニ落粒ス)ナナシ以テ灑ギ上クルヲ常トス曩ニ箔中ニ藁ヲ少シク散布シ措キ灑ギ上ケタル卵紙ヲ上向ケニ扁置シ平等同時ニ水分ヲ垂ラシメ且其紙裏ノ他物ニ冰リ着カザル様ニス此ノ如クシ置クコト凡二日間ヲ經テ之ヲ素ヨリ風ノ強ク觸レサル日影ニ移シ上下ノ緒ニテ交々吊リ換ヘ略ホ乾キタルト認メタルハ之ヲ室内ニ移シ交々吊リ換ヘ凡廿日間ヲ經テ之ヲ再ヒ權量ニ衡リ元量ニ比シテ目方幾分カ減少スルヲ以テ全ク乾キタル者トス蠶卵ハ寒氣ヲ通スヘキ性質アレハトテ其度ヲ過シ水浴シ置ク事十日余ニモ及ス時ハ發生セサル者多シ若シ幾分カ紙内ニ水分ヲ含有セル者ヲ貯藏スルハ後日大害ヲ發表スル者也又寒水浴ヲ施スト施サハルトヲ比スルニ同シ取扱ニシテ水浴シタル者ハ四五日後レテ發生スルモノト雖トモ一期一齊ニ發生



ス之ヲ施サ、ル者ハ四五日間モ前ニ發生シ且ツ一期一齊ニ發生スルコト少ナク區々ニ發生(晩春ノ如キハ尙以テ早發ス)スルヲアリ又種紙モ水浴シタル者ハ其質粗ニ變シ臭氣ヲ脱スルノミナラズ外濕ヲ稟ルコト少シ是レ實際ニ於テ囑ナレハ水浴ノ効力ナカルヘカラズ漸クニ原種全ク乾キ上リタル後ハ前陳ノ如ク紙袋ニ入レ清瓦ナル室ニ吊リ天然ノ寒候ニ觸レシメ置クヲ常法トス素ト種ハ一時寒氣ニ觸レ後六十度以上ノ溫度ニ遭ハサレハ發生氣ヲ催サス五十度以下ナレハ發生セサル者也因テ今明治二十四年一月ニ於テ蠶卵小量ヲ紙ニ包ミ余カ膚ニ着ケ置クコト晝夜十一日間ニシテ十二頭十二日間ニ於テ悉ク發生シ後三日間ニシテ餓死シ黄泉ノ客トナレリ

原種モ桑芽ノ發育ニ伴ヒ天候ノ暖氣ニ促サレテ孕化ヲ催ス是レ理ノ然ラシムル所以ナリ然レモ或ハ年ノ氣候ノ遲速(明治廿三年ノ如キハ二月中旬ヨリ天候俄ニ進ミ三月ニ於テ華氏七十度ニモ及ヒシヲアリ爲メニ其孵化ヲ催シタルモ地氣ハ未ダ進マズシテ桑芽ハ催ヲ來サ、ルヨリ大ニ不幸ヲ見タルモノアリ又同年十一月モ不順暖氣ニテ其貯藏ヲ誤リタルモノアリト云フ)ニヨリ蠶兒ノ孵生ト桑樹ノ發芽ト相伴ハサ

ルコトアリ以前ハ二月中ハ室内ニ吊リ置キ三月ニ至リ貯藏シタルモノハ二十三年度ハ二月廿一日二十四年ハ三月一日(室内ト貯藏所何レモ四十二度)貯藏シタリ其貯藏ノ模様タル原種ヲ廣紙ニ包ミ厚キ桐板ノ(桐ハ其質粗ナル故ニ大氣自ラ通シテ俄然外氣ニ感スル少シ)ニ重箱ニ其中ニ種紙ノ重ナルハ宜シカラザレバ細キ竹串ヲ以テ架ノ構造ヲ擬ヘ寒暖計ヲ備フ而シテ紙ト紙トノ密着セサル様注意ス又薄板ノ箱ハ自然外氣ニ感シ易クシテ同所ニ貯藏シ置クモ幾分カ先キニ發生ス而シテ此箱中ノ架ニ原紙ヲ差シニ重蓋ヲナシ豫テ備アル貯藏所(四十二度以下)ニ移シテ安置ス後漸次春氣進ムニ從ヒ凡ソ發生ヨリ二十五日間モ以前ニ貯藏所ノ戸ヲ開キ(四十五度以下)凡ソ五日間ヲ經テ包紙ヲ除キ箱ノ儘別室(六十度以下)ニ移シ置クコト十日間又之ヲ他ノ暖室ニ(六十五度ヨリ動モスレバ七十五度ニ至ル)移シ凡十日間ヲ經レハ天然ノ氣候ニ感動シ遂ニ發生スルモノナリ六十五度以上ノ室ト雖モ氣候ノ變スルヲアレバ油斷セラレス乃チ四月十六日ヨリ甫テ之ヲ促シ彌五月十日前後ニ掃立トナル而シテ其發生ニ垂ントスレハ又廣紙ニ包ミ蠶室(此以前ニ貯置シ凡華氏六十八度ヨリ七



十一度マデニ轉シ其室ノ氣候ニ馴レシメ追々掃立ニ掛ルノ準備ヲナス  
 原種ノ貯藏モ亦最モ當業者ノ大切ナル仕事ニシテ先ツ卵紙ニ對シ禁忌スヘキハ第一  
 空氣ノ不流通第二濕氣第三煙氣第四臭氣第五冬期ニ暖氣ヲ與フルコト第六晚ク種ヲ  
 貯藏スルコト第七俄ニ涼所ヨリ暖所ヘ移スコト第八幾分カ暖氣ヲ帶ヒタル種ヲ再ヒ  
 貯藏所ヘ戻スコト第九総テ風及ヒ劇動ノ寒暖温涼ニ觸レシムルコト等ニシテ詳細ハ  
 擧ケサレトモ以上概記スル所ハ其最モ害毒ナルモノナリ若シ此貯藏ヲ誤ルトキハ一  
 時其害表レサレトモ養蠶始終ニハ必スシモ早晚病疾ヲ招クモノニシテ蔣カス種ハ萌  
 スト云ヘリ亦注意セスンハアルヘカラサル也

蠶種ノ良否ヲ鑑定センハ甚タ六ヶ敷キコトニテ先ツ肉眼的ニ之ヲ視察スルトキハ其  
 種類ニヨリテ卵粒自ラ大小アレトモ白朧質ハ自然其色味ヲ帶ヒ黃朧質モ亦黃色ノ氣  
 味ヲ顯ス是レ其固有性ノ質ニシテ其卵粒ノ狀リ粒々揃ヘ少シク中凹ニシテ其形チチ  
 亂サズ且ツ硬ク扁ラニ附着シテ其位置ヲ失ハス卵色區々ナル色ヲ現ハサズ何處カ明  
 ルク晴々シテ少シク藤色ヲ帶ヒタルモノヲ上品トス又之レニ反シ卵粒不揃ニシテ附

着力弱ク且ツ産附方一所ニ重ナリ卵粒ノ位置區々ニシテ綿面腹クレテ見分宜レカフ  
 サルモノヲ下等品トスルハ勿論ナレトモ又顯微鏡ヲ以テ之ヲ視察スルモ只其微粒子  
 ノ有無ヲ檢定スルニアリテ其朧質形容其種類ノ如何ヲ辨知スルコト能ハサルモノナ  
 ラン又卵種ノ光澤タル卵皮ト卵内トノ中ニ有スル色素及其位置ノ如何ニヨル是其色  
 素タル蠶ノ質ニアリ又桑園ノ地味及其肥料等ニモヨルコトアルヘケレハ一概ニ光澤  
 ノミチ以テ種ノ良否ハ論シ難キモノナリ然レトモ當地ニ製産セルモノハ其光澤タル  
 藤色茶色(又赤色)ノモノ、ミチ撰ゾテ飼育スルトキハ幾分カ早質ニアリ)ノモノヲ通  
 常上品ナリトスレトモ黒色体ニシテ何處ゾ粧光アリテ滑輝アルモノハ惡シ當地ニ古  
 來ヨリ言傳フルニ赤色ノ種ハ良種ニシテ飼ヒ易シト果シテ然リ是レ學理ノ進マサル  
 先年ニ於テ實地經驗ニ年ヲ積ミシヨリ此言傳アルハ實理相適ヘリト云ツヘキナリ見  
 分上良種ナリト雖トモ微粒子(微粒子ヲ有スル種ハ變色スルコト少シトス)ヲ有スル  
 モノアレハ能々原種ヲ撰ミ無毒ノ良朧質ノモノヲ以テスヘキナリ

○蠶室ノ裝置及氣候折衷ノ事



蠶室ヲ南面(少シク東南ニ向フ)シ南北ニ大氣ノ流通ヲ圖ル旭ハ瓦シトスレトモ直接ニ之ヲ射ルチ忌ム午后西方ノ日光ハ害アレハ堅ク之ヲ防ク玆ニ余カ蠶室ノ構造ヲ云ハンニ乾燥ノ地ニアリ東西長ク南北淺クシテ溫度ノ差(奥行深キ室ハ氣候不平均ニシテ冷濕多ク爲メニ膿病等ノ病多カラン)因テ南北ニ三間ヲ構フト差二間半トハ南端ト北端トハ溫度ニ差アリ二間架ナレハ差ナキカ如シ)ヲ尠フス平屋造リニシテ強風ヲ恐レ通常ノ都台ヲ以テス屋根ハ二重ニシテ寒熱ノ劇シキヲ防ク各室東西ニ連リ其周圍ハ悉ク廊下ニシテ(床下二尺五寸)南方外面ハ戸及障子ヲ以テ過分冷熱ノ侵入ヲ防ク餘ノ三方ハ厚壁ニシテ冷氣ヲ支フト雖モ大氣ノ流通ヲ計リ各方ニ口アリテ二重ノ戸障子トス内回本室ハ東西二間半南北二間余(床下三尺)各室トモ南方障子ニシテ餘ノ三方ハ戸ヲ以テ圍ミ鴨居上ハ悉ク小戸ヲ引違へ及ヒ開戸トナシ溫度ノ様子ニヨリ臨機應變之ヲ開閉シ各室共ニ溫度ヲ平均セントス天井ハ簀子ニシテ二眠後マデ此上ニ筵ヲ載セ上部ヨリノ冷氣ヲ防ク漸次日ヲ退テ悉ク此筵ヲ除キ下々屋根ノ中央ニハ窓ヲ設ケ開戸ヲ附ケ上屋根ニモ亦窓ヲ構ヒ鍍格子姿ヲナシ此ノ上下ノ窓ヲ適宜ニ

開閉シ鬱氣ヲ洩ラシ又南風アレハ北窓ノミヲ開キ北風アレハ南窓ノミヲ開ク如キハ其臨時ニ應ス各室ノ中央及廊下此處彼處ニ小爐ヲ備へ冷濕等ヲ火力ニ補フ此爐上ニハ紙造リノ丸キ胴ノ如キモノヲ覆ヒ火燼ノ足下ニ散シ下部ヲ暖メンコトヲ要ス床上ニハ乾キタル稗(厚サ二寸程)ヲ扁ラニ散ラシ其上ニねん(筵ノ厚キモノニシテ廣シ)ヲ布キ下部ヨリノ濕冷ヲ防キ自ラ溫度ヲ保タシム

小飼室ハ連室ノ中央ニ於テス二重床ニテ床下ニ火力ヲ以スル裝置アリ日ヲ退テ蠶兒掃立以前ニ於テ内廻リノ戸障子ノ建着クニ紙ヲ以テ目貼シ外風ノ入ルヲ防ク四面紙張ヲ以テ之ヲ圍ム而シテ自然新氣ハ障子紙ノ漉目ニ入り舊氣ハ其横窓及ヒ天井簀子ノ際ヲ經テ遂ニ上窓ニ洩ル架ハ各室東西相對シ二間ニシテ箔四枚並ヒ拾枚差トス段間九寸余アリテ自カラ差アリ上下一尺余ノ空間アリ箔ハ内巾ニテ横二尺五寸五分縦三尺五寸ヲ通法トス而シテ日々進ンテ暖氣トナルニ從テ二眠後ヨリ退々適宜ヲ圖リ紙張及ヒ目貼ヲ除キ追々三眠ヨリ四眠トナルニ至リテハ蠶ハ氣候相共ニ進ムモノナレバ漸次徐々ニ外戸ヲ開キ大氣ノ間接寛和ニ流通ヲ求ム室内溫度始終平均七十度位



ナルヲ目的トス然レトモ夜ハ自然冷氣ナルコソ常ナレハ穩カニ三四度位ノ冷氣ハ差支ナシトスレトモ其度俄然下ル時ハ遠ク和カナル火力ヲ以テ是ヲ補フ又濕氣冷氣等ニ際シ火力ニ資テ之ヲ補ハンニモ平常天氣ニシテ室内ノ溫度平均七十度ナルニ冷濕氣ノ爲メ六十度ニ下ルトキハ此際六十三四度ニ是ヲ補フモノトス若シ之ヲ七十度ニ上スルトキハ炭酸瓦斯ノ爲メニ害ヲ稟ルアリ又火力ヲ以テスルトキニ際シテハ必ス上窓ヲ開カサルヲ得サルナリ火力ヲ以テ冷濕ヲ補フト雖モ四眠後ハナルヘク之ヲ用弁ス然レトモ六十度ニ下ラントスルトキハ臨機ニヨリ少シク之ヲ用ユルコトアリ四眠後ハ蠶ノ吐ク炭酸瓦斯モ増シタルニ火力強ケレハ炭酸瓦斯多クナリ從テ酸素ヲ減スレハ蠶體ニ養分乏シク遂ニ空頭病ノ原因トナリ又ハ膿病トモナルヘキモノナリ蠶兒ニ眠以前ハ氣候冷氣ニ過クルモノナレハ之ヲ暖カ(凡七十度)ニ飼ヒ生長スルニ從テ最モ天候ニヨリ只其冷濕ヲ防クニアレトモ其二眠前ノ溫度(七十度ヲ云フ)始終蠶ヲ取扱ノ人ノ自身ニ適スレハ蠶ニモ亦適當ノ溫度ナリトス若シ此人數回外出スルトキハ直ニ身体外温ニ觸レテ慣レ染リ而シテ室内ニ入ルトキハ室ノ溫度ニ差ヲ覺ユレ

トモ其實吾身体ノ溫度ニ差アルモノナレハ此取扱フ人ハ外出スル時ハ先ツ蠶室ニ入り足下ニ冷ヲ覺ヘ又蒸氣ハ勿論惡臭等アルハ其氣候充分ナラズ又二眠以前ハ其取扱人ハ通常給着物一枚ヲ着シ此中ニ住事ヲナシ適温ナレハ凡ソ七十度ダラントス又寒暖計ヲ使用センニ先ツ室内ノ氣候ヲ吾體温ニ詢ヒ此溫度ニシテ蠶體ニ適スルカ又不適スルカヲ思考シ後寒暖計ヲ視ヘキナリ徒ラニ寒暖計ノミニ任セス只之ヲ表準トスルモノニシテ吾身体ト云フ生キタル寒暖計ヲ第一トス又乾濕ヲ知ラン略方ハ室内ニ点火ヲ燈シテ之ヲ知ル室内ニ水分アルトキハ点火中ニ黑色ノモノ多クアリ且ツ水分ヲ火中ニ含ミ火色白味ヲ帯ビ空氣ノ重キニ壓セラレ火先キ丸形ニシテ上ニ立ダス若シ室内ニ水分ナキトキハ火色赤ク黑色ノモノ少ク空氣ノ輕キヲ以テ火先キ充分ニ尖リテ上リ立ツ又翌日ノ天日ヲトフニモ亦十ノ八九ハ易者カ得意トスルモノナリ且又乾濕計ヲ備ヒテ之ヲ計ル而シテ雨天續キ内外濕氣シ又冷氣續クトキハ(給桑除沙ニ最モ注意ス)内外ノ戸障子ヲ閉シ秤ト火力ノ資ニヨレトモ熱氣過クルトキハ外回リノ戸ヲ開キ之ヲ廣クシ北向ノ窓ヲ悉ク開キ之ヲ防ケトモ能ハサルトキハ



廊下ニ少シク水ヲ置クトキハ其効著シ然レトモ當地春蠶ノ期節ニハ如此ト更ニナシト云フモ可ナリ然リト雖モ巽風南風ノ如キハ殊ニ蒸氣多ク且ツ有機分ヲ含ム多量ニシテ蠶體ニ感スルヲ速ニシテ空頭病トナル元因ナリ

氣候ヲ最モ大切ニ配慮スヘキハ蠶ノ眠中ナリ其体ミニ伏スヤ肺及ヒ營養管ノ皮ヨリ外皮迄一重ツ、悉ク脱シ薄膚トナルノミナラス食餌ヲ絶テ其体中ノ脂肪ヲ營養トスルト雖モ幾分力弱リテ來スハ勿論ナリトス此時氣候ニ油斷スルトキハ冷熱感シ易ク遂ニ病原トナルヲ受合タリ多ク蠶ハ氣候ノ折衷不行届ヨリ發病スルモノナレトモ就中眠中ノ油斷ニ病原ヲ醸スコト多分ナレハ最モ注意ヲ主トス實ニ養蠶飼育中ノ大切ナル同候折衷ノ仕事タル天氣ノ變ニ應シ之ヲ折衷スルモノナレトモ先ツ小飼室ヲ親切上手ニ裝置スレハ氣候變動少シトス其始終ニ至ル配慮ノ如キハ實ニ寸言ニ盡ス能ハスシテ其暑カラス寒カラス實ニ適度ノ具合ハ長ク此地ニ棲息シ其氣候ニ慣レ手加減心覺ニアリ諺ニ習フヨリ慣レヨト云フカ如シ只其蠶室ノ番人カ身体ニ其適度ノ具合ハ多年ノ勞苦ヲ積テ自ラ悟ルト云フ場合ニナリテ之ヲ折衷スルニ外ナラス且ツ蠶

室ニ思ムヘキモノハ煙氣蠶ノ臭氣其他臭氣汚穢物及ヒ糞等ハ堅ク掃キテ去ルモノトシ諸機械ノ如キハ發生廿日程以前ニ於テ悉ク之ヲ洗濯シ其清潔ヲ主トスルハ勿論尙能々乾キタル器具ヲ用弁ルモノトス殊ニ養蠶ニ必要ナル溫度ヲ保護シ濕氣ヲ防ク煤品タル秤(硫酸ヨリナルモノ)ノ如キハ成ルヘク之ヲ寒水ニ洗ヒ其日光ニ曝シ再ヒ之ヲ彼岸後ノ日光ニ曝シ指ニテ粉トナル位ニ乾カスモノトシ其秤ヲ彼岸後清水ニ洗ヒ乾カシ置キ扁蓋ニ炊リ其水分ノ蒸發スルノ後少シク變色スレハ之ヲ度トシ風ニ曝シ其強臭ヲ去リ用品トス此二様ノ仕方ヲ以テ使用ス又室外ニ用弁ル薪ハ必ス松木ヲ以テス是レハ前年ニ於テ之ヲ細ク割リ外氣ニ曝シ置キ悉ク乾カシ火爇ノ和カナルヲ目的トス又冷濕及ヒ蒸氣等アルトキハ其適宜ニヨリテ松葉ヲ少シク一時(此時氣抽窓ヲ必スシモ開キ置ク)ニ焚キ鬱氣ヲ散スルトアルモ悉ク乾キタルモノヲ以テス若シ此松葉ニ幾分濕氣臭氣アルトキハ不慮ノ害ヲ蒙ルモノナリ且ツ室ノ内外ニ用ユル炭ノ如キハ雜木ノ細カナルばや炭ヲ用ユルヲ良トスレトモ之レニ不足ヲ來ストキハ普通ノ堅炭ヲ寒水ニ浸シ之レヲ日光ニ曝シ貯ヘ置キ室外ニ火トナシ之ヲ爐ニ入レ此上ニ



藁灰ヲ覆ヒ置キ其上ニ紙胴ヲ以テスル前ノ如シ此ノ如クナレハ炭質ノ間源ニ混スル有機物氣發シ質輕ク火燐和カニ臭味ナク最モ蠶ニ適フモノトス扱テ退々掃立ノ期ニ迫ルヲ以テ四月末ニ於テ蠶室ヲ掃除シ諸機械ヲ洗ヒ悉ク日光ニ乾シ前陳ノ如ク室内ヲ裝置シ掃立ノ四五日前ヨリ凡ソ七十度ノ氣候ヲ計リ總テノ器具ヲ備ヘテ掃立ニ掛ラントス

○蠶兒發生掃立ノ事

蠶兒掃立ハ當日午後一時ヨリ二時半頃迄ニ於テス其期節ハ前ニ云ヒシ如ク通年五月七八日ヨリ十二日ノ際ニスレハ即チ桑芽四五分位ニ發育ス此掃立ノ仕方種々アレトモ此處彼處ニ四五虫發生シタルヲ見レハ之ヲ掃キ捨テ此ニ於テ糊氣ナキ漉目粗ナル廣キ薄紙六枚續キノモノニ(箔ノ内巾ナルモノ)卵面ヲ下向ケニ据ヘ此紙ヲ一折シ又卵紙ノ裏面ヘ二折三折ニ細ク折り疊メハ即チ種紙ノ形ヲニ包メルヲ以テ之ヲ返セハ卵面上向ケトナリテ包紙ノ内ニアリ且發生ニハ多量ノ水分ヲ要ス因テ其ノ掃立ノ前日ニ於テ包紙上ニ桑葉ヲ一面ニ布キ濕氣ヲ與ヘ其盛箔ニ安置シ此中ニ寒暖器ヲ入レ

(凡七十五六度)箔ノ共蓋ヲ覆ヒ置クコト凡四拾八時間位ニシテ蠶兒發生ス其大候ノ如何ニヨリ幾分ノ時間ヲ差フレトモ溫度ノ斟量ニ注意スレハ大同小異ナルモノナリ扱テ此ノ如ク發生シタリト認メシ時ハ室内溫度凡七十度ヲ目度トシ箔ヨリ原種ヲ出シ桑ヲ落シ此包紙ヲ靜カニ廣クルトキハ蠶發生シ包紙ノ裏面ニ附着セルヲ觀ルヘキナリ茲ニ豫テ用意シ調ヒ置キタル刻桑ヲ與フルモノトス其將ニ發生セントスルヤ桑ヲ包紙ノ上ニ載スヘシ然ルトキハ蠶卵ニ幾分ノ濕氣ヲ與フヲ以テ大ニ蠶ノ發生ヲ助クルモノナリ又倒桑ヲ包紙ニ載スルハ濕連法ニシテ蠶ノ食飼ヲ補フモノニアラス又包紙ヲ披キ粟糠ヲ振り第一回ノ給桑ヲナシ蟻ヲシテ空卵紙ヲ離レシム之ヲ稱シテだまし桑ト云ヒ又呼出シ桑トモ云フナリ蠶卵ノ發生ニ迫レハ其呼吸力益々烈シクナルヲ紙ニテ包ムハ理ナラサルカ如クナレトモ其呼吸タル包紙ノ漉目ニ流通交換スルモノナレハ論ヨリ証據ニシテ實驗上差支ナシトス又掃立方ニモ羽箒ヲ用ヘ且ツ蠶ノ油斷セル際ヲ察シ之ヲ打落ス等アレトモ余ハ之ヲ行ハス又網ヲ以テスルノ仕方テスルノ仕方ヲ爲シタレトモ前陳ノ仕方ヲ以テ可トシ今現ニ行フモノトス



蠶ハ早發生ノモノハ早質ニシテ(飼反)スレハ二化蠶トナル)進メトモ多クハ形稍々小ニシテ繭モ亦小形ニシテ其巢狀齊整ナラス又晩ク發生スルモノハ弱體ノ質弱ク病蠶ナシトセス因テ一期ニ發生スルモノハ雌雄共ニ不足ナク發生シ健全ノ良蠶トス故ニ二番三番ヲ掃立ツヘカラス其後トテ充分ナラサレハ一番ノミヲ飼育シ二番三番ハ飼育セサルヘシ然レトモ若シ孚化ノ仕方ヲ誤ルトキハ一番ニ發生少ナク二番三番アルヘキモノナレハ亦孚化ノ方法ニ注意セスシテ可ナランヤ

○桑葉給與及貯藏ノ事

原種ヲ包ミタル紙ヲ開ケハ其裏面ニ蠶兒ノ附着シタル上ヘ豫メ用意シ置キタル桑葉(蠶量五匁ニ付桑量四匁位ヲ與フ)ヲ細カニ刻ミタルモノヲ振り與フルヲ常トス然レトモ其卵面ニ幾分カ蠶兒ノ附着セルモノアレハ粟糠少量ヲ振り散シ其上ヘ給桑スルトキハ忽チ蠶兒ハ桑ニ喰ヒ着クヲ以テ此原紙ヲ傾ケレハ盡ク包紙ノ面ニ下ルヲ以テ之ヲ箸(竹又ハ桑ニテ造リタル細箸)ニテ原紙一枚ノ掃立ニテ凡方一尺五六寸位ニ攤ケ其給桑毎二回其面部ヲ最モ薄ク廣クルヲ常トス而シテ桑葉ノ刻ミ方ハ蠶幼稚ノト

キハ成ルヘク細ク漸々成長スルニ從ヒ疎ク刻ムモノナレトモ最初ヨリ細長ク刻ミ給スルヲ良トス斯クノ如クスレハ其綱ヲ布キタル有様ニテ能ク喰抽ケ易キノミナラス大氣流通ノ具合モ宜シトス又之レニ反テ丸形角形等ニ大狀ニ刻ミ給スルトキハ蠶兒其下ニ居リ其喰着難キノミナラス上ヨリ大ナル蓋ヲ覆ハレタル如キ有様ニテ大氣ノ流通モ自カラ惡キヲ覺ユルモノナレハ初メヨリ三眠ニ至ルマテハ必ス前陳ノ如クスルヲ例トス又給桑ハ最初ヨリ成ルヘク薄ク其度數ヲ多クシ其喰終ルヲ俟テ(喰倦メハ靜休ス)給桑ス其當時ノ溫度如何ニヨリテ幾分カ厚薄ハアルヘキモノナリ是等ノ實際ニ臨ンテハ其飼育人ノ心覺ト手加減ニテ其具合ノ適度ヲ圖ルハ自ヲ上手下手アリ且徒ラニ厚ク給與スルトキハ大氣ノ流通ヲ惡クシ蠶兒ノ呼吸ヲ害スルヲ以テ自然蠶兒ハ桑葉ニ上リテ之ヲ敷キ遂ニ冷氣ヲ増シ水腫病ヲ發スルノ惡レアリ又此時ニ當リ糞砂及糞煖多クアリテ暖氣ナルトキハ忽チ蒸熱ヲ醸シ(バクテリアノ蕃殖ヲ促シ)遂ニハ空頭病ノ一原因トナルモノナリ又惡氣室内ニ籠ルトキハ炭酸氣多クナリ遂ニ蠶ノ吐キタル氣ヲ飲ミ返スカ如クナリテ室内ノ氣重ク微ノ如キ菌質ヲ醸生シ恐ロシ



キ白癰病ノ原因トナル者ナレハ注意專一トス一齡ヨリ三齡迄ハ必ス刻ミ桑ヲ給ス此刻ミ方ハ初メヨリ蠶ノ成長スルニ從テ刻ミ方ヲ異ニシ蠶ノ丈ケ二分ナレハ二分ニ刻ミ四分ナレハ四分ニ刻ムカ如キ心持ニテ刻ムモノトス三眠以後ハ枝桑ノ儘之ヲ與フルモノナレトモ其當時ノ氣候ノ如何ヲ圖リ臨機應變ニ其給桑ノ度ヲ増減スルヲアレトモ天氣晴朗ナルトキハ室内(溫度平均六十九度ヨリ七十二度ニ位ス)一晝夜一齡中九回、二齡八回、三齡七回、四齡六回、五齡五回トスレトモ冷氣又ハ雨天續キ濕氣ナレハ一回又ハ二回ヲ減スルコトアルヘキナリ蠶ハ(動物皆然リ)天氣晴々スレハ空氣輕ク暖ニシテ其酸力ニ富ムルヲ以テ其勢活潑ナリ氣候變シテ冷濕スレハ酸力衰へ種々ナル惡質ヲ混シ血液ノ循環宜シカラサルヨリ遂ニ不足ヲ生シ其氣候ノ摸樣ニヨリ種々ノ病原ヲ起スモノナレハ其天氣溫度ヲ圖リ其様子ニヨリ給桑ノ量ト其度數及ヒ其時間ニ伸縮注意亦大切ナリトス

蠶ノ脫皮ヲ催フスル前ニ於テ非常ニ食桑スルモノナレハ幾分カ多ク給與スレトモ是レヨリ追々食慾少クナルニ從テ段々桑ヲ細カニ刻ミ段々薄ク給與ス而シテ蠶ハ追々

黃赤色体ニ變シテ少シク形小サクナルヲ以テ(此時分蠶煖ヲ除ク)一回乃至二回薄ク給桑シ止桑トナリテ全ク眠ニ伏ス厚ク數回桑止スルトキハ濕氣ノ上ニ蒸氣發シ蠶煖ニ微チ生ス而シテ脫皮終リ起テ餉桑ヲ給スルニハ氣候順ナレハ十分起キ揃フテ后給桑スルモノナレハ氣候不順ナレハ一揃ニ起キサルヲ以テ先ハ十分ノ八モ起タラハ薄ク餉桑スルモノトス若シ此處彼處ニ起キタルモノニ給桑スル時ハ未タ起キサルモノハ桑ノ濕氣ノ爲メ脫皮ヲ差支へ遂ニ病因トナルモノナリ而シテ此餉桑モ細カニ刻ミ給與スレトモ其生長スルニ從テ之ヲ爲スモノトス二三回給桑(後起蠶煖ヲ除ク)シテ後ハ又其生長ノ度ニ從テ給桑ノ加減ヲ執ルモノトス此當時ハ特ニ氣候ヲ大切ニスヘキモノナリ蠶煖乾カサルカ未タ喰終ラサルニ給桑過クレハ蠶ノ胃ヲ胃シ渴病又ハ空頭病又ハ膿病ノ如キ病ヲ發スルモノナリ

始終ニ至ル迄桑葉ハ之ヲ改メテ其良品ヲ用ユヘキハ論ヲ俟タサルナリ蠶兒幼稚ノトキハ桑葉モ亦幼稚ニシテ柔ナリ追々蠶ト伴フテ桑葉モ生育シテ硬ハクナルヘシ若シ誤テ幼稚ノ蠶ニ硬桑ヲ給スルトキハ其喰難キノミナラス漸々ニシテ食スルモ其消化



惡シ、又眠前起後ノ二三回ハ必スシモ其當時ノ調度ナル桑葉ノミヲ用フ若シ柔硬共ニ交給スルカ又寒暖不同カ或ハ惡桑ヲ食スレハ蠶形不揃トナリ遂ニ胃ヲ害セシムヘキナリ此時非常ノ硬桑又霜害ノ桑葉ヲ用フルキハ前陳ノ如キ有様ヲ來シ遂ニ弱質ノ蠶蠶ノ原因トナリ或ハ其當時ノ氣候ノ變ニヨリテハ他病ニ變スルアルナリ且ツ濡桑ハ最モ不適ナリ如何トナレハ平常青葉ノ中ニ定量ノ水分ヲ含有セルモノナレハ此上ニ濡タル水分ハ過量ナレハナリ若シ之ヲ給桑スルヲ度々アルトキハ過量水分ノ爲メ消化惡ク血液ノ運動ヲ不正ニシ諸病等ノ原因トナルモノナリ又四齡ハ五齡ハ尙更注意シテ夜分ハ給桑ノ量ヲ減シ晝分ハ最モ暖候ナルトキニ桑量ヲ増給スル者トス是レ晝ハ糞沙ヲ除キタレハ惡氣少ク外氣間接ニ通シ暖候ニシテ蠶活潑ナル者ナレハ其厚ク給桑スルモ喰出宜シク夜分ハ晝間ニ排泄セル積物體ノ足下ニアリ然ルニ内外ノ戸障子ヲ閉スル者ナレハ室内ハ晝間ノ暖氣籠リ糞砂ニモ幾分力蒸氣ヲ發シ惡氣ヲ發シ易スカランニ夕食トテ徒ラニ厚給スルトキハ益々蒸氣ヲ發シ蠶ハ桑ト糞トノ際ニアリ呼吸ニ苦ミ桑ヲ敷キテ上リ足下ニ蒸氣ヲ増ス此時氣拔窓ヲ開クモ上部ヨリ冷氣壓シ

テ惡氣ノ出ル容易ナラヌ外戸ヲ開ケハ俄然冷氣浸入シ直ニ蠶體ヲ劇烈ニ傷メノナリ之ヲ以テ之ヲ視レハ諍ノ病原トナル勿論ナレハ又注意スヘキトニシテアル而ノ二回モ夜分厚與ヲナサハ翌朝室内ニ入レハ臭蒸氣甚ダシク蠶體ニ手ヲ試ムレハ体肉柔カニ且ツ不活潑ナリ又夜間薄與ノ者ハ体肉硬ク活潑ニシテ其量多シ遂ニ其結果大ナル差ヲ生ス是レ實驗ニ於テ明ナリ因テ夜分ハ少量ヲ給桑シ喰盡サシムルヲ良トス且夜間ニ入レハ深冷ナルヲ以テ又喰桑スルヲ好マサルヲ以テ亦之ヲ知ルニ足ルヘシ桑樹ハ根効リ作りヲ以テス一齡ヨリ二齡中頃迄ハ方言「ドウゲン」及ヒ中葉（何レモ切葉ニテ養分鼠返ヨリ淡白）ト稱スル早中桑ノ摘桑ヲ以テス二齡中頃以後三齡中ハ鼠返シノ若梢ヲ搔キ四齡（三眠起テ三回ハ桑桑ヲ粗刻ミニシテ之ヲ用フルノミ）以後ハ悉ク鼠返ノ枝桑ヲ給セリ蠶ハ枝ヲ亘リテ葉ニ及フ者ナレハ糞砂ハ体ニ觸レス大氣ノ流通宜シク喰出速カナリ又桑ハ蠶ノ二齡以前ハ其樹幹ニ固有セル養分アルヲ以テ上下ノ芽同一ニ生長スレハ養分ニ於テ上下格別ノ差ナキ者ナレハ二齡頃ヨリハ上下ノ芽ニハ養分亘リ兼スレハ其中間ノ葉ヲ適當ナリトス而ノ上部ハ養分中間ニ奪ハレ葉色



薄シ下部ハ日光ニ乏シク大氣ノ流通悪ク殊ニ地面ニ近ク水分多キモノナレハ又思ミ除クチヨシトス又老桑ハ(蠶小ニシテ絲質細シ)養分少ナク若桑(蠶大ニシテ絲質大シ)ハ養分多シト雖モ初効ノ若桑ニ至リテハ水分モ多クハ植着三年ヨリ七八年(蠶大ニシテ絲質長サ量共ニ良シトス)ノモノヲ最良トス五齡中餘リ柔桑ノミヲ給與スルトキハ反テ体内弱質ニナリ從テ結繭スルモ薄皮ニシテ繭テ品位ナク下ス繭ニ光澤ノ厚薄アルハ桑ノ綠色ノ厚薄アルニヨルコト多キモノナリ而シテ綠色ハ青黃赤ノ三素ヨリ成立ト云フ且空氣ノ不正ナル室ニ飼育スルモ亦繭ノ光澤惡キモノナリ桑葉ノ貯方如何ヲ言ハシニ一齡ヨリ五齡ニ至ル日々朝夕ハ水分多キヲ以テ午前九時ヨリ午後四時頃迄ノ間ニ於テ桑葉ヲ執ル而シテ前日執リタルモノヲ翌日之ヲ用フルコト日々同シ若シ瓶ノ如キ深キ陶器ニ貯フトキハ桑葉ノ水分氣發シ瓶ノ膚ニ觸レ其冷度ノ爲メニ点滴トナリテ再ヒ桑葉ニ觸レ反テ水分ヲ増スモノナレハ三齡中頃以後ハ搔桑ナレハ深キ籠或ハ底及ヒ横面ニ數個ノ穴アル大桶ニ入レ布ヲ覆ヒ蒸氣ヲ防ク其風ノ直接ニ觸レサルヲ要ス又四齡後ハ土場ニシテ土藏造リノ中回リニ粗キ架ヲ構ヘ上部ニ

氣窓ヲ備フ根効束ノ儘其隙ニ差入レ前面ニハ廣布ヲ纏ヘ外風ノ直觸スルヲ防シ然ルトスレハ蒸レ又ハ乾キ過クルノ患ナシ而シテ繭室三日以前ニ不殘桑ヲ効上ケ貯藏ス是レ入梅以前ニアレハ蛆害ヲ患アルヲ以テナリ將雨天ニハ成ル可ク桑ヲ執ラサルモノナレトモ動モスレハ之ヲ取ラサルヲ得サル場合アリ四齡以前ハ此ノ濡レ桑ヲ簀又ハ箔ニ乾カシ四齡後ノモノハ根効ノ儘乾キタル筵ニ桑樹一本ツ、並ヘ此上ヘ筵ヲ覆ヒ又桑樹ヲ並ヘテ筵ヲ据クコト段々ニシテ二三時間ヲ經レハ水分ハ筵ノ藪ニ滲ミ悉ク乾クモノナリ又風ニ遭スルトキハ乾クコト速カナルハ勿論ナリ又稗ニテ乾カスモ其シトス之ヲ火力ニ乾カストキハ速カナレトモ冷氣ニ遭ヒ水分ヲ發スルコトアリ此熱氣ヲ舍メルモノヲ給與スルトキハ瀉病或ハ空頭病ノ如キモノヲ發スルモノナリ若シ將ニ雨降ラント考フルトキハ點火ヲ燈シ空氣ノ厚薄ヲ測リ其火ノ赤クシテ黑點ナク火先キ尖リテ上立スルトキハ急キテ桑ヲ採ラサルモ多クハ晴天ノ兆候ナレバ差支ナシ若シ之ニ反シ第三項ニ云フ如キ模様ナレハ直ニ桑採シ注意着手セスンハアラサルナリ



○蠶糞除去及箔積増減ノ事

蠶糞除去モ亦大切ナリ之ヲ忽カセニスルトキハ自然蒸氣ヲ醸シ惡臭ヲ發シ大害ヲ來  
 スコト論ヲ俟タサルナリ先キニ掃立テ甫メテ給桑シ蠶座ヲ攤ケ次第ニ給桑スルニ從  
 テ面積ヲ攤クルモノトス掃立後三日ニ至レハ敷紙ヲ去リ稗箔ニ卸シ成ルヘク手薄ニ  
 攤シ而シテ發生ヨリ五日間ハ蠶糞ヲ除カス只ニ其下タノ蒸レンコヲ恐レ日々稗ヲ布キ  
 タル箔ニ蠶座ヲ小サク分ケテ薄ク据ヘ五日間ノ末頃ニ至テ蠶ノ色白ク此處彼處ニ糞  
 セ始マルヲ期トシ蠶座ニ薄ク稗ヲ散シ給桑シ之レニ喰着ヲ以テ蠶ノ上座ノミヲ小サ  
 ク分ケテ他ノ稗箔ニ移シ下座ヲ除ク此ノ如クスルモ之レ冷氣ノ爲メ蠶ノ下座ニ潜ム  
 コトアレハ大クハ見落シテ失ヒ易キヲ以テナリ此ノ如クシテ給桑一回乃至二回ニシ  
 テ過半一眠ニ伏ス此時他ノ稗箔ニ蠶座ヲ悉ク小サク分ケテ之ヲ攤ケ移スコト最モ靜  
 カニ之ヲ扱フモノトス玆ニ於テ全ク一眠ニ伏ス若シ眠中濕氣多キトキハ炭稗ヲ用ユ  
 ルコトアリ後眠リ覺メタルモノ十ノ八分ト視ナハ此上ニ絲網ヲ布キテ給桑二回ニシ  
 テ此網ノ儘他ノ箔ニ移ス二齡ヨリ三齡中ハ一日ハ蠶座ヲ網取リニシテ下座ヲ去リ一日

ハ手取ニシテ蠶座ヲ小サク分ケテ他ノ箔ニ移ス而シテ一日ハ稗ヲ蠶座ニ撒シ給桑ニ  
 三回ニシテ稗ヲ塚トシ手取ニテ他ノ箔ニ攤ケ移シテ下座ヲ去ル初メヨリ三齡迄ハ常  
 ニ稗ヲ用フルモノトス

眠起ノ取扱ハ前ノ如クナレトモ蠶食慾ヲ減シ色澤少ク變スルヲ度トシ休蠶糞ヲ除ク  
 モノトス蠶糞早キニ過クレハ數回給桑ノ爲メ眠坐堆積シ害ヲナスモノナリ  
 又餘リ晚キニ過クレハ蠶系ヲ吐キ蠶糞ヲ離スコト難キヲ以テ又幾分ノ害アリ若シ休  
 ノ際蠶糞ヲ去リ給桑ヲ止メテ后全ク休ミニ伏サ、ルトキハ雨天ナレハ炭稗ヲ散ラヌ  
 カ又ハ他ノ稗箔ヘ其儘靜カニ移(眠ニ伏サントシ糸ヲ出シタルモノヲ動スハ不適當  
 ノ如ク思ハルレトモ此際ハ最モ靜カニ取扱フ上ハ敢テ差支ナシ)スキハ速カニ眠ニ  
 伏スモノナリ若レ此ノ如クシテ眠ニ伏サ、ルモノハ其以前早晚差支ヲ固持シタルモ  
 ノニシテ動モスレハ微粒子毒ノ含ミタルモノカ不眠蠶ナルモノナリトス又四齡ト雖  
 トモ眠起ノトキハ必ズ稗ヲ用ユルモノトス尙起蠶ニ至リテモ十分ノ八位起キタル場  
 合ニ於テ給桑ノ上起蠶糞ヲ除ク是モ早キニ過クレハ桑ノ爲メ害ヲ起ス晚キニ過クレ



ハ衰弱ヲ來ス

四齡中ハ蠶煥ヲ去ル必ス毎日一回トス五齡二日目迄ハ前ノ如ク一日一回トス三日目ヨリ以後一日中二回ニシテ朝ノ間ニ藪網(前夜給桑ノ時之ヲ布ク)ヲ以テ蠶煥ト糞砂ヲ去リ夕刻ハ手取リニテ糞砂ノミヲ去ル之ヲ蠶糞除ト稱ス(糞砂ハ必ス庭前ニ曝スコトナク直ニ遠キ處ノ埋桶ニ投シ蓋ヲナスモノトス)始メヨリ毎日幾分ノ蠶坐ヲ攤クルモ其取扱人ノ適宜薄ク攤ケ追々室ノ廣(寒暖ノ度ヲ合ス)キニ移スモノナリ先ツ糞ノ硬柔ヲ以テ桑葉ノ可否及ヒ蠶體ノ健否ヲ知ルコトアリ其糞丸ノ指ニテ攀レル位ヲ滴度トス恰モ煙草ノ撚リ加減ノ如シ

框製原種四枚即蛾數百十二ノ掃立ニテ一眠箱六枚(蠶坐一尺八寸五分ニ三尺トス)二眠ニ至ル迄ニ十五枚三眠ニ至ル迄四十枚四眠ニ至ル迄六十枚四眠後三日目ニシテ七十枚前後トナル一齡中ヨリ五齡上簇ニ至ル迄蠶座ヲ攤クル毎ニ素ト端部ニ座スルモノヲ中部ニ座セシメ架ノ下部ニアル箔ハ上部中部ノ段々ニ差換ヘ箔ノ前ヲ取りテ引出セハ之ヲ向フニシ向フノ方ヲ前ニスルカ如クシテ食桑及ヒ氣候ノ平均ヲ得テ以テ

蠶體ノ同一ニ成長ヲ圖ルモノナリ

又蠶幼稚ノトキハ最モ薄飼ニスルヲ良シトス然ルトキハ桑量ハ多ク費ユヘケレトモ之レニ換ヘラレサルノ効力未來ニアルベキナリ四眠後ニ至リ餘リ薄飼ニスルトキハ蠶體不揃ニシテ能力鈍クナリテ結繭ノ形狀モ亦不齊ニシテ異狀ノモノ多シ又三眠前厚飼ニスルトキハ蠶體小形ニシテ結繭スルモ大小尠ナカラス遂ニハ其質ヲ變スルコトアレハ先ツ余ノ適度トスルモノハ四眠後箔一枚ニ七百虫ヨリ七百五十虫赤熟青熟大巢ノ類ニ至リテハ六百頭ヨリ六百五十頭迄ヲ適度トス總テ蠶座ノ厚薄如何ニヨリ結果ノ品位ヲ上落スルコトアレハ又注意コソ專一ナレ

○熟蠶上簇結繭ノ事

蠶體透明ニ熟シタル上ハ簇ニ宿ラシムルモノナレトモ尻ニ糞丸ノ三四粒(一節一粒)アリト視ユルモノヲハ暫時食桑セシメ其糞ノ終ルモノヲ簇ニ入ル、モノトス若シ多ク糞アルモノヲ簇ニ入ル、トキハ繭ノ内ニテ排泄シ動モスレハ繭ヲ穢スヲアリ又半熟位ノモノニシテ幾分カ食欲アルモノヲ宿ラシムルトキハ簇中ニ斃ルヲアリ其結繭



スルモ藪皮薄クシテ充分ナラス因テ糞丸ノ一粒位遺リタルモノハ全ク熟シタルモノトシテ差支ナシ早ク熟スルモノハ多クハ雄蠶ニシテ中頃ハ其雌雄ノ平均ヲ得晚熟ハ多ク雌蠶ニシテ且ツ幾分カ病アリテ弱質ノモノナレハ微粒子アルヘキヲ恐レ之ヲ製糸用トス又餘リ老熟ニ過キタルモノハ充分ノ繭ヲ爲サ、ルモノナリ而シテ熟蠶ハ凡三百五六十頭ヲ簇一枚ニ宿ラシム即チ箔一枚ニ座スル蠶ヲ簇二枚ニ入ル、チ度トス其簇ハ隙メ二三寸ニ藪ヲ折建ツルカ或ハ方言「コスボヤ」ト稱スル小サキ雜木ノ細繁セル梢ヲ箔内ニ横タヘ之レニ秤ヲ適量ニ散セハ箔底ニ布ル此處へ熟蠶ヲ宿ラシムレハ穢藪少シトス如何トナレハ蠶箔中ニ於テ一先ツ惡水ヲ垂ラス此惡水上箔ヨリ下箔ニ段々傳ハリ下テ下箔ノ結ヒ初メタル繭ニ觸レ滲ミテ汚レ繭トナルコト多シ如此スレハ汚水ハ其箔限リニ布キタル秤ニ滲ミテ下箔ニ下ラサルモノナリ又宿簇中雨天積キタルトキハ内外濕氣スルモノナレハ格別滲ノ繭多キモノナレトモ秤ヲ用フルトキハ其効最モ著シキモノナリ扱テ上簇ノ場所ハ蠶ヲ飼ヒタル所ハ成ルヘク直ニ用弁サルチ良トス如何トナレハ其以前ヨリ養蠶中ノ濕氣幾分カ籠リ勝ノモノナリ此所ニ簇

ヲ上ツルトキハ尙更惡氣ヲ増レ冷濕ノ爲ノ結繭充分ナラヌ物ハ充分使用スレハ糞丸アルヘキモノニテ是レ養蠶室ハ最早疫アレハナリ然リト雖モ余義ナク養蠶室へ上簇セシムルトキハ該室ノ外回リヲ閉チ卅分間此内ニ悉ク乾松葉ヲ薰シ室内ノ濕氣ヲ煙氣ニ含有セシメ後一時ニ戸ヲ開キ鬱氣ヲ散シタル上炭火ヲ以テ再ヒ室ヲ煖メ二三時間ヲ經テ上簇スルチ其トス因テ別室ノ煙氣濕氣ナキニ階ヲ良トスレトモ極メテ乾キタル別室ナレハ二階ニアラサルモ差支ナシ先ツ上簇ヲナシタルトキハ一先熟蠶ハ惡水ヲ下シ簇ニ掛ルモノナルヲ以テ戸口ヲ開キ(直接ノ風ヲ防ク)間接ノ大氣ニ乾カシ暫クシテ結繭ヲ始メントスルニ當リ直ニ戸ヲ閉チ室内一般チ暗室トナス若シ上簇シ直ニ暗室トスルトキハ動モスレハ惡水ノ簇ニ觸レテ未タ乾カサルニ結繭スレハ殊ニヨレハ濕氣ヲ起シ(雨天ノ時ハ最モ濕氣ス)遂ニ汚レ繭及ヒ薄皮繭ノ出來スルコトアレハナリ且夏蠶ノ結繭期ニハ滲繭ノ少キハ氣候暖氣ノ故ニ惡水早ク乾クヲ以テナリ又暗室ニスレハ繭ニ脊腹少シトス若シ其光線平均ヲ得サレハ明ルキ方ニ向キタル方ハ厚ク暗キ方ニ向キタル方ハ薄ク結繭スルヲ以テ寧ロ室内ハ全ク暗クスルチ其トス



ス上篋中ノ温度ハ平常飼育中ニ比スレハ少シク高メサルヲ得ス然レトモ餘リ之ヲ高ムルトキハ吐糸スル速カニ過キ粗質ノ繭ヲナスモノナリ餘リ(過度ナルトキハ繭硬キニ過キ氣候適度ナレハ品能ク柔カニシテ硬シ而シテ火力飼ノ繭ハ硬キニ過グルコトアリ折衷育ノ繭ハ程能ク且ツ柔ニ硬シ)其適度ハ華氏七十四五度ヨリ七十六七度トス(八十度ヨリ九十度ニ上セシコトアレトモ宜シカラス)余カ上篋ノ室ハ悉ク二階(横四間半長十間)ニシテ屋上ニ氣脱キ窓アリ周圍ハ引戸ニシテ大氣ノ流通ヲ圖ル冷濕ナルトキハ二階下ニ於テ寛和ニ炭火ノ力ニ其不足ヲ補フ其氣候ノ折衷スルコト前ノ如シ若シ燃火スルカ又ハ薰ムレタル塲所ニ篋ル時ハ幾分カ繭ノ光澤ヲ失スルモノナリ全ク結繭スレハ戸口ヲ開キ間接ニ大氣ヲ通ス然ル上ハ温度七十度ヲ目的トス而シテ上篋ノ後二晝夜以内ニ結繭シテ四晝夜以内ニ全ク蛹トナル凡百時間ヲ經テ篋ヲ箔ヨリ離シ後七十二時間ヲ經テ篋ヨリ繭ヲ抽ク管テヨリ上篋中ニ響キ又ハ結繭中篋ニ觸レハ蠶ハ驚テ糸口ヲ離スコトアリ閑靜ニナレハ再ヒ糸ヲ出ス是二重皮ノ繭ヲ生スルコト多キモノナリ上篋後十二三日目ニ蛆發ス十八九日ヲ經テ蛾發ス篋ヨリ繭ヲ

抽キ糸屑ヲ去リ框ニ粒列シテ發蛾ニ至ル迄繭ノ氣候温度ヲ折衷スルハ前ノ如シ然レニ糸繭用ノモノハ糸屑ヲ去リ湯氣ト火力ノ作用ニテ之ヲ蒸殺スヘキモ種繭用ノモノナルヲ以テ前陳ノ如クスルモノナリ

### ○製種ノ事

茲ニ製種ノ仕方ヲ概言センニ繭ニ纏フ屑ヲ去リ玉繭薄皮繭異狀ノモノ等ヲ去リ之ヲ直ニ蒸殺ス彼ノ良繭ノミヲ以テ製種用ニ供スルハ勿論ニ先ツ蛾發生スレハ愈蛾弱蛾ヲ去リ強蛾ヲ以テ製種ス凡ソ四日間ニ製種シ終ル然ルト雖モ動モスレハ五日間ニ亘ルヲアリ先ツ第一日ノ發蛾ハ雄蛾多ク別テ之ヲ製種ス(早質ニシテ其實飼易ク復生シテ繭形小ニシテ不整也)第二日三日ノ兩日ハ眞盛ニシテ蛾ノ雌雄伴フテ發生ス當日ノ製造ヲ以テ最モ良種トス第四日ニ發蛾スル者モ亦別製ニス當日ハ雌蛾多キノミナラス幾分カ弱質ナル者アラン若シ五日目ニ發蛾スル者ハ悉ク之ヲ廢棄スル者也發蛾ノ前夕ニ於テ穴紙ヲ框中ノ繭上ニ覆フ毎日發蛾ハ午前五時頃ヨリ九時頃迄ニ於テス且ツ發蛾シタル巢殼ニハ會々其出口ヲ茶色ニシ濕ヒアルアレトモ汚スハ發生ス



ルノ際穴ノ小サ過キタルニヨリ腹部屢サレテ液汁ヲ泄シタルモノニシテ病蛾ニハアラサレトモ余ハ之ヲ製種ニハ悉ク用弁サルモノトス又病蛾ハ羽乾カスヲ開クト充分ナラス尙普通ノ色澤ヲ失フカ又ハ何レニカ幾分ノ痣点ヲ有スレハ亦之ヲ除ク勿論タリ已ニ蛾發シテ雌雄相交尾セルアリ又交尾セサルアリ漸次先口ヨリ其交尾セルモノヲ別紙ニ拾ヒ採リ交尾セサルモノヲ又別紙ニ採リ交尾ヲ媒酌ス其交尾セシムルコト四五時間(離尾スルヲ恐レテ注意シ日光ト響キ堅ク忌ム)ニシテ漸次先口ヨリ交尾ヲ離シ放尿シ終リ凡九十蛾(七分附)乃至百蛾(八分)附キ一枚ノ廣トシ豫テ用意シ並ヘ据ヘタル紙上ニ配置シ産卵セシム又種蠶原種用ノ框製種ハ二十八個ニ區畫シ一枚ノ紙上ニ二十八蛾ヲ一區ニ一蛾ヲ入レテ産卵セシム此方法ハ一般ト同シ而シテ午後四時半頃迄ニ蛾ヲ紙上ニ配置シ午後七時頃迄ニ悉ク産卵ス此時間ニハ少シモ油斷セラレス而シテ午後十二時頃ニ於テ蛾ヲ掃捨ス嘗テ發蛾ヨリ交尾中モ直接ノ風ニ觸ルハ忌ム且ツ交尾ノ離レサル様注意スレトモ交尾中ニ其精ノ感セサルモノアルトキハ穀卵(恰モ鶏ノ交尾ヲ精ノ通セサルモノハ卵形小ニシテ且白身ナク黃身ノミ)ヲ産

ス又紙上ニ配置スル後ハ之ヲ暗室ニスルヲ常トス之ヲ暗室ニスルトキハ夜蛾科蠶ノ性アルヲ以テ定期ノ半月形ニ産卵シ靜穩勉メテ其位置ヲ正フス若シ此室内ニ光線ノ直入スルトキハ其明ルキ一方ニ群集シ狼狽シテ産卵重積ス總テ温度ハ七十度ヲ目的トス然レトモ餘リ温度ニ過クルトキハ矢張前陳ノ如ク産卵不齊ノモノニシテ品位ヲ落ス又冷濕氣スルトキハ産卵ノ様惡シク其産粒ノ數ヲ減スルノミナラス龜裂ナリ此當時迅速ノ間注意ヲ誤レハ多日ノ勞ヲ一時ニ失フモノナリ且一蛾平均五百九十粒ヲ産卵ス一枚ノ紙ニ九十蛾ヲ配置スレハ五万三千一百粒此量七勿二分余ニ當ル

○桑樹栽培方ノ事

桑樹ノ種類及ヒ其栽培方モ土地ノ異ナルニ從ヒテ一定ナラス又其地味ニ適不適アルモノナレハ其適方ヲ行フヘキナリ扱テ種別モ夥シクアリテ一々其名稱ヲ擧ケサレトモ素ト桑樹ノ如キモ氣候地味ハ勿論肥料ノ如何手入ノ遲速ニヨリ幾分其質ヲ早晚ニ變スルコトアリ又其定質ノ分量養分ノ差ハ必スシモアルヘキコトナリ且ツ何種類ニテモ全ク其地ニ適セサレハ彼ノ高名ノ國富桑モ若シ其地ニ適セサルトキハ之ヲ栽培



繁茂スル能ハサルナリ然レハ彼ノ國富モ野生ノ桑樹ニモ劣ルモノナラン因テ其風土ニ相適スル良桑ヲ得ンコトヲ望ムニアリ

桑苗仕立方ヨリ植附栽培手續ノ大略ヲ述ヘンニ先ツ苗ヲ伏セント欲セハ四五月上旬ニ桑ヲ蒔リ採リ此ノ蒔株へ余蘖多ク發生シ六月末ニ至レハ一尺余トナル之ヲ横タヘ株ノ上ヘ土ヲ覆ヒ又周圍ヨリ土ヲ傍フモノトス是レ明年四月上旬ニ至リ之ヲ掘レハ細根多ク生セリ(小葉ハ根多ク大葉ハ從テ少シ)之ヲ蒔リ採リ直ニ植ルモノヲ打欠種ト云フ此種ノ小根アルモノヲニツ又ハ三ツニ切テ直ニ一尺距二尺ノ畦ニ植附(田地ヲ以テ最モ良トス)傍ヨリ土ヲ覆フ此根ヨリ若芽數箇ヲ生スレトモ其勢強キモノ一本ヲ栽培ス之ヲ翌年三月頃ヨリ掘リ採ルヲ常トス方言之レヲ伐出シト云フ此種ヲ以テ第一トス又桑苗モ其根ノ色黒赤等ノモノ及幹ニ皺アルモノ或ハ其幹ヲ切テ心ノ白色ナラサルモノ等ハ總テ病アルモノトス豫テ苗ノ植附ニ先チ其前年ノ冬期ニ於テ寬和ナル肥料ヲ布クヲ良トス

桑樹ハ冬植アレトモ先ツ春期ニ於テ其新液ノ昇降セサル時節ニ於テ植附ルモノトス其仕方三月上旬ニ於テ畑ヲ悉ク深サ凡一尺七八寸余ニ掘リ(前年秋季ニ掘リ春期ニ於テ植附クルコトアリ)之ヲ扁ラシ南北ニ畦ヲ通シ其中四尺ニシテ株ヲ離ルハ三尺五寸トス其植附ニ先チ深六寸巾七八寸ニ植込ノ畦ヲ設ケ之ヲ日光ニ燥カシ置キ苗木ヲ掘採リ直ニ植附ニ着手ス苗木ヲ土壤ニ据方ハ當日晴天ノ午前十時頃ヨリ是ヲ甫メ其根ヲ延ハシ必スシモ大根ヲ北方ニ向ケ少シク土ヲ覆フ此土午前ハ畦掘シタル内ノ西側ノ土ヲ用ヒ午後ハ其東側ノ土ヲ落シ用弁ルモノトス午前ハ畦ノ西側暖マリ午後ハ畦ノ東側暖マルモノニテ是レ其冷土ヲ省キ暖土ヲ臨ムヲ以テナリ又其根ヲ北方ヘ向クルヲ例トス南方ハ日光多キカ爲メ自然細根ヲ生スル多クシテ遂ニ大根トモナルナリ而シテ大根ハ北方ニアルモ速カニ細根ヲ夥ク生シ往々其根三方ニ蔓ル若シ大根ヲ南方ニ向クルハ南方ニノミ根ヲ増シ北方ニ根ヲ生スル少クシテ其繁茂遲シ又此ノ如ク大根ヲ北方ニスルハ坂地ナルモノ自然肥土ノ流出スルコト少クシテ肥土ノ株ニ支ヘラレテ止マルモノナレハ土壤深クナリテ繁茂スル著シ根ヲ南方ニスルトキハ肥土流レテ土中淺クナリ遂ニ根ノ外面ニ出ツル如キコトアルモノナレハ亦繁茂惡



シ、又坂地ニシテ手入ニモ恐ル、地ハ畦ヲ少シク東北ヨリ西南ニ畦ヲ斜ニ通スモノ  
アレハ根ヲ向クルハ例ノ如シ東西ノ畦ナレハ其根ヲ東ニ向クルモノトス是レ夕日ノ  
強キヲ以テ細根多ク生スルニアリ先キニ苗ヲ延ハシ土壤ニ据ヘルヤ少シク暖土ヲ覆  
フ此際ニ肥料ヲ培フハ人糞ノ薄水ヲ以テスルヲ良トスレトモ豫テ前年秋期ニ於テ稗  
(麻ニ布クモノ最モ宜シ)ヲ堆積シ薄キ糞水ヲ注キ之ヲ攪回シ厚筵ノ如キモノヲ數層  
蓋ヒ充分蒸シ置キ桑植附ノ前ニ當リ之レニ種油ノ絞糠粉末トシ混合シテ株ノ際ニ廣  
ク散布シ此上ニ暖土ヲ双方ヨリ埋メ少シク根本ヲ高クシ畦ノ際ヲ低フス總テ根莖桑  
ノ植附ハ土中ヲ深ク堀リ淺植ニスルヲ最モ良トス肥料ハ總テ質ノ輕キモノヲ用ヒ土  
中ニ蒸氣又ハ冷氣ノナキヲ要ス

茲ニ桑園手入及肥料ノ仕方ヲ概テ述ヘントス先ツ根莖ヲ作りニシテ年々一回ハ之ヲ  
刈ルヲ以テ年一回乃至二回ハ其細根ヲ鋤切ルモノトス先キニ植附ケタルモノニ畦ヲ  
中鋤ト稱シ左右ヨリ株ニ土ヲ傍フヒ畦ト畦トノ中ヲ通シテ凹メ乾燥セシム此年内ハ  
極メテ薄キ糞水ヲ培フノミ翌年三月中旬ヨリ此畦ノ窪ミタル處ヲ鋤ニテ土ヲ株ニ傍

セ此中ニ廣ク肥料ヲ培ヘ直ニ土ヲ覆フ四月上旬ニ至リ株根ニ傍セタル土ヲ鋤ニテ中  
部ニ盛リ上ケ株ノ周圍ヲ空ク同月下旬ニ於テ鋤ニテ之ヲ扁ラニス通常ハ五月下旬ヨ  
リ六月中旬迄ニ(今年ニ限リ初刈リナレハ五月中旬ニ於テ刈ル)刈リ取ルナリ然ル後  
ハ直ニ株ノ妨口ヲ直シ又株ノ周圍ヲ鋤キ中部ニ盛リ上ケ此時分ヨリ七月上旬迄ノ内  
ニ於テ株ト株トノ際ニ肥料ヲ與ヘテ土ヲ落シテ之ヲ覆ヒ其肥氣ノ蒸發スルヲ防ク而  
シテ九月中旬鋤ニテ此土ヲ扁ラシ同月下旬藁數本ヲ生ス之ヲ緩ク藁繩ニテ結ヒ寄ス  
ルモ從來土地ノ仕來リニヨル十月上旬畦ノ中部ヲ鋤キ株本ニ土ヲ傍スルヲ常トスレ  
レ時ドシテハ株本ヲ鋤キ中部ヲ高スルアリ年々此ノ如クシテ其手入ヲスルヲ常トス  
且ツ度々土壤ヲ鋤クトキハ酸素ノ新シキヲ地中ニ透リ以テ肥料ノ親和ヲ助ク肥料ノ  
如キニ至リテハ春期ニ於テハ畦中ニシ夏期ニ於テハ株ノ中間ニ培ヘ冬期ニ於テスル  
コトアルトキハ必ス糞水ノミヲ以テス若シ冬期ニ種々ナル良肥料ヲナストキハ寒氣  
ノ爲メ氷リテ其養分ヲ氣發シ其効ノ少キヲ以テ只糞汁ノミヲ注キ根部ノ土壤ヲ暖メ  
桑樹ヲ幾分カ保護スルニアルヲ以テナリ又年々同品ノミヲ以テスルハ其効薄シトス



是レ土壤ニ要用ノ和合品乏シキコトアレハナリ生着モ喰ヒ慣ルレハ攝品最モ珍シト云フカ如シ窒素或ハ脂肪分ノ多キモノヲ食スレハ其和合ノ易キ炭素含有ノ多キモノヲ好ムノ理ナレハナリ

肥料ハ土壤ニ養分ヲ減シ其疲レヲ補フニ外ナラス而シテ動物肥料ハ窒素多シ植物肥料ハ炭素多クシテ動物質ニ比シテ其力一時柔シト雖モ又要用ノ有機物ヲ造リ植物ニ與フルヲ夥シ當地ニ産スル者ヲ當地ニ肥料トナシ之ヲ用フル適當ナラント聞ケル當  
地ハ肥料ニ乏シク魚類油精類其他悉ク他方ヨリ購求ス先ハ當地ニ用ヒ來ル肥料ノ四  
五品ヲ擧ケンニ菜種油糠ハ有機品多ク鰯鱈ノ絞粕ハ有機品及ヒ磷酸窒素多クシテ亞  
謨爾亞ニ富ム酒精ハ「アルコール」及炭酸多シテ能ク植物ノ有機品ヲ増ス大豆ヲ澱粉  
蛋白護謨方多ク骨粉ハ磷酸窒素ニ富ム馬肥ハ水分ノ多キハ勿論硅酸窒素灰分多ク有  
機品ヲ増ス人糞ノ水分ハ勿論灰分磷酸窒素ニ富ミ四元素ノ歩合最モ宜シク亞謨爾亞  
ヲ造ルコト多ク寛和ニ植物ノ有機品ヲ造殖スルノ第一位ニアリ蠶糞ハ馬肥ニ比シ水  
分少ナク有機品モアレトモ蒸レ易キヲ以テ桑園ニ不適當ナレハ余ハ之ヲ田肥トス以

上擧クレトモ余ハ馬肥蠶糞大豆ヲ除キ餘ノ數品ヲ年々其品物ヲ替ヘテ増用ス又二品  
乃至三品ヲ混合シテ埋肥ニスルアリ或ハ之ヲ人糞水ニ混和シ注肥トスルコトアリ將  
タ油糟魚類ニ至リテハ畦中ノ凹處ニ廣ク散布シ少シク藪ヲ据キ之レニ土ヲ覆フ然ル  
トキハ油分ハ藪ノ灰分ト親和シ能ク培養トナル又埋肥ハ植物ニ養分ヲ吸收スル晚キ  
モノナレハ春分梅花以前(三月十日以前トス)ニ於テシ他品ニ混和ノ糞尿酸酵水ハ三  
月二十日(彼岸ヨリ)頃ヨリ四月上旬ニ於テス且ツ小飼ニ用フル桑樹ニハ必ス冬期ヨ  
リ薄キ糞水ノミヲ用ヘ手入モ亦急キテ其早質ニヒシメテ葉ノ柔カナルヲ要ス  
扱テ桑樹栽培仕方ノ概略ヲ前述スルニ止マリテ年々手入及ヒ肥料培養ノ期日ニモ幾  
分ノ差アリ因テ一概ニ云ヘ難シ又如何ニ良肥料ト雖モ其土地ニ適セサルコトアリ例  
ヘハ極メテ白色ノ埴土ニ對シ石灰礦物肥料ヲ重テ用フル如キコトアレハ反テ其地味  
ヲ害スルコトアルヘキナリ先ツ其植物ノ最モ好ム肥料ヲ與ヘ其土壤ニ不足スル物質  
ヲ多ク含メル品ヲ以テ桑樹ノ御機嫌トリニ供フルコソ彼レノ最モ馳走ト思フモノナ  
ラントス總テ肥料ノ要ハ土壤ノ疲レヲ補フニ外ナラス



桑モ乾地ノモノニアラサレハ良桑トセス乾地ハ日光ヲ稟クルモ温熱チ地中ニ含ミ水分膨脹シ肥料ノ物質ヲ溶解シ其細根ヲシテ滋養分ヲ充分ニ吸收スルノミナラス大氣流通宜シケレハ是レ良桑ナラサルヲ得ス之ニ反シ濕地ハ日光アルモ水分過量ナルカ爲メ地中冷濕シテ遂ニ肥料ト水分ト親和セス其根ハ冷濕ニ侵サレ往々細根ヲ腐敗シ以テ全部ヲ枯死スル程ノモノナレハ濕地及ヒ北ニ傾キタル地或ハ日影ノ地ノ桑ハ薄軟ニシテ動モスレハ病質ヲ有ス是レ惡桑ノ名ヲ免カレス又此ノ如キ土地ニハ桑ノ諸病ヲ發スルコト多ケレハ如何ニ沃地ト雖モ桑ニ資テ亦惡地ノ名ヲ免カレス

附言 前段ノ如ク養蠶方及桑樹栽培方ノ實行ノ儘ヲ述ヘタレトモ素ト製種目的ト製絲目的トハ蠶兒發生ノ期日モ自カラ異ナラサルヲ得ス若シ絲繭目的ノ者ト種繭目的ノ者ト同時ニ發生ヲ催ストキハ其上結果ヲ得ルモ其收支償ハサルコトアルアリ是レ桑業ノ生育其極度ニ至ラサルニ於テ余儀ナク妨取ル如キハ第一ノ不經濟ナラシ故ニ製絲目的ノ養蠶家ハ其發生ノ期日ヲ少シク延期スル等ハ緊要ノ注意ナリ因テ當業者各自其目的ニヨリ其經濟ヲ圖ルニアリ而シテ製糸繭ヲ目的トスルモノハ必

ス早中晩ノ桑ヲ栽培シ(肥料手入等モ從テ早中晩ニヨリ)置キ春蠶晩春蠶ハ勿論夏秋蠶ニ至ル迄飼育シ得ラルヘキモノハ其業ヲナスヘシ又製種家ト雖モ春夏秋蠶ノ製種迄モ悉ク製造スルコソ全クノ製種家ナリト云フヘケレトモ如此キ兩手ニ花ト二足ノ草鞋ハ穿ケ難シ三足ハ尙恐ル、所ナリ故ニ余ハ只ニ春蠶一途ノミヲ飼育シ之ヲ製種スルニ止マレル專業ナレハ尾端ニ至リ一言以テ寸志ヲ述フ

こがひのてつる

長野縣小縣郡別所村  
倉澤運平

○蠶種撰ヒ方ノ事

養蠶ヲナサントスルモノハ蠶種ノ撰ヒ方ヲ忽ニスベカラス先ツ蠶種ノ撰ヒ方ハ第一ニ種類、第二ニ種ノ良否ナリ種類ハ飼育容易ニシテ専ラ經濟上利益ノ多キモノヲ撰フベシ又卵種ハ平ラカニ紙面ニ附着シ整一ニシテ不正形ノ卵粒ナク水ノ乾キ良ク也



ら、しひを等少クシテ容易ニ落チユホレザルチ良種トス然レトモ實際ニ良否ヲ見分クル事ハ中々難キコトナレハ信用アル蠶種製造家等ニ依托スル方却テ安全ナリトス

○蠶種取扱及ヒ催青ノ事

蠶種ハ最初空氣ノ流通宜シキ清潔ナル室ニ吊シ置キ初冬ニ向ヒ始メテ箱等ニ藏ムヘシ寒中ニ至ラハ最モ寒サノ強キ朝廿分間位冷水ニ浸シ刷毛ニテ卵面ノ汚物ヲ洗ヒ直チニ引揚ケテ蠶箔ニ平ラニ一枚ツ、並ヘ日蔭ニテ充分乾シ上クベシ而シテ後氣候ノ狂ハサル所ニ貯藏スルコト大切ナリ發生セシムルニハ掃卸シヨリ凡一ヶ月前位ニ取出シ漸次氣温ヲ感ゼシメ桑ノ葉ノ發育ト蠶ノ發生ヲ適合セシムルヲ要ス一旦温カキ所ニ取出シ青ミチ催シタル種チニダビ冷カナル所ニ移スハ大害アルナリ發生四五日前ヨリ少シツ、濕氣ト火力チ加ヘテ發生セシムル方宜シ數頭發生シタル頃種紙ノ裏ニ絲ヲ附ケテ紙ニ包ミ稍ヤ温カニナシ置キ而シテ大抵發生シ盡クシタル時分チ見計ラヒ掃卸スヘシ夏秋蠶種ハ空氣ノ流通良キ室ニ掛ケ置キ青ミ切りタルトキ紙ニ包ミテ其翌午前八時頃掃卸スベシ

○掃卸シノ事

掃卸シハ粟糠等チ種紙ノ上ニ振り掛ケ其上ニ倒ミタル桑チ與ヘ蟻ノ桑ニ登リタル時分豫テ種紙ノ裏ニ附ケ置キタル絲ヲ持チテ打落シ盡クシ其儘糠ト共ニ紙ノ上ニ羽根ニテ擴ケ居直リ桑チ與フベシ

○蠶座面積ノ事

蠶座ハ概シテ厚カラサルチ宜シトスレトモ餘リ薄ス過ルモ亦害アルチ以テ蠶ト蠶ト體ノ密接セズシテ自由ニ動カル、位チ標準トスベシ四眠起ニ至ルトキハ稍厚キモ妨ケナシ然レトモ專ラ良キ繭ヲ獲ントスルニハ薄飼ニ如クナシ蠶種一枚(全面一粒並ヒニ産附シタルモノ)ニ附キ左ノ面積位ニ廣グルハ適當ナルベシ但シ箔ハ縦三尺五寸横貳尺五寸ナリ

- 一眠前 掃卸 一枚 毎日箔ヲ廣ケ眠除沙迄 五枚
- 一眠起 桑附 五枚 毎日箔ヲ廣ケ眠除沙迄 十枚
- 二眠起 桑附 十枚 毎日箔ヲ廣ケ眠除沙迄 二十枚



三眠起 桑附 廿枚 毎日箔ヲ廣ケ眠除沙迄 四十枚  
四眠起 桑附 四十枚 三日目ニ箔ヲ廣ケ 五十枚

○給桑ノ事

桑ノ切り方ハ其蠶ノ丈ケ位ニ四角或ハ三角ニ揃ヘテ切ルベシト雖トモ振リ桑(青桑トモ云フ)ハ稍ヤコマカニ長方形ニ切ルベシ梢桑ハ三眠起或ハ四眠起頃ニ與フベシ桑ヲ與フルハ大抵ニ喰ヒ盡シタル時分ヲ見計ラヒムラノ無キ様ニ與フルヲ良シトス給桑回数ハ温度ノ高低濕氣ノ多少ニ因テ増減スベシ高温度ナルトキハ桑ハ枯レ易キ故ニ稍ヤ残り桑アルモ與フル方安全ナリ水分ノ多キ桑濡レ桑等ハ與フベカラズ然レドモ九十度前後ノ高温度ニテ非常ニ乾燥シ桑葉モ水分ニ乏シク是ヲ與フルモ食セサル内ニ忽チ枯ル、恐アル片ハ水分ヲ含メルハ新シキ桑ヲ回数多ク與フルトモアリ宜シク臨機應變ノ術ヲ行フベシ蒸レタル桑土ノ附キタル桑赤キ斑點ノアル桑等ハ與フベカラズ稚蠶ノ片程ナルヘク柔カキ桑ヲ與フベシ充分成育スルニ於テハ硬キ桑ヲ與フルモ妨ケナシ又盛食期ヨリモ起キ際眠リ際ニハ稍ヤ柔カキ桑ヲ與フル方宜シトス

總テ飼育中ハ成ルベク良キ桑ヲ撰ビ蠶シキ桑ヲ與ヘサル機與々モ注意スベシ又蠶書ノ多キ桑ハ成ルメク夏秋蠶用ニ廻スベシ

○温度氣候ノ事

養蠶ハ總テ程良ク温カニシテ乾キ瓦ク温度ノ激變ナキ氣候ヲ最上トスルガ故ニ寒冷ナルトキハ火力ヲ加ヘ炎暑ナルトキハ日光ノ照リ込ミ照リ返シ等ヲ遮ギリ防ギテ加減ヲナスベシ空氣ノ流通ハ最モ大切ナルコトナレドモ稚蠶ノ時直チニ風ヲ當ツルコト惡シ成長スルニ從テ漸々徐カニ空氣ヲ通ハシメ四眠起頃ニ至リテハ充分ニ空氣ヲ流通セシムベシ澤山ノ桑ヲ室内ニ入レ與フル期節ニ至テハ假令雨天ニテ濕氣多キ日ト雖トモ窓及ヒ氣拔等ハ開キ置キテ焚火ヲナシ濕氣ヲ除キ空氣ノ流通ヲ計ルベシモ此ノ如キ際ニ濕氣ヲ防カント欲シ妄リニ窓戸等ヲ閉チテ室内ニ火力ヲ用ユルモ桑葉ニ蒸熱ヲ起シ且ツ空氣ノ流通惡シク却テ室内ニ濕氣ヲ増スモノナレバ異々モ空氣ノ流通ハ忽ニスベカラズ

○除沙ノ事



除沙ハ掃卸シテ二三日目位マテハ其儘マ蠶座ト共ニ割リ擴ケ置キ其後チ食桑中ハ一日一回ヅ、ハ手取り網取りニ係ハラズ必ズ行フベシ尙夏秋蠶期ノ如キ高温度ニテ給桑モ激シキモノハ一日二回以上モナスベシ眠リ除沙ハ將サニ一二頭眠リ就カントスル時分ヲ篤ト見計ラヒ常ヨリモ稍ヤ多ク蠶ヲ蒔キテ其上ニ給桑シ凡四五割モ眠リ附キタリト思フ頃手或ハ羽根ニテ糠ト共ニ剥キ取り乾キタル別ノ箔ニ割リ並ベ其上ニ二三回少シツ、振り桑ヲナシテ桑止トスルナリ若シ不揃ノ蠶ニテ止桑ニナラザルトキハ網ヲ掛ケテ他ノ箔ニ遲蠶ヲ取り移シ眠ラシメ決シテ青キ殘桑ノ中又ハ濕ケタル中ニ眠ラシメ置クヘカラズ

○上簇ノ事

簇ハ種々ノ拵ヘ方アレトモ普通蕘ノ折簇等ヲ簡便ナリトス葉ノナキ地方ニ於テハ小枝多キ植物ヲ用フルモ可ナリ総テ乾燥シテ濕氣ヲ含マザルモノヲ用ウベシ上簇セシムルニハ善ク老熟シタル蠶ヲ拾ヒ而シテ簇ノ箔ニ蒔キ入ル、ナリ簇ノ箔數ハ四眠起食盛リノ時ノ箔數ノ二倍乃至二倍半位ノ箔數ニ上簇セシムベシ繭ヲ營ム中ハ温カニシテ乾燥スルヲ旨トシ冷濕ナルトキハ火力ヲ用エ又室内ハ暗クシテ空氣ノ流通ニ注意スルコト總テ養蠶期ト異ニセザルヲ良シトス三日目ニ至リ繭ヲ營マザル蠶アラバ徐カニ拾ヒ取り營蠶ノ目的アルモノハ別ノ簇ニ入レ成ルヘク簇中ニ斃死セシムベカラズ繭ノ搔キ取りハ温度ノ高低ニ因テ遲速アレトモ概ネ五六日目ヨリ始ム蛹ヲ殺スハ繭ノ中ノ蠶兒悉ク蛹ニ化シタル時分ヲ宜シトス

○蠶病豫防ノ事

微粒子病 此病ノ豫防ハ原種ヲ蠶微鏡ニテ検査シ病毒ヲ除キ又此病毒ノアル蠶ト同一ノ室ニ養ハズシテ強壯ニ成育セシムベシ且又蠶道具ハ清潔ニ洗フテ用ユヘシ  
 空頭病 此病ヲ防グニハ原種ノ強壯ナルモノヲ撰ビ飼育スルハ勿論左ノ件々ニ注意スベシ殊ニ温度ノ高キニ過グルノ時ハ一層注意ヲ怠ルベカラズ  
 一蠶座ヲ堆積セシメザルコト、一蠶室ノ空氣ヲ鬱閉セシメザルコト、一桑ノ與ヘ不足ナキコト、一硬過ル桑蒸レタル桑乾キ過ギタル桑等ヲ與ヘザルコト、一開放スルモ激シキ風ニ當テザルコト、一充分起揃ハザルモ飢渴ノ狀アルトキハ桑附ヲナス



且又濕ケテ冷カナルトキハ水分ノ多キ桑濡レタル桑等ハ與フベカラズ  
 節高病(ギラ又ハウミコ) 此病ヲ豫防スルニハ蠶種ノ撰ヒヨリ貯藏、催青、掃卸シ迄  
 ノ注意ヲ忽ニスヘカラズ又飼育中ハ冷氣ニテ濕氣ノ多キトキハ火力ヲ加ヘテ溫度ヲ  
 平均セシメ蠶室内ノ乾燥ヲ計ルヘシ又桑ヲ多ク與ヘ過ギテ常ニ青キ殘桑ノ中ニ置ク  
 ハ極メテ惡シ(俗ニ是ヲ桑冷ヘト云フ)眠中ハ別シテ蠶座ノ濕ケザル様注意スヘシ  
 白蠶病 此病ヲ豫防スルニハ専ラ空氣ノ流通及蠶座ノ乾燥ヲ計リ除沙ヲ數多ク行フ  
 ヘシ假令ヒ一頭ノしやりヲ認ムルトモ直ニ拾ヒ捨テ、其手ヲ洗フヲ長シトス又室毎  
 ニ焚火ヲ用エテ成ルヘク開放スヘシ次ニしやりノ澤山アル家ヘハ往來スヘカラズ其  
 前年しやりノ多ク出來タル家ナラバ蠶ノ發生セザル三十日モ以前ニ蠶道具ヲ悉ク清  
 潔ニ洗ヒテ干上リタル時分蠶室ニ入レテ薰毒法ヲナスヘシ其法種々アレトモ最モ容  
 易ナル法ハ先ツ拾疊敷ノ室ニ硫黃ヲ三十匁位ノ割合ニ火鉢ニ入レテ焚クナリ尙ホ一  
 度燃ヘ立ツトキハ(薰毒中)其室ヘ入ルト能ハザレバ火ノ危險ナキ様ニ注意スヘシ而  
 シテ其室ハ密閉シ置キ二日間モ經テ戸障子ヲ開ケ放チ蠶具モ取出シ硫黃ノ香ヒノ消

ユルマツ外氣ヲ通ハシムヘシ又此病アリタル蠶兒ヨリ製シタル蠶種ハ別ケテ寒水浴  
 ナ怠ルヘカラズ又夏秋蠶種ナラバ水ニ入レ軟カキ刷毛ニテ洗ヒ直ニ引揚ケ布ヲ以テ  
 軟カニ拭ヒ掛ケテ乾カスヘシ但シ長ク水ニ入レ置クヘカラズ  
 起縮病 此病ヲ防グニハ就眠前暖氣等ニテ食慾盛ナルトキハ殊ニ給桑ヲ怠ルヘカラ  
 ズ又蠶座ニ濕氣アルトキハ煎糠等ヲ用エテ除沙ヲナスヘシ桑ハ成ルヘク長キ桑ヲ撰  
 ビテ硬過ル桑等ハ決シテ與フヘカラズ且又眠蠶及ビ稚蠶ノトキハ風ニ當ツルコト惡  
 シ  
 垂レ蠶(タレコトハ成長スルモ體短ク太ク絲腺發達セズ) 此病ヲ防グニハ蠶室ノ氣  
 ノ詰ラサル様空氣ノ流通ヲ計リ且濕氣ノ多キ時ハ除沙ヲナシテ蠶座ノ濕氣ヲ防グヘ  
 シ又蒸レ桑濡レ桑等ヲ與フヘカラズ  
 腹詰病(脱肛スルモノアルヲ以テ脱肛病ノ名アリ) 此病モ多ク濕氣ヨリ來ルヲ以テ  
 蠶室蠶座ノ濕ケサル様ニ注意スヘシ  
 渴病 此病ハ眠中殊ニ寒冷ニ過ギ或ハ氣候ノ激變ニ遭ヒ或ハ冷濕ノ氣候ニテ水分ノ



多キ桑滯レタル桑等ヲ給與スルニ當テ發スルガ如シ故ニ是等ニ就テ充分注意スヘシ

○附言

總テ蠶病ハ一ツノ原因ヨリ發スルハ少ク種々ノ障害ノ集リテ病原トナリ單ニ一病ヲ發スルアリ或ハ數病併發スルコトアルヲ以テ唯簡單ノ豫防法ニノミ依ルモ完全ノ方法ニアラザルナリ宜シク平素ノ注意ヲ怠ラス蠶兒ヲ強壯ニ成育セシメ病ヲ發スル如キニ至ラシメザルヲ以テ豫防法ノ要訣トスルナリ

蠶兒強弱ノ特徴 強壯ノ蠶兒ハ(眠リ際及ヒ上簇ニ近ツキタル時ヲ除クノ外)常ニ蠶糞固結シテ又起蠶ノ色ハ比較上灰白色ニシテ頭ト尻トノ太ミ大差ナキモノナリ虛弱ナル蠶兒ハ(眠リ際及ヒ上簇ニ近ツキタル時ヲ除クノ外)常ニ蠶糞軟カニシテ起蠶ノ色比較上赤ク且瘡セ口及ヒ頭大キクシテ尻ノ方小サシ又發生ノトキ及就眠ノ時ニ比較上絲ヲ多ク吐ク者ハ概シテ虛弱ナリ  
日用品中蠶兒ノ毒ニナル物 煙草、油、石鹼、魚類等ヲ燒ク香ヒ種々ノ惡臭アル物品ナリ

節高病蠶論摘要(宮入善吾)

長野縣小縣郡東鹽田村

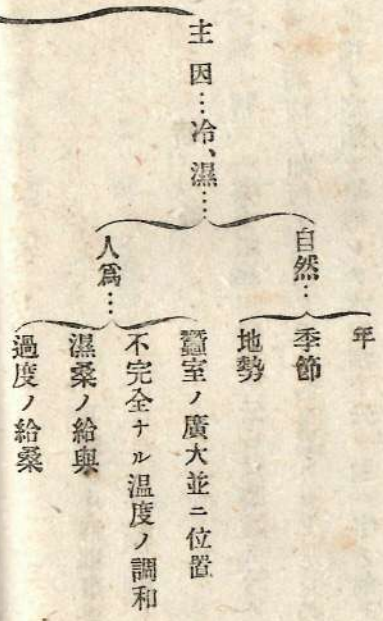
横關次郎兵衛

緒論

世ニ節高病蠶ト稱スル者不眠蠶、白光ト云ヒ又膿蠶ト云フ其病原素ヨリ一ナリト雖惱患ノ輕重ト病様ノ如何トニ因ツテ命名ヲ異ニセリ是レ必竟同症異名ニ過ギサルノミ而シテ此種ノ病類ヲ總稱シテ水腫病ト云フ腫ハ字ノ如クハル、ト云フ意ニシテ水腫病ハみつばれ病ト云フ義ナリ去レハ水腫病ノ稱ヲ以テ論ズヘキニ通稱節蠶ヲ以テスルノ便ナルヲ感シ即チ本編ハ節高ヲ以テ總テ是ヲ論述ス蓋シ節高病蠶ハ其初メ健康ノ盛食期ニアリテハ却テ比較的ニ蠶体細小ニシテ而シテ健康ノ眠ニ就クニ及ビ漸ク桑葉ヲ食リ其体形異常ニ大トナリ遂ニ皮膚上ニ光澤ヲ生シ次第ニ關節膨起シテ恰モ竹節様ノ觀ヲ爲スニ至ル是レ即チ節高病ノ名アル所以ナリ而シテ其病勢愈々昂シテ危キニ至レハ全身白濁色ニ變シ皮膚軟弱トナリ僅カニ物ニ觸ルレバ容易ク傷キテ



白汗ヲ迸流シ忽チ斃死スルニ至ル然シテ彼ノ白瘰空頭兩蠶病ノ如ク症性急激ナラサルヲ以テ個戸ニ酷シキ凶蠶ノ害ヲ見ザルモ春蠶ノ時季ニアリテハ處トシテ斯ノ病ノ發セザルハナク蠶家トシテ多少ノ害ヲ蒙ムラサルハナシ豈猛蠶セサル可ケン哉故ニ該病ノ起因ヲ研究シ適切ナル豫防ノ方法ヲ講スルハ蠶家ニ於ケル急務ニシテ改良上最モ必須ノ件ナリトス因リテ余ハ其原因中主因ト副因トヲ別ツテ左ニ示ス



病因……

種類……變性シテ高尚ニ至リシモノ

先天……微粒子毒ノ遺傳

卵子……虛弱性遺傳

卵子ニ實力乏シキモノ

副因……虛弱……

後天……

卵子……貯藏及孵化方法

飼育……飼育中諸般ノ欠點

第一章 節高病蠶ノ主因ヲ論ス

蠶病發因ノ關係多シト雖之ヲ概括スレバ三ツニシテ第一生物ノ害第二氣象的ノ害第三人爲是レナリ而シテ節高病蠶即チ水腫病蠶ノ如キハ遺傳症ニアラズ傳染症ニアラス又寄生物ノ害ニモアラズ職トシテ氣象的ノ作用ニ因ルノミ天然ノ氣候温和且ツ順ヲ得タルノ際ニアリテハ敢テ該病ヲ發スルコトナシト雖氣候大ニ冷氣ニ傾キ濕氣過剰ナルノ年ニアリテハ處トシテ之レナキハナシ蓋シ寒冷ノ氣一タヒ蠶体ヲ襲フヤ外表皮筋ノ收縮的作用ヲ起シ皮膚廢泄ノ機能減耗スルヲ以テ勢ヒ蠶体内水分ノ蓄積ト老



廢產物ノ増量トチ來サ、ルヲ得ス然リト雖健體ニアリテハ自然的ノ良能之ヲ代償シテ敢テ病理的状況ニ移行ヒシムルコトナシト雖體質弱キ乎又ハ前陳作用一定ノ限界ヲ超ヘ屢々襲來スルニ於テハ内臟官中尿管ノ如キ迂曲卷纏セル臟器ハ之ガ刺衝ニ堪ユル能ハズシテ生理的必尿ノ作用漸々減耗シ遂ニ水腫ノ疾病ニ變異スルヤ理ノ正ニ見易キ處トス今之ヲ人体ノ疾病ニ徵スルニ感冒性水腫ノ如キモノ是レナリ余ハ嘗テ醫師某ニ聞ク毫モ他ノ原因ナクシテ感冒ノ爲メニ人体尿機ニ特異ノ變狀即チ感冒性腎臟炎ヲ誘發シ尿廢泄ヲ障害シテ全身浮腫ヲ起シ治術巧ミナラザルニ於テハ之レカ爲メ非命ノ死ヲ遂クルモノ尠ナラズト是レ等疾病ノ成立スルハ單ニ寒冷ニ逢遭スルガ故ノミニアラズシテ体内温ト体外温トノ急激ナル變化即チ其不平均ニ重大ノ關係ヲ有スルモノニシテ例ヘバ彼ノ沐浴後又ハ晝夜ニ於ケル睡眠中俄カニ襲ヒ來ル一陣ノ冷風ハ能ク感冒ヲ誘起スルカ如キ皆此理ニ外ナラズ是レ蓋シ全温動物ノ人体ト不全温動物ノ蠶體トヲ混同視スルニアラスト雖其症候相均シキモノナレバ之ヲ相對照スルニ於テ容易ニ其理ヲ解スヘキナリ

以上ハ冷氣ノ作用ニ係ルモノヲ論述セリ故ニ是レヨリ進ンテ濕氣ノ操作ニ就キ一言セントス蓋シ濕氣ニ富メル空氣ハ蠶體ヨリ蒸發セル水分ヲ空中ニ取ルコト能ハズ又呼吸ノ作用ヲ障害スルカ故ニ水分老廢的有害瓦斯容易ニ蓄積シ加フルニ水分ハ可導體ナルカ故ニ多ク蠶體ノ温ヲ奪ヒ寒冷ノ操作ヲナスニ至ル是レ其蠶身ヲ害シ該病因ノ一トナル所以ナリ蓋シ蠶體ノ如キハ之ヲ人身ニ比スレバ小ナルコト數万倍ナリ小ナルモノハ小ナルニ從ヒテ外表ノ面積大ナリ外表ノ面積比較的大ナルモノハ蒸發多カラサルヘカラス而シテ又氣門多ク且ツ頻煩ナル呼吸ヲナスヲ以テ老廢物ヲ呼出スルコト多カラサルヘカラズ若シ夫レ蠶室內ノ空氣ニシテ濕氣ヲ以テ泡和シマリトセシ乎一分ノ水氣ヲモ取ルコト能ハサルヘシ斯ノ如キ場合ニ遭遇セバ勢ヒ其水分及老廢物ハ蠶体内ニ蓄積シ有害ノ操作ヲナスヤ明カニシテ又該病因ヲ起ス所以ナリ以上ノ障害ニヨリテ發スル處ノ其病勢ハ緩ナルモノアリ急ナルモノアリ斃死ノ時日長短アリト雖概チ發蟻ノ際其感ヲ受ケシモノ第一齡ノ末期ニ於テ早ク已ニ不眠蠶トナリ第一眠起即チ脫皮ノ際其變動ニ接セシモノハ其末期ニ於テ不眠トナル各眠起ノ



際障害ヲ受ケタル者ハ其齡末皆節蠶トナリテ現ハル或ハ又食桑中ナリト雖劇烈ナル  
 障害ニ接スルトキハ該病ニ罹ルモノ多シ蓋シ蠶體各眠中ニアリテハ諸機新舊交代變  
 化煩雜其体力疲勞スルノミナラズ脱皮スルニ方リテハ皮膚猶軟弱恰モ病後ノ人ノ如  
 シ故ニ此ノ時ニ方リテハ些々ナル變動モ亦病因ヲ醸スルニ至レモノナリ而シテ發蟻  
 ノ際モ尙之レト均シク漸々卵中ニ形ヲ作り卵殼ヲ脱シテ初メテ外氣ニ觸ルハモノナ  
 レハ其脆弱ナルコト亦子ノ如ク僅微ノ障害モ忽チ病因ヲ醸スニ至ル豈猛蠶セザルヘ  
 ケン哉而シテ稚蠶ノ際其感觸ヲ受ケタルモノ病勢緩慢ナレバ壽命ヲ保持シテ四齡五  
 齡ニ至リ節蠶トナリ現ハル又稚蠶ノ際發蠶セシモノ多クハ各眠毎ニ顯ハル蓋シ終末  
 迄發蠶スルコト多シト知ルヘシ以上節高病蠶ノ主因斯ノ如シ余ハ是レヨリ經驗上ノ  
 事實トシテ動スベカラサルノ數項ヲ掲ケ以テ前論ヲ確メントス

### 第一節 自然的冷濕

#### 第一 年

天然ノ氣候順チ得レハ節蠶ノ害少ク不順ナレバ其害多キハ既往現在ノ事實ニ徴シテ

了知スルニ足ルモノアリ過グル明治十九、二十ノ兩年ニ當リ寒冷地方ニ於テ節蠶ノ  
 多カラザリシハ氣候ノ順ナルニヨレリ而シテ其翌年節蠶ノ多ク流行セシハ氣候ニ非  
 常ノ變動アリシニ因ル思フニ其變動ノ有様ハ同年養蠶中日々調査シタル平均氣温ノ  
 表ニヨリテ明カナリト雖其要ヲ摘ムトキハ始メ氣候温暖ナリシモ數日間維持ノ後高  
 温度ハ忽チ變シテ急劇ナル冷氣ト化シ霜結ヒテ桑葉ヲ害シタルノ際試ミニ平均セル  
 一日ノ温度ト其初メノ高温度トヲ比較スルニ華氏ノ寒暖計ニ於テ二十余度ノ差ヲ生  
 シタリ而シテ單ニ最高ノ温度一回ト最低温度ノ一回トヲ比較スルニ其差實ニ六十度  
 ニシテ即チ最高温度ハ九十七度最低温度ハ三十七度ナリキ其後又暖氣ト化シ冷氣ト  
 變シ霜結ヒテ桑葉ヲ害セシコト前後二回三眠起ニ至リテハ愈々冷却シテ五齡中動モ  
 スレハ温度六十度ヲ降ラントシ殆ント蠶食ヲ防止セントスル冷氣ヲ來セシチ以テ五  
 齡ト雖トモ猶火力ニヨリテ上簇セシメタリ斯ノ如ク其氣候或ハ暖或ハ冷變動窮リナ  
 キチ以テ幸フシテ之ヲ防キ得シ者ハ完全ノ結果ヲ得シモ之ヲ防シノ方法ヲ誤リ或ハ  
 其方法ヲ知ルト雖其勞ニ堪ヘスレテ違蠶セシモノ少カラフ其後年々氣候ノ變動ト節



高病ノ多少トヲ比較シテ該病蠶ノ氣候ニ關スルコトヲ知得セリ之ヲ要スルニ一日平均自然温度ガ日々高低ノ比較二十度ノ差ヲ生スルトキハ未熟ノ養蠶家ニアリテハ節高病ヲ發スルコト最モ多シ而シテ又雨多ク濕氣過剩ノ年ニ於テハ該病ヲ發スルコト多シ是レ即チ余カ其年ノ氣象ニヨリテ該病ノ發因ニ差異アリトナスノ第一証トス

第二 季節

節蠶ハ春蠶季ニアリテ多ク夏蠶季ニ少キノ事實ハ一般養蠶家ノ了知セル所ニシテ是レ又氣候ノ關係ニ外ナラザルナリ之ニ就キテ一言セントセバ先ツ一ケ年中ニ於ケル氣候ノ變遷ヨリ論陳セザルヲ得ス凡ソ天然ノ氣候ナルモノ寒ナレハ寒暑ナレハ暑ト已ニ一定スルニ於テハ又格別ノ變動ナキ者ナルト雖トモ其嚴寒後ヨリ大暑ニ進行スル迄ノ間或ハ大暑ヨリ嚴寒ニ達スル迄ノ間ニアリテハ變動頗ル多キモノニシテ春分ノ頃ヨリ晴明ノ時分ハ或ハ暖ナルカト思ヘハ再ヒ冷氣トナリ日々ノ變動晝間ト夜間ト其温度ニ甚クシキ差ヲ生ズ而シテ立夏ノ頃ニ至リテハ變動稍々減シ夫レヨリ大暑ニ進ムニ從ヒテ少ク晝夜ノ等差ヲ生スルモ亦少キモノナリ春蠶ノ發生ハ土地ニヨリ

テ差ヲ生スト雖我小縣郡地方ニ於テハ概チ立夏ノ頃發生シ夏至前ニ於テ上候スルモノナレハ此間晴明ノ頃ニ比スレハ氣候稍々一定スルト雖トモ晝夜ニ於ケル温度ノ等差甚ク又不時ノ冷却ヲ來シ蠶坐ノ乾カサルコト多ク夏蠶季ハ之ニ反シテ冷氣ノ襲撃ナシ之レ即チ夏蠶季ニ此モノ少ク春蠶季ニハ此モノ多ク發顯スル所以ニシテ其實該病蠶ノ發因冷濕ノ感觸ニアリトナスノ理ヲ証スルニ足ルモノナリ

第三 地勢

地勢ニヨリテ該病ノ發顯多キヤ少キヤヲ比スルニ地勢高クシテ且ツ寒冷ナル國ニ於テハ此モノ多ク温和ノ國ニアリテハ此モノ少ク又山ナ背ニシ南面セル土地ハ此モノ少ク山陰ノ土地ハ此モノ多ク平坦ノ地ニハ此モノ少ク山間ニハ此モノ多ク現ハルモノニシテ其所以ヲ尋スルニ温和ノ國平坦ノ地及山陽ノ土地ハ總テ陽且ツ暖ニシテ高寒ノ國山陰ノ地及山間ノ村落ハ冷濕ナルニヨレリ若シ夫レ南方及東方山脈ヲ以テ圍繞シ光線ノ透過常ニ鈍ク雲霧或ハ往來シテ空氣濕潤タルノ地理ナラバ蠶室蠶具皆濕ヲテ乾カザル事明カニシテ而シテ氣候常ニ冷氣ナリ其冷濕ノ氣象ハ相兼テ以テ



節蠶ヲ生ズルモノナリ斯ル風土ニ於ケル養蠶者ハ非常ニ注意ヲ要シ人爲ヲ以テ冷氣ノ變動ヲ調和シ室内ノ乾燥ヲ計ルニアラザレハ該病蠶ヲ免カルコト事蓋シ難カルベシト余母テ漫遊中山間ノ村落ヲ過クル毎ニ病蠶ノ重モナルモノハ何ナリヤト問ヘハ蠶ヲ節蠶ヲ以テ苔ヒダリ斯ノ如キ地ヲ日没後通過スルトキハ衣袖爲メニ濕フヲ知ル即チ比較的濕氣ノ抱含多キコト此ノ如シ節高病ノ年々發顯シテ絶エサルコト又疑ヲ容ルヘキニアラス

第二節 人爲的冷濕

第一 蠶室ノ廣大並ニ位置

蠶室廣大ニ失スルトキハ天然ノ溫度室内チ平均ナラシムルコト能ハス而シテ其室廣大ナルトキハ縱令火力ヲ用ユルト雖トモ其効著シカラズシテ一部分暖マレハ又一部分ニ冷處ヲ生シ火力緩ムトキハ忽チ冷氣ニ變シ常ニ寂寥トシテ蠶坐乾カス遂ニ不眠蠶ヲ生スルニ至ル者ナリ而シテ夏蠶ノ季節ナリト雖其早キ者ハ六月末若シクハ七月ノ始メニ於テ發生スルカ故ニ年ニヨリテハ溫度比較的低キコトナシトセス猶且ツ梅

雨ヨリ降雨打チ續キ濕氣刺多ニシテ其操作ヲナスヲ以テ大厦深窓若シクハ樹木蔭間トシテ屋上ヲ覆フノ蠶室山間ノ家杯最モ陰氣ナル場所ニ於テ稚蠶ノ幼育ヲナセハ時トシテハ不眠蠶ヲ生スルコトアリ而シテ稚蠶飼育室ノ場所柄ニヨリテモ亦該病ノ誘因ヲナス者ナリ例ヘハ臺所即チ炊烟ノ年中散漫シテ火爐ノ暖之ヲ補フノ室内ニアリテハ蔭然云フヘカラサルノ補ヒアルモノニシテ夜間ト雖モ猶能ク暖氣ヲ存スルノミナラス拂曉ニ際スレハ炊烟又散漫シテ自ラ暖氣ヲ添フルカ故ニ室中殊ニ直接ノ火力ヲ用弁スト雖自ラ室内ノ溫度ヲ補ヒ乾燥ヲ助クルヲ以テ室内溫度平均シ不眠蠶ヲ出スコト少キモノナリ而シテ臺所ヲ遠サカルニ從ツテ冷濕トナリ飼育上ニ困難ナルノミナラス不眠蠶ヲ誘發スルコトアルモノトスサレハ吾地方ノ如キハ幾多ノ經驗ニヨリテ稚蠶飼育室ハ臺所ニシテ火爐ノ隣室其ノ室トキモノハ新ニ其近傍ニ仕立若シクハ其近傍ナルニ階ニ設クルヲ以テ通例トシ戸々家々皆其方法ニ準フ年々完全ノ收穫ヲ得ルモノ又偶然ニアラサルナリ

第二 不完全ナル溫度ノ調和



上來陳述シ來レル如ク節蠶ハ氣象ノ作用ニヨリテ發病スルモノナルカ故ニ之ヲ調和スルニ注意周到ナルノ養蠶家ニアリテハ勿論該病ヲ發スルコト少シト雖之レガ注意方法粗ナルトキ若シクハ調和上ニ觀念ナキモノ、如キハ多ク其患ニ罹ルモノニシテ天然ノ氣象順ヲ得タルノ年ヲ除ノ外ハ歲々該病ニ陷ルモノ多シ左ニ其所以ヲ説明セントス

折衷育或ハ溫暖育ノ蠶室内ニハ此ノ者發顯スルコト少ク自然育者ノ蠶室内ニハ此モ多ク發顯ス蓋シ春蠶期ノ自然育ハ火力ヲ用弁ザルカ故ニ室内常ニ陰氣ニシテ且ツ溫度ニ變動ヲ來シ空氣乾燥セス從ツテ新陳代謝アシキモノナリ加之ナラス自然育者ノ蠶室ハ外氣ノ變動ニ應シテ室内ノ溫度皆變動スルモノナレハ終ニ節蠶ヲ出スノ結果ヲ生スルコト多シ

折衷育ト云ヒ溫暖育ト云ヒ皆其溫度ノ高低ニヨリテ命名ヲ異ニスルモノニシテ其方法ヲ巧ミ施シ其目的ヲ完フスルハ至極難澁ナル事トス然ルニ世上ノ廣キ養蠶家ノ多キ或ハ養蠶ノ日誌ヲ製シ養蠶表ヲ製スルモノアリト雖トモ多クハ朝晝夕ノ溫度ヲ調

ブルニ止マリ最モ油斷スベカラサルノ要點即チ夜十二時ヨリ午前七時頃迄ノ狀況及記表ヲ爲スモノ稀レナリ是レハ之レ眠ラザルノ場合ノミヲ調査セシ者ニシテ夜間ノ必要時間ハ眠リ居タルモノニハアラサルナキ乎ヲ疑ハシム若シモ其必要時間ニ於テ眠リタルモノナリトセン乎縱令口ニハ溫暖育ナリト折衷育ナリト自稱スルト雖彼ノ冷氣彌々増シ蠶室内寂寥トシテ堪ヘ得サルノ際ニ方リテハ其加減ヲ計リ目的ノ溫度ニ据ヘ置クコト難カルヘシ然ルニ或ル養蠶家カ溫暖育ニナシタリト雖節蠶ヲ生シタリ又蠶坐ハ乾燥シタリト雖節蠶ヲ生シタリ杯ト唱フト雖余ヲ以テ之ヲ見レバ其人必ス溫度ニ一定ノ標準ナク終始溫度ノ主義目的ヲ守リタリトハ信スルヲ得ス如何トナレハ溫暖育ノ失策ヨリ生スル處ノ病蠶ハ節高病ニアラサレハナリ若シ其レ火力ヲ用ユル時ノミ劇火ヲ用弁最モ注意セザルヘカラサルノ夜間ヨリ拂曉迄ノ間ニ於テ油斷シツハ溫度ノ劇降シタルヲ知ラス其襲撃ニ接シ遂ニ該病因ヲ作リタルモノナリトス縱令火力ヲ用エルト雖トモ之ヲ口實トシ其應用上ニ欠點アリテ氣候冷氣ニ落ツルトキハ溫暖室中又冷氣ナキニアラズ況ンヤ溫暖室ニ馴レシメタル蠶不時ノ冷氣ニ感ズル



ニ於テハ容易ニ其病因ヲ釀スニ至ルヤ復明カナリ

第三 濕桑ノ給與

濕桑ト掲ゲタルハ朝露桑雨桑若シクハ水ヲ多ク撒布シタル桑葉ヲ指シタルモノナリ  
蓋シ濕フタル桑葉ヲ蠶ニ與フルトキハ其附着セル水分ハ蠶体ノ外表ニ觸レテ寒冷チ  
來タシ其蒸發スルニ當リテハ潛温ヲ奪フテ飛散シ同時ニ寒冷ノ作用ヲナスモノナリ  
試ミニ人身ノ皮膚ニ向テ「アルコトル」若シクハ燒酎ヲ撒布スルトキハ著シキ寒冷チ  
感スヘシ是レ其速カニ蒸發シテ同時ニ潛温ヲ奪フノ微ナリ蠶ノ濕桑ニ於ケル亦之ト  
均シク濕桑具體ニ觸ル、トキハ水分ノ爲メニ寒冷チ感シ其蒸發スルニ方リテハ潛温  
ヲ奪フテ去ル右ノ如ク濕桑ハ二箇ノ操作ヲナス而シテ蠶体ニ向ツテハ局處的ニアラ  
ズ全身的ニ操作スルヲ以テ不眠蠶即チ節蠶ヲ發スルモノナリ而シテ桑葉中水分ノ抱  
含多量ナルモノヲ蠶ニ散布シテ冷濕ノ感動ヲ與フルモ亦其操作前陳ノ如シトス高名  
ナル實業家丹治梅吉氏ノ養蠶日誌中ニ曰ハク今チ距ルコト十年前頃迄ハ吾地方養蠶  
家ハ重モニ摘ミ立テ桑チ(桑葉ヲ摘採シテ直ニ蠶ニ與フルチ云フ)幼稚蠶ニ與ヘテ多

ク不眠蠶ヲ生ゼリ今ヤ其有害ナルヲ覺リ貯藏ノ勞ヲ取ルニ方リ大ニ該病蠶ノ減少ス  
ルヲ見ル實業ノ進歩思フヘキナリ云々蓋シ其十年前トアルハ明治四年頃ナルヘシ如  
何トナレバ同氏が養蠶日誌ハ明治十三年度ノ編成ナレバナリ此說簡單ナリト雖能ク  
事實ヲ穿チタルモノニシテ前説ヲ確ムルニ足ルモノナリトス今日猶自然育チ貴フ地  
方ニアリテ多ク節蠶即チ不眠蠶ヲ見ルハ野生蠶ノ昔チ思ヒ出シ桑樹ニ棲息セシトキ  
ハ自由ニ桑樹ヲ匍匐シ桑葉ヲ食シタル者ナレバ摘立桑チ給スルニ適當ノ方法ナリト  
誤認シ年々不眠蠶ヲ出スモノアリ然リト雖之レヨリ生ズル不眠蠶ノ關係ハ獨リ濕桑  
ノ關係ノミナラズ斯ル古風ノ養蠶家ハ自然トノミ唱ヒテ火力ノ應用ニ至リテハ嫌惡  
スルノ傾キアルニヨリ相助ケテ以テ該病ヲ發スルモノナリ

第四 過度ノ給桑

蠶チ愛スルニ過ギテ蠶ノ桑葉ヲ食セズ從ヒテ乾燥セザルニモ拘ラズ頻繁給桑シ蠶チ  
シテ生葉堆積ノ間ニ處フシムルガ如キハ前項ノ作用ニ均シク冷濕ノ氣遂ニ該病ヲ發  
スルモノナリ凡ソ火力育及ヒ乾燥セル蠶室内ニ於テハ水分ノ脱却速カニシテ畢竟多



量ノ桑葉ヲ給セザルヘカラズ然リト雖ドモ彼ノ温度高キヲ恐ル養蠶家及濕氣アルノ蠶室内ニ於テハ過度ノ給桑摘立桑ノ給與等總テ該病因トナルモノナリ抑々乾燥スルトキハ温度昇リ濕氣アルトキハ温度降ルモノトス而シテ稚蠶ヲシテ此ノ冷氣ニシテ乾カザル桑葉中ニ居シメバ愈々其冷氣ヲ助ケ蠶ヲシテ冷濕ノ感動ヲ受ケシムルヲ以テナリ而シテ此ノ冷濕ノ障害ハ幼稚ナル蠶即チ一二眠ノ頃尤モ受ケ易キモノナレバ宜シク下蟻ノ際ヨリ注意セズンバアルヘカラザルナリ動モスレバ人傳ヒテ曰ク桑ヲ食スルコト過量ニシテ爲メニ蠶体肥大ニ過ギ途ニ該病ニ陥ルコト是レ大ニ附會ノ言ナリ凡ソ不眠蠶即チ節蠶ノ体入ナルハ脂肪ノ健蠶ニ比シテ特ニ多キモノニアラズ其始メ健蠶ノ盛食期ニアリテハ其体却テ衰弱シ健蠶眠ニ就クニ及ビ漸ク桑葉ヲ食食シ異様ニ其体腫脹ス是レ其ノ病害ニヨリテ皮膚癢泄及泌尿ノ作用遲鈍トナリ水分及老廢物体中ニ蓄積シ脂肪組織壞爛シ遂ニ大ニ腫滿スルニヨル者ニシテ決シテ桑葉ノ過食ニアラズ又脂肪ノ多キニ過ギタルニモアラズ蠶ハ固ト胃囊ノ消化ニ從ツテ桑葉ヲ食スルモノニシテ食囊空シキトキハ復タ食ヲ欲スル者ナレバ縱令如何ニ桑葉ヲ給ス

ルト雖決シテ漫リニ食ヲ貪ルヘキモノニアラズ唯殘桑ハ癢レテ堆積スルヲ見ルノミナリ此ノ癢レタル桑葉乾クトキハ害ナシト雖乾カザルトキハ蠶ヲシテ被害セシム即チ暖氣ニ失シ蒸熱ヲ醸ストキハ空頭蠶トナリ冷氣ニシテ濕ケルノミナルトキハ不眠蠶即チ節蠶トナル乾カザルノ廢桑發病ノ誘因ヲナスコト此ノ如シ恐ルヘキモノナラズヤ

以上自然的及人爲的ヨリ來レル作用ヲ事實ノ証蹟ニ照シ論述シタル該病ノ發スル主因ハ冷濕ノ氣ニアルコト瞭然タルヲ信ズ故ニ余ハ是ヨリ一步ヲ進メテ在來流傳ノ說ヲ指摘シ或ハ之ヲ贊シ或ハ之ニ反對シ養蠶家ノ參考ニ供シ合セテ自己ノ所說ヲ確實ナラシメント欲ス

第三節

各家ノ說ヲ擧ケテ參照ノ資料トス

第一

蛆害ヲ以テ原因トセシ說

蛆害說ニ曰ハク「蠶ノ四齡以後ニ於テ發顯シタル節高病蠶ハ重モニ蛆卵ノ寄生ニヨリテ來ル」トアリ又「末期ニ現ハレタル該病蠶ヲ解剖シテ蛆ノ寄生シアルヲ認ム」云



々トアリ然レドモ余ハ其節蠶ト蛆害トハ全ク病因ノ異ナルヲ信ズ何トナレバ縱令節蠶ノ多ク生スル蠶ナリト雖從來蛆害ナキ桑園ヨリ採收セシ桑葉ヲ與ヒテ飼育スルトキハ蛆害ノアルコト少ク又蛆害ノ多キ桑園ヨリ採收セシ桑葉ヲ與フルトキハ節蠶ヲ生スルコトナクシテ單ニ蛆害ノ多キヲ見ルノミナレバナリ去ル明治二十一年其ガ試驗ヲナサント欲シ通常ノ蠶ヨリ發生ヲ遅クスルコト十三日ニシテ掃立タルニ六月二十二日因眠起ノ桑附トナレリ而シテ恰モ蟹害盛ニノ真最中ナル桑葉ヲ與ヒシコトナレバ終末多クノ節蠶ヲ見ルヘシト思ヒシニ同月二十九日熟蠶ヲ出シ三十日悉皆上簇シタリ既ニシテ結繭ノ後繭百顆ヲ取り之ヲ切斷シテ其蛹体ヲ檢セシニ蛆害ニ罹ルモノ多クシテ實ニ七十有餘頭ニ及ヘリ玆ニ於テ蛆害ハ節蠶ノ原因ニアラザルコトヲ發見シタリ其後屢々世上ノ事實ヲ調査セシニ蛆害ト節蠶トハ全ク病因ノ異ナルモノニシテ彼ノ節高病蠶ノ体中ニ蛆ノ寄生シアリシガ如キハ一頭ノ蠶二種ノ病ヲ併發セシモノナリ而シテ節蠶ハ病勢緩慢ナルガ故ニ其病ニ罹リ居ルト雖トモ斃死スルニ至ル迄ハ桑葉ヲ咀喰スルモノナレバ病後猶蛆害ノ患ニ罹ルコト復々疑ヲ容ルヘカラズ

蠶業調査トシテ歐州ニ渡航シ去ル明治二十四年歸朝セラレタル三吉米熊氏ニ就キ彼ノ節高病蠶ナルモノガ外國ニモ亦行ハル、ヤ否ヤヲ質問シタルニ該病ハ腐敗病ノ如ク甚ダシカラズト雖多少ノ流行アリト答ヒ又蛆害ハ日本及支那「ヘンカール」ノ特有寄生生物ナリト答ヒラレタリ如斯外國養蠶地ニ於テハ蛆害ナルモノナク節蠶ノミアリトセバ蛆害ハ節蠶ノ原因ニアラザルコト明カナルヘシ

第二 交尾時間ノ過長ヲ原因トセシ説

廣蠶桑起ニ曰ク「蛾一對不<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>太<sub>レ</sub>遲<sub>レ</sub>遲<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>眠<sub>レ</sub>後多<sub>レ</sub>高外<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>扼<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>云々此ノ語ヲ反釋シテ云ハバ交尾時間永キニ失シテ發スルモノナリ是レ亦事實ニ相違スルモノ、如シ抑々節高病蠶ノ如キハ外部ノ刺衝ニヨリ發病スルモノナレバ交合ノ過度其病因タルガ如キハ信ズルヲ得ザルナリ今又試驗上ノ事實ヲ擧グレバ生理學ノ載スル處蛾ノ交尾時間ハ十分乃至十五分間ニシテ雄蛾ハ全ク精虫ヲ雌蛾ノ受精囊中ニ傳フトアリ然ルニ製種家ハ從來五時間内外ノ交尾ヲナサシムルノミナラズ去ル明治十二年黃繭ノ彩色ヲシテ濃厚ナラシメント欲シ一隻ノ



雌蛾二三隻ノ雄蛾ヲシテ交々孳尾セシメ以テ黃繭ノ濃色ヲ促シタリシガ其當時ハ交合熟卵ノ現ヲ解スル能ハズシテ臆測上ニ於テ施シタル試験ナレバ黃繭ノ濃色其効ヲ奏セズト雖翌年節高病蠶ノ發顯スルコト絶テ之レナキヲ以テ見レハ其事實前説ヲ證スルニ足ルモノト信ズ

### 第三 下蟻ノ際劇敲シタルヲ以テ原因トセシ説

蠶事輯説及養蠶説示ニ記載スル所ニヨレバ「蟻ヲ掃キ卸スノ際蠶卵臺紙ノ裏面ヨリ劇シク撃チ落スキハ内臓ノ諸機關ヲ損傷シテ遂ニ該病ニ陥ル」云々ト是レ又事實ニ反スルモノナリ其試験ニ就テハ嘗テ靜肅、擊敵、數種ノ方法ヲ施シタルコトアリシが一室内ノ蠶同一ニ發育シテ絶ヘテ節蠶ノ見ヘザリシモ元ト是レ該病患ハ内臓ノ機關ヨリ發スルモノニアラズシテ外部ヨリ漸次内部ニ及ホシ斃死スルモノナレバナリ

### 第四 過度ノ温熱ヲ以テ原因トセシ説

人アリ曰ク節高病蠶ハ暖ニ失シテ生ズト之レ全ク反對ノ説ナルガ如シ若シ夫レ此目的ヲ以テ豫防ノ方法ヲ施サシメバ益々該病蠶ノ増加ヲ見ルニ至ラン何トナレバ其方

法ハ却テ該病蠶ノ發現ヲ促シツ、アレバナリ試ミニ問ハン該病發顯ノ多少ハ比較的春蠶季ト夏蠶季トハ何レガ最も多キヤ又火力育者ノ蠶室内ト天然育者ノ蠶室内トニアツテハ該病結果シテ何レガ多キヲ認メシヤ余ヲ以テ之ヲ見レバ春蠶季ニハ至ル處該病ノ罹害者アラザルハナク夏蠶季ニハ殆ント之ヲ見ル稀レナリ又火力育者ノ蠶室内ニ發現スルコト少ナシト雖トモ天然育者ノ蠶室内ニハ常ニ多ク之ヲ生シテ凶蠶ニ陥ルモノ多キヲ知レリ然ラバ則チ暖ニ失シテ發顯ストノ説ハ自ラ消滅ニ歸スヘキナリ而シテ天然ノ氣候ガ俄カニ一段ノ暖氣ニ進ムトキハ必ズヤ冷氣ノ反動ヲ來スコト免カルヘカラズ是レ實ニ經歷上ノ事實トスサレバ暖氣ハ該病ノ發因ナラズシテ第二ニ變動シタル冷氣ガ病因ヲ醸シタルモノト知ルヘシ

### 第五 陰濕ノ氣ヲ以テ原因トセシ説

今ヲ距ルコト十有餘年前農業雜誌中福嶋縣實業家某氏ノ言ヒルアリ「節蠶ハ陰濕ノ氣ヨリ來レル」云々蓋シ陽ハ暖ナリ乾燥ナリ陰ハ冷ナリ濕幽ナリ即チ蠶室内冷氣ニシテ乾カザルトキハ該病ヲ發スルト謂フニアリ氏ハ此説ヲ以テ地勢風土等ニ對照シ



懇切ニ説明シタリ是レ又事實的ノ議論ニシテ余ガ説ト符節ヲ合ハスガ如シ

第六 氣象ノ作用ヲ以テ原因トセシ説

田嶋棟平氏著ハス處ノ蠶桑真理中ニモ亦氣象的ノ疾病ナリト論シ余ガ意見ト異ナルナシ

第二章 節高病蠶ノ副因ヲ論ズ

節高病發因ノ主ナルモノハ冷濕ノ氣ニシテ次ニ其作用ニ感シ發病シ易キハ蠶體ノ虛弱ナルニヨリ蠶體ノ虛弱ハ第一先天即チ其親蛾ヨリ遺傳セシ性質第二後天即チ人爲ニ屬シ卵子ノ取扱及飼育上諸般ノ欠點ニヨレリ左ニ次ヲ述フテ之ヲ説明セン

第一節 遺傳的蠶體ノ虛弱

第一 種類ノ高尙

人爲ノ陶太ニヨリテ進化シ蠶體肥大トナリ優美ノ良繭ヲ營ム種類ハ其性質虛弱ナルモノニシテ糸量少ク優美ナラズ且ツ小繭ヲ營ム種類ノ如ク強壯ナラザレバ「少許ノ故障モ亦其影響ヲ蒙ルモノナリサレバ高尙ナル種類ハ老練ナル養蠶家ノ飼育ニ適

スト雖普通ノ養蠶ニハ兎角失敗多キモノナリ是レニ由リテ之ヲ觀レハ蠶種製造人ノ方法充分ニシテ卵子ニ實力アリトスルモ性質弱キガ故ニ病ヲ誘發スルモノナリ然ルニ養蠶家其種類高尙ノ虛弱質ヲ察セズ之ヲ種類ノ進度低キモノト相比較シテ疾病多シトナシ徒ラニ之ヲ其蠶種製造人ノ罪ニ歸スルハ彼我相混同セシモノニシテ大ニ誤謬ノ判斷タルヲ免カレザルナリ

第二 卵子ノ虛弱

虛弱ナル蠶卵ヨリ發スル處ノ蠶ハ體質弱キカ故ニ外來ノ故障ニヨリテ容易ニ何レノ蠶病ヲモ發シ易キモノナリト雖モ特ニ余カ論述スル所以ノ者ハ同一蠶室内ニ於テ同一飼育ヲナシ比較的節高病蠶ヲ出スニ多少ノ差異ヲ生スルコトアルニ由レバナリ而シテ單ニ蠶卵ノ虛弱ト云ヒ放テタルノミニテハ其理判然セザレバ先ツ其虛弱ノ因テ來ル所ノ各種ニ就キ説明ヲ試ミント欲ス

一 微粒子毒ノ遺傳

微粒子毒ハ恰モ人身ニ於ケル肺病ノ如ク其病素ハ遺傳ト傳染トノ二性ヲ兼ネルト雖



特ニ遺傳甚クシク蠶ニ凶害ヲ與フルモノナリ今該病ヲ詳論スルニ違アラザレハ唯微  
 粒子毒ノ遺傳ハ節高病蠶第二ノ原因トナル理由ヲ略述センニ凡ソ微粒子毒ノ蠶体ヲ  
 犯スヤ早キモノハ稚蠶ノ時ニ斃レ晩ク蕃殖セシモノハ蛾トナルヲ得ルモノニシテ該  
 微粒子ノ生殖器内ヲ犯スコト早キトキハ卵粒内ニ該病ヲ包含ス縱令該毒ノ生殖器内  
 ヲ犯ス事晚ク其卵殼已ニ成立セシ後ニシテ卵液内ニ該粒子ヲ傳フルコトナキ者ト雖  
 其虛弱ノ性ヲ産卵ニ傳フルヤ論ヲ俟タザルナリサレハ其卵粒ニ該毒ノ遺傳アル者ハ  
 勿論親蛾ニ含毒アリシモノ、卵ハ虛弱ニシテ節高病蠶ヲ發スル第二ノ原因トナルモ  
 ノナリ

二 虛弱性遺傳

虛弱性遺傳トハ微粒子毒ノ遺傳ニアラスシテ重モニ軟化病ヨリ來レルモノヲ云フ末  
 期ニ於テ軟化病ニ罹リタルモノハ縱令生殖器内ヲ犯サスト雖虛弱性ヲ遺傳スルモノ  
 ニシテ微粒子毒病ハ形アル病質ヲ傳ヒ軟化病及其他ノ病ハ無形ナル虛弱性ヲ卵子ニ  
 傳フルモノナリ若シ其レ各種ノ病蠶ヲ發シ死ニ殘リノ繭ヲ以テ發蛾セシメ而シテ採

卵シタルモノハ虛弱性ヲ傳フルコト多シトス而シテ其虛弱性遺傳アルモノハ些々タ  
 ル障害ニモ亦該病ヲ誘發スルモノトス

三 卵体實力乏シキモノ

實力乏シキ卵子トハ其蠶種ノ製造ニ供用シタル原繭ノ飼育者カ大ニ不完全ナル飼育  
 ナンシ食飼不足トナリ縱令病質ノ遺傳ナキモ卵粒瘠小ニシテ粘着力弱ク落チ易クシ  
 テ何トナツ力薄キモノヲ云フナリ此虛弱性ハ最モ恐ヘキノ性ニシテ彼ノ種類ノ高尙  
 ヨリ來ル虛弱及微粒子毒ノ遺傳ヨリ來ルモノヨリモ却テ恐ルヘキモノナリ斯ル虛弱  
 卵ヨリ發スル處ノ蟻ハ些々タル障害モ亦疾病ノ發因ヲナスニ至ルモノトス

第二節 人為的蠶体ノ虛弱

第一 子ノ貯藏及化法ノ欠點

卵子ノ貯藏宜シキヲ得ス急劇ナル温度ノ變動ヲ與ヒ或ハ濕氣ニ過ギタル風穴中ニ入  
 レ或ハ入穴ノ期ヲ失シ晚キニ過ギタルモノ等ノ障害ニヨリテ卵子衰弱シタルモノハ  
 如キハ該病蠶ヲ誘發ス又孵化ヲ催スニ當リ俄カニ冷氣ノ場所ニ時ヘ又ハ不順ノ氣候



チ感セシメタルモノ、如キハ該病ヲ發シ易キモノナリトス彼ノ秋蠶第一化ノ原種ハ春季ニ發生セシムヘキヲ風穴中ニ入レ置又出穴以後人工の孵化法ヲ施スヲ以テ蟻蠶衰弱シ多ク不眠蠶ヲ發スルコトアリ而シテ其發生重モニ梅雨中ニアルヲ以テ濕氣常ニ泡和度ニ達シツ、アルノ季節ナレハ防濕ノ用意ナク陰氣ナル蠶室内ニ於テ其ノ原虫ヲ飼育スルトキハ必ス多クノ不眠蠶ヲ出スモノニシテ其所以ハ孵化法ニヨリテ蟻ノ衰弱及氣中多クノ濕氣アルニヨルナリ

凡ソ卵子ノ孵化スルニ當リテハ已ニ發生セシ蠶ト同シク氣象ヲ調和スルニアラザレハ病害ヲ免レ難キモノナリ若シ夫レ蟻ノ孵化スルニ當リ冷氣ノ激變ニ感セシムルコトアレハ第一就眠ニ方リ早ク已ニ該病蠶ヲ出スコト免ル可カラサルノ事實トス

## 第二 飼育諸般ノ欠點

蠶體チシテ弱カラシムル所以ノ者ハ前數項ニ論ゼシノミナラス飼育法諸般ノ要點ニ於テ欠漏アル時ハ毫モ他ノ原因ナクシテ衰弱セシムルヲ得ル者ナリ此時ニ方リ急劇ナル故障ヲ與フル時ハ容易ニ不眠蠶即チ節蠶ヲ發スルニ至ル而シテ稚蠶時ニ發スル

アリ盛蠶時ニ發スルアリ上簇ニ際シテ發スルアリ固ヨリ時機ニ定マリナシト雖要スルニ蠶體ノ虛卵ヲ襲ヒ來ル勢ノ強弱ニヨリ隨時發病スルナレハ平素油斷シテ不覺ヲ取サル様注意スヘキナリ

## 結 論

以上論述シ來リタル節高病水腫病蠶ノ主因及副因ハ余カ養蠶中經驗セシ處及地方ノ事實又ハ各地ヲ漫遊シ實地ニ調査シテ大体ノ比較上ヨリ判斷チ下シタルモノナリ而シテ冷氣ノ年及氣候ノ變動多キ年世上皆該病ニ罹ルト云フニアラス氣候寒冷ノ地方及山間ノ地方廣大ナル蠶室皆其害ニ罹ルト云フニアラス其養蠶者ノ熟練ニ依リテ能ク調和シ得ルニ於テハ完全ナル結果ヲ得ルモノナリト雖氣象上天然ノ補ヒアル場合ニ比スレハ餘分ニ注意ヲ要シ臨機ノ適法ヲ設ルニアラザレハ善長ノ結果ヲ望ミテ得ヘカラサルモノナリトス



蠶種ノ貯藏及ヒ催青ノ時期ノ必要ヲ論ス

長野縣小縣郡鹽尻村大字秋和

工 藤 喜 六

蠶卵種ヲ撰ヒ貯ヒ置クト雖トモ貯藏法其宜シキヲ得サレハ決シテ善良ナル結果ハ期シ難シ今ヤ改良法トテ種々ノ法ヲ用エテ或ハ桐ノ箱ニ箋ヲ以テシ其内ニ保チ坏ナスト雖モ充分ノ方法ニアラス適々以テ大氣ノ通路ヲ遮絶スト雖モ温ノ透徹ヲ遮絶スル能ハサルヲ以テ被害ヲ與フルナリ

或ハ謂フ自然ノ催青ハ能ク其氣候ト隨伴スル故ニ最モ適當タルヲ論スルモノアリト雖モ其不經濟タルコト自然飼育ノ不結果ト一樣ニシテ亦用ユヘカラス

近年三四年間ノ經驗ニ因テ論スルモ其ノ不利ナル事ヲ確論スルニ足レリ即チ二十一年度ハ冬ヨリ初春ノ候温暖ニシテ早生ヲ爲シ一般ニ桑葉ノ不足ヲ以テ養蠶家ノ不利益タルコト疑ヒモナシ二十二年度ハ之レニ反シテ晩生ヲ爲シ遅キニ從ヒ季候愈々温暖ニ過キ不結果ヲ取リシコト勿論ニシテ至ル所青桑ヲ拾テザルハナシ二十三年度ハ

冬ヨリ初春ノ候ハ温暖ニシテ且降雨多クシテ二十一年ヨリ一層甚ダシクシテ其貯藏ヲ過リ至ル處失敗ノ多キコト開クニ絶ヘタリ二十四年度ハ晩生ヲナシ桑葉ヲ棄サルナシ此ヲ以テ論スレハ終秋ノ季ヨリ越冬ノ季節及ヒ春季何レモ氣候順ニシテ早中晩生トモニ上結果アル時ニアラサレハ自然催青ハ保シ難シ近年ニ於テハ唯夫二十年度ナル哉

茲ニ農商務省蠶病試驗ノ成績ノ概略ヲ掲ケレハ左ノ如シ

桑葉ハ遅キニ從テ收穫多キヲ以テ晩生ハ利益多キ如クナレトモ蛆害ノ多キト糸質ノ劣ロフルトノ嫌アリ早キニ失スレハ收葉ノ不足タルヲ免カレス其ノ季節一日ヲ爭フモノ、如シ

二十年度ニハ四月二十七日同月三十日五月三日ノ三回ニ掃下シテ各々殆シト同一ノ飼育ニシテ四齡マテノ温度ハ平均七十一度ニシテ第一回ハ五齡ニハ六十八度次ハ七十度次ハ七十二度ニシテ卅五日前後ナリ收葉ノ多量ハ第三回ナリト雖モ糸質成繭最モ善良ニシテ最モ多キハ第二回ヲ以テ第一トシ次ハ第一回ニシテ第三回最モ劣レリ



二十一年度ニハ四月二十五日同月二十八日五月二日同月三日同月四日ノ五回ニシテ最モ優等ヲ占メタルハ第五回ノ晩生トス斯ク例年ノ反對ニ出ヌルハ三四月ノ候温暖ニシテ發芽ノ早キニモ拘ラズ五月ノ候屢々冷氣ヲ催シ桑葉ノ發育ヲ妨ケラレシヲ以テ却テ晩生ノモノ其適當シタル桑葉ト氣候トニ因テ五齡ノ蠶ヲ養フヲ以テ成繭收葉共ニ多クシテ善良ナリ

二十二年度ハ早中晩ノ三回トナシ第一回ハ四月二十八日第二回ハ五月二日第三回ハ五月六日ヲ以テ掃下シ蟻量一匁ニ對シ第一回ハ三十四日十二時間ニシテ成繭重量ハ三貫三百二十七匁八分ナリ第二回ハ四貫百七匁八分ナリ第三回ハ三貫二百七十一匁八分六厘ナリ而シテ給桑十貫匁ニ對スル收繭ハ第一ハ五升二合九夕第二回ハ五升三合三夕第三回ハ五升六合五夕ナリ

第一回ノ蠶ハ眠起殆ント齊一ニシテ成長最モ宜シク繭ノ形狀光澤共ニ佳ナレトモ其締リハ不充分ニシテ現在ノ收繭ハ第三回ヨリモ多ケレトモ給桑量ニ對スル收繭ハ最モ寡ク第二回ノ蠶ハ眠起前者ニ比スレバ稍不齊ナルカ如クナリシモ成長至テ速カニ

シテ繭ノ形狀光澤共ニ第一回ニ讓ラズ其締リ甚タ良シクシテ現在ノ收繭最モ多ク給桑ニ對スル收繭ハ第三回ニ亞キ第三回ノ蠶ハ眠起不齊成長緩慢ニシテ上簇後斃レテ結繭セサルモノ尠カラズ繭ノ形收締共ニ不齊ニシテ遙カニ前二回ニ及バズ現在ノ收繭ハ最モ寡ケレトモ給桑量ニ對スル收繭ハ最モ多シトス

繭一類試驗ノ成績ヲ以テ互ニ優劣ヲ比較スルニ第二回ノ繭ハ其ノ糸纒最モ細長ニシテ恰モ好ク製糸ニ適シ第一回ノ繭ハ較重クシテ質類大キモ其糸纒短クシテ大キニ過ギ第三回ノ繭ハ目方最モ輕ク糸纒甚タ短クシテ切斷ナキモ質類甚タ多ク第一回ニ比スレハ較細シ糸纒試驗モ亦第二回最優等ニシテ糸量多クシテ且細長ナリ第一回ハ之レニ亞キ第三回ハ最劣等ニ居レリ

又蟻量四匁ヲ飼育スルニハ掃下シヨリ收繭マテ第一回ハ一反四畝十四歩五合六夕第二回ハ一反三畝二十四歩一合六夕第三回ハ一反一畝二十八歩一合二夕ノ桑園ヲ要スル割合ニテ桑園一反歩ニ對スル成繭第一回ハ九斗五合七夕第二回ハ一石八合五夕第三回ハ一石七升八合ヲ得ル割合ナリ



以上全成蹟ニヨリテ全体ノ優劣ヲ按ズルニ第二回ハ優等ニシテ第三回ハ之ニ亞キ第一回ハ却テ劣等ニ位セリ

以上三箇年ノ全成蹟ニ依ラ見ダランニハ必ズヤ給桑ニ對スル收繭ノ割合及ヒ結繭ノ善惡氣候ノ難易等案スルニ催青ノ時節ヲ計ラザルヘカラズ若シ之レヲ過リ早キニ失スルハ不經濟タルヘシ遲キニ失スルモ亦危險タルヘシ且氣候ノ變遷ヲ案スルニ初春ノ候温暖ナレバ終春ヨリ初夏ハ却テ寒冷ナルガ如キ故ニ二三月ノ候温暖ナレバ發芽ハ早クモ四五月ノ寒冷ニ依テ桑ノ發育ハ遅レテ晩生ニ利アルモノ、如シ蠶種貯藏催青ノ時期ノ必要タルハ敢テ多言ヲ要セサルナリ

蠶種ノ貯藏ニ注意スヘキ卵ノ生理ヲ簡略ニ論ゼザルヘカラズ即チ卵ノ外殻ハ蛋白質「セリユローズ」ヨリ成レル(シチヌ)質ノモノナリ卵巢ノ内ヨリ細胞ノ内皮ニ分泌スルヲ以テ表面ニ細胞形ヲ存シ且細微無數ノ脈絡アリ卵ノ一端ヲ見レハ少シク凹狀ヲ成スハ產出前マデ殻ニ明キタル孔ニシテ蠶精體ハ之レヨリ卵中ニ入り然ル後閉ダシ痕跡アリ蠶兒ノ發生モ亦此所ヲ嚙ミ破リテ出ツ殻ノ外面ハ護膜液ニ包被セラル内

部ノ蠶精及ヒ蠶精ヲ滋養スヘキ細胞即チ多少ノ核ヲ含ミシ圓キ粒子ハ薄キ蛋黃膜ニ依テ包被セラル、モノナリ然ルニ外皮ノ最微無數ノ脈絡ハ大氣及ビ水分ト密接シテ絶ス呼吸スル故ニ有毒物ヲ接スレバ害アリ即チ水及ヒ塩水弱酸等ハ無害ナレトモ油煙草樟腦苛性加里液等ハ甚シキ有害ニテ恐ルヘキモノナリ

卵ノ呼吸ハ初産ノ時期ト輕化ノ節ト最モ甚ダシ則チ水蒸氣ト炭酸瓦斯トヲ呼出シ同時ニ酸素ヲ吸入ス之ヲ實驗センニハ長頸壺中ニ卵ヲ入レ然ル後壺中ノ大氣ヲ分拆スレハ知ルヘキナリ其元量タル炭素ト水分ノ失スル割合ハ卵ノ性質則チ種類及製産地ニ依テ多少ノ差アレトモ其ノ減量ノ概略ハ產出後一箇月間ニ百分ノ二其後二箇月間ニ百分ノ二次ノ六箇月間ニ百分ノ一輕化ノ一箇月間ニ百分ノ九ヲ失フ故ニ初産及ヒ輕化ノ呼吸ノ烈シキトキハ殊ニ卵ヲ累積シ或ハ狭少ナル器中ニ閉置スヘカラズ殊ニ春季ハ温度ノ作用ニヨリ一層甚シキヲ以テ殊ニ注意スヘキナリ水分ノ勢力著シキハ其表面ヨリ水蒸氣ノ發散ヲ障碍シ卵殼ヲ腐敗ニ傾カシムルヲ以テナリ故ニ水分多キ大氣中ニ貯藏スヘカラズ大氣ヲ乾燥セシムルハ障害ナシ故ニ乾燥ノ度ニ適當ナル



ヤ否ヤヲ知ルニハ驗温器ノ七十五度ノ時最モ適當セリ八十五度以上ニ至ラハ新ニ生石灰ヲ入レ大氣ヲシテ乾燥セシムヘシ

寒氣ノ作用温度ノ勢力ニ注意セザルヘカラズ一廻寒氣即チ氷点前後ニ至テ再度六度以上ニ至レバ催青ヲ促スベシ故ニ初産後冬期マテハ如何ニ温度上昇スルモ催青セザレトモ秋季ノ末ヨリ冬季ハ温度少シク上昇スルモ催青ヲ促シ再度寒氣ニ觸レシムルモ忽チ虛弱性ヲ帶ルモノナリ故ニ温度ノ如何ニ依テ催青ノ遲速伸縮ハ人造寒ヲ用ユテ適宜ヲナシ得ヘシ而シテ冬期即チ氷点以下ナレハ明ハ宛モ死セシカ如ク濕氣ノ過度大氣ノ欠乏等モ之レニ準シテ更ニ影響スルナシ然レトモ他ノ時期ニ在リテ大害ヲ醸スモノナリ

故ニ我日本ニ於テハ製種ノ後ハ蠶卵ヲ別ニ冷處ニ持行カズシテ其儘室内ニ乾カシ九月ヨリ運搬ヲ初ノ十一月後ハ運搬ヲ止メ直チニ十二月ヨリ貯藏室ニ納メ一月中ニ浸水ヲ行ヒ三月下旬カ四月上旬ニ掃下ス者ハ二月下旬マテ四十度以内ノ氣中ニ貯ヒ三月初旬ヨリ湿度ハ常ニ七十五度内外ニシテ温度ハ六十度ヨリ漸ク上昇セシメテ掃立

ノ時節マデニ七十五度ニナスヘシ五月上旬ニ掃下スモノハ三月下旬マテ四十度以内ノ貯藏室ニ置キ四月上旬ヨリ温度ヲ上昇セシムルコト前條ニ説クカ如シ

冬季貯藏ニ於テモ熱心ナル以太利人ハ能一室ニ多數ノ蠶卵ヲ貯藏シテ常ニ充分ナル成績ヲ顯セリ

今茲ニ一二ノ類例ヲ掲クレハ左ノ如シ

シユザニ一氏ノ如キハ湿度及温度ヲ容易ニ左右シ得ヘキ室ヲ設置シテ公衆ト共ニ利益ヲ計レリ其建物ハ凡ソ縦ハ二十間横ハ十五間許ナル構造ニシテ其内部ニハ縦十二間横三間高サ二間半許リノ寒冷室ナリ其室ニハ凡ソ十萬枚ヲ貯藏シ得ヘシ此室ハ二重ノ壁ヨリ圍マル、外壁ハ厚サ二尺三寸余ニシテ内壁ハ五寸其間ハ五寸ノ間隙アリ土間ハ「タ、キ」ニシテ上ニ水「セメント」ヲ塗り又土間壁トモ比去母(燃土ノ類)ニテ上塗り鉄ト煉瓦石トヲ以テ作りタル天井ニハ砂ヲ散布セシ其上ニ板ヲ列ヘ又此板ノ上ニ鋸屑ヲ厚ク敷天井裏ニハ細長キ三箇ノ鉄箱ヲ鈎シ其中ニ零点以下三十六度ニ至ラザレハ凍ラザル強キ格魯兒化麻個涅更母ヲ入レ此酸ハ造寒器中ニ冷ヲ以テ室内



ヲ冷スナリ又室内ノ大氣ハ木箱中ニ入レタル石灰ノ爲メニ乾燥シ而シテ戸及ヒ窓ノ間隙ヨリ流通ス經テ窓ハ太陽ノ登ル以前ニ一時間開クヲ要スルナリ  
更ニ不慮ノ氣温災害ヲ防クニ造寒器ヲ用ユ即チ硫酸ヲ入レタル機械ナリ硫酸ハ承溜器中ニ瓦斯トナリ此器ヲ鹽類ノ融液ニ沈ムル時ハ融液自然ニ冷ユルナリ一ノ唧筒ハ此冷タル融液ヲ天井ノ筒ニ注ク又同時ニ他ノ唧筒ハ之レヲ第二ノ承溜器ニ注入シテ夫ヨリ復第一ノ承溜器ニ流通セシムルナリ或ハ大氣ヲ唧筒ニ依テ承溜器ニ壓迫シ一旦器中ニ熱ヲ生スル故ニ暫ク温度ノ自然ニ復スルヲ俟テ是ヲ貯藏室中ニ持行キ其大氣ヲ自然ニ放散セシムル時ハ大ヒニ寒氣ヲ生スヘシ此方法ハ流動物ヲ用ユル法ヨリ優レリト云フ或ハ氷塊等ヲ用ユ生石灰ヲ用ユテ濕氣ヲ收ムル等數種アリテ十一月ヨリ四月マテ安全ニ貯藏スト云フ

願ミテ我國ノ現況ハ果シテ如何ゾヤ普通養蠶家ノ貯藏ハ狹少ノ木箱ニ入置キ氣温ノ如何ニ注意セズ開ケハ既ニ催青或ハ發生皆虛弱性ヲ帶ヒ半ハ毛蠶ニテ失ヒ殘リ半ハ斃レ僅ノ成繭ヲ以テ皆無ニ優レリト又近年蠶種ノ檢査云々ニ依テ貯藏保存ヲ障害

スルコト實ニ名狀スルニ堪ハザルナリ其一端ヲ例スレハ我縣ノ如キモ規則ト規約トニ依テ官ノ監督ヲ以テ製種家元種ノ檢査ノ最モ盛ンノ期日ハ十一月ヨリ翌二月マテニシテ檢査所中ニ卅日間ヨリ六十日間止メ置キ温氣湯氣喫煙等ノ中ニ檢査シ終ル如ク何ニ粹製ニシテ雌蛾ヲ磨ク碍キ顯微鏡ニ照シ有毒ヲ除キタル最上等ノ卵粒モ亦掃下シ飼育シ能ハザル所ノ元種ヲ製種家ニ用ユヘキモノトス故ニ止ムヲ得ス一千蛾ノ産出セシ卵粒ヲ掃下ス者ハ四千蛾ノ準備ナカルヘカラズ二千蛾ヲ檢査所ヘ出シ二千蛾ヲ躬カラ靜ニ貯藏ト檢査ト共ニ之レヲ行ハズンバ亦以テ製種ノ元種ニ供スヘカラザルナリ

亦普通檢査ノ弊害モ一般ニテ製種家ハ常ニ乾燥シタル大氣中ニ之レヲ乾カシ然ル後運搬季節ニ最モ乾燥ノ日ニ荷造スルコト例ダリシニ今ヤ檢査中ニ種々ノ障害ヲ以テ荷造ヲナス故ニ其害ハ百千ニ一二ノ病毒ノ害ヨリ亦恐ヘキ結果ヲ來シ無毒有毒ノ區別ナリ皆ト虛弱性ヲ帶ルニ至レリ余ハ蠶種檢査條例或ハ規則規約ヨリ寧ロ蠶種貯藏條例或ハ規則規約ヲ蠶業社界ニ希望スルナリ



然リト雖モ遠カニ此ノ如キ改良ヲ見ル能ハザル場合ニ於テ簡便法ヲ述レハ左ノ如シ  
 寒ノ入口ニ浸水ヲ施シ其ノ乾キタル後蠶卵紙ヲ入ルニ適シ且綿布ヲ以テ被皮シタル  
 箱ヲ製シ一寸位ノ間ヲ以テ棧ヲ造リ之レニ指シ込ミ其圍リヲ厚キ藁藎ヲ以テ包ミ之  
 レニ三倍位ノ容積ノ木箱ニ入テ之レヲ冷室ニ貯藏スヘシ  
 冷室ハ常ニ濕氣多キヲ以テ箱中へ生石灰ヲ入レテ濕氣ヲ收ルヘシ但シ驗温器ト毛製  
 驗温器ヲ備ヒ置キ適産ヲ注意スヘシ生石灰ニ換ルニ百四十度以上ノ温ニ因テ乾シタ  
 ル木炭又ハ煎タル粉糠ノ炭等ヲ土器又ハ壘中ニ入レ目張ヲナシ冷處ニ置キ全ク冷タ  
 ルヲ俟テ之ヲ箱中ニ散布シテ濕氣ヲ收ルモ宜シ箱ノ上下ニ戸口ヲ造リ冷ニシテ乾燥  
 ノ時刻ニ箱中ノ大氣ヲ交換スヘシ  
 蠶種ノ貯藏タル不慮ノ氣候ニ對シ温濕ノ高度ヲ避クルガ爲メナリ故ニ藁ノ如キ不導  
 温素ノ物体ニテ被皮シ以テ禍害ヲ未發ニ防キ且ツ呼吸ニ對シ障害ナクンハ亦幾分か  
 ノ改良ヲ見ルヘシ蠶種ヲシテ遠カニ催青セシムル勿レ必ラス發生前一ヶ月ニ至ラハ  
 漸々溫度ヲ上進セシメ決シテ遅キニ失スル勿レ(明治二十五年中ノ起草)

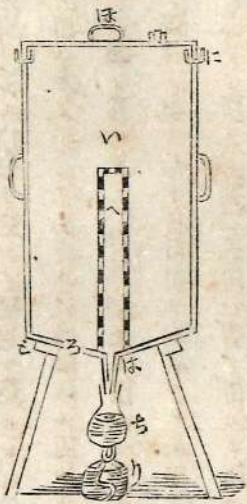
### 殺 蛹 法

長野縣小縣郡鹽尻村大字秋和  
 工 喜 藤 六

勞力ヲ積テ精良ノ繭ヲ得ルト雖トモ繭中ニ含蓄セル蠶蛹ヲ殺スニ良法ヲ撰バザレハ  
 糸質ヲ傷ヒ損失ヲ受ルノ憂ヒヲ免カレズ故ニ殺蛹法ヲ行フニ(一)太陽ノ光線ト濕熱  
 ナ用ユルアリ(二)高度ノ乾燥熱氣ヲ用エテ殺蛹ヲ行フアリ(三)強熱ノ水蒸氣ヲ用ユ  
 テ殺蛹ヲ爲スアリ(四)ハ湯氣ト炭火トヲ用ユ蒸燥殺ヲ用ユルアリ而フシテ蠶兒ノ繭  
 ナ繫着ノ初ヨリ十日目位ヲ適度トス最早太陽光線ノ光熱ヲ用ユルノ不可ナルハ各地  
 ノ唱フル所ナリ其二三四ハ皆ナ用ユル所ニシテ是非相半スル者ニシテ器械紡績所ノ  
 知キハ高熱ノ蒸殺ノ後ハ直チニ乾燥室ニ送り各々二時間前後ニシテ其用全ク終ルナ  
 リ而シテ其ノ裝置ノ容易ナラズシテ各養蠶家ニハ殆ト用エ難シ  
 虫類ニ有毒ナル藥品ヲ用エ塵殺スヘキ方法ヲ論シテ密閉セル室内ニテ樟腦ヲ火鉢ニ  
 テ十匁ヲ焚トキハ三十六時間内ニ十貫目ノ蠶蛹ヲ殺了スヘシト云ヘリ



發氏ハ種々實地試驗ノ末硫化炭素ヲ用エテ良効ヲ奏スルコトヲ發見セリ而シテ其ノ殺蛹ノカモ頗ル迅速ニシテ且此物質ヲ用エテ殺了シタル蠶繭ハ其光澤緊力彈力及ヒ靱性等ノ如キ素質各般ノ性質ニ就テ之レヲ見ルニ全ク製糸ニ適スルモノナリ其ノ裝置ハ左圖ノ如シ



(い)ハ圓筒(ろ)ハ基底(は)ハ鉄板管(に)ハ溝渠(ほ)ハ把柄(へ)ハ鉄板ノ細穴管(と)ハ三足ノ木檯(ち)ハ硝子瓶(り)ハ酒精燈硫化炭素ヲ以テ殺蛹ノ用ニ供スヘキ器械ハ即チ圖ニ示スカ如ク鉄ノ薄板ヨリ成リ

且尋常ノ鉄板職ノ能ク製造シ得ヘキ者ニシテ其廣サハ十八「ツオル」長サ三「フート」ナル圓筒(い)ニシテ其基底(ろ)ハ鈍角ノ圓錐形ヲ成セリ其圓錐ノ高サハ六「ツオル」ニシテ尖端ニ一ノ鉄板管(と)ヲ鑄着ス此廣サハ一「ツオル」三分ノ一ニシテ其ノ長サハ六「ツオル」ナリ而シテ硫化炭素ノ蒸氣ヲ此裝置中ニ通セシムルノ用ニ供ス圓筒ノ

上縁ハ深サ一「ツオル」廣サ僅ニ一「ツオル」三分ノ一ニ過ザル溝渠(に)ヲ成シ此溝中エ把柄(ほ)ヲ有スル所ノ蓋ヲ嵌入セシム若シ溝中ニ水ヲ充填シテ其半ニ至リ而シテ後蓋ヲ覆トキハ能ク空氣ノ流通ヲ斷絶シ得ヘキナリ圓柱ノ内部ニ於テ基底ノ鐵板管ニ接續シ更ニ一ノ鐵板管(へ)ヲ挺出シテ高サ正中位ヲ超エ其廣サハ三「ツオル」ニシテ左右前後並ニ巔頂トモ其外壁ニ節狀ノ細孔有リテ硫化炭素ヲ能ク筒内ニ散布充滿セシムルノ内ニ供スル者ナリ此全裝置ヲ以テ三足ノ木檯(と)上ニ置キ今殺了セントスル所ノ蠶繭ヲ以テ之レヲ填タシ密ニ蓋ヲ覆ヒ道氣管(と)ト硝子瓶(ち)ト接合シ此瓶中ニ百「グラム」貯有スヘキ管ト瓶トノ接合ヲシテ氣密ナラシムルニハ只其中央ニ一孔ヲ有シテ瓶口ヲ塞ク所ノ「キユルク」中へ導氣管末端ノ下方ニ至ルニ隨フテ漸々狹小ナル者ヲ挿入ナルノミニテ可ナリ

硫化炭素ヲシテ迅速ニ蒸散セシメントスルニハ硝子瓶下ニ酒精燈(り)ヲ置ク可シ然リト雖モ強ク之ヲ熱スヘカラス八時或ハ十時間ヲ經テ後此裝置ヲ露天ニ出シテ之レヲ開クヘシ然ラザレハ硫化炭素ノ蒸氣大ニ其惡臭ヲ室内ニ充布シテ或ハ居人ノ健康



チ害スルノ恐レアリ此時間中ニハ全ク蠶蛹ヲ殺了スルコト決シテ疑ナシ凡ソ百斤ノ蠶繭ヲ殺サントスルニハ宜シク「ロート」ヨリ十二「ロート」ノ硫化炭素ヲ用ユヘシ少量ノ蠶繭ヲ殺サントスルニハ此單筒ナル裝置ヲ用ユヘシ其費用モ僅少ニシテ常ニ之レヲ使用スルチ良トス若シ此裝置ヲ巨大ナラシメ凡ソ一回ニ百斤ノ蠶繭ヲ殺了スル様之レヲ構成スルトキハ一日三回ツ、ニシテ其成蹟確實ニシテ費用更ニ僅少ナリ尙多量ノ蠶繭ヲ殺了スルニハ煉瓦ヲ以テ一小室ヲ造築シ其氣密ノ閉鎖ト其蠶繭ノ出納トヲ便穩ナラシメ且硫化炭素ヲ流入スルニ當テ困難危害ヲ生セザル様注意セハ更ニ擴大ノ度ヲ以テ同一ノ術ヲ行ヘ得

### 秋 蚕 之 部

### 秋 蚕 元 種 飼 育 法

長野縣南安曇郡温村

中 村 佐 吉

#### 第一章 養育法

##### (一) 蠶兒發生ノ時注意

- 一 發生ノ際ニハ新鮮ナル空氣ノ流通宜シキ室内ニ置クヘシ
- 二 漸次温度ヲ高メ成ヘク温度ニ劇變ナキ様注意スヘシ
- 三 漸次温度ヲ高ムルト同時ニ適宜ノ濕氣ヲ保タシムヘシ
- 四 掃立テントスル前日濕連法ヲ施スヘシ

##### (二) 濕連法

掃立テントスル前日ノ午後五時頃桑蕾ヲ細カニ揉ミ碎キ蠶箔上ニ紙ヲ布キ之ヲ撒布スルコト凡ソ二三分ノ厚サニ至ラシメ其上ニ白紙ニ包ミタル種紙ヲ平置シ又其



上ニ桑蕾ヲ撒布スルコト二三分ニシテ殆ント蠶種ノ没スルニ至ラシメテ之ヲ止メ  
一時間程ヲ經レハ種紙濕氣ヲ含ミ柔軟トナル此時桑蕾ヲ除去シ更ニ白紙ニ包ミ直  
シテ蠶架ノ中段ニ置テ翌日掃立ノ時迄適宜ノ温度ヲ保タシムルハ發生ノ最モ宜シ  
キモノナリ

(三)掃立法

一 蟻量調査

蠶兒ヲ掃立ツルニハ蟻量ヲ調査スルコト必要ナリ何トナレハ豫メ蟻量ヲ調査セ  
サレハ以後増箔ノ割合給桑ノ分量等ヲ定ムルコト能ハサレハナリ而シテ其方法  
ハ掃立ノ時ニ至リテ卵紙ヲ紙ニ包ミタル儘之ヲ秤リ後紙ヲ廣ク蟻蠶ヲ掃下ロシ  
再ヒ之ヲ秤リ前重量ヨリ後重量ヲ減シ其差ヲ蟻量トス

二 掃立法 (甲法)

紙ニ包ミタル卵紙ヲ廣ク糊糠ノ細カク碎キタルモノ若シクハ粟糠ヲ其上ニ一面  
ニ撒布シ毛子ノ隠ル、チ度トシテ之ヲ止メ後細カク刻ミタル桑葉ヲ與フ(此桑

ヲ與フル目的ハ食セシムルニアラスシテ只毛子ヲシテ糠上ニ呼ヒ出サンカ爲ナ  
リ故ニ俗ニ之ヲ呼出桑トモ云フ)而シテ毛子ノ這ヒ出ツルヲ待テ其桑ヲ食セサ  
ル内ニ又糠ヲ振り懸ケ適宜ニ攪キ交セ蠶箔上ニ移シテ撒布ス尤モ蠶箔上ニハ其  
廣サニ準シテ作りタル紙ヲ布キ置クモノトス

三 掃立法 (乙法)

初メ紙ニ包ム時ニ際シ其紙ノ重量ヲ秤リ置キ既ニ發生シタルトキハ靜カニ包紙  
ヲ開キ羽箒ヲ以テ卵紙一隅ノ蠶兒ヲ掃下ロシ其處ヲ摘ミ卵紙ノ裏面ヲ上方ニ向  
ケ兩人相對シテ兩端ヲ持シ蠶兒ノ油斷セル所ヲ見込シテ輕ロク裏面ヨリ叩キ落  
スナリ而シテ蠶ト共ニ包紙ヲ秤リ前ニ秤リ置キ紙ノ重量ヲ減シ其差ヲ蟻量ト  
ス既ニ紙上ニ叩落セシ蟻蠶ハ甲法ノ如ク糊糠ヲ振り懸ケ呼出桑ヲ與ヘ攪キ交セ  
紙上ニ移ス等少シモ甲法ト異ナルコトナシ

(四)蟻蠶擴布法

蟻蠶ヲ蠶箔上ニ廣ムルニハ其當ヲ得ルヲ要ス今蟻蠶一疋ヲ檢スルニ巾三厘長サ一



分ニシテ一萬頭ノ面積三百平方寸ノ所ニ擴布スヘシ或ハ蟻蠶ノ五倍ニテモ差支ヘナシ

(五) 第一回ノ給桑

既ニ適宜ニ紙上ニ廣ク其四方ヲ羽箒ニテ丁寧ニ掃キ寄セ凡二三十分間靜定シ蟻蠶悉ク這ヒ出テ食ヲ求メントスル有様ヲ見テ桑ヲ與フヘシ其分量ハ蟻蠶四匁ニ付凡ソ十五匁ヲ可トス是レ多キニ過クルカ如シト雖第二回給桑迄時間ヲ成ルヘク長クセンカ爲メナリ若シ然カセサレハ蟻蠶ヲシテ一齊ニ食ニ就カシメサル蠶ヲ生セシメハ其蠶ハ必ス初眠中ニ一晝夜ノ後レテ取ルモノナリ

第二章 蠶種製造法

(一) 種類

蠶種製造ニ二種アリ一チ散種法ト云ヒ一チ紙附法ト云フ而シテ又紙附ニモ框製普通製(又平附)ノ二法アリ西洋諸國ニテハ多ク散種法ヲ用ヒ支那日本ニテハ紙附法ヲ行フ其利害ヲ考フルニ撒種ハ水洗淘汰ニ便ナレトモ紙附ノ取扱ニ便ニシテ且ツ

孵化淘汰ノ便ナルニ如カス

(二) 老熟ノ時期

蠶兒老熟期ニ至ラハ先ツ早熟蠶及晩熟蠶ヲ除キ中熟蠶ヲ撰ヒ取テ成繭セシムヘシ

(三) 撰繭

凡ソ製種ニ供スル繭ハ蟻量四匁ニ付一石以上ノ良繭ヲ收メタルモノ、中ヨリ左ノ件々ニ注意シテ撰出スヘシ

イ 死籠繭

死籠繭一割以上モアルカ如キ養蠶者ノ繭ハ製種ニ供スヘカラズ斯ノ如キ種類ノ繭ハ假令蛹ニ化シタルモノト雖モ幾分カ病害ニ罹リ脆弱ノモノアレハナリ

ロ 蛆害検査

蛆害検査ハ古來行ハレタル法ナリ之ヲ判別スル特徴ハ蛹ノ氣門ノ部ニ黒點ヲ生シタルモノトス而シテ繭百粒ヲ切り開キ検査シ蛆害ニ罹ルモノ一割アルヲ蛾丸分ト云ヒ二割アルモノヲ八分ト唱ヘタルモノナリ蛆害検査ノ好時期ハ上簇後七



八日乃至十日後ニアリ

ハ 微粒子検査

蠶種ヲ製造スル者ハ未ダ發蛾セサル前即蛹期ニ於テ微粒子毒ノ有無多少ヲ検査シ卵子ニ遺傳スルヤ否ヤヲ豫知セサルヘカラズ此検査ト同シク一種類ノ繭凡百顆ヲ取り潰シテ其液ヲ顯微鏡ト照ラシテ検査スルモノナリ此検査ヲ行フニ當リ微粒子病ニ罹リタル蛹百分ノ五以上アルモノハ其レト同種ニ供スヘカラズニ 繭ノ外貌

前述ノ検査ヲ終リ蛆害及ヒ微粒子毒共ニ少ク製種ニ供スルヲ可ナリト認ムル以前上ハ尙又繭ノ外貌ニ注意スヘシ即チ光澤形狀緊緩皺縮等ノ完全ナルモノヲ撰ブ可シ

(四) 種繭保護法

種繭ノ撰別終レハ其繭ヲ保護スル室ハ蠶兒ヲ飼育スル時ト同シク空氣ノ流通ヲ能クシ温度ノ劇變ヲ防キ適宜ノ濕氣ヲ保タシムヘシ

(五) 發蛾ノ時注意

發蛾ノ時刻ハ氣候ノ冷暖ニヨリ差異アリト雖モ大抵暖氣ナレハ朝三四時頃ヨリ冷氣ナレハ朝六七時頃ヨリ發蛾スルモノナリ而シテ最初發蛾スルモノハ概オ雄蛾ニシテ後レテ發スルモノハ多クハ雌蛾ナリ故ニ交尾時間ヲ正シクセンニハ雄蛾ノ出ツルニ從ヒ他ノ器具ニ移シ可成羽打動搖セサル様ニナシ置キ雌蛾ハ繭ノ上ニ蔽ヒタル紙ノ上ニ其儘置キ午前八九時頃ニ至リ雌蛾ノ出揃ヒタル時ニ於テ其雌蛾ノ居ル紙上ニ雄蛾ヲ放ツテ交尾セシムルヲ可トス

(六) 撰蛾

發蛾セシ時左ニ掲クルモノハ皆廢棄スヘシ

(イ) 羽打セサルモノ

(ロ) 觸角ナキモノ

(ハ) 尾端ノ黒キモノ

(ニ) 腹部ノ赤キモノ

(ホ) 鱗毛ナキモノ

(七) 交尾時間産卵時間

交尾時間ハ大抵六時間ヲ可トス即チ午前八時ニ對セシメタルモノハ午後二時ニ分



對シ又午前九時ニ對セシタルモノハ午後三時ニ分對スヘシ普通製ノ蠶種ヲ製スルニハ分對スレハ雄蛾ハ直ニ廢棄シ雌蛾ニ十分尿ヲ排出セシメ後産卵紙上ニ排列シテ産卵セシムルヲ尋常ノ法トス而シテ産卵シ初ムル時間ハ氣候ノ冷暖ニヨリ差異アリト雖モ概ネ午後四五時頃ヨリ産卵ヲ始メ七八時頃ニ最モ盛ニ産卵スルモノナリ故ニ九時或ハ十時頃ニ至レハ卵紙上ヨリ除去スルヲ可トス蓋シ晚産ノ卵ヲ除カシカ爲ナリ

## (八) 框製法

框製法ハ外國製種法ト日本製種法ト折衷シタル法ニシテ健全ナル蠶種ヲ撰フニ最モ適當セル方法ナリ即卵紙上ニ相應ノ番號ヲ附シ其上ニ之ト同數ニ區劃セル框ヲ置キ分對スヘキ時間ニ至レハ雄蛾ハ原紙上ニ置キタル框内ニ移シテ産卵セシムルナリ此時雄蛾ヲ入レタル紙囊ノ番號ト之ト交尾セシ雌蛾ヲ移シタル原種ノ番號ト違ハサル様ニシテ産卵終レハ前ニ交尾シタル雄蛾ト同シ囊ノ内ニ入レ置ク法ナリ框製法ニ於テ雌雄共ニ貯ヘ置キ双方ヲ檢査スルモノト又雌蛾ノミヲ貯ヘ置キ檢査

スルモノトノ二法アリ前法ハ甚タ手勤ヲ要スルヲ以テ自家ノ飼育ニ供スル丈トシ多數ノ蠶種ヲ製造スルモノハ雌蛾ノ三ヲ貯ヘ置キテ檢査スルコト、シテ可ナリ蠶量四匁ニ付蠶種製造高

上繭凡三万〇六百顆内(一万五千三百顆ハ製糸用一万五千三百顆ハ製種用トス)製種用一万五千三百顆ノ内二割ハ蛆害其他ノ病害ニ罹ルモノト見做セハ實際ニ發蛾ノ數ハ一万二千二百四十顆ナリ此内雌蛾十分ノ四或ハ反對ニ出蛾スルモノト見做シ四千八百九十六双ヲ得(但シ二割ハ蛾寡或ハ惡蛾ト見做セシナリ)之ヲ普通製トスレハ原紙一枚百二十双トシテ四十枚八分ノ蠶種ヲ得

框製ナレハ右ノ三割廢棄スルモノトシ三千四百二十八双ノ産卵ヲ採リ三十四枚二分八厘ノ蠶種ヲ得ヘシ(但シ百蛾分ヲ以テ普通製一枚ニ相當スルモノト見做ス)

## (九) 蠶種取扱法

凡ソ蠶種ヲ貯藏シ或ハ之ヲ運搬スルニハ能ク蠶卵ノ呼吸作用及ヒ其他ノ理由ヲ心得成ヘク其卵ニ損害ヲ蒙ラサル様注意セザルヘカラス左ニ蠶卵呼吸ノ割合ヲ擧ク



但シ呼吸ノ最モ少キ時ヲ一トシテ計算セルモノナリ

産卵後時日	呼吸力
四五日目	二六
一ヶ月目	三
五六ヶ月目	一
八九ヶ月目	二五
發生前	四八
蟻 蠶	三〇〇
蠶卵ガ真空ナル場中ニ在テ生命ヲ保ツ時間ニ長短アルヤ否ヤヲ試験セシニ其結果左ノ如シ	
産卵後時日	生命ヲ保ツ時日
四五日目	二日
一ヶ月目	六日

蠶卵ガ真空ナル場中ニ在テ生命ヲ保ツ時間ニ長短アルヤ否ヤヲ試験セシニ其結果

左ノ如シ

産卵後時日

生命ヲ保ツ時日

四五日目

二日

一ヶ月目

六日

六ヶ月目

二十日

發生前

十二時間

蠶卵ノ呼吸作用ニヨリ卵中ノ水分其他ノモノヲ排出シテ其量ノ減スル割合左ノ如シ

一ヶ月間

百分二、五

二ヶ月目ヨリ九月迄八ヶ月間

百分二、

發生前一ヶ月間

百分十二

合計

百分十六、五

右ノ割合ニヨレハ産卵ヨリ發生マテノ間ニ重量十匁ノ卵ハ水分ノ散出スル爲メ八匁三分五厘ニ減スルモノトス

(十)蠶種取扱ニ付テ最モ注意スヘキ要點ハ左ノ如シ

一産卵ノ際四五日間ハ蠶種紙ヲ平方ニ置クヘシ

二卵紙既ニ變色セハ清冷ナル室内ニ吊シ置クヘシ



三既ニ冬季ニ至レハ可成温暖ノ氣ニ感セシムヘカラス

(十一) 寒水浴種法

一利益卵面ノ汚物ヲ去ルノ益アリ

二方法

晴天ニシテ寒キ日ノ朝六時頃ニ奇麗ナル器ニ水ヲ汲ミ置キ塵埃ノ其底ニ沈澱スルヲ待テ其内ニ蠶種ヲ浸シ置クコト三時間ヲ過キタル時軟キ刷毛ヲ以テ卵面ニ附着セル蛾尿其他ノ汚物ヲ洗濯シテ後又器ニ清水ヲ汲ミテ再ヒ之ヲ浸タシ後竿ニ吊シテ乾カスヲ法トス而シテ之ヲカワカス間ハ一日ニ一ニ上下ヲ懸ケ換フルヲ要ス然セサレハ上ノ方ハ早ク乾キ下ハ乾カサルヲ以テ發生ノ際ニ遲速ヲ生ス故ニ可成卵紙面ヲ平等ニ乾燥セシムル様ニ注意スヘシ又其全ク乾キタル否ヤヲ檢スルニハ種紙ノ重量前ノ重量ニ復スルヲ度トシテ之ヲ寒冷ノ所ニ貯ヘ置クヘシ以上大略ヲ記セシモノナレハ臨機應變ノ處置ヲ以テスヘシ

秋蚕飼育法心得書

長野縣小縣郡東鹽田村

曲尾 徳太郎

(一) 蠶種購求方法

夏秋蠶種賣買上ニ就テハ種々ノ弊習アリト雖在仲買商人カ實業性質ノ軌道ヲ外シ投機者流ノ冒險事業ヲ以テ夏秋蠶種賣買ノ本色トナシ恬トシテ怪マサルト買者カ蠶卵ノ健否病毒ノ多少ヲ辨セズ或ハ安價ノ物品ニ意ヲ奪ハレ精穢ノ蠶種ヲ求メザルヨリ甚ダシキハナシ然レトモ斯クノ如キハ目下至ル處其類乏シカラズ爲メニ同業者間ノ蒙ル失敗ハ少々ニアラサルナリ豈慨嘆ノ至リナラズヤ因テ此等ノ弊ヲ匡濟センガ爲メ左ノ規約ヲ設ケ精良無毒ノ蠶種ヲ購求センコトヲ期ス

蠶種購求組合規約

- 一 何々健卵購求組合ト稱ス
- 二 當組合ハ蠶業ノ實利ヲ増進センカ爲メ地方實業家ヲ以テ組織ス



- 三 當組合ハ前條ノ目的ヲ達センカ爲メ左ノ役員ヲ置ク  
組長 一名 委員 若干 検査員 若干  
但シ勤限各一ケ年トス
- 四 當組合ハ無毒ノ蠶種購求ノ爲メ蠶種製造地へ委員或ハ検査員ヲ派出セシム
- 五 當組合ハ毎年一月總會ヲ開キ養蠶諸般ノ事項ヲ談議スヘシ
- 六 當組合ハ蠶種ノ良否ト飼育家ノ巧拙ヲ量ルガ爲メ左ノ方法ヲ設ク  
一 組合員ハ分配ヲ受ケタル蠶種ノ飼育表ヲ製シ組長へ届出ツヘシ

書式

春夏、秋蠶飼育表

全	全	蠶種製造人	蠶種紙數	同上代價	桑葉人夫	玉繭收穫實量	同上代價	飼育難易	利害ノ要
		國郡村何誰			其他諸費	屑			点

備考 掃卸月日、炎熱ノ多少、降雨或ハ濕氣ノ多少、桑葉ノ良否、蠶室ノ廣狹、  
取扱ノ適否等ヲ記スヘシ  
右御届ケ及ヒ候也

年月日

郡村

飼育人 姓

名印

組長 宛

二組長ハ組合員ノ届出ヲ參酌シ成績表ヲ作り毎年一月總會へ報告スルモノトス

(二) 蠶室準備ニ對スル觀念

溫度ノ高低濕氣ノ多少ハ蠶兒ノ衛生上桑葉ノ經濟上得失ノ係ル處最大ナリトス故ニ  
蠶室ハ空氣ノ流通及ヒ閉塞ニ便ナルヲ要ス之レ氣候ノ變化ヲ防キ蠶兒ノ嗜好ニ適ス  
ル溫度ノ調和ヲ圖リ且緊要ナル酸素ノ欠ヲ補ハサルヘカラヘカズ  
今「グレイシエル」氏ノ乾濕表ニヨリ二間半ニ二間高十尺ノ室ニテ其立方積即千八百  
立方積空氣ノ重量ト其ノ空氣中ノ酸素ノ量ハ左ノ如シ



華氏驗温器

千八百立方尺空氣ノ重量

同上ニ含有スル酸素ノ量

六〇度	一五、九四八	三、一八九六
六五度	一五、七六八	三、一五三、六
七〇度	一五、六〇六	三、一二一、二
七五度	一五、四二六	三、〇八五、二
八〇度	一五、二四六	三、〇四九、三

右ニヨレハ温度六十度ノ時ヨリ八十度ニ至レハ空氣七百〇二忽ヲ減シ酸素ヲ減スル

コト百四十忽餘ナリ又蠶兒ノ發育緩急ニ從テ生活ニ要スル空氣ト酸素ノ量

華氏驗温器	同上ノ温度ヲ以テ發	蠶重量一貫目ニ付廿四	上欄ノ酸素量ヲ含有
六〇度	四十五日	時間ニ要スル酸素ノ量	スル空氣ノ立方尺
七〇度	三十五日	一六忽二	九立方尺一四二
八〇度	二十五日	二一、六	四六三
		二八、八	一七、
			五〇〇

又蠶兒成長シテ体量ヲ増スニ從ヒ多量ノ酸素ヲ要スル比例左表ノ如シ

蠶兒四夕各齡成長ノ極度ニ達セシ時ノ体量

華氏温度

二十四時間ニ蠶兒ニ要スル酸素ノ量

上欄酸素量ヲ含有スル空氣ノ立方尺

一齡	七二忽	八七〇〇度	一、五五六六	〇立方尺六五八
二齡	三三二忽	八七〇〇度	二、〇七三六	一、八九六
三齡	一、六六四忽	八七〇〇度	九、二一六〇	二、二四
四齡	七、四八〇忽	八七〇〇度	五、二二五〇	九七、一
五齡	三五、二〇〇忽	八七〇〇度	九、九一六〇	四四〇
			二六、九五六八	五、三、
			三六、九四二四	二、二〇、
			四七、九二二二	二八、
			一一、一、	一五、
			一六、三、	二〇、
			二一、五、	二八、
			二六、九六八〇	六八、
			三一、四二四〇	九四、
			三六、七六〇〇	一二七、
			四一、三二〇〇	一五八、
			四六、〇〇〇	二〇七、
			五一、〇〇〇	二五七、
			五六、〇〇〇	三〇七、
			六一、〇〇〇	三五七、
			六六、〇〇〇	四〇七、
			七一、〇〇〇	四五七、
			七六、〇〇〇	五〇七、
			八一、〇〇〇	五五七、
			八六、〇〇〇	六〇七、
			九一、〇〇〇	六五七、
			九六、〇〇〇	七〇七、
			一〇一、〇〇〇	七五七、
			一〇六、〇〇〇	八〇七、
			一一一、〇〇〇	八五七、
			一一六、〇〇〇	九〇七、
			一二一、〇〇〇	九五七、
			一二六、〇〇〇	一〇〇七、
			一三一、〇〇〇	一〇五七、
			一三六、〇〇〇	一一〇七、
			一四一、〇〇〇	一一五七、
			一四六、〇〇〇	一二〇七、
			一五一、〇〇〇	一二五七、
			一五六、〇〇〇	一三〇七、
			一六一、〇〇〇	一三五七、
			一七一、〇〇〇	一四〇七、
			一七六、〇〇〇	一四五七、
			一八一、〇〇〇	一五〇七、
			一八六、〇〇〇	一五五七、
			一九一、〇〇〇	一六〇七、
			一九六、〇〇〇	一六五七、
			二〇一、〇〇〇	一七〇七、
			二〇六、〇〇〇	一七五七、
			二一一、〇〇〇	一八〇七、
			二一六、〇〇〇	一八五七、
			二二一、〇〇〇	一九〇七、
			二二六、〇〇〇	一九五七、
			二三一、〇〇〇	二〇〇七、
			二三六、〇〇〇	二〇五七、
			二四一、〇〇〇	二一〇七、
			二四六、〇〇〇	二一五七、
			二五一、〇〇〇	二二〇七、
			二五六、〇〇〇	二二五七、
			二六一、〇〇〇	二三〇七、
			二七一、〇〇〇	二三五七、
			二七六、〇〇〇	二四〇七、
			二八一、〇〇〇	二四五七、
			二八六、〇〇〇	二五〇七、
			二九一、〇〇〇	二五五七、
			二九六、〇〇〇	二六〇七、
			三〇一、〇〇〇	二六五七、
			三〇六、〇〇〇	二七〇七、
			三一、〇〇〇	二七五七、
			三一六、〇〇〇	二八〇七、
			三二一、〇〇〇	二八五七、
			三二六、〇〇〇	二九〇七、
			三三一、〇〇〇	二九五七、
			三三六、〇〇〇	三〇〇七、
			三四一、〇〇〇	三〇五七、
			三四六、〇〇〇	三一〇七、
			三五一、〇〇〇	三一五七、
			三五六、〇〇〇	三二〇七、
			三六一、〇〇〇	三二五七、
			三六六、〇〇〇	三三〇七、
			三七一、〇〇〇	三三五七、
			三七六、〇〇〇	三四〇七、
			三八一、〇〇〇	三四五七、
			三八六、〇〇〇	三五〇七、
			三九一、〇〇〇	三五五七、
			三九六、〇〇〇	三六〇七、
			四〇一、〇〇〇	三六五七、
			四〇六、〇〇〇	三七〇七、
			四一一、〇〇〇	三七五七、
			四一六、〇〇〇	三八〇七、
			四二一、〇〇〇	三八五七、
			四二六、〇〇〇	三九〇七、
			四三一、〇〇〇	三九五七、
			四三六、〇〇〇	四〇〇七、
			四四一、〇〇〇	四〇五七、
			四四六、〇〇〇	四一〇七、
			四五、〇〇〇	四一五七、
			四五〇、〇〇〇	四二〇七、
			四五五、〇〇〇	四二五七、
			四六〇、〇〇〇	四三〇七、
			四六五、〇〇〇	四三五七、
			四七〇、〇〇〇	四四〇七、
			四七五、〇〇〇	四四五七、
			四八〇、〇〇〇	四五〇七、
			四八五、〇〇〇	四五五七、
			四九〇、〇〇〇	四六〇七、
			四九五、〇〇〇	四六五七、
			五〇〇、〇〇〇	四七〇七、
			五〇五、〇〇〇	四七五七、
			五一〇、〇〇〇	四八〇七、
			五一五、〇〇〇	四八五七、
			五二〇、〇〇〇	四九〇七、
			五二五、〇〇〇	四九五七、
			五三〇、〇〇〇	五〇〇七、
			五三五、〇〇〇	五〇五七、
			五四〇、〇〇〇	五一〇七、
			五四五、〇〇〇	五一五七、
			五五〇、〇〇〇	五二〇七、
			五五五、〇〇〇	五二五七、
			五六〇、〇〇〇	五三〇七、
			五六五、〇〇〇	五三五七、
			五七〇、〇〇〇	五四〇七、
			五七五、〇〇〇	五四五七、
			五八〇、〇〇〇	五五〇七、
			五八五、〇〇〇	五五五七、
			五九〇、〇〇〇	五六〇七、
			五九五、〇〇〇	五六五七、
			六〇〇、〇〇〇	五七〇七、
			六〇五、〇〇〇	五七五七、
			六一〇、〇〇〇	五八〇七、
			六一五、〇〇〇	五八五七、
			六二〇、〇〇〇	五九〇七、
			六二五、〇〇〇	五九五七、
			六三〇、〇〇〇	六〇〇七、
			六三五、〇〇〇	六〇五七、
			六四〇、〇〇〇	六一〇七、
			六四五、〇〇〇	六一五七、
			六五〇、〇〇〇	六二〇七、
			六五五、〇〇〇	六二五七、
			六六〇、〇〇〇	六三〇七、
			六六五、〇〇〇	六三五七、
			六七〇、〇〇〇	六四〇七、
			六七五、〇〇〇	六四五七、
			六八〇、〇〇〇	六五〇七、
			六八五、〇〇〇	六五五七、
			六九〇、〇〇〇	六六〇七、
			六九五、〇〇〇	六六五七、
			七〇〇、〇〇〇	六七〇七、
			七〇五、〇〇〇	六七五七、
			七一〇、〇〇〇	六八〇七、
			七一五、〇〇〇	六八五七、
			七二〇、〇〇〇	六九〇七、
			七二五、〇〇〇	六九五七、
			七三〇、〇〇〇	七〇〇七、
			七三五、〇〇〇	七〇五七、
			七四〇、〇〇〇	七一〇七、
			七四五、〇〇〇	七一五七、
			七五〇、〇〇〇	七二〇七、
			七五五、〇〇〇	七二五七、
			七六〇、〇〇〇	七三〇七、
			七六五、〇〇〇	七三五七、
			七七〇、〇〇〇	七四〇七、
			七七五、〇〇〇	七四五七、
			七八〇、〇〇〇	七五〇七、
			七八五、〇〇〇	七五五七、
			七九〇、〇〇〇	七六〇七、
			七九五、〇〇〇	七六五七、
			八〇〇、〇〇〇	七七〇七、
			八〇五、〇〇〇	七七五七、
			八一〇、〇〇〇	七八〇七、
			八一五、〇〇〇	七八五七、
			八二〇、〇〇〇	七九〇七、
			八二五、〇〇〇	七九五七、
			八三〇、〇〇〇	八〇〇七、
			八三五、〇〇〇	八〇五七、
			八四〇、〇〇〇	八一〇七、
			八四五、〇〇〇	八一五七、
			八五〇、〇〇〇	八二〇七、
			八五五、〇〇〇	八二五七、
			八六〇、〇〇〇	八三〇七、
			八六五、〇〇〇	八三五七、
			八七〇、〇〇〇	八四〇七、
			八七五、〇〇〇	八四五七、
			八八〇、〇〇〇	八五〇七、
			八八五、〇〇〇	八五五七、
			八九〇、〇〇〇	八六〇七、
			八九五、〇〇〇	八六五七、
			九〇〇、〇〇〇	八七〇七、
			九〇五、〇〇〇	八七五七、
			九一〇、〇〇〇	八八〇七、
			九一五、〇〇〇	八八五七、
			九二〇、〇〇〇	八九〇七、
			九二五、〇〇〇	八九五七、
			九三〇、〇〇〇	九〇〇七、
			九三五、〇〇〇	九〇五七、
			九四〇、〇〇〇	九一〇七、
			九四五、〇〇〇	九一五七、
			九五〇、〇〇〇	九二〇七、
			九五五、〇〇〇	九二五七、
			九六〇、〇〇〇	九三〇七、
			九六五、〇〇〇	九三五七、
			九七〇、〇〇〇	九四〇七、
			九七五、〇〇〇	九四五七、
			九八〇、〇〇〇	九五〇七、
			九八五、〇〇〇	九五五七、
			九九〇、〇〇〇	九六〇七、
			九九五、〇〇〇	九六五七、
			一〇〇〇、〇〇〇	九七〇七、

右表中ノ酸素二十四時間ニ蠶兒が要スルモノナレハ下欄ノ空氣ヲ一晝夜ニ輸送セカ



ルヘカラズ之レ空氣中ノ酸素ヲ消費スルニ從ヒ蠶體ノ老廢物炭酸瓦斯或ハ水蒸氣ノ爲メニ蠶兒ノ生活力ヲ減セシムルコト間々アリ豈注意セザルヘケンヤ茲ニ二間半ニ二間高十尺ノ室ニ盛蠶八十枚ヲ置クモノトシ一枚ニ對スル給桑一日八百匁ト假定シ六十四貫ノ桑葉ヲ蠶室ヘ輸入シ此ノ桑葉ニ含有スル水分ハ四十四貫八百匁ナリ内三十二貫蠶糞桑ト共ニ室外ヘ排出シ残り十二貫八百匁ヲ升ニ改ムレハ三斗四升ノ水トナリ悉ク水蒸氣トナニ至レハ千七百倍即五百七十八石トナル此ノ六分ノ一百石内外ノ水蒸氣ハ常ニ蠶室ノ空氣ト混淆シ有要ナル酸素ヲ減少ス之レ空氣ハ溫度ノ昇ルニ從テ膨脹シ稀薄トナルモノナレハ高温ナルトキハ益々空氣ノ交換ヲ計ラザルベカラズ

今斯氏ノ調査ニヨリ溫度ト水蒸氣ノ割合ヲ瓜(我一厘七毛)ニテ示ス

華氏檢溫器 一尺立方水蒸氣ノ量瓜

六〇度 六瓜二二二

七〇度 八、三九二

八度 一一、三三三

九度 一五、〇〇五

右表ニヨレハ八十度ノ時十疊間ニ水蒸氣ノ存在スルコト三百四十六匁八分ナリ

(三)蠶兒ヲ飼育セント欲スル室ニハ繭其他ノ物品ヲ置カザルヲ要ス

春蠶ヲ飼育セシ後ハ叮嚀ニ掃除シ新鮮ノ空氣ヲ通シ或ハ焚火ヲ以テ新陳代謝シ四五日間ヲ經テ夏蠶或ハ秋蠶ヲ養フベシ然ラザレバ室内ニ腐敗シタル空氣ノ滯留ト微菌屬或ハ種々ノ臭氣アリテ蠶兒ヲ害スルノ恐レアリ故ニ蠶室ハ常ニ清潔ナラシメザルベカラズ

(四)桑葉摘採ノ注意

桑葉ニハ十分注意シ軟カナルモノヲ撰ミ摘採スヘシ若シ不馴ノ雇人等ヲ以テ摘採セシムルトキハ軟葉ハ小サクシテ時間ノ多ク掛ルヲ厭ヒ成長セシ硬葉或ハ硬軟混淆不齊ノモノヲ摘採スルコトアリ軟葉ハ滋養多クシテ食ヒ易ク硬葉ハ滋養少ナクシテ食



シ悪シ故ニ蠶兒ノ發育モ從テ不齊トナリ眠起ノ際非常ニ困難ヲ來スモノナリ故ニ成ルヘク軟カナルモノヲ以テ二眠或ハ三眠起マテ養ハサルヘカラス而シテ雨桑ニハ外面ニ附着スル水分ノミナラズ其ノ組織間ニ水氣ノ充滿セルヲ以テ蠶兒ノ食スルニ當リ濃厚ナル膽汁モ稀薄トナリ消化力ヲ減シ滋養分ヲ空シク排泄セシムルニ至リ或ハ「バクテリア」ノ附着スルヲ以テ消化力ヲ妨ケ爲メニ蠶身疲勞シテ病ヲ生ス故ニ成ルヘク雨桑ヲ摘採セザルヲ要ス

又桑葉ヲ濫摘スルトキハ桑樹ノ發育ヲ害シ或ハ種々ノ桑病ヲ醸ス故ニ成ヘク夏秋蠶用ノ桑園ヲ以テシ春蠶ノ飼桑ハ三分一以上ハ摘採セザルヲ要ス

今農務局ノ試験ニヨリ三眠起ヨリ上簇マテ普通育ト雨桑育トノ比較左表ノ如シ

	蠶兒五百頭宛	上	中	下	同功	合	計
普通桑ヲ以テ飼育セシモノ	二九五顆	二四顆	二五顆	二三顆	三六七顆		
雨桑ヲ以テ飼育セシモノ	九五顆	一〇顆	四五顆	一〇顆	一六〇顆		
本表ニヨレバ雨桑ヲ與ヒシモノハ普通桑ヲ以テ飼育セシモノヨリ劣ルコト五分							

六ノ餘ナリ

(五)桑葉ハ蠶體ヲ組織スルノ要素ナリ故ニ運搬或ハ貯藏ニ注意スヘシ

桑葉摘採ノ節袋或ハ箆等ニ堅ク押込ミ或ハ貯藏中不注意ニシテ蒸熱ヲ醸スカ如キコトアレハ桑葉ハ直チニ變化シテ養分ヲ減シ爲メニ蠶體ノ生活力ヲ遲緩ナラシメ氣候ノ變動ニ逢フテ病蠶ヲ生セシム而シテ炎熱隆盛ナルトキハ桑葉ノ水分大ニ減シ細胞間ニ空隙ヲ生シ恰モ水ヲ渴望シツ、アルヲ以テ枯凋ヲ防クガ爲メ適度ノ水ヲ灌キ成ルヘク戸棚或ハ土藏等ノ空氣ノ流通セザル所ニ貯フヘシ

蒸レ桑給與試験ノ概要左表ノ如シ

	上	中	下	同功	合	計	事	由
甲	五九顆	五顆	四顆	五顆	七三顆		盛蠶兒百頭ヲ別ケ蒸レ桑ヲ一日與ヒシモノ	
乙	一〇顆	四顆	五顆	二顆	二三顆		盛蠶百頭ヲ別ケ蒸レ桑ヲ十五日間與ヒシモノ	
右表ニヨレハ	讒カ一日ノ蒸レ桑ニ割餘ノ蠶兒ヲ損セリ							



(六) 温度ノ高低ニヨリ給桑ノ加減ヲナス事

冷氣濕氣ノ多キトキハ給桑ヲ減シ炎熱酷烈ナルトキハ給桑ヲ増加ス之レ蠶体消化機能ノ力ニ應ジ給與ノ適度ヲ得ルガ爲メナリ

(七) 蠶坐ハ勤メテ毎日換ヘルモノトス

蠶坐ヲ換ヘザレバ蠶桑蒸熱ヲ醸シ或ハ臭氣トナリ室中ノ空氣ヲ汚シ病蠶ヲ生セシムルコトアリ

(八) 炎熱ヲ防キ或ハ降雨前ニ要スル注意

炎熱酷烈ナルトキハ庭前ノ土石ヨリ反射スル熱氣ヲ防禦スル爲メ南方ノ戸ヲ閉シ北方ノ戸ヲ開放ス又西陽ヲ防グトキハ東方ヲ開キ或ハ青松葉ヲ以テ炎氣ノ侵入ヲ防グヘシ

又降雨ノ徵候ニ接シテハ桑ノ用意及ヒ乾燥用ノ糠或ハ器械ノ濡レザル様注意セザルヘカラズ茲ニ降雨前氣壓ノ概要ヲ記ス左ノ如シ

降雨前ニ至レハ氣壓力増加シテ空氣ハ益々濃厚トナリ身体トノ平均ヲ失フ爲メニ

(弱性ノ人或ハ婦人等ノ頭痛ヲ生スルコトアリ) 身影幽鬱トシテ沈靜ス蠶兒モ又然リトス故ニ充分注意シテ蠶兒ノ爽快ナランコトヲ勉ムヘシ

斯氏ノ調査ニヨレハ華氏驗温器六十度ノトキ大氣平方一寸面ニ壓迫スルノ力十五磅(十八貫百五十匁)ナリ人身ニ壓迫ヲ受クルコト其表面平方二千寸トシ三万磅(五十四万四百五十貫)ナリ以上ノ壓迫ハ尋常ナレトモ降雨前ニハ此ノ上ニ壓迫セララル、ナリ

(九) 眠起ノ際ハ特ニ軟カナル桑葉ヲ與フヘシ

眠リニ際シテハ先ニ就眠セシ蠶兒ニ追附クガ爲メ滋養ノ多キ給桑ヲ以テ速進セシムヘシ

起ノ際ニハ絶食中蠶体疲勞シ且皮膚モ柔軟ナルニヨリ滋養ノ多キ軟カナル桑葉ヲ以テセザレハ病人ニ硬飯ヲ與ヒタルガ如ク直チニ胃病ヲ生ス注意スヘシ

(十) 眠起蠶取扱ノ事

春蠶ト大差ナシ然レトモ取扱ノ粗漏、或ハ蠶性ノ虛弱、或ハ給桑ノ硬軟、或ハ炎熱



ノ激烈、或ハ雨濕ノ夥多、或ハ空氣ノ欠乏、或ハ激風ノ直入等ヨリ蠶兒ノ發育不同トナリ或ハ病蠶ヲ生スルコトアリ斯クノ如キ場合ニ於テハ眠蠶ノ摸樣ニヨリ網ヲ掛ケ不眠病蠶ヲ除去シ猶殘リタル不眠蠶ヲ一頭宛拾ヒ去ルヘシ然ラザレハ桑附ノ際病蠶給桑ノ上ヲ匍匐シテ糞尿ヲ漏シ健蠶之レヲ食シテ感染スルモノナリ

(十一)給桑ノ事

春蠶ト略同シキト雖モ秋蠶ハ幾分薄ク分箔シ飼桑モ幾分大ナラシム而シテ給桑回数ハ一二齡中八回乃至十回三四齡中五回乃至七回五中齡三回乃至五回トス然レモ降雨打續キ給桑ニ差支ヲ生セシトキハ止ヲ得ス少々ツ、與ヒ濡桑ヲ多ク與フヘカラズ

(十二)養蠶上主任者ヲ定メ置ク事

一主任者ハ第一蠶室ノ冷熱及ヒ乾濕或ハ空氣ノ流通或ハ給桑ノ加減或ハ桑葉ノ摘採方法及ヒ貯藏或ハ天氣摸樣或ハ夜中ノ注意等總テ心配シ宜敷臨機ノ所置ヲナスヘ

二養蠶中ハ總テ主任者ノ指揮ニ從フモノトス

三養蠶上ノ仕事ニ掛ルトキハ誰人モ手ハ必ス洗フヘシ蠶兒取扱人ハ勿論桑摘桑伐桑扱何レモ煙草入ヲ携帯セザル事

(十三)雇人ハ勉メテ熟練ナル者ヲ要ス

不馴ノ雇人ヲ雇フトキハ萬事附添フテ指揮ヲセザレハ用ヲ成サズ縱令用ヲ爲スモ其ノ仕事ハ主任者ノ氣ニ叶ハサルモノ多シ之レニ反シテ熟練ナル者ヲ雇フトキハ萬事主任者ノ指揮ニ應ジ主任者ノ意ヲ滿タスコト明カナリ實ニ養蠶事業ハ臨機應變ノ策ヲ以テ蠶兒ノ嗜好ヲ滿タスモノナレバ飼育者ノ熱心ト冷淡トハ天淵萬里ト謂ツヘキ得失ノ係ルモノナレハ俸給ノ高キヲ厭ハズ熟練家ヲ雇ハサルヘカラス

譬ハ兵家ノ良將ヲ撰ミ航海家善長ナル技師ヲ雇フト少シモ異ルコトハナク兵家ニシテ良將ヲ得ル能ハサレハ戰ヒ必勝ヲ期セス航海家ニシテ熟達ナル技師ヲ得ザレハ航海危險ナルヘシ養蠶家ニシテ熟練ナル雇夫ナクハ寸間モ雇人ニ任セ置クコト能ハサルヘシ然ルニ社會ノ進歩ト共ニ萬事繁雜ニ趣キ中等以上ノ資産ヲ有スルモノハ公私交際ノ爲メニ止ヲ得ス養蠶事業ヲ雇人ニ一任セザルヲ得ザル事アリ之レ熟練ナル



雇人ヲ要スル所以ナリ

(十四) 蠶具ハ完備シ且清潔ナラシムヘシ

器具備ハラザレハ席アリト雖モ充分廣クコト能ハス乾カサント欲スルモ乾カス能ハス一時間ニ成スヘキノ事業モ二時或ハ三時間ヲ費ヤシテ餘アリ爲メニ活潑ナル蠶兒ヲ虛弱ニシ或ハ斃死セシムルニ至ルノミナラス設令蠶ハ精良ナル繭ヲ結ヒシトスルモ器具ノ汚物附着シテ鏽菌或ハ玉菌ヲ増サシムルコトアリ之レ器具ノ不潔ト不足トニヨリ知ラス識ラス蠶兒ニ不親切ノ扱ヒヲナスコトアリ注意スヘシ

(十五) 熱氣ト濕氣

熱氣ノ多キハ空氣膨脹シテ稀薄トナリ蠶體ニ要用ナル酸素ノ欠乏ヲ來シ不活潑トナリ纒カノ障碍或ハ少シノ手拔ケニモ病蠶ヲ生セシムルコト間々アリ故ニ屢々(朝夕)新鮮ノ空氣ヲ輸入シ室内舊氣ノ排除ヲ要ス而シテ夏期ハ炎熱ノ爲メ常ニ水蒸氣多ク加フルニ雨天等ニテ濕氣蠶室ニ滿ツルトキハ給桑後焚火ヲナシ會々空氣ノ交換ヲ計ルヘシ

以上ノ主旨ハ簡短ナ旨トシ簡條的ニ陳述セシナテ十分意ノ盡サザル所アリ讀者諸君機ニ臨ミ變ニ應シ宜敷取捨セラレンコトヲ望ム

### 秋蚕飼育心得書

長野縣南安曇郡温村

中村爲十郎

緒言

近年各地トモ養蠶ノ術大ニ進歩シ好結果ヲ博スト雖トモ獨リ秋蠶ニ至テハ其經驗乏シキカ故往々失敗ヲ招キ遂ニ失望セシムルニ至ルハ誠ニ遺憾ニ堪ヘス依テ余カ多年ノ實験ニヨリ得タル飼育ノ方法ヲ摘記シ注意ヲ促シナハ多少裨益スルニ足ラント欲スルノ微衷ニ出テシモノニテ文章錯雜意義通セサル處アラハ質問セラレンコトヲ乞フ

第一章

養蠶室

凡ソ養蠶ノ業タル蠶種ノ善良ナラサル可カラサルハ勿論ナリト雖トモ蠶室ニシテ不



完全ナルトキハ好果ヲ博スル能ハサルヤ明ナリ故ニ先蠶室構造ノ事ニ付聊卑見ヲ述  
ヘン

養蠶室ハ第一光線及ヒ温度ノ平均第二空氣ノ流通第三乾濕ノ度合其他氣象ノ變化ヲ  
禦宜ニ左右シ得ヘク且ツ勞動ニ便ナルヲ要ス素ヨリ蠶兒ニ新鮮ノ空氣ヲ與フルト寒  
暖陽氣ノ加減ヲ能ク研究スルヲ肝要ナリトス故ニ世ノ飼育ニ熟練セルモノハ能ク此  
理ニ通スルニ外ナラザルナリ世ニハ性々空氣ヲ風ト混同シ又多量ノ火力ヲ用非爲ニ  
失敗ヲ招クモノ少カラス宜シク注意スヘシ若シ光線及温度ニ不平均ナランカ即チ蠶  
兒ノ發育上ニ大ナル妨害ヲ及ホシ殊ニ上簇後其結繭ニ不同チ生スルニ至ルヘケレハ  
尤モ注意スヘキナリ又飼育上動作ニ不便ナレハ徒ニ勞力ヲ費シ經濟上不利ナルヲ免  
レス故ニ以上數項ヲ具備セサレハ完全ノ蠶室ト謂フ可カラサルナリ尙一言スヘキコ  
トアリ既ニ春夏蠶ヲ飼養セラレシモノナラハ四周ノ窓戸ヲ開放シ充分室内ヲ掃除シ  
タル上濕氣ヲ除去スルコトニ注意スヘシ

## 第二章

## 蠶具

總テ養蠶ニ用フル器具ハ春夏蠶ヲ飼育セルモノハ能ク之ヲ洗ヒ殊ニ蠶籠及蠶網等ハ  
之ヲ曝曬シ臭氣其他ノ汚物ヲ去リシ後使用スヘシ余地方ニ於テハ竹籠ニテ凡巾二尺  
二寸長三尺壹寸ノモノヲ用ユ蠶筵ハ成ルヘク薄ク織リ寒中雪ニ晒スカ又ハ水ニ浸シ  
蕪ノ(アク)ヲ抜クトハ其重量ヲ減シ取扱上經便ナルノミナラス速ニ濕氣ヲ去ルノ益  
アリ故ニ除沙スルニ當テモ時々乾スヲ宜トス又蠶網ハ各齡共眠起ノ際蠶兒ノ早晚ヲ  
撰別スル者ニシテ蠶ノ生成ニ從テ細ヨリ粗ヲ用ユヘシ簇ハ熟蠶ヲシテ繭ヲ結ハシム  
ル爲メ要スルモノナレハ其適否ハ大ニ蠶兒ノ勞働ニ難易ヲ生シ光澤及解舒ニ影響ス  
ル者ナレハ注意セサル可ラス第一清潔ニシテ乾燥セルモノヲ以テ用料ノ得タルモノ  
トスト雖モ若シ多量ニ失スルトキハ空氣ノ流通惡シク成功上ニ害アルヲ以テ其材料  
ハ繭ヲ作ルニ適當空隙ヲ存スルヲ要ス當地地方ニアリテハ多ク繭ヲ用ユ其法ハ清潔ニ  
シテ乾キタル蕪ヲ一握ツ、凡三寸程ニ數重ニ折曲ケ中央ヲ假リニ束ヲ蠶ノ熟スルニ  
當リ筵ノ上ニ薄ク擴ケ立ツ方言コレヲ波ト云フ其形ノ似タルヲ以テナリ其他蕪ヲ折  
リ曲ケシモノ種々アリト雖モ煙氣ナク清潔ナル乾燥セル塲所ニ置ク様注意スヘシ



第三章 蠶種ノ鑑別

凡テ其種ノ何タルニ論ナク其良否ニヨリテ結果ノ同シカラサルハ一定規則ナリト雖トモ殊ニ其著シキヲ蠶種ナリトス之ヲ撰擇スルハ養蠶家中最モ大切ナリトス若シ蠶種ニシテ不完全ナルトキハ飼育ノ方法如何ニ宜シキト雖トモ好果ヲ得ル能ハス故ニ左ニ其要ヲ述フヘシ

第一 蠶卵ノ形状少シク橢圓ニシテ平ク中央凹ミ居リ正シクシテ産附順ヲ得ル者

第二 色澤齊一ニシテ附着力強ク容易ニ落チサル者ヲ良シトス

第四章 蠶種取扱法

夫レ蠶種ハ未ダ孵化セサル中ト雖トモ空氣ノ流通寒暖ノ變化濕氣等一々感スルモノニシテ外ニ卵殻ヲ具フルヲ以テ其害ヲ被ムル少シト雖トモ成ルヘク溫度ニ劇變ナク空氣ノ流通ヨキ清涼ノ室ノ蠶棚ニ水平ニ置クヘシ

第五章 掃下シ法

蠶種ノ催青期ヲ過キ孵化スルニ至テハ之ヲ掃下スニ其法多シト雖モ蠶ヲ損傷セスシ

テ健全ノモノ、ミヲ得ルニ注意シ尙蟻量ヲ調査スルニアルナリ故ニ健全ノ蟻ヲ得ンニハ中頃一齊ニ發生セシモノヲ掃下シ前後ノモノハ掃下サ、ルヲ要ス其故ハ前後ノモノヲ除去セサレハ第一手數多ク且ツ虛弱ニシテ畢竟不利タルカ故ナリ但シ一齊ニ發生スルモノハコノ限リニ非ラス次ニ蟻量ヲ知ランニハ發生前ニ方ツテ蠶種ヲ秤ニカケ其量ヲ記シ發生終ルノ後原紙ノ量ヲ度リ前ノ量ヨリ減シハ容易ニ知リ得ヘシ則チ蟻量ヲ調査スルノ要ハ給桑ノ準備擴席等蟻量ニ準シ尙結果ノ良否ヲモ認メンカ爲ナリ倍掃立法種々アリト雖モ蟻ヲ損傷セス尤モ簡易ナル方法ヲ說カン先ツ蠶種數倍ノ紙ヲ糞キ其上ニ蠶種ヲ置キ既ニ發生セシヨリ暫時適宜ノ温ニ感セシメ其舉動ノ活潑トナルヲ待テ極細目ノ網(即チ五厘目)ヲ掛ケ切桑ヲ蟻量ノ數倍給スヘシコレ多量ナリト雖モ次回ノ桑ハ蟻ノ悉ク一回ツ、食スルノ後ニアラサレハ給セサルカ故ニシテ其發育チ一齊ナラシメシカ爲メナリ然ル後乾キタル粗糠五六分平等ニ撒布セル籠ニ移ス可シ

第六章 養桑ノ供給



蠶兒ノ發生ヨリ上簇迄華氏寒暖計八十度ヨリ八十五度ノ溫度ニ於ケル給桑ハ一日間  
 八回乃至十回トス而シテ上簇迄ノ給桑ノ度ハ大凡百五十回トス尙一言スヘキハ豫メ  
 養桑ノ準備ニシテ蠶量一匁ニ付始終合計凡三十五貫目ヲ要ス而シテ之ヲ眠度ニ分配  
 スレハ假ヘハ一眠迄ニ一貫匁ヲ要スレハ之ニ三五ヲ掛ケ即チ三貫五百目ヲ以テ初就  
 眠後二眠迄ノ養桑ノ量ヲ知り得ヘク此ノ如ク順次ニ二眠前ヘ二五ヲ乘シ三眠迄ノ料  
 ヲ得三眠前ヘ三七ヲ乘シ四眠迄ノ料ヲ得四眠前ヘ五三ヲ掛ケ上簇迄ノ量ヲ知り得ヘ  
 シ

次ニ發生ヨリ一眠迄ニ卅回、一齡ヨリ二眠迄ニ二十六回、二眠ヨリ三眠迄ニ三十二  
 回、三眠ヨリ四眠迄ニ三十回、四齡ヨリ上簇迄ニ三十二回也ノ割合ニテナシ凡テ養  
 桑ハ兩桑濡桑ヲ忌ミ供與ノ平等ニ注意スヘキナリ

第七章 擴席法

一利アレハ一害ノコレニ伴フハ數ノ免レサル處ナリ故ニ利害相比較シテ其利ノ多ク  
 シテ害少ナキヲ取ラサルヘカラサルヲ以テ飼育者ノ隨意ニ任スヘキモ養蠶ハ座ノ廣

狭ニヨリテ發育上及經濟上ニ大ナル得失アルモノニシテ厚飼トナストキハ養桑ト手  
 數トチ省クヘキモ蠶體少ニシテ收穫上利ナラス又薄飼トナストキハ給桑量手數多シ  
 ト雖トモ其收購ハ厚飼ノモノニ勝ルヤ明カナリ素ト養蠶センハ利益ヲ得ンカ爲メノ  
 業ナレハ厚薄折衷飼ヲ以テ最モ宜シトセン假令ハ一眠期拾枚ナレハ二眠ニハ三十枚  
 三眠ニハ八十枚四眠ニハ百六十枚トシ上簇ニハ貳百四拾枚トナル割合ニテナスヘシ  
 但シ前ニ述ヘシ蠶籠ヲ以テ謂フナリ終始蠶體七八倍ノ座ヲ與フルヲ以テ適度トナス

第八章 除沙分箔法

除沙スルニ當リ蠶網ヲ用ユルトキハ大ニ其手數ヲ省クヲ得ヘシト雖トモ蠶座ヲ交換  
 スルコト能ハス尙遲レ蠶膿蠶等ヲ抜キ出サ、ルカ故強キ者ノ爲メ踏ミ敷カレ自他相  
 害シ發育不齊ノ因トナルカ故手換ノ法ヲ宜シトス其法ハ除沙ノ都度外周ナル蠶兒ヲ  
 内部ヘ内部ヲ外部ヘ移ス心得ニテ毎日一回宛ナスヘシ但シ催眠期ハ成長極度ニ達セ  
 シヲ以分箔セスシテ一時ニ除沙スヘシコレ其就眠ヲ一齊ナラシムルカ故ナリ眠起ノ  
 時ハ竣脱シテ其舉動ノ活潑トナルヲ待テ後除沙スヘシ尙又除沙ノ際ハ其位置ヲ轉換



シ下段ノ蠶兒ヲ上段へ移シ上部ヲ下部へ移ス様注意スヘシ之レ室内温度ノ全シカラサルカ故發育ノ整然ヲ計ルナリ

附記 掃卸

掃卸シハ國ノ南北ト蠶兒ノ強弱ニヨリ差等アルカ故一定ナラスシテ強健ノ蠶兒ハ二十四時間ヲ經サルモ成繭ノ業全ク怯弱ナレハ三晝夜ヲ經サレハ繭ヲ結フニ至ラサレハ蠶ノ強弱地ノ南北ニヨリ斟酌セサル可ラス

以上概略ヲ記セシモノナレハ斯業ニ從事スルモノ臨機應變ノ處置ヲ以テ宜シク飼育ノ術ヲ研究セサル可カラス

秋蚕飼育法

長野縣南安曇郡豊科村字本村

丸 山 和 藏

元 種

一秋蠶ノ早口ト云フハ暖國地方ニテ飼育ノ元種ハ大略入梅發生ト云フテ六月十日前後ヨリ全二十日頃迄ニ掃キ立中手向キハ六月下旬ヨリ半夏掃キト云フテ尤モ多ク夫レヨリ末口向キハ半夏五六日後レヨリ土用掃キニ至ル迄續々絶へ間ナキノ今日何レノ時期ガ元種掃キ立テニ適合スルカト云フニ天候ノ順逆ハ決テ一様ニ豫測ナリ難シト雖トモ概シテ我安筑ノ地ニ在リテハ入梅時期(即チ六月十日頃ヨリ)ハ濕度尤モ高点ニ降雨モ隨テ多ク土地ノ俗語ニ半夏水ト云フテ六月下旬迄ハ大底例年降雨多ク爲メニ河水ノ汎濫スル事アリ是ヨリ以向時トシテ降雨ナキニ非ズト雖漸次暑熱ニ向フト共ニ自然濕氣ノ減少スルガ故ニ此際ニ於テ發生スル即チ半夏掃キハ氣候モ未タ酷暑ナラス乾濕共ニ具ハリ第一ノ元料タル桑葉モ肥料ノ充分ニ熟シ實ニ元種飼育ニ適好スルノ時ナレハ概シテ此期ヲ以テ尤モ優レリトナス然リト雖モ各地ノ時候ニヨリ已ニ期節アル稻田仕付等ニ差支有之限リハ實ニ止ムヲ得ザルモ只タ各自ノ競争的ヨリ秋蠶ハ早口ニ限ルナド、殊更之ヲ望ム可キモノアラス乍去茲ニ論者アリ假令右期節ノモノト雖モ無病上結果ノ者ハ敢テ差支之レナント云



ンカ余ハ決テ一概ニ之ヲ擯斥スルニ非スト雖兎ニ角早口ハ例年ノ危険ノ時氣ヲ經  
 歴スルノミナラス右元料ニ必要ナル桑葉ハ水分ノ尤モ多量ナル時節故通常ノ桑葉  
 ニテハ蠶虫ノ腸ニ病根ヲ醸スヨリ茲ニ一回ノ結果ハ充分成繭ノ功ヲナスモ蛹ニ變  
 化シテ後遂ニ死シ其本分ヲ尽リザルカ如キハ現ニ余カ冗言ヲ待タヌシテ尤モ明カ  
 ナリ是即チ元祖ノ生育中好氣順ニ適セザルカ將タ(原料)桑葉ノ充分ナラザルカ何  
 レ此点ニアルベシ江湖熱心家比年經驗シテ何レガ優勝ナルヤ試育ノ上知り給フヘ  
 シ總テ元種ハ乾燥ニ過キス濕氣ニ過キス極メテ清涼ノ土地ニ於テ飼育ナシタルヲ  
 尤モ優等トナシ之ヲ暖國地方ニテ飼育スルハ繭量ニ對スル糸目ノ多キ事現ニ其  
 證ナリ昨今虫性種類ニ付テハ各製種家カ適宜名稱ヲ付シタル掛合セノ者尤モ多  
 シ故ニ熱心ナル飼育家ト雖名稱ニ依テ虫性及繭巢ヲ知ルヲ得ヌ何レニセヨ從來  
 有ル所ノ白龍、万平、金丸、龍馬、銀白、青熟、矢ノ羽等ノ類ハ虫性尤モ強健ニ繭形中  
 巢ナレ共系質善良ナリ世人遇々繭巢ノ非凡ニ大ナルト單ニ繭形ノ良キ等ノ點ニ迷  
 ヒ當リ遠キ種ヲ製シ當リ遠キ蠶ヲ飼フ者不尠是等ハ之レ未タ其道ニ淺キ者ト云フ

可シ

撰種

一 良種ハ空氣ノ流通ヨキ蠶室ニテ相當ノ技手十分ナル飼育ヲ施シ好結果ヲ奏シタル  
 元種ヨリ製造成シタルモノヲ以優等トナス是等ノ蠶種ハ概テ卵殼厚ク光澤アリゴ  
 ム質強クシテ磨スルハ容易ニ落チズ産附ノ狀平カニ整列スルモノナリ近頃ハ蠶種  
 ナ顯微鏡ニ照シ兎角六ヶ敷云ナレ共未タ技師其良シキヲ得ザルカ遇々病毒アリト  
 テ廣乘セシモノナ而已拾ヒ集メ之カ實否ヲ試驗スルニ至テ健康ナル生育ニテ良結  
 果ヲ奏スル事アリ是等ノ點ニ依テ余ガ年來ノ經驗ニ照考スルニ總テ蠶ハ發生ヨリ  
 眠起ノ時期其良キヲ得レバ假令病根アル蠶種モ至然其毒消滅シテ無病健然カル蠶  
 兒トナル又至テ無毒ナル精撰種ト雖モ發生ヨリ眠起ノ氣順惡キトキハ遂ニ病蠶ヲ  
 生シ以テ大失敗ヲ來スコアリ然リト雖モ浮キ世人情トシテ何人モ良キ踏ヲ慕ヒ惡  
 キ踏ヲ嫌フハ理ノ常ナリ依テ善ク飼育ニ注意シ好結果ヲ爲シタル元種ヲ以テ製造  
 スルノ外他ナシ總テ元種ニ病毒アルト否トニ拘ラズ好氣順ニ際シ充分ナル飼育ヲ



遂ケタルモノヨリ製造成シタル蠶種ノ發蟻ハ體軀割合ヨリ太ク強健ニシテ飼育中眠起ニ至リ不揃トナル等ハ概テ之レナク亦無毒保險ノ元種ト雖モ飼育ニ不注意ナルトキハ發蟻虛弱ニシテ常ニ糸ヲ吐キ著キ病毒ナキニ眠起毎ニ階級ヲ來ス生スル等ハ之レ其元種飼育ノ未ダ足ラサル所以ナリ是等ヲ產出スル蠶卵ハ大略小粒ニシテ光澤ナクゴム力薄ク大小不同ナルモノナリ然リト雖トモ單ニ卵殼ノ大小ニ依テ而已其可否ヲ判別スルハ非ナリ何レノ土地ニセヨ氣候高度ノ地ニ於テ產出スル蠶種ハ卵粒黃色ヲ帶ヒ且ツ大ナリ又清涼地ノ蠶種ハ卵殼先ツ白ク大粒ナラズト雖モ光澤アリテゴム質強ク大小不同ナキモノナリ此点ニ付飼育家善ク其本場ノ云ヒ有ルコトヲ判別シ給フヘシ本場ニモ下等物アリ塲邊ヒニモ上等物アリ決テ一概ニ論ス可カラズ

#### 秋蠶種運搬

一秋蠶ハ産附後僅カ十日前後ヲ以テ發生ナス者ナレバ殊ニ酷暑ノ炎天ヲ運搬スルガ如キ場合ニハ至テ注意セサル可カラズ先ツ産附後一兩日ノ經過ヲ待ツテ卵水ノ落

テ着キタル所(尤モ日ヲ經テ已ニ目付以後催青ノ時分ハ至テアシ、)夜中カ或ハ午前未ダ大地ニ炎熱ヲ帶ヒサル内ニ運搬スルヲ甚トス然リト雖モ日時際限アルモノナレバ別シテ遠隔ノ地ニ在テハ中々好時期ノミヲ計リ運搬ナリ難シ此クノ如キハ該蠶種ノ紙數ニ應シ箱ヲ造リ(産卵ノ箱中ニアツテ充分空氣ヲ呼吸シ得ル程ノ餘隙アルモノ)蠶卵ノ磨セザル様ニ之ヲ入レ蓋ヲ閉チ付ケ外氣ノ直接箱中ニ侵入セザル様ニナシ運搬スヘシ遇々該箱ニ空氣ノ通ヒ穴ナドヲ穿ツモノアリ是反ツテ外氣ノ侵入スル有ツテ爲メニ良シカラズ當今郵便ニテ送致スル等專ラ行ル試驗上決テ害アルコトナシ依テ實際本場ノ精種ヲ需メント欲セバ一部落申合セ産附ノ節惣代人ヲ派遣スルカ或ハ直接製造元ヘ申越シ郵便ニテ取引キ致ス方良策ト云フ可キナリ

#### 種ノ置キ場所

一蠶種ハ可成空氣ノ流通ヨク乾燥ニ強カラズ亦湿度ニ過キザル極メテ清涼ノ所ヲ撰ビ置クヲ良トス殊ニ炎暑ノ際ハ午前ト午後トハ光線ノ當リ場所ニ依テ大ニ差違ア



ルモノナレバ徐カニ程ヨキ場所ニ移シ替ヘベシ卵水ハ常ニ外氣ヲ呼吸シ以テ發生ノ用意ヲ爲シ居ルモノナレハ雅蠶生育ノ時ト敢テ異ル事ナシ眼付キ以後催青ノ時節ハ特ニ注意肝要ナリ

## 蠶種掃キ立及桑附法

一蠶種已コ十分催青シ明日發生ノ模様見ユルトキハ先以テ之ガ給桑ヲ摘ミ置クヘシ然テ其夜十二時過キノ頃カ或ハ明朝未ダ暗キ内ニ縱横新聞紙位ヒノモノヲ蠶箔ニ敷キ蠶種一枚ヲ右紙ノ中央ニ置キ其上ニ同様ノ紙ヲ蔽フ(此紙ハ總テ毛足ノ少キ洋紙類ニテ滑ク地目滑カナルモノヲ良トス新聞紙ノ古ルハ氣發油ノ臭アリテ惡シ、之ハ發生蠶虫ノ未タ桑附前直接空氣ノ動搖ニ觸レサラシムル爲ナリ然ラザレハ早出ノ虫ヨリ漸次桑ヲ求ムルノ餘リ蠶種紙面ヲハイマワリ虛弱ノモノハ蠶體疲勞シテ遂ニ糸ヲ吐ク風氣有レ日ハ特ニ注意スヘシ蠶ハ生レナカラニシテ體中ニ糸アリ桑葉ノ食ニ依テ此糸ヲ太クシ以テ繭ヲ結ブモノナリ然レバ各飼育家長ク注意シテ此元料ヲ空ク消耗セシム可カラズ)猶ホ其蔽ヒ紙ノ上ニ内ナル蠶種ニ對スルト

思フ程ノケ所ヘ桑葉ヲ四分角位ニ切り(之レハコワキ桑ニテヨロシ)紙面ノ見ヘザル程ニ平カニ蒔キ置クヘシ(之ハ卵殻ヘ幾分ノ濕氣ヲ與ヘ發蟻ノ卵殻ヲ破リ出ツルニ安カラシムル爲ナリ然シ前日ヨリナシ置クハ惡シ、)然レバ發生ノ蠶令已レガ好ム所ロノ桑葉ノ香アルヲ以テ上ナル蔽ヒ紙ニ附着シ匍匐マハラザル故ニ蠶體ニ疲勞ヲナサシムル事ナシ倍大略發生シテ已ニ掃キ立ノ時分ト思フトキハ(若シ二日出スルモノハ目付キノ頃ヨリ判然スルト雖モ初日掃立ノ時分ハ明日發生ノ分モ已ニ催青シ幾何位ガ初日ノ發生ナルカ殆ト見分テ難キモノナリ何レニセヨ暑氣ノ節ハ大略十一時頃ヲ良トス又雨天カ或ハ冷氣ナル頃ノモノハ十二時頃ニ至テ掃立ヲナスヘシ)先ツ豫メ桑葉ヲキザミ置キ次ニ掃キ落シテ爲スヘシ然ラザレバ掃キ落シテ後チ桑ヲ切ルナド時間ヲ長ク消ストキハ毛蠶ハ桑ヲ需ムルノ余リ定規ノ場所ヲハイ出ス等ノ事アリ殊ニ秋蠶早口ノ如キハ炎暑ニ際スルモノナレバ掃キ落スヤ直ニ給桑スルヲ良トス第一掃落方ハ蠶種一枚ト云フテモ其厚薄ニ依テ定規ナシ先ツ本部付一枚ト云フテ蠶量三匁七八分ヨリ四匁ニ至ル(但シ蠶量四匁ト云フ



モノハ五分附二枚ヲ合セ一枚トナセシモノ）蠶箔（縦三尺二三寸横二尺二三寸）一枚ニ配置スル位ヲ良キ度合ヒトナス餘リ薄キニ過キテモ給桑ノ施料ニ最モ注意セザレハ蠶已ニ食欲ノ狀見ユルトキ食ヒ殘リノ桑未タ蠶下ニ有ル様ノ事ハ衛生上大ニ惡シ、往々其食欲ノ狀ヲ知ラズシテ未ダ桑有ルナド、思ヒ其度合ヒテ過ス等ノ事之有リ爲メニ宜シカラズ然シ餘リ厚キニ過キタルハ是亦惡シク蠶出虛弱ノモノハ食後レ等ヨリ眠期ニ至リ不捕ヒト爲ルナド多ク此點ニ原因ス故ニ善ク其蠶ノ厚薄ニ應シ程良キ分合ニ掃キ落シヲ爲スヘシ（先ツ食欲ノ狀ヲ見ルニハ明カルキ戸口ニ蠶箔ヲ持チ行キ向フノ様リヲ低ク斜ニ光線ヲ受ケ手前ヨリ之ヲスカシ見ルトキハ蠶ノ口ト頭ノ付際ハ幾分青ミヲ持ツ是其兆ナリ頭部全ク透クガ如キハ已ニ其期ノ過キタルナリ漸次空腹ニ隨ヒ青白ク全體透キ通ルモノナリ炎暑赫々ノ時期ニ當リ如此度合ヒテ過ス等ノ事有ルヨリ遂ニ一大病蠶ヲ生ズ故ニ良ク其度合ヲ見計ヒ給桑方ニ油斷スヘカラズ給桑已ニ枯レントスルトキ蠶已ニ之ヲ食ヒ尽シ後チ五分間位ヲ經テ食欲ノ狀見ユルガ如キガ程好キ給桑ノ手術ナリ總テ蠶四眠前ハ此點

ニ注意シ一瞬時モ油斷スヘカラス）總テ掃キ立法ハ土地ニヨリ慣行ニヨリ其方法種々アリト雖トモ先以テ蠶體ヲ負傷セシメザル様ニ取ルニハ先ツ掃キ落サントスル蠶箔ニ粉糈ヲ良ク敷キ置キ豫メ蠶種ノ中央ニ裏面ニテ持ツ様ニ糸ヲ附ケ置キ之ヲ掃キ落ス可キ蠶箔方或ハ紙ノ上ニテ（右糸ヲ左手ノ指先キニテ持チ右手ノ指先キニテボツ、ト）爪彈スルトキハ安ク蠶種ヲ離ル、モノナリ之ヲモチ草（一名モヨギ）カ或ハ桑葉ノ細ヤカニ切りタルニ付ケ蠶箔ニ廣グル等ヲ良トス遇々粟糈或ハ粉ノ細末糈ナドニ混セ時キチラス手法アリト雖モ妙手ニ非レバ反テ惡シ、

#### 除沙（コシリカヘ）

一蠶掃立ヨリ適好ノ度合ニ給桑スルトキハホンノ僅カ位ノ殘桑ノミ箔ニ止ル有ルガ故ニ其翌日位ハ蠶下薄キヲ以テ格別蠶尻ニムレ等ハナキ故其翌々日（即チ二日目）ニ至リ初除沙ヲ貫クヘシ此時ハ蠶モ大ニ生育シテ丁度一枚ノ箔ヲ二枚ニ爲シ程良キ頃合ヒナリ（蠶發生ノ翌日除沙ヲ行フハ蠶體未タ小ナルカ故ニ不知々々毛蠶ヲ捨ツル等ノ場合少ナカラス）總テ蠶二眠前ナル雅蠶ノ除沙ヲ行ハントスルニハ粟



糟カ或ハ粗糟ナラバ臼ニテ極細末(粗糟一粒ヲ六ツ割位ヲ良トス)ニナシタルモノヲ蠶尻ノ見ヘザル程ニ厚カラズ薄カラズ善ク其境界ヲ隔ツル丈ケムヲ無ク蒔キ其上ニ給桑シ之ニ昇リタルヲ別箱ニ移ス也尤モ雅蠶ニ眼前ハ右糟ノ上ニ二回給桑シ悉ク昇リタル所ヲ取ルヘシ尤モ除沙法ハ網ヲ以テ取ルアリ鳥ノ羽根或ハ指先ニテマクリ取り廣ゲル等種々手法アリ第一網ニテ取ルハ大ニ簡便ナレ共雅蠶ニ眼前ハ網ヲ要セザレ方大ニ優レリ(乍去三眠起後ハ蠶體モ大ニ生長シ隨テ箱數モ増加スル事ナレバ何レノ手法ニテモ各飼育家ノ手練レタル早キ法ヲ行フヘシ)總テ初除沙以後ハ日蠶尻ト云フテ毎日一回ツ、ハ除沙ヲ行フヲ良トス若シ此間ニ非常ナル冷天ニ際シ既ニ食欲ノ狀見ユル時分食シ残りノ桑葉未ダ枯狀ヲ示サズ或ハ雨天等ニテ是亦タ濕氣アルトキハ日蠶尻ノ間ニ粗糟ヲ一回若シクハ二三回ヲ蒔キ給桑スヘシ若シ其レニテ非常ニ蠶尻ノ堆積ヲナス事アラバ直ニ除沙スヘシ總テ眠起ノ除沙ハ大略蠶箱中二分通り眠リニ就キタル蠶アルトキ粗糟(二眠前細末糟ヲ用ユヘシ)ヲ蒔キ給桑ニ回薄ク施シ別箱ニ移スヘシ總テ除沙ノ際蠶ヲ移ス可キ箱ニハ粗

糟ヲ長シムラナキ様ニ蒔キ置キ此上ニ移スヘシ然レハ古箔等ニテ濕度ヲ帯ヒ惡臭ヲ發スルガ如キ者モ此糟ノ爲ニ遮ヘラレ濕氣ヲ箔ニ及ホス事ナシ

#### 給桑之度數

一秋蠶初眠前寒暖計(華氏)八十五度以上ニ昇進スル日ニハ晝間十回ヨリ其昇高二隨ヒ十三回夜ニ點燈後明且未明迄ニ三回位ヲ施スヘシ初眠起キヨリ四眠ニ至ル迄各眠毎ニ一回位ツ、度數ヲ減シテヨシ實ニ此点ニ付テハ土地ノ寒暖ニ隨ヒ大ニ差違アルモノナレハ前項ニ述ヘタル如ク食欲ノ狀ニ依テ其日ノ寒暖ニ應シ斟酌給桑スルトキハ至然適好ノ度合ヲ悟ルヘシ

#### 秋蠶眠起桑附法及注意

一蠶眠期除沙ヲ施シタル後ハ施桑ハ可成細クヤ、長キ向キニ切り薄蒔キニ度々振り就眠セシムヘシ若シ此間ニ氣候寒冷ナルカ或ハ雨天等ノ爲メニ濕氣アリテ蠶尻ノ頁ク乾カザルトキハ粗糟ヲ給桑ノ間ニ用ヒテ休ミ込ミチナサシムヘシ總テ何レノ休ミニセヨ糟ヲ給桑ノ間ニ用ヒテ休ミ込ミチナサシメタルモノ起キノ際若シ桑葉ナ



ルトキハ早起キノ虫ヨリ桑ヲ需ムルノ余リ蠶尻糞ノ上ヲ飼餌スルヨリ大ニ蠶體ニ  
損傷ヲ與フルコトアリ先ツ此患ヲ防グニハ糊糟ノ上ヘ(青草但シ惡臭ナキ蓬キノ  
類ヲ細カニ切り粉ノ上ニ蒔キ置クヘシ然レハ起キ出デノ蠶此青草ニ息ヒ泰然トシ  
テ舐驅チ盡フ)總テ秋蠶ハ春蠶ト違ヒ多ク氣候劇變ノ際ニ於テ結果ヲ爲スモノナ  
レハ殊ニ眠起ノ節ハ瞬時モ油斷ナク注意スヘシ總テ蠶起キニ當リ炎暑ニ際スルガ  
如キトキハ青草ヲ蒔キ置クチ良トス(是其古皮ヲ脱スルニ幾分青草ノ濕氣ヲ補フ  
ナ以テ拔ケ出ツルニ安カラシムル爲ナリ)蠶已ニ起キノ際ニ當テ風氣アルハ大ニ  
惡シ、可成風口ニ木綿幕カ或ハ紙張等ヲ張り風氣ヲ防クヘキ手策ヲ十分ナスヘシ  
實ニ起蠶ニ際シ南暴風等有シ時ハ豫防ノ出來ザルニ於テハ大略違蠶ヲ現出スル事  
予ガ年來ノ經驗ナリ故ニ若シ如此天變ニ際スルトキハ起キ揃チ待タズシテ大略半  
數モ見ヘタルトキ附桑ヲ爲スヘシ尙起キ蠶ノ舐驅未タ整ハサル内ハ至テ光線ヲ嫌  
フモノナレバ蠶室ノ鬱蒸無シ以上ハ戸口ヲ閉チ可成暗然タラシメ以テ起キ揃ヒチ  
ナサシム可シ如此ナサシムルトキハ蠶泰然トシテ動搖セザルカ故ニ蠶ニ疲レチ爲

サシムルコトナシ天氣朗カニ且ツ冷ナルトキ或ハ雨天等ニテ濕アルトキハ充分ノ  
起キ揃ヒチ待ツテ附桑スヘシト雖モ秋蠶ト大略八分通り起キノ見ユル頃ハ給桑ス  
ヘシ(但シ起キノ附桑ハ例ノ給桑半額料ヲ施シ次回モ全額ニ給スヘシ此時分大略  
全部起キ揃ヒニナルモノナリ三回目ニ漸ク全額料ヲ與フ)總テ蠶就眠中ハ食ヲ絶  
シ極メテ空腹ナルトキニ方ツテ一時ニ滿腹スルガ如キ事ヲナサシムルハ第一蠶ノ  
衛生上大ニ惡シク試ニ健然ノ蠶モ一ト先ツ食ニ飼キ施桑ノ上ニ一ト先ツ茫然タル  
形狀ヲナスコトアリ依テ起キノ二三回ハ極メテ薄桑ニ施シ以テ一時ニ飽カシメザ  
ル様注意スヘシ又起キノ當日ハ可成光線ヲ防キ室内ヲ暗クシ置クチ良トス平時ト  
雖モ光線ハ可成平均ニ受クル様注意スヘシ片光線ノ室ニテ飼育スルトキハ蠶ハ常  
ニ暗所ニ向テ片々寄りスル是其扁方ヨリ注射スル光線ヲ嫌フノ故ナリ總テ蠶發生  
ノ當日ト眠起ノ當日ハ特別ニモ注意肝要ナリ

### 秋蠶病

一春夏秋蠶トモ疾病ノ点ハ敢テ異ル所ナシト雖モ時候ニヨリ多寡ノ差ナキニアラズ



先ツ秋蠶ニ於テ第一產出スルハ軟下病ノウチ空頭病(俗ニ頭赤)該病ハ多ク室ノ鬱蒸ト乾燥ニ過キタルト又ハ南暴風等ニ際シ欠食ヨリ來ス故ニ秋蠶ニ多ク此病アリ蠶一ト度ヒ此病ニ罹ルトキハ如何ナル手術モ其功ナシ實ニ該病蠶ハ體軀疲弱シ常ニ蠶坐ニ糸ヲ吐キ頭ニ金茶色ノ水氣ヲ持チ甚ダシキハ眠期ニ斃レ或ハ起キ蠶ニ縮少シ僅カニ輕病ノモノト雖給桑ノ際ホンノ一時食ヒテ爲スノミニテ軀細ク不揃ヒトナリ次第ニ箔中ヲ凌キ出テ、箔縁ニ彷徨シ遂ニ斃ル遇々極輕病ノモノハ四眠迄ハ起キ出ルト雖モ決テ良結果ヲ奏セズ試ミニ四眠起キ中ニ該病ニ罹リタルモノアラバ之ヲ引キ裂キ軀中ヲ檢スヘシ糸料ハ至テ少ク甚ダ敷ハ絶テナキモノナリ依テ蠶己ニ眞ノ空頭病トナルトキハ直ニ棄ツヘシ實ニ此病蠶ヲ出スガ如キ蠶室ニ有テハ起ノ當日及ヒ殊ニ南風アル日ニハ特別ニモ注意シ常ニ寒暖計(華氏)八十五度以上ニ昇進スルトキハ飼育人ハ瞬時モ蠶室ヲ離レテ其摸樣ヲ審查シ食欲ノ度合ヲ計ヒ給桑方ニ尽力怠ル可カラズ若シ室内鬱蒸ノ摸樣アラバ速ニ戸ヲ開キ徐ロニ風ヲ導キ入ルヘシ此際夕立摸樣等ニテ非常ニ蒸シ戸口開放スルモ風氣ナク進

退茲ニ極マルノ際ハ別室ニ於テ火鉢ニ充分火ヲ起シ蠶室ノ廣狹ニ應ジ二個或ハ三個ヲ持チ入レ青松葉カ或ハ青草(總テ惡臭ナキモノ)ヲ火鉢ノ上ニ蔽ヒ團扇ヲ以テ之ヲ煽キ立ツルトキハ忽ニシテ白煙室ニ滿ツ此時火鉢ヲ他ヘ持チ出シ戸口ヲ不殘開放スルトキハ白煙ハ其ノ所ヨリ立チ去ル是ト同時ニ室ノ腐廢シタル空氣蒸發シテ立チ出ル然レハ戶外ヨリ新鮮ノ空氣侵入スルガ故ニ蠶ノ舉動誠ニ靜カニナルモノナリ總テ大暑ノ節新ヲシキ桑葉ヲ與フルモ之ヲ急食シ或ハ暫時ニシテ頭ヲ(ザハ、ハ)振リマワシ舉動常ニ反リテ繁ク蠶箔ヲ匍匐シ廻ル等ハ是其室ノ鬱蒸ノ爲メ空氣ノ腐敗スルヨリ該狀ヲナス所以ナリ恰モ水魚(鯉鮒ノ類)ヲ桶ニ入レ是ヲ久ク置クトキ水既ニ彼等ガ香ミ返シトナルトキハ不殘水面ニ浮ビ外氣新鮮ノ補助ヲ受クルガ如シ總テ乾燥ニ過キ欠食或ハムレ桑等ヨリ原因スル病ハ空頭病ヲ以テ第一トシ其次ニハ白透(俗ニトワロウ)是レモ即軟下病ノ一種ニシテ該病蠶タル身體縮小ニシテ頭大キク全身白クスキ通り甚ダシキハ絶テ食ヲ欲セズ蠶坐ノ高所ニ息ヒ或ハ箔縁ニ凌キ出茫然タル形狀ヲナシ遂ニ斃ル是等ハ多ク眠中ニ強ク乾燥ニ過



キダルヨリ原因ス依テ連日乾燥ノ際眠期ニ掛ラバ須ク注意シ假令一二回ノ給桑ニテ全部休ミ込ミヲ成ストモ未タ起キ蠶ノ見ヘサル限リハ度々薄桑ニ蒔キ置クカ或ハ(青草惡臭ナキモノ)蓬ノ類ヲ相當ニ切り蒔キ與フヘシ然レハ幾分此青葉ガ濕氣ノ爲メニ古皮ヲ脱キ安ク又空頭病(白透)乾燥ヨリ原因スル病氣ヲ預防スルノ一助タラン起キ縮ミ此病蠶モ多ク眠中風氣ニ當ルト一ハ微粒子毒病ノ輕症ヨリ來タスモノト眠前桑葉ノ喰ヒ不足等ヨリ原因ス其色茶褐色ニシテ幾分桑葉ハ食スルモ到底生育ヲ遂グルモノニ非ズ依テ該病蠶ハ直ニ棄ツヘシ

以上病蠶ハ皆乾燥ニ過キタルト又ハムレ桑等ヲ食シ或ハ蠶坐ノ堆積等ニ多ク原因スルモノナリ

濕氣ヨリ起ル病ノ尤モ甚タ敷モノヲ白強病(俗ニラシヤリ)或ハフンツマリトス本病ハ空氣ノ不流通ヨリ濕氣ノ鬱シタル室ニ於テ是ヲ現出ス一タビ此病蠶ヲ出ストキハ後來ニ遺傳スルノ患アリ特ニ其豫防法ニ注意スヘシ倍其豫防ヲ施スニハ蠶發生三十前ニ該蠶ニ使用シタル器具ハ不殘石灰水ニ鹽化石灰(俗ニ色貫キ粉)ヲ少シ

加ヘ之ヲ以テ器具ヲ涵シ後清水ニ浸シ置クコト五六時間余ニシテ後ヨク洗ヒ乾カシタルモノヲ蠶室ニ持チ入レ室ノ戸ヲ嚴ク閉チ拾疊間ニ對スル硫酸瓦斯四十匁ニ硫黃十匁程ヲ加ヘ薰蒸スルカ或ハ硫黃三十匁ニ硝石五匁ヲ加ヘ全樣薰蒸シ其儘置クコト二日間後チ戸ヲ開キ風氣ヲ長ク通ハシメ置クヘシ第二ニハ軟下病ノ内ナル腹下シ病是ハ重モニ濕氣ノ多量ナルト或ハ溫度ノ變リニ際シ厚ク飼ヒ等ニテ蠶體皮膚ノ發蒸ヲ妨グルト亦ハ雨桑ヌレ桑等ヲ與フルヨリ原因ス雨水ニハ炭素質ヲ含有スルカ故ニ假令雨水ノ乾キタルモ雨中ノ滴ミ置キハ此質氣チ桑ニ浸シ有ルヲ以テ往々蠶虫ヲ害スルコト不尠故ニ可成貯桑ニ用心シ僅一兩日位ノ雨天ニ遇フモ差支ナキ様貯桑方肝要ナリ雨止ミ雨氣發散スルヲ待テ摘桑スヘシ雨桑ヲ施スヨリハ寧ロ施サ、ルニ利アリ微粒子毒病是ハ蠶病中尤モ重症故ニ該毒アル蠶種ハ發生シテ桑ヲ附クルニ甚タ敷ハ其儘縮少シテ斃レ少シク輕キモノハ眠起キニ至リ同様縮少シテ死ス褐色ヲ呈スルモノナリ方今殊ニ其筋ニ於テモ該病ノ檢査ニ注意シ兎角六ヶ敷云フナレトモ發生以來該病ハ至テ見安ク先ツ初眠ノ前中蠶尻ヲ檢スルニ該



病アルモノハ殘桑ノ中ニ毛蠶ノ儘斃死スルモノアリ初眠起キニ斃死アリ大略右様ノモノ一分通りヨリ以上ノ者ハ決テ飼育スルノ功ナシ間々蠶箔中ニ五頭十頭位該様ノモノアルモ決シテ差支ナシ然シ該病ハ實ニ遺傳スルノ患アルヲ以テ元種飼育者ハ特ニ注意セザル可カラス其外蠶病ハ時トシテ種々ノモノヲ提出スルコトアリト雖モ皆是氣運順候ニ來シ蠶室ノ工合ニヨリ乾濕ノ度合ヲ計リ技手其嗜好ノ飼育ヲ施サ、ルヨリ源因スルモノナリ

飼育中禁物

一 煙草油魚類等ノ臭氣アルモノ燒クコトヲ禁ム殊ニ發生桑附前及ヒ眠起桑附前ハ至テ惡シ、特ニ注意スヘシ

一 蠶眠リニ掛リ一般留ノ桑ノ際ニ當リ今夜ハ樂ナリ休業ナリト唱ヒ早夕飯ニテ戸ノリヲナシ就眠スル等ハ至テ惡シ、秋蠶ノ如キハ殊ニ酷暑ノ際ナレバ夜ルト雖モ戸ヲ開キ直接風氣ノ蠶体ニ當ラザル様ニ除風ヲ導キ大地已ニ冷濕ノ氣ニ感シ熱度ヲ去ルノ際戶外ト蠶室ト同等位ノ寒暖ニ至ル迄ハ決テ戸ヲ閉ツベカラズ是只眠期而

己ニ限ラズ常ニ注意スヘシ

一 秋蠶ハ重ニ酷暑ニ際スルモノナレハ午後一時ヨリ同四時ニ至ル迄ノ間飼育主任者ハ蠶室ニ有テ間斷ナク注意ヲナスハ勿論假令蠶体等疲ル、トモ該時間内ニ晝ル休ミナド、唱ヒ就眠スルコト堅ク禁スルコト若シ主任者ニシテ晝夜働力ノ疲レテ休マント欲セバ先ツ午前十一時前ニスヘシ

一 蠶掃立ノ僅少ヨリ本業ニナラサルナド、云テ餘手間ナトナスハ堅ク禁スル處ナリ殊ニ維兒生育ノ際ハ多分ノ摘桑モ不要亦飼育ニモ多分ノ時間ヲ要セザルヨリ婦人ナドハ片手間ニ糸ヲ引キ或ハ機ヲ織リ縫仕事等ヲナシ今僅カニシテ仕事ノ切リニナド、餘念ナキ間ニ蠶ハ己ニ食欲ノ度合ヲ經過シ欠食ナドノ点ヨリ遂ニ病源ヲ醸スコトアリ決シテ飼育中ニ餘仕事等ヲ兼ヌルハ堅ク禁スル所ナリ

一 飼育中雨天等ニ遭遇ノ際蠶室ノ濕氣ヲ去ルナド、唱へ終日煙リヲ蠶室ニ滿スルトキハ大ニ惡シ、総テ檜杉其外桑林等煙リノ目ニシミル如キ薪類ハ飼育中用ユヘカラズ



一蠶已ニ上簇ト云フテ(まばし)ニ入ル、ヨリ最早大結果ナリ安樂ナリト稱ヒ注意上  
無頓着ニ附シ夜ハ早寝等致スハ大ニ悪シ大略簇ニ糸ヲ張り蠶各モ繭巢ノ形ヲ顯ス  
ノ頃ヨリハ可成空氣ノ流通ヲヨクシ假令糸料ニ飼育セシモノト雖モ蛹ニ變セザル  
内ハ總テ飼育中モ同様ニ注意ヲ怠ルヘカラズ

### 秋蚕及風穴蚕飼育實驗法

長野縣信濃國南安曇郡温村

柴野源次郎

同縣同郡同村

關 又 吉

#### ○室内及蠶具

春蠶飼育ノ後ハ室内ヲ能ク掃除シ前蠶ノ臭毒氣ヲ除クガ爲メ戸障子ヲ開ケテ空氣ヲ  
流通セシメ蠶具ハ渾テ能ク洗ヒ日光ニ乾カシ用ユ然レトモ前蠶ノ未タ片ツカザル以

前ニ發生スル場合ニ於テハ毛蠶ヲ別室ニ飼育シ勉メテ臭氣ヲ防キ病毒ノ傳染ニ注意  
スヘシ

#### ○糠糠持方

能ク釜ニテ煎リ之ヲ舂ニテ搗キ碎キテ四ツ割位ニシテ篩ニテ小糠ヲ去リ能ク洗ヒテ  
毛蠶ノ使用ニ供ス之ヲ搗キ糠ト云フ又煎リ糠ノマ、糞ニテ能ク洗ヒ方言(ウブケ)  
ヲ去リテ日光ニ乾カシ毛蠶後即チ成蠶ノ使用ニ供ス之ヲ洗ヒ糠ト云フ總テ糠ノ養蠶  
ニ必用ナルハ第一除沙スルニ易ク且ツ蠶兒ヲ傷クルノ憂ナシ第二籠中平面ニ布キ置  
キ其周圍ヲ籠縁ヨリ二寸五分位宛去テ蠶兒ヲ配置スルトキハ這ヒ廻ル事ナク行儀正  
シクシテ飼育便ナリ第三曇天或ハ雨天ニシテ蠶坐ニ濕氣ヲ含ミ蠶兒ニ害アリト認ル  
トキハ之ヲ散布スレハ能ク濕氣ヲ吸收シテ大ニ蠶兒ノ衛生ニ効アリ

#### ○温熱ノ適度

華氏寒暖計八十度ヲ以テ適度トス(七十五度ヨリ八十五度マテ)温度乾濕ノ高低空氣  
流通ノ良否ハ大ニ蠶兒ニ關係アルモノナレハ給桑ノ回数ヲ増減シ成可適度ノ權衡ヲ



失ハサル様ニ注意スヘシ

劉桑及給桑ノ注意

掃立ヨリ四齡マテハ蠶兒大小ニ從ヒ常ニ細大不齊ナキ四角切り劉桑ヲ給與スヘシ然  
 ラサレハ除沙ニ甚タ困難ナレハナリ併シ催眠ノ青桑ハ熟眠ニ至リ蠶下ノ堆積スルモ  
 充分ニ空氣ヲ流通セシムル爲メ成ヘク細長ニ刻テ與フルヲ良トス之レヲ素麵切ト云  
 フ五齡ニ至リテハ切放シノ桑ニテ飼育スヘシ一齡中ハ毎日十回二齡ヨリ四齡迄ハ七  
 八回五齡ニ至テハ六七回渾テ前日ノ摘桑ヲ以テ給與スヘシ一齡中又ハ熟眠ノ前後ハ  
 成可ク薄桑ニ給與ス以上陳ヘタル回数ハ華氏八十度ノ適度ニ相當シタル回数ヲ標準  
 トシテ示シタルモノナレハ余リ之レノミニ拘泥セズ暑熱強クシテ適度ヲ超過スルト  
 キハ回数ヲ増シテ乾燥ヲ凄キ或ハ曇天雨天ニシテ濕氣甚タシキトキハ回数ヲ減シテ  
 濕潤ヲ防ク等ノ斟酌ナカルヘカラス

○除沙方法

掃立ヨリ三日目迄ハ毎日分箔ノミニテ除沙ヲ要セス四日目ヨリ四眠迄ハ毎日一回乃

至二回宛除沙シ五齡ニ至テハ一回宛トス其方法ハ篩ニテ蠶坐ノ見エサル位ニ糠ヲ散  
 布シ二回給桑シ三回目ノ給桑ヘ蠶兒ノ這ヒ付クト同時ニ羽箒ニテ籠ノ中央ヘ掃キ寄  
 セ之ヲ木製ノ塗鉢ニ移シ糠ヲ入テ除カニ攪拌シ更ニ糠ヲ布キタル籠ヲ供ヘ置テ當分  
 ニ配置スヘシ蠶兒飼育中尤モ注意スヘキハ除沙ニシテ之レヲ怠ルトキハ如何ニ自他  
 ノ注意ハ周到ナルモ蠶下堆積スルトキハ空氣ノ不流通ヨリ或ハ酸酵シ或ハ蒸熱ヲ醸  
 シテ臭氣ヲ發スル等総テ蠶病ノ起因トナルモノナレハ手ノ及フ丈ハ除沙スル事肝要  
 ナリ

○蠶種及掃立

種紙ノ兩端ニ糸ヲ附ケ蠶室ノ中央四尺高サニツリ置キ催青迄ハ毎日二回宛上下ニツ  
 リ換ヘスヘシ而シテ催青ニ至ラハ種紙裏面ノ中央ヘ手カケ糸ヲ附ケ置ヘシ蠶種ハ發  
 生ハ當日早朝紙ニテ包ミ籠ノ裡チニ平面ニ直シ棚ノ中程ニ載テ發生ヲ待ヘシ掃立ハ  
 蠶兒一般發生ノ後即チ正午十二時頃ヲ以テ適當トス此時細末ナル糠ヲ薄ク種紙ノ全  
 面ニ散布シ上ヨリ細カナル刻ミ桑ヲ給與シ暫時ニシテ蠶兒ノ能ク這ヒ付クト同時ニ



片手ニテ裏ノ手カケ糸ヲトリ逆シマニシテ裏ヨリ靜カニ羽箒ニテ叩イテ下ロスヘシ

○第一齡

蠶種ナツ、ミタル紙面ニ蠶兒ヲ掃キ下ロシテホトヨク配置シ直チニ給桑スヘシ二度目ノ給桑ハ大低二時間位ヲ經過シ初桑ノ全ク枯ル、ヲ待ツテ給與スヘシ(暑強キトキハ此限ニアラズ)蠶兒發生ノトキハ脱皮ノ時ト同シク身体至ツテ軟弱ナレハ妄リニ飽食セシムルハ却ツテ害アリ二度目ヨリ以後ハ桑ノ枯レ或ハ絶ルヲ待ツテ給與シ蠶座ノ積ルト共ニ分箔スヘシソレヨリ段々飼育シテ蠶兒ノ眠リヲ催ストキニ至リ除沙スルニハ其時期ヲ誤ラザルヨウ注意セサル可キヲ先ツ蠶體ニ光澤ヲ帶ヒ食欲稍減少セシトキ除沙ノ用意ヲナシ凡ソ一枚ノ籠中一二頭ノ眠蠶ヲ視ハ直クニ除沙シ二枚ヲ三枚位ニ分箔シ一般蠶兒大概ノ熟眠迄ハ薄ク頻リニ給桑ス之ヲ責桑ト云フ而シテ蠶兒ノ熟眠中ハ糠ヲ使フテ濕氣ヲ防キ桑屑又ハ蓬ヲ細カニ刻ミ之レヲ散布暑熱ヲ凌キ以テ蠶兒ノ脱皮ヲ待ツヘシ

○第二齡

籠中僅カノ起キ蠶ヲ憐レミ妄リニ給桑スヘカラス若シ妄リニ給桑スルトキハ一般蠶兒ノ長成ヲシテ非常ニ不齊ナラシメ飼育ノ困難ヨリ終ニハ種々ノ病原ヲ引起スニ至ル故ニ全体蠶兒脱皮ノ後除沙ノ用意ヲナシテ(此時マテ搗キ糠ヲ用ユ)桑付ナシ兩度給桑シテ除沙ス余ハ第一齡ノ飼育ニ同シ

○第三齡

本齡ハ一齡二齡ニ比シテ少シク眠込ミノ緩慢ナルモノナレバ十中八九ノ熟眠蠶ヲ親ハ網チカケ給桑シ未タ眠ラサルノ蠶兒ヲ揚ケテ別籠ニ移シ頻リニ責桑ヲ入レテ晩レヲ輓回スヘシ然ラサレハ矢張り四齡ノ脱皮ニ至リ大ニ不齊ヲ來スノ恐レアルモノナリ

○第四齡

本齡ハ實驗上飼育中ノ尤モ大切ナル時ナリ本齡ヲ無事ニ通過スルトキハ結果ニ疑ナキ事ヲ信ス故ニ本蠶ニ失敗スルモノ多クハ此時ノ不注意ヨリ空頭又ハ不眠蠶起キ縮ミ等ノ諸病ヲ發シツマツクモノナレハ萬端油斷ナク注意ヲ怠ルヘカラズ



○第五齡

本齡ニアリテハ起蠶ノ口ヲ摘ヘルコトニ意ヲ用ルヨリハ最モ蠶兒ノ衛生ニ注意スヘ  
シ諭ヘ蠶兒ニ不齊ヲ來タスモ格別頓着スヘキコトニアラス故ニ籠中二三頭若クハ四  
五頭ノ眼蠶アルモ除沙ノ用意ヲ(此時迄洗ヒ糠ヲ用ヒ以後ハ糠ヲ廢止ス)爲スヘシ又  
本齡ハ蠶兒蕃殖シテ二日目頃ヨリハ食盛リトナルモノナレハ成ルヘク四齡ノ熟眠中  
ニ貯桑シ置キ給桑ニ不足ヲ告ゲサルヨウ用意シ除沙ニ怠リナク蠶兒ノ老熟迄ハ非常  
勉強スヘシ然レトモ老熟期前即チ四日頃ニ至リテハ摘桑ニ注意セサレハ折角ノ貯桑  
モ不用トナルモノナリ

○上 簇

五齡ノ桑付ケヨリ五日目ノ午後カ六日目頃ニハ蠶兒必ズ老熟スル者ナレハ豫メ上簇  
ノ準備ナカルヘカラズ而シテ簇ノ材料ハ種々アリト雖トモ畢竟其土地ニ於テ得易キ  
モノヲ用ヒ成ルヘク其構造ヲ粗疎ニシテ空氣ノ流通ヲ能クシ濕氣ヲ含マサルヨウ注  
意スヘシ而シテ熟蠶ヲ撰フニハ蠶體ニ糞ノアル時期即チ尾部ヨリ凡ソ四節位ハ不透

明ニシテ其レヨリ上部ノ稍透明ニナリタルチ度トシテ拾ヒ取ルヘシ若シ之ニ反シテ  
全身完ク透明トナリタルノチ之レヲ拾ヒテ簇ニ入レハ既ニ結繭ノ時期ニ到達セルチ  
以テ簇中ヲ這ヒ廻ル中ニ贅冗ノ糸ヲ吐キ且ツ勢力衰口ヘ良繭ヲ結ハサルモノナリ

土 土 土 土 土 土

性來脆弱ノ秋蚕種ノ多キ理由

長野縣小縣郡本原村

山崎 右源 治

(一)種類ノ虚弱

昔時ハ繭ノ善惡ニ拘ラズ素質ノ強壯ナル種類ヲ養ヒマシタカラ平均上收穫モ澤山ア  
リマシタガ轉近ハ改良々々トノミ唱ヘテ豊作連作ハ扱テ措キ優美ノ繭ヲ得ンコトニ  
ノミ心ヲ寄セ無我夢中ニナリテ高尚ノ種類チノミ養フ様ニナリマシタレハ種屋モ亦  
高尚優美ノ種類ヲ拵エテ之ヲ販賣スル様ニナリマシタ扱コソ近年ノ秋蠶ハ病ニカ  
リ易クシテ飼ヒ惡クナリ遂ニ今日ノ如ク多數連作ノ不結果が出来テ參ツタ譯デアリ



マセウ一昨明治二十八年ハ秋蠶ノ結果悪シキ年柄ナルニモ拘ラズ小縣郡泉田村品評會ノ成績ヲ見マスレハ秋蠶ノ繭一粒ノ絲ノ長サガ二千七百三十尺ニ達シタルモノガアリマシタ是等ノコトハ進歩トイフ上ニ於テハ喜フヘキコトナレトモ斯ル種類ヲ世間普通ノ養蠶家ニ飼ハセタナラハ違作ハカリガ澤山出來テ甚タ不利益ノ始末ガ多イデアリマシヤウ現今普通養蠶ガ違作ヲ來ス原因ハ種々アリマスルナレドモ物好キの種類ノ撰ヒ方が一大原因ヲ爲スコト、存シマス去レバ秋蠶ヲ飼フ人々ハ之ヲ春蠶ノ副業ト思ヒ物好キ的立派ニ過ギタル種類ヲバ廢シ強壯ノ種類ヲ撰ヒテ飼育シ澤山ノ繭ヲ取り充分ノ利益ヲ得ルコトヲ心掛クルガ上策デアリマス

(二) 微粒子違傳ノ虛弱

微粒子ノ性質ト申シマスモノハ温度ノ高低ト濕氣ノ多少トニ因テ其蕃殖方ニ異同ガアリマス去レバ春蠶ノ時分ニハ温度モ低ク濕氣モ比較上少ナイカラ微粒子ノ蕃殖方モ亦少キモノナレトモ秋蠶ノ親即チ「モトコ」ノ育ツ時分ハ一年中最モ濕氣ノ多キ梅雨ノ候ニテ温度モ亦春蠶ノ季節ニ比ブレバ餘程高キ頃デアリマスルカラ隨テ微粒子

ノ蕃殖方モ格別多キコトデアリマス斯ル時分ニ「モトコ」ノ飼育者ガ其原種ノ撰擇ヲ忽セニシ蠶室蠶具ノ消毒ヲカメズ飼育其法ヲ盡サザレバ微粒子ノ蕃殖ハ益甚ダシキヲ加ヘ遂ニ其種ニ傳ハルノ不幸ハ到底免ガレンモノデアリマス此ノ微粒子ヲ澤山有シテ居ル種ハ如何ニ上手ニ養フモ蠶ノ發育ガ不揃ヒトナリ或ハ細蠶が出來タリ又ハ縮蠶トナリ杯致シテ結局一粒ノ繭ダニ見ルコトノ出來ヌ程ノ違作ヲ來スモノデアリマス現今秋蠶ノ違作ハ微粒子ノ害ガ最モ大ナル原因デアリマス去レハ秋蠶種ヲ購フモノハ充分ニ能ク檢査ヲ致シ該病毒ノナキモノヲ撰ヒテ掃キ立ツルガ肝要ノコトデアリマス如何ニ頑固ナ種屋デモ秋蠶ノ時分ニ無毒ノ種ト有毒ノ種トヲ飼ヒ比マタナラハ忽チ其害ノ恐ロシキコトヲ曉リ瘡セ我慢ノ角ハ必ズ折レテ微粒子ハ繭ノ收穫ニ關係ナシ杯トノ話シハ再ヒセヌ様ニナルハ請合デアリマス現ニ秋蠶ノコトヨリ致シテ宵ヲ脱キタル種屋ガ澤山アリマス

(三) 飼育上ヨリ來ル虛弱性違傳

秋蠶ノ「モトコ」ガ發育スル時分ハ前陳ノ通り濕氣澤山ノ梅雨中デアリマスルカラ若



シ油斷致シテ蠶下ノ乾カヌチモ搆ハズ又過度ノ給桑チナシ不斷 下ガ堆積致シテ居  
ル時ニハ爲ニ必ズ空頭蠶ガ出來マス此ノ病ニ罹ルモノガ多ケレバ縱令繭ヲ作りテ蛾  
トナルモノアルモ其種ニハ多少虛弱ノ性質ヲ傳フルモノデアリマス故ニ秋蠶種チ飼  
フニ方ツテハ成ルヘク種屋ノ「モトコ」チ見テ空頭蠶ノ居ラヌ家ヨリ其種チ購ヒ入ル  
、ガ安全デアリマス

又前陳ノ關係ノナイ種デモ意外ニモ違作ノ酷イモノガアリマスガ是モ矢張り「モト  
コ」ノ飼ヒ方ノ惡シキヨリ起ルコトニテ其重ナルモノヲ舉テ申シマスルト桑不足ノ  
關係ガ甚ダ多イデアリマス桑不足ハ何ヨリ起ルカト尋ネテ見マスルト彼ノ返リト申  
シテ初度ノ原種ガ催青當時ノ溫度ノ作用ニ由ツテ其本然ノ性質ヲ變シテ其年再ヒ孵  
化スルコトナク越年スヘキ卵トナルコトノアルチ種屋ガ其理チ解シマセンデ是レハ  
飼育上給桑ノ多キニ過グルニ因ルト思ヒ妄リニ給桑ノ分量チ減シ僅カニ命チ繋クニ  
足ル位ノ給桑チ以テ上簇ニ至ラシムル者ガアリマス斯ル飼ヒ方ノ蠶兒ハ常ニ營養補  
給ノ作用ガ不充分デアリマスルカラ爲ニ瘡セタル弱キ蛾チ發生セシムル様ニナリ其

種ハ比較的ニ小サク手チ觸ル、ト容易ニ落チル様ナ虛弱ノモノガ出來テ飼育ノ結果  
思ヒモヨラス大違作チ來スモノデアリマス又厚飼ヒニ過キテ食不足ノ弊モ亦同シコ  
トデアリマス又一ツニハ空氣ノ流通ノ惡シキ爲ニ「モトコ」ノ弱ク出來ルコトガアリ  
マスガ是ハ「モトコ」ノ飼育中余リ戸ヤ障子チ密閉シテ置キマス故ニ空氣ガ不足致シ  
テ自然ト虛弱性チ種ニ傳フルモノデアリマシテ是等モ蠶ノ病ト共ニ恐ルヘキモノテ  
アリマスルカラ秋蠶チ飼フ人ハ是等ノ專柄チ能ク取調ヘテ不都合ノナキ種ヲ購ヒ入  
ル、ガ肝要ノコトデアリマス

以上述ヘマシタル種類ノ虛弱ナルモノニアリマシテハ管ニ飼ヒ惡キノミナラズ違作  
チ來ス原因ナレハ縱令其他ノ各項ニ於テハ充分善長ナルモノチ避ケテ飽マデモ蠶ノ  
體質強壯ノ種類チ撰フガ肝要デアリマス種ノ検査上微粒子ノ遺傳モナク又肉眼ノ鑑  
定上申分ナキモノニテモ蠶ノ素質ガ余リ高尚ニ過ギマスト矢張り飼ヒ惡キモノデア  
リマスカラ與々モ飼ヒ易キ種類チ撰フガ第一利益デアリマス種チ鑑定スルニハ單微  
鏡チ以テスルト肉眼チ以テスルトノ兩様ノ方法ガアリマシテ顯微鏡ニハ學術上ノ規



則ガアリマスレド肉眼ニハ定リタル充分ノ規則ガアリマセンカラ極メテ困難デアリ  
マス去リナガラ私ノ經驗デハ種紙ノ面ヲ隈ナク視察致シテ卵ノ形ガ善ク揃ヒ水ノ引  
キ方が程好ク參リ恰モ石臼ノ坐ハルガ如ク臺紙ニ附着シ種ノ色ガ淡キ黄色デアツテ  
曇リナク透キ徹ルガ如ク見ユルハ最モヨキ種デアリマス蠶ノ發生セシ後無色透明水  
晶ノ如ク見ユルハ即チ是等ノ種ノ空殻デアリマス俗ニ出殻ガ水晶ノ如ク透明ナレバ  
秋蠶ノ豐作疑ヒナシト云ハ此故デアリマス若シ之ト異ナリ種ノ形ガ適度ヲ失ヒテ小  
粒ニ起キ附着力弱ク手ヲ觸レハ容易ニバラ、落テルハ虛弱ノ證據デアリマス又横  
ニナリテ附着セルモノ多ク或ハ濃キ黄色ヲ呈シ曇リテ透キ徹ラヌモ亦惡種ノ證據テ  
好結果ハ決シテ得ラレマセシ甚ダシケレバ一粒ノ繭ヌニ見ルコトが出来ヌト申シマ  
シテ差支ヘナキコト、信シマス

種ノ形ガ適度ヲ失ヒテ小キハ粗種ナリトノ説ニ就テ或ハ否ラヌトイフモノモアラシ  
カナレトモ大トイヒ小トイフハ何レモ比較上ノ形容詞ナレバ實物ニ對シテ説明ヲ致  
サスト充分解リマセンケレトモ茲ニ述ヘマス所ノ大綱ヲ心得テ實物ヲ見マスト大

抵解リマス卵ノ餘リ大粒ニ過ギマスルノハ固ヨリ宜シクアリマセン今一ノ例證ヲ舉  
ケテ申シマスレバ「モトコ」ガ餘リ薄飼ヒニ過ギテ蠶ノ躰ガ太リ過ギマスト蛾ニ化シ  
テモ亦大ニ過キ其運動緩慢ニシテ適度ヲ超エタル大ナル卵粒ヲ産ムモノデアリマス  
此ノ大ナル卵粒ヨリ出ヅル所ノ蠶ハ些細ノ害ニモ侵サレ易ク發育不揃ニシテ充分ノ  
結果ヲ見ヌコトガ澤山アリマス世人ガ大粒ニ過ギタル種ヲ宜シクナイト申スハ全  
ク之ガ爲メデアリマス之ニ反シ「モトコ」ガ厚飼ヒニ過ギ食不足ノ爲メニ種ノ小粒ニ  
過ギタルモノ、如キハ始メノ揃ヒ方ハ宜シキモ其狀況一變シテ遂ニ失敗ニ歸スル  
ガアリマスルカラ種ノ鑑定法ハ先ヅ以テ前ニ述ヘタル要點ニ注意シ能ク々々其種ヲ  
視テ善キガ上ニモ良キ種ヲ撰ビ求ムヘキコトデアリマス  
春蠶ノ種ニアツテハ中等以上ノモノナレハ其飼ヒ方サヘ宜シキトハ大シタ區別モ見  
エザルモノナレトモ秋蠶ニ在テハ種ニ七分飼ヒ方ニ三分ノ力ヲ持ツテ居ル程ノモノ  
デアリマスカラ秋蠶ヲ飼フ人々ハ力ノ及ブ限り能ク充分ニ吟味致シテ善良無比ノ種  
ヲ購ヒ求メテ掃立テチバナラスコトデアリマス



右ノ如ク種ノ撰ヒ方ハ至ツテ大切ナル事ナルニ世ノ養蠶家ノ中ニハ調ヘガ疎漏テアツテ何故ニ違作ヲ來シタルガ又如何ニスレバ充分ノ收穫ガアルカトイフ要點ガ解ラヌカラ所謂暗中物ヲ探クルガ如ク幾多ノ製糸者ヨリ蠶種ヲ求メテ何レガ豊作スルデアロフト多クノ種代ヲ捨テ、萬一ノ傍侍ヲ望ンデ居ルモノ、如キハ實ニ氣ノ毒ノ至リテアリマス故ニ今御參考マデニ種ノ鑑別ノコトヲ説キマシタガ實ハ種デハナカ、容易ニ解リマセン故ニ成ルヘクハ種ニナラヌ前ニ充分ノ注意ヲ致シ完全ナル種ノ求メ得ラル、工夫ヲ爲スノが必要ノコト、信シマス

秋蠶種ノ撰ヒ方並ニ購入

長野縣小縣郡本原村

山崎 右源 治

(一)種類選擇ノ心得

蠶種ヲ購入スルニ方リ其名稱ヲ頼ミト致シテ注文スルト云フコトハ決シテ出來マセ

ン如何トナレハ同一ノ種類ノモノニツモ三ツモ名ガ附テ居リマシテ甲ノ製種家ニハ「中巢」ト云ヒ乙ノ製種ニテハ「ロタイト」云ヒ丙ノ製種家ニテハ綾錦トイフガ如ク各勝手ノ名稱ヲ附ケマスルカラデアリマス凡ソ秋蠶ヲ養ハント欲スルモノハ老練ナル製種家ニ就テ蠶種ノ性質強壯ニシテ而モ糸質ノ宜シキ種類ヲ撰ビテ幾枚入用トカ又ハ代價ハ何種トカイフ様ニ特約ヲ結ビテ注文ヲ致シタナラハ素性ノ知レタル種類ヲ揃テ購ヒ求ムル事が出來テ至極安全ナリト考ヒマス

(二)元蠶鑑定ノ心得

秋蠶ノ「モトコ」ハ一年中最モ季節ノ悪シキ梅雨ノ時ニ育ツルモノ故ニ老練ノ製種家ト雖モ年ニ由リテハ多少ノ缺點カナイト云フコトハ保證カ出來マセン去レハ「モトコ」ヲ視ルト云フコトハ極メテ必要ノ事デアリマス其ノ視方ハ甚ダ至難ナレトモ要點ヲ摘ミテ申セハ先ツ左ノ如クデアリマス

一製種ニ就キ「モトコ」ヲ視ルニ先ダチ蠶室ノ廣サト蠶ノ分量トハ適當ナリヤ蠶座ノ厚薄ハ如何蠶ノ動作ハ如何ト大體ニ就テノ觀察ヲ下シテ若シ飼育方宜シキチ



失ヒ蠶ノ動作不活潑ニシテ頭部ヲ低シ割合ニ瘡セテ見ユレバ注文ヲ致サヌガ安  
全デアリマス是ハ養法ノ不完全ヨリ致シテ虛弱ノ性質ヲ遺傳スルカラデアリマ

ス

二大脉ノ觀察ヲ終ラバ病蠶ノ有無ニ注意シ若シ細蠶ヤ縮蠶ノ見ユレバ「モトコ」ナラ

バ注文致シテハナリマセン是レ蓋シ微粒子遺傳ノ恐レガアルカラデアリマス

三空頭病ノ見ユル「モトコ」ハ注文シテハナリマセン是レハ虛弱ノ性質ヲ遺傳スル

カラデアリマス

四「モトコ」ノ四齡ヨリ肥料ヲ充分ニ施シテ能ク熟ヒシ桑葉ヲ與ヒナケレハ堅實ナ

ル蛹ハ得ラレヌノデアリマス若シ此時ヨリ余リ嫩キ桑葉ヲ與ヒマスルト自然ト

蛹カ柔カニナリ虛弱性ヲ遺傳スル恐レガアリマスカラ其事實ヲ探究致シテ之レ

ヲ認メルトキハ注文致サヌ方ガ安全デアリマス

五「モトコ」ノ觀察ハ一回ニ止メズ時々出張シテ數回ニ涉ルチ宜シト致シマス若シ

一回ノ觀察ナラバ四齡ノ後ニ於テスルカ得策デアリマス

右ノ觀察ハ其道ニ慣レタル人ヲ撰テ蠶種ノ製造元ニ出張セシメ鑑定上愆リナキ様注  
意致シテ完全ナル蠶種ヲ購入致サネハナリマセン

(三) 繭並ニ蛹鑑定ノ心得

秋蠶ノ原繭ハ形カ小サク糸層薄ク致シテ第二化即チ二度目ノ發生終局ニ至テハ善キ  
繭ヲ作ルノガ彼ノ本性デアリマスカラ第一化即チ初度ノ發生ノトキニハ決シテ繭ノ  
形ガ大キク糸層ガ厚ク外觀ノ優美ナキモノヲ善トハ云ヒ得ヌモノデアリマス只原繭  
ハ形小サキ又糸層薄キモ其中ニアル蛹カ充分熟シテ堅ク脂肪ニ富ミテ光澤ノアルチ  
以テ宜シト致シマス然ルニ是等ノ事實ニ慣レヌモノハ春蠶ノ原繭ノ同シモノト思ヒ  
徒ラニ外觀ノ善キモノニノミ眷戀致シテ言フニ言ハレヌ妙味ヲ看破スルコトノ出來  
ヌモノ、多キハ氣ノ毒ノ至リテアリマス又蛹ヲ肉眼ニテ鑑定スルニ一ノ良法ガアル  
則チ原繭ヲ切斷シテ蛹ヲ出シ試ニ指頭ヲ以テ其腹部ヲ推シ其局所ガ容易ニ窪ミテ  
彈力ナキハ柔軟ナル證據デアリマス是レハ飼育中食不足ノ爲メ又柔軟ナル桑葉ヲ與  
テ育タルガ爲メ因ルモノデ斯ル蛹ノ化シタル蛾ハ虛弱ナル卵ヲ産ミ其ノ卵ヨリ發生



セシ蠶ハ到底繭ヲ得ルコトが出来ヌモノデアリマス之レニ反シテ食桑充分ニ肥料ヲ多ク施シタル桑ノ熟葉ヲ與ヘタルモノハ蛹躰堅實ニテシ頗ル彈力ヲ有シ幾回指頭ヲ以テ推スモ決シテ異狀ヲ呈スルハアリマセン病毒ノ有無ハ顯微鏡的鑑定ニ於テ判明シ得ルモノナレハ茲ニハ述ヘマセン肉眼ノ鑑定ニ於キマシテハ先ツ蛹ガ堅實デアルカ又其光澤ハ如何テアルカト前ニ陳ヘタル方法ニ據リテ之レヲ試ミ不完全ヲ認メタル蛹ナラハ注文セヌガ安全デアリマス

蛹ノ肉眼的鑑定ハ前ニ述ヘタル如クナレトモ夫ニテハ未ダ以テ充分ト申ス譯ニハ參リマセン如何トナレハ眼テ視タ所ニテ完全ナリトテ其内部ニ微粒子又ハ「ミイロツクス」「ビブリオ」等ノ寄生物が存在スルト否トガ知レヌカラデアリマス之レヲ知ルニハ顯微鏡ニ藉ラテハナリマセン私ノ試験シタ所ニテハ蛹ノ検査ハ余リ早キニ過ギテハ確實ヲ得ザルモノ、如ク始メニ病毒少ナキモノガ後ニ病毒多キ成績ヲ呈スルトガ性々アリマシタ所テ蛹ノ検査ハ發蛾前一日ニ於テ致シマスルト蛾躰検査ノ成績ト略ホ合一スルモノデアリマス斯ク發生期ニ逼リテ検査ヲ致シマスルト水分モ脂肪

モ減シ加フルニ蕃殖スヘキ微粒子モ又充分ニ蕃殖致ス故ニ甚ダ視易クシテ其成績カ確實デアリマス扱其検査ヲ爲スニハ蛹ヲ殺シテ乾燥セシメ奇性加里ノ液ヲ加ヘテ之ヲ潰ブシ式ノ如ク検査ヲ行フノガ適法デアリマス其検査成績ニ於キマシテ蛹百頭中ニ微粒子若クハ「マクロツクス」「ビブリオ」等ノ寄生セシモノ二十頭ヲ超ユルモノハ注文致サヌ方が安全デアリマス

#### (四)秋蠶種合同購入ノ心得

前ニ申シ述ヘタル如ク蠶繭蛹蛾等ノ鑑定法ヲ實行シ其目的ヲ達センニハ其地方ノ便宜ニ由テ各申シ合ハセ組合ヲ設立致シテ其道ニ老練ナル人ヲ撰ビテ種屋ニ出張セシメ充分ノ手續ヲ盡シテ完全無缺ノ種ヲ購入シ得ル様心掛ケテハナリマセン善長ナル種ヲ購入スル手續ハナカ、複雑ナルモノデアリマスカラ餘程其道ニ熟練シタル人ヲ撰ビテ委任セヌトキハ當ニ其ノ目的ヲ達スルコトノ出来ヌノミナラズ却テ弊害ヲ生シ易キモノデアリマス故ニ其人ヲ得ルトイフコトガ最モ大切ナ事デアリマス然ルニ世人ハ動モスレバ其道ニ熟練セヌモノニテモ金満家ダトカ又ハ智識ガアル人ダト



カ或ハ御役人様ダトカ云フ様ナ人ヲ出張セシメ折角費用ヲ投シテ其甲斐ナキ結果ガ  
 往々出来テ居ルノハ實ニ氣ノ毒ノ至リテアリマス故ニ私ハ呉レ々々モ其道ニ精通セ  
 シ適當ナル人ヲ撰ヒテ事ニ當ラシムルコトヲ希望致シマス蠶業ニハ蠶業丈クノ學問  
 ト實際トガ入用デ其外ノ學問ヤ立派ナ髯ヤ政治家的智略ナドハ入用ノモノデアリ  
 マセンカラ斯業ハ斯業上ノ學問ト實際トヲ貴ブガ當然ノ事デアリマス兎角目的ト手  
 段トガ齟齬セヌヤウニ心掛ケルガ一番肝要デアリマス

已ニ其キ蠶種カ求メラレタル以上ハ飼育ノ方法ニ充分注意ヲ致シマシテ繭ノ澤山  
 ラ得ル、様ヘ致サネハナリマセンカラ是ヨリ秋蠶ノ飼育法ニ就キ實驗致シマシタル  
 所ヲ御話シ致シマス凡ソ秋蠶ヲ養ニハ其ノ地方ノ風土ヲ商量シ自己ノ境遇ニ鑑ミテ  
 巧ニ飼育ヲ遂ケ充分ノ豊作ヲ得ラレンコトヲ希望致シマス

#### (五)飼育法

秋蠶ニハ殊ニ臨機應變ノ所置ガ肝要デ飼育中最モ困難ヲ感シマスルハ過度ノ乾燥酷  
 熱蒸熱俄然ノ冷濕等デアリマスルガ是等ノ場合ヲ巧ミニ防キ得マスレバ其余ハ左程

困難ノモノテハアリマセン

一蠶室ノ準備並ニ熱氣防禦ノ心得 蠶室ハ蠶兒ノ一小天地從テ其構造ハ大ニ注意  
 セ子ハナリマセン即チ室外ノ氣候ハ如何程變動ガアリマスル共室内ハ依然トシ  
 テ其變動ヲ受ケズ常ニ一定ノ温度ヲ保テ得テ善ク蠶兒ノ發育ニ適スル様ニスル  
 ガ必要デアリマス今其ノ構造々法ノ概略ヲ申シマスレハ春蠶ノ蠶室ハ日アタリ  
 ヨク陽氣ニテ且ツ寒サヲ防ク丁ノ容易ニ出來ルノヲ好ミマスルガ故ニ奥行キ淺  
 クシテ日光ノ充分行互ル平屋カ又ハ二階ヲ以テ之レニ充ツルヲ宜シトシマスレ  
 ド秋蠶ハ二階ヲ嫌テ平屋ヲ貴ビ奥行キ淺キヲ忌テ却テ其深キヲ望ムモノデアリマ  
 ス何故ナレバ春蠶ノ季節ハ温度低ク動モスレバ冷氣ノ侵害アルヲ以テ蠶室ノ構  
 造モ自ラ温暖ニシテ且ツ乾燥スルヲ要スルガ故ニ奥行キ淺キヲ取リ又二階ヲ  
 宜シトスレトモ秋蠶ノ季節ニハ過度ノ乾燥ヲ避ケ又劇烈ノ炎熱ヲ避クルヲ目的  
 トスルガ故ニ二階ヲ嫌ヒ奥行ノ淺キヲ忌ムノデアリマスサレバ秋蠶ノ飼育ニハ  
 平屋ニテ奥行キ淺カラズ常ニ熱氣ニ過キズ清涼ニシテ爽快ナル室ヲ宜シト致シ



マス斯ク申サハ奥行ノ淺キ蠶室ニテハ秋蠶ノ飼育ガ出來ヌカト訝カル入モアラ  
 ンカナレトモ決シテ左ニアラズ奥行淺クシテ底面又ハ室後ヨリ光熱反射シテ室  
 内ニ襲ヒ來ル憂アル場合ニハ萱薦又ハ藁薦ノ類ニテ二間許リモ假庇ヲ作リテ日  
 光ヲ遮キリ以テ反射熱ヲ起サ、ラシムレハ飼育ノ出來ヌコトハアリマセン而シ  
 テ雨天ノ後底面ノ濕潤アルトキハ一時右ノ假庇ヲ取除キテ速カニ乾カシムルノ  
 注意ヲ要シマス

蠶室ハ一棟葺葺カ最モ適當デアリマス瓦葺ハ暑時ニハ非常ノ鬱熱ヲ來シ又寒天  
 ニハ冷氣ヲ導キ易ク而カシテ葺葺屋根ト同一ナル温度ノトキニモ比較的動物躰  
 ニ不快ヲ感ゼシムルモノデアリマス故ニ瓦葺ハ蠶室ニ宜シトハ申サレマセンサ  
 リナガラ在來ノ瓦葺住宅又ハ蠶室ニ於テ飼育センニハ屋瓦ノ上ニ棒ヲ横ヒ其上  
 ニ萱藁ノ類ニテ作りタル薦ヲ載セテ熱ヲ防ギ而シテ瓦ト薦ノ間ハ三寸位隔テ、  
 空氣ノ流通スル様ニスレバ宜シク又瓦庇或ハ近隣ノ土藏其他ノ建物等ヨリ熱ノ  
 反射シ來ル憂アル場所モ總テ同一ノ仕方ヲ以テ防グヲ良トシマス斯様ニ瓦葺ハ

養蠶ノ致シ惡キノミナラズ多少收穫ニモ關係ヲ及スモノデアレハ新ニ蠶室ヲ造  
 ラウト思フモノハ決シテ外觀ノ善惡ニ拘ハラズ蠶ノ強壯ニ育ツヲ專一トシテ瓦  
 葺ニハセヌガ得策デアリマス

室ノ廣サハ春蠶ニアリテハ一室東西二間半南北二間ヲ適當ト致シマス之レヲ連  
 續シテ長サニ至ラシムルヲ宜シト致シマスレドモ秋蠶ニアリテハ奥行深キ蠶室  
 ノ中央ニ稚蠶ノ飼育室ヲ設ケ蠶ノ漸次發育スルニ從ヒ室ト室トノ間ノ障子襖ヲ  
 取リ除キ次第ニ擴ムルヲ良ト致シマス稚蠶ノ時ニテモ室内ノ障子襖ハ常ニ大凡  
 ソ五寸位ハ開ケ置クガ宜シイ去リナガラ直接ニ外氣ヲ室内ニ入ル、ハ堅ク忌ミ  
 マス其譯ハ後ニ述ヘマス扱秋蠶ノ飼育室ノ廣サハ三間四方位ニシテ蠶箔百二十  
 枚位ヲ容ル、ヲ適度ト致シマス天井ノ氣抜き窓ハ秋蠶飼育ノ時ハ春蠶飼育ノ時  
 ト異ナリテ酷熱蒸熱等多キカ故ニ常ニ開放シ置クヲ良トス但シ雨濕侵入ノ恐レ  
 アル場合或ハ風ノ烈シキ時等ハ此限リデアリマセン天井ノ低キトキハ鬱熱ノ爲  
 メニ蠶體ヲ害スルノ虞アレバ寧ロ其高キヲ望ミマス



次に申上ケテバナラヌ事ハ秋蠶ヲ飼育スル室ハ成ルヘクハ夏春蠶ナゾナ飼ハス  
室カ宜シイ其理由ハ一度蠶ヲ飼育イヌシタル室ハ如何ニ注意シテモ多少微粒子  
其他傳染性微菌等ヲ遺シ多少蠶兒ヲ害スルノ虞アルカラノコトデ已チ得ヌ場合  
ニテ春夏蠶ノ室ヲ用ユルトキハ之レヲ用ユル一週間許リ以前ニ清水ヲ以テ蠶室  
及ヒ蠶具ヲ洗滌シ而シテ濕氣ヲ去ル爲メニ焚火スルガ宜シクアリマス秋蠶掃立  
ノ際其最寄ニ春夏蠶ノ汚菌等ヲ置クコトカ随分アリマスルケレトモ此等ハ大ニ  
注意スヘキコトデアリマス

(二)朝夕空氣ノ交換並ニ散熱ノ心得 凡ソ物体カ熱ヲ受ケタルトキニハ一定ノ時  
間内ハ必ラズ保續シテ居ルモノデアリマス蠶室モ其ノ如ク日中受ケタル熱カ籠  
テ居テ日暮ニナリテモ散熱致シマセヌカラ夜ニ入りテモ室内ノ涼シクナルマデ  
ハ戸ヲ閉ソル事ナク障子ノマ、ニテ置キ暖國ニテ直接ニ風ノ當ラヌ限リハ夜半  
マデモ障子下ゲテ障子ヲモ亦開ケ放シ置クガ宜シイノデアリマス(明治二十九  
年ノ如キ系菌取りノ秋蠶ノ期節ニハ太陽ノ没セシ時ヨリ四方八方ノ戸障子ヲ開

#### 放シ置クコト)

又寒國ニテモ午後九時頃空ガ蒼々トシテ澄ワダリ星ノ光リ鮮明ニシテ風ナク暖  
カナル時ニハ四方ノ戸障子ヲ開ケ放シテ置クヘク其時間ハ大凡ソ三十分位ヲ限  
リト致シマス若室内ニ熱ノ籠ツテ居ルニモ拘ハラズ戸ヲ閉メマスルト鬱熱ノ爲  
メニ蠶ヲ害シテ取返シノ出來ヌ様ニナルコトガアリマスレハヨク々々注意セネ  
バナリマセン

又午前三時頃ニ起出テ、曉星ノ光リ鮮明ニ風ナク穩カナル時ハ桑ヲ與ヒ始メテ  
ヨリ之レヲ與ヒ終ルマテハ四方ノ戸障子ヲ開ケ放シテ新鮮ナル空氣ヲ通ハスガ  
宜シイサレド雨降リノ時及風ノ吹ク時杯ハ開ケ放シテハナリマセン

(三)火力利用ノ心得 夏秋蠶ノ季節ニハ火力ヲ用ユヌガ宜シイトイフモノガアレ  
トモ是等ハ未ダ其ノ一ヲ知リテ其ニチ知ラヌ説トイハ子バナリマセン若モ氣候  
カ蠶ノ生活ヲ害スヘキ程ノ變動ヲ來シマスル場合ニハ時ヲ選バズ火力ヲ用エテ  
之ヲ補フコトヲ勉メネハナリマセン去ル年七月下旬ノコトデアリマシタガ恰モ



夏蠶ノ四齡ノ時分俄カニ非常ノ冷氣ヲ來シ高山雪ヲ戴キ少シ白ク見ヘシコトガアリマシタガ此時焚火ニテ室内ヲ暖メ蠶ノ動作ヲ活潑ニシ食慾ヲ起サシメ適當ナル保護ヲ與ヘタルモノハ繭ヲ得マシタレドモ其注意ヲ欠キマシタモノハアハレ違作ノ不幸ヲ蒙リマシタコトカアリマス是ハ夏蠶ニ就テ話ナレトモ秋蠶ノ季節ニハ一層斯ル變動ノアルモノナレハ豫メ目的セル七十度ヨリモ降ラントスル場合ニハ置火又ハ焚火ヲ用エテ室内ヲ暖メ雨天杯ニテ蠶坐ノ乾カヌトキハ焚火ヲ用エテ乾ス様ニ注意スルカ肝要ノ事デアリマス殊ニ注意ヲ要シマスルハ酷熱蒸熱等ノ時ニハ蠶兒ニ桑ヲ與ヘテ焚火ヲナスコトデアリマス是或ハ奇ニ過クルノ説ナリト思フモノモアルヘケレドモ決シテ左様デハアリマセン換氣及ヒ乾濕ノ手段トシテ最モ必要ナル仕方デアリマス又十二時頃給桑シテ寝ニ就クトモ焚火スルカ宜シイ而シテ焚火ノ位置ハ蠶棚ヨリ少ナクトモ八尺位ハ離レテ居ラテハナリマセン

秋蠶飼育室ノ溫度ハ春蠶ノ如ク自由ニ作ルコトハ出來マセヌケレドモ八十七八

度ヨリ昇サズ七十度ヨリ降サズト豫メ標準ヲ定メ置キテ若七十度ヨリ降ルトキハ焚火ヲ用エ又其昇リテ九十度ニモ達スルコトアラハ前ニモ述ヘタル炎熱防禦ノ頃ヲ應用シ且桑葉ニ水ヲ撒布シテ多量ニ之レヲ與ヘ以テ其防遏ヲササネハナリマセン

(四)空氣流通ノ心得 凡ソ物ニハ適度トイフコトカアツテ適度ニ仕事スレハ良キ結果ヲ收メ適度ヲ得ナケレハ下良ノ境界ニ陥ルモノデアリマス然ルニ世ノ養蠶家ノ中ニハ空氣ノ流通ヲ以テ此上モナキ秘密ノ事ト致シ或ハ冷氣ヲ小蠶ニ吹キ當テ或ハ熱風ヲ直接ニ吹キ通サシメテ度外ノ乾燥ヲ來シ爲メニ衰弱ヲ起シテ復タ救フヘキ道ナキニ至ルカアリマスルカ蠶ヲ養フニハ能ク其場合ヲ考ヘテ過クルコトモナク又足ラヌコトモナク中正適度トイフ處ヲ知ルカ甚タ必要ナルコト、存シマス

秋蠶ヲ掃キ立ヨク二眠迄ハ室ノ中央ニテ飼育致シ外圍ノ障子ヲ閉メ室ト室トノ間ノ襖若クハ障子ハ必ず常ニ二寸位開ケ置クカ必要デアリマス世ニハ稚蠶ノ際



ニハ少シニテモ開ケ置クヲ嚴シク忌ムモノガアリマスレトモ是レハ室内空氣ノ  
 鬱滯ヲ成シテ大ニ蠶兒ヲ害スルノ憂カアリマス故ニ右申ス如ク仕切ノ障子必ず  
 半ハ一二寸宛開ケ置キテ空氣ノ新陳代謝ヲ計ルカ宜シク在マス斯クテ追々蠶兒  
 ノ發育スルニ從ヒ漸次ニ其開ケカヌヲ増シ三眼後ニ至ラバ全ク之レヲ取除キ室  
 内ヲ廣クシテ飼育スルカ宜シイ而シテ稚蠶ノ際ト雖モ北方ノ障子ハ常ニ開ケ放  
 シ置キ下ゲテ外氣ノ直接ニ侵入スルヲ防クヘク南方ハ炎暑ノ日中ハ戸障子ヲ閉  
 メ他ノ方面ヨリ清氣ヲ入ラシムル様ニ注意セネハナリマセン之レチ一口ニ申サ  
 ハ秋蠶ヲ飼フ蠶室ハ熱カラズ寒カラズ空氣カ徐カニ通ヒテ室内ニ桑ノ臭ヒナリ  
 室内ニ入レハ眞ニ心地ヨキ氣味ナル様致スカ最大要訣デアリマス  
 氣抜 蠶室ニ入りテ桑ノ臭ヒ其他ノ惡キ臭アルハ是レ全ク空氣ノ流通惡シキ證  
 據ニテ臭氣ノ多ハ蠶ノ危機ニ逼レル時ナレハ斯ル場合ハ速カニ焚火ヲナシ天井  
 ノ氣抜及周圍ノ戸障子ヲ開キテ空氣ノ新陳代謝ヲ爲サシメ室内ノ清ク爽カナル  
 様ニスルカ緊要デアリマス天井ノ氣抜キチノミ開ケテ充分ト思フハ大ナル誤テ

アル此季節ハ寧ろ床下及周圍ヨリ間接ニ清氣ヲ通ハスヲカ大切ノ事デアリマス  
 (五) 催青並ニ掃立ノ心得 卵ノ上面膨起シテ催青シ卵ノ中ノ一部分ニ黒點ノ見エ  
 テ來マシタ時ハ俗ニ眼附トイフ蠶架ノ中央ナル籠ニ桑ノ枝若クハ蓬ヲ置キ其上  
 ニ種紙ノ卵ノ附キタル面ヲ上ニシテ載セ自然ト種紙ノ裏面ヨリ潤リ氣ヲ及ホシ  
 テ卵ノ中ナル毛蠶ノ發育ヲ容易ナラシムル様注意スヘク若シ乾キ過キル時ハ催  
 青一様ナラズ從テ毛蠶ノ發生力數日ニ亘ル事カアリマス斯クテ其種紙ノ下ニ敷  
 キタル桑枝又ハ蓬ノ萎ミタル時ハ新タニ取換テハナリマセン、  
 秋蠶ノ掃立法ハ春蠶ト異同ハアリマセンケレトモ秋蠶ノ發育ハ非常ニ速カナレ  
 ハ從テ敏捷ナル取扱ヒヲセテハナリマセン春蠶ト同シク打撃法ニ依リテ掃立ツ  
 レハ毫モ差支ハナケレトモ一寸便法カアリマスルカラ御話シ致シマシヤウ  
 先ツ種紙ヲ桑ノ枝又ハ蓬ノ上ニ載セル前ニ種紙ノ裏面ノ周圍ニ二寸許リノ紙ヲ  
 貼リ付ケ之レヲ前ニ述ヘタル如ク桑ノ枝又ハ蓬ノ上ニ載セテ潤シ然ル後ニ其種  
 紙ヲ別ニ蠶箔ニ移シ種紙ノ周圍ヲ粟糠又ハ粉糠ノ四ツ割位ニシタルモノヲ堤防



用ハ盛りテ毛蠶ノ散逸ヲ防キ毛蠶ノ盡ク發生スルヲ俟テ其上ニ粟糠又ハ粉糠ノ細カキモノヲ適宜ニ撒布シテ細カニ刻ミタル桑ヲ與ヘ毛蠶ノ其上ニ登リ終リタル後之レヲ顛覆シテ籠ニ撒クヘシ(但シ籠ニハ濕ル場合ヲ除クノ外ハ敷糠ヲ爲サス)其割台ハ春蠶ニテ毛蠶一匁チ一尺坪ニ撒ク所ナレハ秋蠶ハ其二倍即チ二尺坪ニ撒クヲ宜シトシマス是レハ溫度ノ高キ時節ニシテ發育ノ速カナル故テアリマス斯クテ毛蠶ノ糠ニ上ツタ後桑ヲ與ヘテ發育ノ揃フ様充分注意スルカ肝要テアリマス

(六)養桑ニ關スル總テノ心得 春蠶ヲ養フニハ桑ノ新ラシク發シタルモノヲ以テスルカ故ニ軟カナレドモ秋蠶ノ時分ハ之ト異リテ桑ノ葉硬ク且ツ水分少クシテ蠶ニ與フレハ間モナク乾クカ故ニ蠶兒ノ消化ヲ害シ甚ダシキニ至リテハ暫時ニシテ喰フコトノ出來ヌ様ニナルモノテアリマシテ桑ノ事ハ秋蠶ノ飼イ方ノ中ニテ取分ケ大切ナルヲテアリマス故ニ左ニ順序ヲ逐テ一通リ御話ヲ致シマス 葉ノ撰方 秋蠶ニ硬キ葉ヲ與フレハ消化ヲ害シ發育ヲ妨ケ漸次不揃ヒトナリ遂

ニハ瘡七裂ヘテ病ヲ起スニ至ルモノテアリマス殊ニ掃立ノ時分ニ硬キ葉ヲ與フレハ此ノ失敗カ一層甚シクアリマス蠶ノ二眠前ノ頃ニアリテハ恰モ人ニ於ケル嬰兒ノ如ク躰格カ未タ強固ナラヌカ故格別柔キ葉ヲ撰ヒテ與ヘネハナリマセヌ世人之レヲ名ケテ乳桑ト申シマス其摘方ハ桑ノ樹ノ新ラシキ梢一本ニ就キ一葉ツ、ノ割合ニテ芽頭即チ(ヨシ)葉ヨリ第二若クハ第三ノ葉ヲ摘ミ取ルヲ宜シト致シマス是レハ二眠ヨリ前ノ摘方ニテ二眠ノ後ハ其ヨリ下ノ葉ヲ漸々ト摘ミテ與ヘ四眠ヨリハ硬キ葉ヲ與ヘテモ少シモ差支ハアリマセン只余リ硬キ葉ノ肥料ノ少ナキモノヲ與ヘマスルト蠶カ肥ヘス繭モ粗惡ニ出來ルモノテアリマス又桑ノ摘ミ取リ時刻ハ春蠶ト異ナツテ朝未明ヨリ摘ミ始テ十時前ニ止メ又午後ハ四時頃ヨリ始メテ黄昏ニ終ルチ宜シト致シマス

此糸繭用秋蠶ニ與フルニ掃立ヨリ上簇ニ至ルマデ柔カナル桑葉ヲ以テスレハ頁キ繭ヲ得ラレマス

貯桑 春蠶ノ時分ニハ水ヲ桑ニ撒クコトヲ厭ヘトモ秋蠶ノ時分ニハ桑葉ノ中ニ



水分ノ乏シキカ上ニ乾燥ノ劇シキ時ナレハ桑ノ貯ヘ方ニモ亦殊ニ注意ヲ要シマ  
 ス乃チ桑葉ヲ摘ミ來ルキハ朝ノ摘ミ葉ヲ除クノ外日中ノ摘葉ハ之レヲ籠ニ薄ク  
 擴ケテ熱氣ヲ放散セシメ然ル後ニ水ヲ撒布シテ能ク攪拌シ布ノ類ニテ覆ヒ又其  
 上ニ更ニ水ヲ撒キ桑ノ萎マヌ様ニ注意スルコトアリマス若旱天打續キテ桑ヲ與  
 フルヤ否ヤ乾キテ蠶ノ食スル間ニ合ハヌ程ノ場合ニハ先ツ桑ニ水ヲ撒キ其ノ桑  
 ヲ倒ミテ與フルカ宜シイ桑ニ水ヲ撒クハ惡シトノミ思ヒテ水ヲ用セヌトキハ却  
 ツテ蠶ヲ害スルコトカアリマス又霖雨打チ續キテ濕氣ノ多キトキニハ只水ヲ用  
 ヒヌノミナラズ籠ニ糠ヲ用イテ蠶座ノ乾ク様ニセネハナリマセヌ斯様ニ時ト場  
 合トニ由テ種々ノ仕方モ致サチハナリマセヌカラ秋蠶ノ飼方杯ハ中々一定シタ  
 口ハ利ケヌモノデアリマス猶ホ桑葉ノ倒ミ方ニ就キマシテモ春蠶ト大差カナイ  
 カテ何分切杯ノコトハ申シマセヌ  
 給桑分量 前ニモ申シ述ヘタルゴトク秋蠶ノ時分ハ春蠶ト異ナリテ能ク乾ク故  
 ニ一晝夜ニ二三回モ給桑セチハナラヌ事カアリマスルカラ桑ノ貯ヒ方ニ注意

チ致シマスルト矢張り八九回位ニテモ足リルモノデアリマス非常ニ乾ク地方ニ  
 テハ一晝夜ノ間ニ十四五回モ給桑スルコトカアリマスルカ柔カキ葉ヲ撰ヒテ摘  
 ムニハ中々容易デアリマセヌカラ水ヲ撒テ桑葉ヲ生キ返ラシメ之レヲ食シテモ  
 差支ナキ様ニ工夫シ給桑ノ回数ヲ減少スルカ肝要ト存シマス又給桑毎回ノ分量  
 ハ申ス迄モナク春蠶ヨリ多キカ宜シク蠶ノ眠リヲ重テル毎ニ桑ノ切り方ハ大キ  
 クナリ一晝夜間ノ回数ノ減リ行クコトハ春蠶ニ似タレトモ秋蠶ハ四齡五齡ニ到  
 ルモ総テ摘葉ノ桑ナレハ隨テ春蠶ニ比スレハ一晝夜間ニ一二回ハ多ク給桑セチ  
 ハナラヌモノデアリマス  
 (七) 蠶座清潔ノ心得 蠶座ヲ清潔ニナルハ蠶ヲ養フ上ニ於テ最モ大切ナル事柄マ  
 テアツテ養蠶ノ豊作スルモ凶作スルモ大關係ヲ持テ居リマス蠶座ヲ清潔ニセン  
 ニハ蠶下換ヘチ屢々スルコト、蠶座ヲ程能ク乾カスコトカ肝要デアリマス蠶座  
 ノ不潔トイフコトニ就テ申セハ蠶ハ給桑ノ給テ喰尽サズ殘リノ桑ニ大小便チ  
 ナシ汚穢ニ致シマス其汚穢ニ致シタル所ノ喰殘シ桑カ乾クトキハ差支ナケレト



モ若シ乾キ惡シキ時ハ腐敗致シマス此ノ蠶座ノ腐敗ヨリシテ蠶ニ害ヲ與フルト  
キハ如何ナルカ出來ルカト申セハ或ハ胃病ヲ起サシメ又ハ微粒子毒殖ノ誘因  
ナナス者デアツテ其結果トシテハ細蠶不捕蠶縮蠶等トナリ甚シキニ至テハ「シ  
ヤリ蠶」杯ヲ生シテ凶信ニ陥ルコトカアリマス故ニ蠶座ハ乾クトキハ憂トナス  
ニハ足リマセンカ乾カヌ時ハ屢々之レヲ取リ換ヘテ蠶座ノ醱酵腐敗ヲ豫メ防カ  
ネハナリマセン而シテ蠶座ハ青白ク乾ク時ハ毫モ憂トナスニ足リマセンカ黒色  
ヲ帯ヒタル時ハ是レ乾キノ遲緩ナルヲ證セシモノナレハ隨テ其危險ナルヲ曉リ  
之レカ防禦ノ法ヲ設ケテハナリマセン斯ル場合ニ在テハ春蠶ト同シク籠底ニ粉  
糠ヲ敷キテ其乾燥ヲ促シ又給桑ノ分量ヲ減シテ殘桑ノ沼マラヌ様ニ充分意ヲ留  
メテ速カニ取除クヲ宜シト致シマス之レニ反シテ蠶座程能ク乾キテ青白ク見ユ  
ルトキハ給桑ノ分量ヲ増シ蠶ヲシテ食餌ノ不足ナク衰弱セシメヌ様注意セテハ  
ナリマセン

之レヲ約メテ申シママレハ蠶座ノ清潔ハ養法上最モ肝要ノ事デアリマス而シテ

春蠶ノ飼育ト混同シ乾燥ノ程度ヲ失ハヌ様注意スルノモ亦養法上ノ主眼デアリ  
マス

(八)分箔並ニ除座ノ心得 秋蠶分箔ノ割合ハ掃立ヨリ上簇ニ至ル迄順ヲ逐ヒ春蠶  
ニ比シテ殆ント二倍ノ面積ニ擴グルヲ宜シト致シマス乃チ秋蠶一枚(一粒並ヒ  
穴ナシ)ノ毛量ヲ假リニ四匁ト致シマスレハ其箔數ハ左ノ割合ヲ適當ト考ヘ  
マス

- |        |      |
|--------|------|
| 掃立テノ日ハ | 籠一枚  |
| 二日目ニハ  | 二枚   |
| 三日目ニハ  | 四枚   |
| 一眠     | 八枚   |
| 二眠     | 十六枚  |
| 三眠     | 三十二枚 |
| 四眠     | 六十四枚 |



分箔ノ方法ハ稚蠶ノ時ハ春蠶ト同シク粟糠又ハ粉糠ヲ撒キ二三回桑ヲ與ヘテ後  
羽筭ニテ掃キ寄セ迅速ニ籠ニ撒キテ直チニ桑ヲ與フルヲ宜シト致シマス又分箔  
ト給桑トハ成ルヘク別人ニテ爲シ手間ノ取レヌ様ニスルカ宜シイ若シ分箔ト給  
桑ト手間取レル時ハ蠶ヲ衰弱セシムルノ恐レカアリマスルカラ注意セテハナリ  
マセン除座ハ網ヲ以テスレハ速カニ爲シ得ラレマスサリナカラ眠ニカヽリマシ  
夕時ハ網ヲ用エヌ方カ宜シイ吳々モ夏秋蠶ハ蠶下換ノ際乾燥ニ過クルノ虞アリ  
故ニ直チニ給桑スルカ肝要デアリマス

(九)就眠ノ心得 秋蠶ノ季節ハ春蠶ノ季節ト異ナリテ動モスレハ乾燥ニ過クルノ  
憂カアリマス殊ニ眠リニ就ク前ハ多ク給桑ヲ要スルモノデアレハ蠶体白色ヲ帶  
ヒ將ニ眠ニ就カウトスル前ニ座ヲ擴ケ置キ就眠ノ際ニハ柔カキ桑葉ヲ與ヘマス  
ルコト數回七八分就眠シテ眠座ヲ除キ猶直チニ給桑シテ食桑ノ乏シクナイ様ニ  
注意セテハナリマセン又乾燥スル場合ニハ春蠶ノ如ク裸ニテ蠶下薄ク乾キノ甚  
シキ中ニ眠ラシムルノハ惡シキ故斯ル場合ニハ澤山ニ給桑シテ裸ニ十サズ眠蠶

カ程能キ乾キノ中ニ居ル様ニ注意セテハナリマセン

(十)起眠ノ心得 前項ニ申述ヘマシタル通り蠶座ノ乾燥加減ニ由リテ總テノ手段  
ヲモ色々ニ致サテハナラヌコトデアリマスルカ眠起ノ際ハ春蠶ト異ナリテ一齊  
ニ起キ揃フヲ待ツテ居ラナケレハナリマセン若其起キ揃フヲ待ツトキハ却テ蠶  
ヲ衰弱致サセマスル憂カアリマス故ニ七分通りモ起來ラハ一回給桑スルヲ宜シ  
ト致シマス而シテ眠座ハ殊ニ汚穢ナレハ急速ニ蠶下ヲ換ヘテハナリマセン又秋  
蠶ニ就テノ注意ハ桑附ノ際ハ常ニ必ス柔カキ桑ヲ與ヘテハナリマセン何故ナレ  
ハ眠蠶ハ衰弱シテ居ルカラ若シ此時ニ硬キ葉ヲ與フレハ不消化ノ爲メニ病ヲ引  
起スカラデアリマス

(十一)熟蠶取扱ノ心得 熟蠶取扱ノ事ハ春蠶ト異ナルコトハアリマセンカラ之ヲ  
省クコトニ致シマス

(十二)簇ノ持方ノ心得 簇ノ持方ハ春蠶ト異ナル事ハアリマセン而シテ其材料  
ハ地方在來ノ者ヲ以テシテ宜シイ但タ注意ヲ要シマスルノハ空氣ノ流通ノ良キ



様ニスルノカ肝要チアリマス若シ空氣ノ流通惡シク又ハ濕リ易キモノニテ拵ヘ  
 マスレハ藪ノ光澤ヲ損シ且ツ解舒ガ惡シクナリマスルカラ之レヲ忌マネハナリ  
 マセン私カ實驗上良果ノアリマシタ方法ハ乾燥セル小枝ヲ籠ノ上ニ横タヘ其上  
 ニ「ハカマ」ヲ除キテ清潔ニシタル折藪ヲ置キタルモノテアリマス熟蠶ヲ簇ニ撤  
 ク時ハ成ヘク薄クスルヲ宜シト致シマス

秋蠶眠中ノ注意

長野縣南安曇郡温村字住吉

順陽館 兒 嶋 勇 吾

蠶兒チシテ衆蠶チ一様一時ニ催眠セシムルノ甚タ困難ナルハ各自ノ熟知スル所ナリ  
 故ニ一蠶箔中ニ一二分ノ催眠ナキヲ見ルトキハ除沙チナシ尙責桑振桑チナサザルベ  
 カラス然ラザレバ他ノ食ヲ求ムル蠶兒ノ催眠ヲ待ツニ苦ムヲ以テナリ抑モ蠶兒ノ眠  
 皮中ハ蠶体疲勞シテ空腹ノモノナレバ勉メテ室内ヲ靜穩ニシ非常ナル空氣ノ劇入チ  
 防キ温度ノ如キモ少シク緩慢ヲ要ス此時ニアリテ能ク注意セザレバ峻絶ノ後不脱蠶  
 膿質蠶節高蠶細縮蠶空頭蠶大頭蠶チ生ズ總テ養蠶ノ失敗ヲ取ルハ大半此眠中ニ於テ  
 蠶兒ノ暑濕ニ觸ル、所以ナリ故ニ眠座ニアリテハ熟眠セシ蠶兒ノ居裏ヘ綱ヲ少シ揚  
 テテ數十筋ノ藪ヲ敷キ幾分空氣ノ漏入ヲ試ム之レ則チ眠中ノ蠶兒チシテ濕氣ヲ豫防  
 ノ術ナリ且又眠座非常ニ乾燥シテ暑氣ニ觸ル、ト思ハバ其熟眠中ヘ草散ノ術ヲナス  
 之レ暑氣ヲ豫防スルノ法ナリ此草散ニ用ユル者ハ清淨ナル蓬ヲ刻ミテ散布スル者ト



ス然レトモ此時ニ於テ桑葉ヲ與フルトキハ既ニ竣蛻セシ蠶兒ハ餐餉スルヲ以テ不整蠶ヲ生ズル基トス此理由ナルニ依リ勉メテ眠中ノ注意ヲ怠ラザルモノトス草散ノ術タルヤ一齡二齡中ハ蓬ヲ施ス容易ナリト雖トモ三眠以後ハ甚ク困難ナルヲ以テ一室内ヲ限リ床上ヘ一面ニ水ヲ散霧シ草散ニ代用シ暑氣ヲ豫防スルニアリ凡ソ蠶兒ヲ飼育スルニハ草散ヲ施スニ限ラズ蠶齡ニ依リ飼育室ヲ區別スルハ實ニ良法ナリトス

#### 養蠶ニ關スル温度及ヒ給桑ノ注意

養蠶ハ掃立ヨリ氣候ノ順ヲ計リ桑葉及ヒ温度ニ依リテ成育スル者ナレ共其飼育方モ千差万別アリテ容易ニ説キ盡スコト能ハズト雖モ之レヲ大別スレハ清涼温暖ノ二育トス此二種ニ就キテ其論ズル所各一理アリトス如何トナレバ清涼育ト云ヒ温暖育ト云ヒ土地ノ氣候ト習慣ニ依リ其飼養ノ術異レバナリ然リト雖モ清涼育モ清涼ニ過レハ害アリ温暖育モ温暖ニ過ルモ亦害アリ去レハ即チ其適度ハ何レノ點ニアルヤ之レヲ推究スルニ第一其國ノ風土及ヒ其年ノ氣候其時日ノ晴雨ニ依リ以テ室内ノ温度

ヲ定ムルニアリ而シテ第二ハ養桑ノ剛柔及ヒ刻方ノ大小分量ニ注意スル之レナリ例ヘバ適度ノ温度ニ飼育スルモ養桑ノ適度ヲ得ルニアラザレバ良結果ヲ見ルコトナシ之レニ依リテ養蠶ハ適度ノ温度ト適度ノ養桑ト相須テ成育スルモノナレバ温度ヲ第一トシ養桑之レニ亞シ故ニ室内ノ冷暖ニ據リ養桑ノ多少ヲ計リ臨機應變ノ飼育ヲナスニアリ然リ而シテ蠶兒ノ餐食スルハ温度ノ寒暖ニ依ルモノナレバ蒸熱ナルトキハ食ヲ進ミ冷濕ナル時ハ食ヲ進マズ加之朝夕日中ノ差アリテ養蠶ノ桑食ニ緩急アルハ老練家ノ熟知スル所ナリ例ヘバ華氏寒暖計六十度以上ナルトキハ蠶兒ノ食ヲ求ムルアリト雖モ五十度以下ナルトキハ食ヲ求メザルモノナレバ適度ノ溫氣ニ依ラズシテ飼養スルハ勞シテ益ナキモノトス此理由ナルヲ以テ温度及ヒ飼育ノ概略ヲ左ニ記シ養蠶家各自ノ參考トス

天然清涼育折衷育順氣育温暖育ノ種々アリト雖モ凡ソ其飼育ニ付温度ヲ大別スルニ清涼育華氏寒暖計六十五度ヨリ七十五度ノ間ニ飼育シ給桑晝夜平均六七回トス折衷育順氣育ハ七十五度ヨリ八十五度ノ間ニ飼育シ給桑晝夜八九回トス温暖育ハ八十



五度ヨリ九十度ノ間ニ飼育シ給桑晝夜平均十二回トス天然育ハ其時日ノ温度ニ依リ飼育スト雖モ大略此割合ヲ以テ注意ス猶其時日ニ於テ非常ナル霖雨或ハ氣候ノ冷濕ナル時ハ清涼育天然育ヲ除クノ外總テ幾分ノ大力ヲ用非テ温度ヲ補フモノトス凡ソ施桑ノ時間ニアリテハ六十五度ヨリ七十五度ノ間ニ給桑ナラハ散布ヨリ順次三時間毎ニ餐與シ七十五度ヨリ八十五度ノ間ニアリテハ二時間毎ニ給桑シ八十五度ヨリ九十度ニアリテハ一時間ヲ隔テ、給桑ス而シテ桑葉ノ如キハ蠶兒ノ大小ニ依リ桑ノ摘ミ方及ヒ刻ミ方チナスモノトス

かき手本

長野縣小縣郡泉田村大字福田

百瀬兵太郎

い命かけにて蠶飼をすゑは早之日本を富ませたさ  
ろ 祿に應じて蠶家たてゝ利益はかる之國の爲め  
と 掃ふ蠶種を能く〳〵撰み病除くみや顯微鏡  
に 日本魂蠶によせて茂ける桑葉は皆繭に  
は 外の國てもうらやむ蠶飼未熟するのは國の愧  
へ 邊僻山奥よき地があるは桑の植附すまな之  
と 所々に學校立てゝ習ふて蠶飼をして之れ  
ち 地勢風土に蠶飼はよれど桑の有る地はみかあたる  
り 理論書物じや蠶飼はてまぬなれた先師によゑがよい  
ぬ 温みを一度あわせた蠶卵は再び寒氣か害とある



る類なき蠶飼を上手にするは家内和合の共はげみを多く掃よりよい繭卵少し掃ひて手扱のきい様にわ僅かかみの時手間にても蠶飼に手扱は後の損か風と蠶飼に宜敷くあひか少しはかりは北の風よ夜る晝ねすにて蠶飼をしても掛る日數と四十日た高い所に蠶家たてな低き所と濕があるれ練磨學理て繰りとる糸が外の國まで能く光るそ外の國から買込む品と輸り出す生絲の細ひかね常に心を蠶によせて桑の培養にむしのぞきね願ひますぞい蠶飼の間ひたな遊山はやめにしてあ成らは生絲の貿易やめて織物着物で輸りたいら樂て蠶飼とてきあゆへに苦勞しやんせ初よりむ無やみやたらに掃立せず桑と人夫を積らんせ

う浮きつ沈みつ蠶の徳かあるはやまい世の習ひる田舎育ちのわしや蠶しやが絲の光て都まで除之蠶下は人手を入れて日毎々々にとまかよいたれはと蠶のよりたる時か桑のあたいによき時分と桑を切るには蠶の丈けよ四角むらなく幹よけてや休み初めは蠶の色か薄之黄色に透之わいなま蒔ひて散らすと糠をはあらは其日々に煎器がよいけ毛蠶の育てに手扱かあれと後ちは病の基となふふ二つ休みと短かいからに桑の用意を急かんせこ蠶下とまにはいろくありて網に手取にまくりざり之益を見すまか蠶の素性可愛かられりやそれたけにて天氣能い日は蠶具を出して成たけ濕氣を取るかよいあ朝日受けたる地勢を撰み夕日除けあよ蠶飼室



三度休みと蠶のやくよ長と起きぬる濕とのけ  
 き 聞が學理て花をは咲かせたのしテ蠶飼によくみる  
 油断人敵蠶に多し桑の過不足霜や雨  
 め 面倒厭のす蠶の籠と上下左右へ換へしやんせ  
 み 南風をは充分よける烈しく吹之を自ら張して  
 し 濕り烈しく霧まく時は程よ之火力て防かんせ  
 為 繪にもかけをい細かな虫か桑かぬれたにたんとわと  
 ひ 日和見定め桑をはどりも濡れ桑蒸れ葉は毒になる  
 も 最早庭起三日となれば桑の積りて前てしれ  
 せ 世間家なみに白強蠶かあらは蠶下かわかししめて飼へ  
 す 透て糸吐くれ蠶見たならは一つ拾ひに簾はんせ  
 京 今日苦勞の驗か見へて藪をつくらぬれ蠶はあひ

養蠶飼育都々逸

長野縣小縣郡川邊村  
 農桑會員 倉澤金次郎

一に輸出の生糸は蠶飼國の寶を繋ぐもと  
 ろろくに知らぬ濱邊の人も蠶飼く持てはやす  
 は 掃立蠶とたいじにしやんせ末の違も元にある  
 ににわか陽氣の變り一時は桑や蠶に氣を附る  
 ほ 本を讀むにも實地か大事經驗するより外わなへ  
 へ 下手くどひがみをせずし手技のあるを改め  
 と 遠く他國へ賣出生糸下手に採るのは國の恥  
 ち 乳をやる子ともし様に飼は蠶は好く當る  
 り 理屈たしかめ勉強しやんせ病理生理も説て在  
 め 濡た桑を蠶はきらい喰ふがよいとて給論な



留守にするのと手板の元よ蠶のそばをば離れずに  
 起る度毎蠶を見るよ桑の喰ふり揃ふり  
 わ 悪ひ摘桑とリく捨る蒸やちくれや毒にあそ  
 か 箔の扱さし蠶地の操は蠶捕はす秘傳法  
 よ 夜桑給へて給へくど進め夜も蠶は眠りやせぬ  
 た 高へ桑をばむだにはしるを薄く度々やるがいと  
 れ レンデン紙より貴敏な蠶寒多りや少しも働かぬ  
 を 揃ふ様には眠りと起に桑の付止あはてず  
 つ 尽す手品の高下によりて繭の厚へと薄へ繭  
 ね 念に念入湿氣をは去りな兎角蠶は湿氣毒  
 な 永へ間の蠶飼の内も家内和合が第一よ  
 ら 樂な様たと油断せず休の間も氣を付な  
 む 裏と表てをよくく糺し信用ある種買しやんせ

う むらに出る様な蠶は捨る種にいたみが出来て居る  
 お 今之苦勞の蠶飼をするが鈍着るのを見やしやせ  
 の 残す様には桑付やるを残りや蠶下が湿氣で来る  
 れ 起る時には桑は大事十の八九も起きてから  
 く 桑を切るには蠶の次に細くむらなく太過ず  
 や やわらかい桑給ふれば蠶の繭に糸目と光澤あふ  
 ま 間毎く火鉢を入れて湿氣や寒氣除かしやんせ  
 け 毛蠶の間は殊更大事みにも力もあつ内よ  
 ふ 殖て来たなど人夫を増しな手張蠶に損がある  
 こ 蠶尻高めりや第一わるい積りや二度迄扱てやれ  
 ね ねくりや蠶飼はこうしやで居ても種が悪けりや苦勞損  
 て 敵とするのは湿氣蒸れ油断またもこれいがかんて流  
 あ 網を使ふは便利の物よ手間くふいて害はなへ



さ 寒へ熱へも加減の内よ七十四五度が蠶飼頃  
 き 汚なへ處へ蠶にや毒よ掃除が當りの五とめる  
 ゆ 油断大敵戒めしやんせ空氣のこもりや頭すぎ  
 め 眼にも見へない微粒子毒も顕微鏡にて好くわかる  
 み みじんつもれば山とのたごへひだに捨まへ蠶下をば  
 し 濕氣を抜にと糶糠焚火桑は加減第一ぞ  
 系 異國人にも誇りて話す下女が封たる上田精  
 ひ ひまがあるなら折巢やむしろさして蠶飼にあてず  
 も もとは毛程の小さきを蠶も無事に育てば此の太さ  
 せ せはしないこと見廻せず桑の掃除を忘るゝな  
 す 巢やとみするにわ熟蠶計いつをぬえととやどうべし

養蚕富國いろは歌

長野縣小縣郡神科村

塚原角太

い 一に撰むは蠶種ありよ小種買ふて飼はしやんせ  
 ろ 勞して功なき蠶飼をするは種の安いにほれた故  
 は 柱やかべにつるして置ば種がしけるよ注意しあ  
 に 俄にやうきがくるうたならば種のしまつもきづかんせ  
 ほ 保護と貯藏に手ぬまがあれはよい種買うたせんもない  
 へ へたを功者て火力を用ゐる末にや蠶もふはいびやう  
 と 隣りあるきも蠶が出たらやめてやうきをどらしやんせ  
 ち 力つとでは蠶飼はできぬやうきとるのが専一よ  
 り りんき應變しけると見たらちとは火力をつかはんせ  
 ぬ ぬかをつこうにや焼たる糠よ粟ぬかつからとむれやすは



る 留守にするよじや蠶飼はいちぬはいた所がくろうそん  
 を をどり見物神さま参りまんぼしやんせよ四十日  
 わ 僅一日蠶のためにや春夏秋冬あるとしれ  
 か 蠶休にや桑をば取りて程よ久貯藏をしてたきさ  
 よ よると蠶飼に注意の時よ寐すにやうきをどらしやんせ  
 た たれ蠶うみ蠶の其もときけば多く火力をつかう故  
 れ 冷きありとてしめきりたけばしむれ病やれしやり病  
 ろ 外のやうきと蠶室やう衣二十度ちかはば注意しな  
 つ 常の注意は氣籠や桑の切分に蠶下のき  
 ね 眠りてたきしよれ蠶みれば弓の形やしうがしら  
 な 何の仕事もさりとやめて蠶飼するきにあらしやんせ  
 ら 樂を願はば蠶飼の業よ家を富すも國のため  
 む むつましく手とり足とり飼としやんせ蠶飼にけんくわは第嫌

う うへしたの蠶の籠はれたらずかへてやらんせ蠶飼人  
 ゐ ゐやどれもいず働らかさんせ家を富ますも蠶飼業  
 の 昇る朝日をよくく受させて夕日よしあよ蠶飼室  
 た たれそるく物はしけとむれ暑さ寒さに蠶下むれ  
 く 桑を切ぬには短冊ありや四角三角むらがあそ  
 や 休みごしりはきをつけしやんせとか久蠶にきづがつと  
 ま 益きけんがよいからとて油断出来ぬよ蠶飼人  
 け 煙り入たらすぐぬかしやんせ長く籠れば害とある  
 ふ ふし延蠶にちるそのもとは空きの通ひがわるい故  
 こ こしやり病は傳染すればはやくよばうをするがよい  
 に 枝桑とよきて蠶に與へ蠶下取にはなはのあみ  
 て 天氣よい時や小窓をあめて内の空きを拂はんせ  
 あ あまた人夫を雇てたきな仕事れこれのあみやうに



さ 寒はよ、うきが蠶にさわり細蠶うみ蠶や食後れ  
 き きれいに やんせよ蠶飼の室をどのと病ハふまつから  
 ゆ ゆだんする、きや僅のひまにあたら蠶も頭すき  
 先 目にも見えない蠶のやうき取るにや手れんを積し上  
 み 右と左りの蠶のかごをかへて程よく手入しな  
 し 四眠ねきなら蠶れかすか尺坪一まに百計り  
 ち ちらみ取りたる蠶種のしっし見ねて揃ふた此蠶  
 ひ 一ッ／＼にひきたるれとほ拾ふてまぶしにやどはんせ  
 も もこや蠶も上作する、見たらまぶしのやういふを  
 せ 世事を忘れて蠶飼業するも家のため國の爲  
 す すきを蠶の業あらわたしやどんふくろうもいとやせぬ  
 京 今日八日目まゆほし上てめで度蠶の祝とせん  
 明らかにねさまる御代のうまとしの春

英國土産養蠶穴さがら娘義太夫

長野縣小縣郡川邊村

農桑會員 倉澤金次郎

三千世界に蠶飼する人の心は皆一つ蠶の可愛身に餘り毒な桑葉食など云て常々撰み  
 擇で給るに○尻も抜かず朝寝して雨桑蒸桑厭ひなく濕氣の中にて若死を無理にせよ  
 とて捨飼に胴窓悲道の扱を爲さるゝ人があるものか同じ蠶に産れても空氣の通ふ暖  
 き清潔の室に住居して日毎夜毎お好を桑噛よ食ひよと持てあされ未だ其上に乾きた  
 る筈や棟の敷きかいに様々の心使ひ思ひ回せば同す程私程因果を者はあいうまれい  
 であら其日の儘き座敷の床に掛ち捨置き煙や風に吹き廻わされやうやうのことにて  
 内は小供に見付られたが仕合せに掃立られたとよけれどモテモア手荒か意扱に強  
 多しく汚れた濡れ桑を勝手に使ひし庖丁の錆も臭氣も落さず不揃に刻みて給へら  
 れヤット此事に操り抜き少しは食べたれと思ふ様には食されず當座凌ぎに枯桑を一  
 日二日と寒風に吹かれ／＼と暮せしが積もり積もりし蠶尻さい思ふ様にはれ抜もせ



す殖して移す籠さいも夕邊の雨よ濡れ掛り乾き兼たる筈邊にあらす様さい微難り手荒に取りて擴げられ泣て明して一眠の年を取らんもあら悲し乾きて温き處とて籠の隅をば尋ぬれば又掛られる滯桑に忍ひ兼てや哀れにも私しの兄や弟わ終に一眠の齡さへ越すに難やみて不眠蠶の云ふ恐ろしい病に罹りて遂ひ死んだわいなあー

兼て覺悟の上なれば假令如何なる浮思ひつらき浮目に逢ふてあり二眠三眠四眠の末迄も首尾能く生て食ひ延びて心わ白き白糸を結んで解けぬ妹背の中睦まし之蠶卵をは數多殘して國人の富の基を計らんと只夫れのみが樂みに籠の中にて温順ふ囁して居るに情あや柔も火の氣も尽きりて震ふて食事を待ち居けるに隣の婆々と長話し娘に機を織せつゝ私しをば余所に見捨られ晝食夜食も食わずに辛抱し夕日があるわいなアー余所の蠶が明暮に桑よ蠶尻と取持たれ夜わ焚火に温められ家内和合油斷あく思ふ様に肥へふとり成人なさるゝを視るに付け私か主人もあの様なら兄や弟を殺しはせまい未だ夫れのみが外外の者共まで繭蠶白隠病空透節蠶ぞどの病のたえとかさい最後も致まいと思ひ出してわ愚知ながら羨まじうてありません

跡に残りしこの私が瘠せ衰へたる此有様内の妹子の話しでは七日食ふても未だヒキヌ八日食ふても未だヒキヌ九日食ふても未だヒキヌとあぶらるゝのも覺悟の上せめて狭に入られて落葉とあるをまぬかれて汚蘭かりと作りてなぞ一人前の蠶じやと言はるゝ様に成りたいとそればつかかりがきにかゝり涙にむせび居るわいなアー國家思ふ一筋にくゞき立てたる有様無理はり過ぎて哀れなり

蠶ト馬トノユカリ

長野縣小縣郡東鹽田村

横關式左衛門

從來蠶ト馬トハ自然深キ關係ナ有セルカ今ニ至ルモ多々養蠶家ハ午ノ日ヲ貴ヒ蠶種ノ寒水浴ニモ蠶兒ノ掃立モ午ノ日ヲ以テスルヲ吉日トセリ殊ニ年々初春ノ初午トテ春ノ始ノ午ノ日ニ於テ蠶祭ヲ行フノ例今ニ廢レヌ且蠶種家ハ素ヨリ種袋ニ馬ノ姿ヲ繪ナ以テセリ又蠶ニハ総テ延喜ヲ採リ性質強クシテ其勢好シキヲ旨トシ勇駒鈴駒春



駒杯ノ名稱ヲ與フルアリ亦蠶モ其性トシテ多々卵子ヲ産附スルニ駒ノ爪形ニ弦狀ヲ爲セルハ自然ノ例ナリ以上二三ノ義ヲ有セルモ如何ナル場合ニ因リテスルモノナルカ今其紐先ノ説ヲ得タレハ竝ニ記テ同胞諸彦ノ笑ニ語ラントス又諸彦備説ヲ話シ玉ハハ余亦樂ミ其中ニアラン

茲ニ聽得タル説ヲ緒解ケハ養蠶ノ本邦ニ起リタルハ太古豊受大神保食命丹波ノ伊奈子嶽ニ天降り玉ヘシトキ天道日女命ノ受玉ヘシ穀類蠶桑ノ種ヲ求メテ始テ養蠶ヲ爲セ玉ヘリト是ニヨリテ之ヲ視レハ養蠶守護ノ神ハ乃テ保食神ナリ後雄略天皇二十一年丹波ノ比治ノ真井ト云ヘル地ヨリ之レヲ伊勢ニ遷シ奉ル今ノ外宮是ナリ後大御神ノ分零ヲ諸國ニ鎮座シアルハ其數ヲ知ラスト雖モ農事ヲ受持セルノ正一位稻荷大明神モ亦保食命ヲ分零シ奉リシモノナリト○雄略天皇ノ御宇ニ始マリタル春ノ午日ニハ御種祭ト稱ヒ近隣ノ男女共各禮服着用シ蠶種ヲ同處ニ持寄り之レヲ寒水ニ洗ヒ清々潔白トシ上段ニ俛ヘ御酒物ヲ置齋ハシ此年ノ養蠶豐作ヲ祈リ各種ノ過不足ヲ融通スルヲ例トシ互ニ祝ヒ祭リテ此舉ヲ結ヘリ是豊受大神ヲ祭ルニ外ナラス此例ニ則

リ今ニ至ルモ蠶影山蠶玉祭ノ例能ク行ハル太古ヨリ受持マセルハ此大御神ニ外ナラスルハ論ヲ俟タサレトモ今ヤ蠶業ノ進歩大化シテ實ニ蠶ハ人手ニ造リタルモノナルカ人ノ産タルモノナルカ如シト假ニモ之レヲ唱ヒテ貴ム程ノ域ニ際シテハ千万ノ佛尊八百万ノ大御神タチ悉ク蠶神ノ御名ヲ兼稱セラレ六合ニ神佛ノ力ヲ添テ守リ玉フトキハ自ラ養蠶ハ豐作ナルヘケレトモ單ニ神明ニノミ依頼セズシテ吾精神ト云ヒル神ノ力ヲ勵ミテ以テ神明ノ御力ヲ添ラレンコトヲ祈リテコソ豐作成就スルモノナラシ運ハ臥テ待ツヘカラス運ハ臥テ俟テト其運ニ宜シキニ玉ハルトカシ馬ト蠶ニツキテハ様々ノ説アレトモ搜神記ニ言フ太古大人アリ遠ク征テ久ク歸ラヌ其妻ハ世ヲ早フシテ一女子ヲ遺セリ其家ニ一頭ノ壯馬アリ此時女子馬ニ向テ曰フ是レ馬ヨ吾カ父様ヲ尋テ汝カ背ニ乗セテ歸ラレヨ若シ乗セテ歸リナハ吾身ハ汝ニ委セント云ヒケレハ馬ハ之ヲ謹ミ聽テ忽チ背ヲ視セス日ヲ經テ大人ヲ乗セテ歸セリ女子大ニ喜ヒ馬ハ頻リニ女子ヲ戀フ有様ナレハ父之レヲ女子ニ問フ女子ハ赤心以テ事情ヲ答フ父大ニ驚キ直チニ馬ヲ殺害シ皮ヲ剝キ簷ニ掛ケリ女子ハ其皮ヲ視テ曰フ汝



畜生ナガラ早ク其望ミヲ求ム今ヤ皮ニナリテモ尙萎チ戀フカト云ヘケレハ忽チ皮地上ニ落チ女子チ推包ミ鬼風起テ共ニ空天ニ登ル翌日庭木ニ女子ノ屍ヲ遺セリ其屍ヨリ無量ノ蟲生ス是蠶ナリ云々○唐土ニハ堯舜ノ御代ニ雀人馬ヲ庭前ニ放チシニ皇女王會ニ簾ヲ上ケテ馬ヲ視玉フコト深シ馬モ亦玉女ヲ視ルコト恰モ視入レ視取レルカ如シ或夜女王夢ミラクハ(馬告テ曰ク女王ノ艷色美姿撫カナリ吾畜類ナレハ色ニ引カル、ニモ事協ハス吾人間ナレハ積ル思ヒハ嚴モ通ス早晚ハ成ラン成ラチハト)夢覺テ翌日俄ニ馬斃レリ之ヲ野外ニ埋メシガ其地ニ多ク蟲生ス桑アリテ之ヲ食シ繭ヲ結フ之ヲ真綿引カシテ女王ノ手ニ着カレタシト陰過ノ報コソ○又三才圖會ニ云フ蠶ノ神ハ天驕ト名ク天驕ハ諸星ノ司ニシテ蠶神トモ云ツヘキカ此星ハ馬ヲ司ル星ナリト云フ又一説ニハ蠶ハ龍ノ性タリ馬ト氣ヲ同フス故ニ午ノ馬ヲ用フルト○又佛説ニハ養蠶ハ馬馬菩薩ノ始メシモノナリト此菩薩ハ女佛ニシテ常ニ馬上ニ在リ蠶ニ馬チ貴フハ亦此處ニ因ルカノ一説アリ云々○俗説ノ一ニハ下野國結城邊ニ於テ或ル蠶種家或川ノ一本橋ヲ通行中暴風ノ爲メニ種ヲ水中ニ吹流セリ後數日ヲ經テ漸クニシテ

之ヲ探リ得タリ是冬期ニシテ指ヲ屈スレハ種ヲ流シタルハ午ノ日ニシテ探リ得タルハ酉ノ日ナリトカ云々

以上聽ク處ノ馬ト蠶トノ關係ニ於テハ今ヤ信又不信ヲ置クカ疑念其中ニアルヘケン然レトモ古キ傳ハ古キ傳ニヨリテ程度ニ信ヲ置クヘキモノナラン又馬ト蠶トハ非常ニ中好シノ如キモノナレトモ彼是ノ間動物其異ニスル此ノ如キモノナレハ様チ親ク惡意ト云フニモ非サルヘシ昔聖德太子ノ遺言ニ蠶ハ赤子チ育ツカ如シト是ニ因リテ今茲ニ蠶無數ノ意ヲ推察スレハ彼等ノ思フ真意ハ午ノ刻ノ如キ暖カナル氣候ニ生レテ午ノ刻ノ如キ暖カナル氣候ニ程能ク熱カラス寒カラス調度ニシテ自由自在ニ育テラレタシトノ慮セニ外ナラサルヘシ笑話此ニ止マル矣

番重首の女良文明的運動

本章ハ植子ノ順序誤リニ付(春はれと春と思ぬ枯尾花、信濃嵐に吹  
き拂され、都にあらで都路を越して、遙く相摸瀉)ト讀ムヘシ  
次郎 旧の裏手に身を寄



畜生ナガラ早ク其望ミヲ求ム今ヤ皮ニナリテモ尙妾ヲ戀フカト云ヘケレハ忽チ皮地上ニ落チ女子ヲ推包ミ鬼風起テ其ニ空天ニ登ル翌日庭木ニ女子ノ屍ヲ遺セリ其屍ヨリ無量ノ蟲生ス是蠶ナリ云々○唐土ニハ堯舜ノ御代ニ雀人馬ヲ庭前ニ放チシニ皇女王會ニ簾ヲ上ケテ馬ヲ視玉フコト深シ馬モ亦王女ヲ視ルコト恰モ視入レ視取レルカ如シ或夜女王夢ミラクハ(馬告テ曰ク女王ノ艷色美姿撫カナリ吾畜類ナレハ色ニ引カル、ニモ事協ハス吾人間ナレハ積ル思ヒハ嚴モ通ス早晚ハ成ラン成ラチハト)夢覺テ翌日俄ニ馬斃レリ之ヲ野外ニ埋メシガ其地ニ多ク蟲生ス桑アリテ之ヲ食シ繭ヲ結フ之ヲ真綿引カシテ女王ノ手ニ着カレタシト陰過ノ報コソ○又三才圖會ニ云フ蠶ノ神ハ天驕ト名ク天驕ハ諸星ノ司ニシテ蠶神トモ云ツヘキカ此星ハ馬ヲ司ル星ナリト云フ又一説ニハ蠶ハ龍ノ性タリ馬ト氣ヲ同フス故ニ午ノ馬ヲ用フルト○又佛説ニハ養蠶ハ馬馬菩薩ノ始メシモノナリト此菩薩ハ女佛ニシテ常ニ馬上ニ在リ蠶ニ馬ヲ貴フハ亦此處ニ因ルカノ一説アリ云々○俗説ノ一ニハ下野國結城邊ニ於テ或ル蠶種家或川ノ一本橋ヲ通行中暴風ノ爲メニ種ヲ水中ニ吹流セリ後數日ヲ經テ漸クニシテ

之ヲ探リ得タリ是冬期ニシテ指ヲ屈スレハ種ヲ流シタルハ午ノ日ニシテ探リ得タルハ酉ノ日ナリトカ云々

以上聽ク處ノ馬ト蠶トノ關係ニ於テハ今ヤ信又不信ヲ置クカ疑念其中ニアルヘケン然レトモ古キ傳ハ古キ傳ニヨリテ程度ニ信ヲ置クヘキモノナラン又馬ト蠶トハ非常ニ中好シノ如キモノナレトモ彼是ノ間動物其異ニスル此ノ如キモノナレハ様々親ク懇意ト云フニモ非サルヘシ昔聖德太子ノ遺言ニ蠶ハ赤子ヲ育ツカ如シト是ニ因リテ今茲ニ蠶無數ノ意ヲ推察スレハ彼等ノ思フ真意ハ午ノ刻ノ如キ暖カナル氣候ニ生レテ午ノ刻ノ如キ暖カナル氣候ニ程能ク熱カラス寒カラス調度ニシテ自由自在ニ育テラレタシトノ慮セニ外ナラサルヘシ笑話此ニ止マル矣

蠶種者の改良文明的運動

倉澤金次郎

春なれど春と思ぬ枯尾花 都にあらて都路を 沖に漂ふ拾小舟 宿の裏手に身を寄



して 齋圃の業を擴めんと 語る事さいうたてけれ 福嶋大佐の遠征も 鉄石心と  
 思ひあはば 餘所の謗りを憚りて 實業軍の若者を 只一編の丹心と 乾之ひまざい  
 泣き涙 平民主義の端緒とて 種の良否をあから様 國の利益を計るため あらと  
 發きしうらみをば 吾等の身にそ集へくる 忍ひもしすれ唯故に 粗悪の種をば焼  
 き捨てし 農桑會が務むるも 昔しなしたる種賣が 道中種をたばさみて 關八州  
 に東海を 小腰屈めて坊ちんや 一口になり三種と 小鏡を集め雨替し 箱根八里  
 は馬でも越が 歌へし時は昔にて 大井川には鐵橋を 四里の確水も二十六 僅か  
 貨金十錢で 出來る時勢の御代をれや 家業の道も改まり 越して商ふ洋物や 賣  
 買をする保險法 繫く生糸の母をれや 固く結んで解れざる 結ぶことのみを急務と  
 せ

信濃嵐しに吹き拂はれ 越して遙く相摸瀉 たよる手さいも大磯の 心細とも糸  
 筋に よゝある人の門を訪ひ 郡司大尉の航海も 國を愛する赤心の 些細の事に  
 氣をあやみ 貧苦のちまたにさまよする いかで救はで置とへさや 汐干に見へぬ

沖の石 固め上たる農桑會 成産力を起さんと 白狀なして目を覺まし 誓へし事  
 も種賣の 誰れに報はんあじき泣 うらみは兼て覺悟にて 亂れし風儀を糾さんと  
 國の餘畜を拂はんため 時勢と云へる風故ぞ 脚絆はらじに三斗笠 中仙道や北  
 國地 馬や籠にて乗り廻り 鳥や猫まで譽はやじ うそ方價を賣あして 得々然と  
 した時期は 越お越されぬ大井川と 箱根山は隧道に 架て難なく通行し 隧道通  
 ふし七哩 土を踏まずに昇降の 士農工商面々の 店のがざりもがらず戸を 裏と  
 表てのふき品を まして國家の財源を 學理と實地を應用し 實業軍の團躰を 結  
 ぶ事こそ急務とせ



生絲檢査所法令

○生絲檢査所法

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル生絲檢査所法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月十七日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文  
農商務大臣 子爵 榎本武揚

法律第三十二號

生絲檢査所法

第一條 生絲檢査所ハ横濱及神戸ニ之ヲ設ケ

第二條 本邦製産ノ生絲ヲ賣買スル者ハ内外人ハ問ハス檢査所ニ對シ生絲ノ檢査ヲ

請求スルコトヲ得

但シ檢査料ヲ徴セス



第三條 生糸検査所ハ農商務大臣ノ所管トシ此ノ法律施行ニ關スル細則ハ同大臣之ヲ定ム

此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○生糸検査所官制

朕生糸検査所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年七月三日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文  
農商務大臣 子爵 榎本武揚

勅令第九十三號

生糸検査所官制

第一條 各生糸検査所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師

技手

書記

第二條 所長ハ一人奏任トス技師ナシテ之ヲ兼テシム農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ

所中全般ノ事務ヲ掌理ス

第三條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ掌ル

第四條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ従事ス

第五條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第六條 各生糸検査所ヲ通シテ專任技師五人專任技手七人專任書記七人ヲ以テ定員

トス

○生糸検査所臨時商議員規定

朕生糸検査所臨時商議員規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽



明治二十九年一月十六日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

勅令第一號

生絲檢査所臨時商議員規定

第一條 生絲檢査所ニ臨時商議員十名以内ヲ置クコトヲ得

臨時商議員ハ横濱若クハ神戸ニ於テ現ニ生絲ノ貿易ニ從事シ經驗アル者ノ中ヨリ  
農商務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第二條 臨時商議員ハ農商務大臣ノ諮詢ニ應ジ生絲ノ檢査及之ヲ施行ニ必要ナル事  
項ヲ審議スルモノトス

○生絲檢査所司掌事務民事訴訟ノ件

農商務省令第二號

生絲檢査所ハ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

明治二十九年三月三十日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

○生絲檢査所法施行細則

農商務省令第三號

生絲檢査所法施行細則左ノ通相定ム

明治二十九年四月四日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

生絲檢査所法施行細則

第一條 檢査所ニ於テハ左ノ項目ニ付生絲ノ檢査ヲ施行ス

- 一 原量
- 二 正量
- 三 再繰
- 四 織度
- 五 類節
- 六 強力及伸度
- 七 練減



第二條 生絲検査所法第二條ノ検査請求者ハ甲號雛形ニ從ヒ検査ヲ要スル項目ヲ記シ請求書ニ通テ生絲検査所ニ差出スヘシ

第三條 生絲検査所ニ於テ前條ノ請求書ヲ受理シタルトキハ生絲検査所長ハ検査請求書一通ニ生絲搬入及其検査結了ノ時日ヲ記シ之ヲ検査請求者ニ交付ス

第四條 生絲ノ検査ハ請求書受理ノ順序ニ依ルモノトス

但第三條ニ依リ指示セラレタル時日ニ生絲ヲ搬入セサルトキハ此限ニアラス

第九條 生絲検査所所在地ニ在ラサル生絲検査請求者ハ生絲検査所所在地ニ代理者ヲ置キ検査ヲ請求スヘシ

第六條 検査請求者ハ第二條ニ依リ指示セラレタル時日ニ生絲ヲ搬入スルトキハ每一箇ノ重量ヲ記シタル書面ヲ添付スヘシ

第七條 検査ヲ要スル生絲検査所ニ搬入シタルトキハ生絲検査所ハ検査請求者ニ對シ乙號雛形ノ預書ヲ交付ス

前項ノ預書ハ検査結了ノ後生絲ノ引渡ヲ受クルトキ之ヲ生絲検査所ニ差出スヘシ

第八條 生絲検査所ニ於テ生絲ノ荷造ヲ解クトキハ検査請求者ハ之ニ立會フコトヲ得

第九條 生絲検査所ニ於テ生絲ノ検査ヲ終リタルトキハ生絲検査所ハ生絲一箇毎ニ丙號雛形ノ檢定證正副二通ヲ検査請求者ニ交付ス

第十條 生絲検査結了ノ後第一條第一號及第二號ノ検査ヲ請求セル生絲ヲ除キ生絲一括毎ニ検査済ノ證ヲ貼付ス

第十一條 第一條第一號及第二號ノ検査請求者ハ生絲ノ引渡ヲ受クルトキ所員ノ立會ヲ請ヒ檢定正書ヲ其ノ生絲ニ添ヘ荷造ヲナシ之ニ封印ヲ受クヘシ

前項荷造ニ係ル費用ハ検査請求者之ヲ負擔スヘシ

第十二條 第十條ノ検査證又ハ第十一條ノ封印ナキ生絲ハ検査ノ効力ナキモノトス

第十三條 生絲検査所ニ於テハ検査請求者ノ搬入シタル生絲ニ對シ適當ノ保護ヲナスト雖不可抗力ノ爲損失ヲ致シタルトキハ其ノ責ニ任セス

第十四條 第一條第三號乃至第六號ノ検査ニ供用シテ消費シタル生絲ハ還付セス



第十五條 検査ヲ請求セル生糸ニシテ検査ヲ與フルノ價值ナシト認ムルトキハ生糸検査所ハ検査請求者ニ對シ其ノ請求ヲ取消サシムルコトアルヘシ

第十六條 生糸検査所ノ検査ヲ請求スル生糸ハ一箇(八貫目以上)タルヘシ

第十七條 生糸検査請求者ハ生糸ノ見本ニ就キ第一條第三號乃至第六號ノ検査ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ検査請求者ニハ丁號雛形ノ検査成績表一通ヲ交付ス

第十八條 前條ノ検査請求者ニハ本則第六條第八條第九條第十條第十六條ヲ適用セス

甲號雛形

生糸検査請求書

生糸ノ種別箇數(見本生糸ニ限リ其重量)

所有者若クハ製産者ノ氏名(生産地ノ明カナルモノハ其地名ヲ付記スヘシ)

生糸ノ記號及番號(見本生糸ニ限リ記載ヲ要セス)  
検査ヲ要スル項目  
前記ノ生糸御検査相成度此段請求候也

年月日

住所

職業氏

名<sup>印</sup>

横濱  
神戸生糸検査所長宛

乙號雛形

第 號

預 書

一生糸ノ種別箇數及皆掛量

一生糸ノ記號

右預置候也

年月日

検査請求者氏名

横濱  
神戸生糸検査所<sup>印</sup>











○生絲檢查所處務規程

農商務省訓令第三號

生絲檢查所處務規定左ノ通相定ム

明治二十九年二月二十一日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

生絲檢查所處務規程

第一條 各生絲檢查所長ハ官制ノ定ムル所ニ從ヒ法律命令ノ執行及主管事務ノ整理ニ付其責ニ任ス

第二條 各生絲檢查所長事故アルトキハ部下ノ官吏ニ代理ヲ命シ又ハ主管事務ノ幾分ヲ委任シ自己ノ名義ヲ以テ之ヲ處辨セシムルコトヲ得

第三條 各生絲檢查所長ハ事務整理ノ爲メ經伺ノ上所中處務細則ヲ設クルコトヲ得

第四條 各生絲檢查所長ハ判任官以下ノ歸省看護墓參轉地療養願ヲ許可シ及除服出仕ヲ命スルコトヲ得

第五條 各生絲檢查所長ハ日俸拾貳圓又ハ日給五十錢ヲ超ヘサル僱員ノ採用解免ハ

之ヲ專行スルコトヲ得

第六條 各生絲檢查所長ハ其主管事務ニ付各官廳ニ照會往復スルコトヲ得

第七條 各生絲檢查所長ハ檢查請求者ニ交付スヘキ生絲檢定證ニ署名スヘシ

第八條 各生絲檢查所長ハ毎年五月及十一月檢査成績ヲ農商務大臣ニ報告スヘシ

第九條 農商務大臣ニ經伺又ハ報告ヲ要スル事項ハ凡テ農務局長ヲ經由スヘシ

○生絲檢查所仕拂命令ノ件

農商務省訓令第十號

生絲檢查所

明治二十九年年度以降生絲檢查所ノ仕拂命令ハ橫濱生絲檢查所長ニ委任ス

明治二十九年四月一日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

○生絲檢查所會計事務當分橫濱ニ於テ取扱

農商務省訓令第十一號

生絲檢查所



生絲検査所會計事務ハ當分ノ内總テ横濱生絲検査所ニ於テ之ヲ取扱フヘシ

明治二十九年四月一日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

○生絲検査所事務當分農商務省内ニ於テ取扱

農商務省告示第八號

生絲検査所ノ事務ハ當分ノ内農商務省内ニ於テ之ヲ取扱フ(四號ニテ消滅)

明治二十八年七月六日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

○神戸生絲検査所位置

農商務省告示第三號

神戸生絲検査所ハ兵庫縣神戸市榮町一丁目番外二十一番地ニ之ヲ置ク

明治二十九年三月七日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

○横濱生絲検査所當分神奈川縣廳内ニ設置

農商務省告示第四號

横濱生絲検査所ハ當分神奈川縣廳内ニ之ヲ置ク

明治二十九年三月二十八日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

○生絲検査規程

農商務省告示第八號

生絲検査所生絲検査規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

明治二十九年四月一日

農商務大臣 子爵 榎本武揚

生糸検査規程

第一 原量

原量検査ハ天秤ヲ以テ生糸一箇ノ全量ヲ檢シタル後風袋其他附屬物ノ重量ヲ秤リ之ヲ控除シタルモノヲ生糸ノ原量トス

第二 正量

正量検査ハ生糸一箇ノ原量ヲ秤リ九本ヲ採リテ之ヲ三分シ其二分ヲ各々乾燥器ニ入レ攝氏百十度乃至百三十五度ノ温ヲ與フルコト凡ソ三十分時間ニシテ水分ヲ蒸散セシメタル後各一分ノ減耗百分比例ヲ求メ其差〇、五以下ナルトキハ二分平均



ヲ求メテ之ヲ無水量トス若シ其差〇、五以上ナルトキハ更ニ残リノ一分ヲ検査シ三分ノ平均ヲ求メテ之ヲ無水量トシ之ニ生絲固有ノ含水量一割一分ヲ加ヘテ正量トス

第三 再繰

再繰検査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リテ之ヲ再繰器ニ掛ケ生絲ノ細太ニ應シ一分時間四十回内外ノ速力ヲ以テ二時間繰返シ絲條ノ切斷數ヲ檢スルモノトス

第四 織度

織度検査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リテ一本毎ニ長サ五百「メートル」ツ、四口ヲ採リ其一口毎ニ「グラム」ヲ以テ原量及正量秤リ之ヲ平均シテ織度ノ本位ヲ定ムルモノトス

檢定證ニハ賣買上便利ノ爲前項ノ結果ヲ舊式糸條ノ長サ四百七十六「メートル」ニ付「デニール」即チ〇、〇五三一二「グラム」ヲ以テニ比較シ列記スルモノトス

第五 類節

類節検査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リ一本毎ニ二回ツ、五百「メートル」ニ對スル類節ノ多寡ヲ檢スルモノトス

第六 強力及伸度

強力及伸度検査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リテ一本毎ニ二回ツ、之ヲ「セリメートル」ニ掛ケ強力ハ「グラム」ヲ以テ之ヲ秤リ同時ニ伸度ハ「ミリメートル」ヲ以テ檢シ各其平均ヲ擧グルモノトス

第七 練減

練減検査ハ生絲一箇中ヨリ六本ヲ採リ之ヲ三分シテ其二分ノ無水量ヲ檢シ其絲量四分一ノ馬耳塞石鹼ヲ熱湯ニ溶解シ生絲ヲ麻袋ニ入レテ該湯ニ投シ沸煮スルコト二回ニシテ更ニ微温湯ニ投シ之ヲ攪拌シテ清水ニ移シ能ク洗滌乾燥シテ練減ノ百分比例ヲ求メ之ヲ平均シテ謹謨質其他ノ物質量ヲ檢定ス而シテ其差一以上ナルトキハ残リノ一分ヲ検査シ終リニ三分ノ平均數ヲ求メテ之ヲ練減量トス

○生絲検査所處務細則



第一章 總則

第一條 本所ニ左ノ二部ヲ置キ諸般ノ事務ヲ處理ス

事務部

検査部

第二條 事務部ニ庶務、會計ノ二科ヲ置キ左ノ事項ヲ掌ル

庶務科

文書其他物件ノ受入及發送ニ關スルコト

文書ノ點查及取扱ニ關スルコト

統計報告ニ關スルコト

文書ノ編纂及記録圖書ノ保管ニ關スルコト

所員ノ進退身分ニ關スルコト

所長ノ官印及所印ノ保管ニ關スルコト

會計科

經費及諸收入ノ豫算、決算並會計ニ關スルコト

土地、建物及物品ニ關スルコト

第三條 検査部ニ第一、第二、第三ノ三科ヲ置キ左ノ事項ヲ掌ル

第一科

生絲ノ受入、保管及返付ニ關スルコト

生絲ノ査定、定量及原量検査ニ關スルコト

他科ノ検査ニ屬スル生絲配付ノコト

各科ノ検査ニ要スル書類ノ調製及簿記ニ關スルコト

第二科

正量及練減検査ニ關スルコト

第三科

再練、織度、類節、強力及伸度ノ検査ニ關スルコト

第四條 部ニ部長ヲ置キ科ニ科長ヲ置ク各首席ノ者ヲ以テ之ニ充ツ



第二章 事務

第五條 本所ニ到達スル文書其他ノ物件ハ庶務科ニ於テ受入シ後復主任直ニ之ヲ開封シ其月日番號件名ヲ簿冊ニ記入シ各主務科ニ配付スヘシ但親展書ハ直ニ名宛人ニ送付スヘシ

第六條 退所後本所ニ到達シタル文書ハ翌日午前十時前ニ取纏メ前條ノ手續ヲナスヘシ但緊急重要ノ事件ハ宿直ヲシテ取扱ハシム其規程ハ別ニ之ヲ定ム

第七條 庶務科ニ受入シタル文書中金券ヲ添付セルモノハ即時科員二名ノ立會ヲ以テ簿冊ニ記入シ自ラ其金券ヲ携持シ當該官吏ニ交付シ受領ノ證印ヲ徴スヘシ

第八條 事務ヲ處理スルニハ主務科ニ於テ之ヲ調査シ關係ノ科ニ合議シテ所長ノ決裁ヲ受クヘシ但至急ヲ要スル場合ニ於テハ主務科ニ於テ直ニ所長ノ決裁ヲ請ヒ執行シタル後速ニ其成案ヲ關係ノ科ニ回付スヘシ

第九條 各科ニ於テ調査シタル成案ハ其件名番號ヲ簿冊ニ記入シテ之ヲ庶務科ニ回送シ庶務科ハ之ヲ受入シ月日ヲ簿冊ニ記入シテ所長ニ提出スヘシ

第十條 至急ヲ要スル成案ハ主務科ニ於テ之ニ赤色ノ紙片ヲ貼附シ庶務科ニ於テ之ヲ通常ノ文書ト區分シテ所長ニ提出スヘシ

第十一條 庶務科ニ於テ決裁濟ノ成案ヲ受入シタルトキハ發送ノ要否ヲ判別シ其發送ヲ要スルモノハ淨書捺印シ之ニ番號ヲ附シ發送ノ手續ヲナシタル後其旨ヲ簿冊ニ記入シ又其發送ヲ要セサルモノハ決裁ノ月日ヲ文書及簿冊ニ記入シ且ツ之ニ保存番號ヲ附シ主務科ニ回送スヘシ

第十二條 發送文書ニシテ電報又ハ郵便ニ付スヘキモノハ相當ノ切手ヲ貼用シテ簿冊ニ記入シ發送ノ手續ヲナスヘシ

第十三條 緊急又ハ機密ニ屬スル文書ハ通常ノ手續ニ依ラス主任者自ラ携持シテ他科ト面議商量シ所長ノ決裁ヲ請ヒ施行スルコトヲ得ヘシト雖モ施行後速ニ通常ノ手續ヲ履行スヘシ

第十四條 公文ニ添付スヘキ附屬書類及圖表ハ主務科ニ於テ之ヲ調製シ庶務科ニ回送スヘシ



第十五條 文書ノ授受ハ簿冊ニ受領者ノ捺印ヲ要ス

第十六條 事務ニ關スル文書ハ曆年度ニ大別シ會計ニ關スル文書ハ會計年度ニ大別

シ各部門保存期限ノ種類ニ從ヒ結了ノ前後ニ依リ成冊スヘシ

第十七條 文書ヲ成冊シタルトキハ開首ニ件名ヲ附シテ檢索ニ便スヘシ

第十八條 本所ノ文書ニシテ本省規定ノ保存期限ヲ經過シタルモノハ其翌年ノ初ニ

於テ廢棄ノ處分ヲナスヘシ

第十九條 所中一切ノ取締及小使以下ノ監督ハ會計科ニ於テ之ヲ取扱フヘシ

第二十條 所中必需ノ物品ハ各部物品取扱主任ニ於テ物品請求書ニ記載シ所長ノ檢

印ヲ受ケ會計科ニ請求スヘシ

第二十一條 會計科ハ毎月十五日及末日ヲ以テ支出計算表及約束仕拂豫算殘高表ヲ

所長ニ差出スヘシ

第三章 檢査

第二十二條 生糸檢査請求書ハ庶務科ニ於テ之ヲ受入シ其旨ヲ簿ニ記入シ其生糸

搬入及檢査結了ノ時日ヲ請求書ニ記入シテ一通ハ請求者ニ交付シ他ノ一通ハ第一科ニ送付スヘシ

第二十三條 第一科ニ於テ生糸ヲ受入シタルトキハ每一個ノ重量ヲ秤リ之ヲ檢査請

求書ト照合シテ添書ノ重量ト共ニ荷受表ニ記入シ取扱人之ニ捺印シ尙其要件ヲ臺

帳ニ記入シタル後每一個之ヲ査定シ請求書ニ受領ノ證印及取扱人ノ捺印ヲ捺シテ

庶務科ニ送付スヘシ但檢査ヲ與フヘカラサルモノト査定シタルトキハ所長ノ決裁

ヲ受ケ其旨ヲ庶務科ニ通牒シ且其生糸ヲ請求者ニ返付スヘシ

第二十四條 庶務科ニ於テ前條ノ捺印アル請求書ヲ受入シタルトキハ施行細則ニ揭

クル乙號書式ノ預書ヲ調製シ所長ノ捺印ヲ受ケテ之ヲ請求者ニ交付スヘシ

第二十五條 第二十三條ノ査定ヲ完了シタル生糸ハ之ヲ定量シタル後原量檢査ハ直

チニ之ヲ施シテ成績ヲ臺帳及荷受表ニ記入シ其他ノ檢査ハ請求項目ニ依リテ檢査

料絲ヲ採取リ之ヲ定量シテ其成績ヲ臺帳ニ記入シ荷受番號其他ヲ檢査表ニ記入シ

テ檢査料絲ニ添ヘ其檢査主務者ニ交付スヘシ



第二十六條 第三科ニ屬スル検査表ノ項目中検査ヲ要セサルモノアルトキハ第一科ニ於テ之ニ消印スヘシ

第二十七條 検査料繰取扱取濟ノ生絲ハ荷受表ト共ニ第一科ニ送付シ其月日ヲ臺帳ニ記入スヘシ

第二十八條 第二科及第三科ニ於テ第一科ヨリ検査料繰及検査表ヲ受入シタルトキハ之ヲ検査シテ其成績ヲ検査表ニ記入シ検査料繰ト共ニ第一科ニ返付スヘシ

第二十九條 第一科ニ於テ前條ノ返付ヲ受ケタルトキハ其成績ヲ臺帳ニ記入シ練減及第三科ニ屬スル検査ヲナシタル者ハ其検査料系ヲ定量シテ減量ヲ求メ之ヲ検査表、臺帳及荷受表ニ記入シ検査表ヲ庶務科ニ送付シ検査料繰ヲ原括ニ復挿スヘシ

第三十條 庶務科ニ於テ前條ノ検査表ヲ受入シタルトキハ一應檢算シテ査定證簿ニ記入シ檢定證ニ通テ調製シテ之ヲ第一科ニ送付スヘシ

第三十一條 第一科ニ於テ前條ノ檢定證ヲ受入シタルトキハ之ヲ検査臺帳ト照合シテ差誤ナキヲ確認シタル後檢定證番號ヲ臺帳ニ記入シテ再ヒ該證ヲ庶務科ニ返付

スヘシ

第三十二條 庶務科ニ於テ前條ノ檢定證ヲ受入シタルトキハ所長ノ檢印ヲ受ケテ之ヲ第一科ニ送付スヘシ

第三十三條 第一科ニ於テ前條ノ檢定證ヲ受入シタルトキハ其番號ヲ荷受表ニ記入シ施行細則第一條第一及第二ノ検査ニ屬スルモノハ荷造ニ立會ヒ檢定證ヲ挿入セシメ第三及第六ノ検査ニ屬スルモノハ檢定證ヲ貼付シテ預書ト引換ニ生糸ヲ請求

者ニ返付シ其月日時ヲ荷受表ニ記入スヘシ

農商務省令第九號

蠶種微粒子病(一名黑痣病)豫防ノダメ蠶種検査規則左ノ通り相定メ原種ノ検査ハ明治二十年検査期ヨリ施行シ製糸用種ノ検査ハ同二十一年検査期ヨリ施行ス

明治十九年八月十七日

農商務大臣 伯爵 山縣有朋

蠶種検査規則 第一條 凡ソ蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種販賣セントスル者ハ管轄廳ニ願出テ鑑札ヲ受ク



へし

第二條 蠶種ヲ製造スル者ハ此規則ニ從ヒ其検査ヲ受クヘシ

第三條 検査證印ナキ蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第四條 蠶種検査所ハ管轄廳ニ於テ管内便宜ノ地ニ之レヲ設置スヘシ

但シ地方ノ狀況ニ由リ巡回検査ヲナスモ妨ケナシ

第五條 蠶種検査員ハ管轄廳ニ於テ之レヲ命ズヘシ

但シ検査ノ方法ハ別ニ訓令ヲ以テ之レヲ定ム

第六條 春蠶種ノ検査ハ毎年十月一日ヨリ始メ夏蠶種秋蠶種ノ検査期日ハ管轄廳ニ

於テ適宜之レヲ定ムルモノトス

第七條 蠶種ヲ製造スルモノハ春蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造額ヲ毎年七月三十日マテ

ニ夏蠶秋蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造豫算額ヲ検査期日ニヨリ三十日以前ニ管轄廳ニ

届出ヘシ

第八條 蠶種ニハ製造人ノ住所氏名又ハ會社若シクハ組合ノ名稱ヲ記シ之レヲ原種

(販賣用種ノ製造ニ用ユルモノ)ト製系用種トニ區別シテ検査所ニ差出スヘシ

第九條 病毒ノ歩合原種ニ於テハ百分ノ五以下製系用種ニ於テハ百分ノ十五以下ノ

モノニ検査証印ヲ付シ其以上ニ及フモノニハ都テ廢棄証印ヲ付スルモノトス

第十條 廢棄証印アル蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第十一條 蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣スル者廢棄スルカ他ノ管轄地ニ寄留若シク

ハ轉籍スルトキハ其旨ヲ管轄廳ニ届出テ鑑札ヲ返納スヘシ

但シ寄留若クハ轉籍地ニ於テ營業セントスルトキハ第一條ニ據ルヘシ

第十二條 第一條第三條第十條ニ違ヒタルモノハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

茨城縣令第十八號

明治二十五年一月縣令甲第壹號蠶系業取締規則第四條製系用蠶種検査施行手續左ノ  
通相定ム

明治二十六年六月三十日

茨城縣知事 高崎親章



第一條 製糸用蠶種ノ検査ハ其年九月十一日ヨリ十二月三十日迄左ノ地ニ検査所ヲ置キ施行ス

但時宜ニ依リ其他ノ町村ニ於テ出張検査ヲナシ又ハ期限ヲ伸縮スルコトアルヘシ

一水戸市縣廳構内

一眞壁郡下館町

一新治郡土浦町

一河内郡龍ヶ崎町

第二條 蠶種病毒ノ歩合ハ百分ノ十以下ノモノニ検査証印ヲ押捺シ其以上ニ及フモノニハ廢棄印ヲ押捺スルモノトス

第三條 検査証印ヲ定ムル左ノ如シ

(雛形ハ略ス)

第四條 蠶種製造人ハ其年七月三十一日迄ニ其製造枚數ヲ縣廳ニ届出ス可シ

第五條 検査所ニハ「茨城縣製糸用蠶種検査所」ト記シタル標札ヲ掲クルモノトス  
茨城縣令甲第壹號

明治十九年一月甲第七號蠶糸業組合規則左ノ通改正ス

但組合規約及蠶糸検査法ハ本廳へ届出認可ヲ受クヘシ

明治二十五年一月十二日

茨城縣知事 石井省一郎

蠶糸業取締規則

第一條 蠶絲業ニ従事スルモノハ郡市ノ區畫ニヨリ組合ヲ設置シ之レニ加盟スベシ

若シ一郡内ニ於テ分割ノ必要アルトキハ三區畫内ニ分割設置スルコトヲ得

但自用ノミニ供スルモノハ此限リハアラス

第二條 組合ノ名稱ハ茨城縣何郡市蠶絲業組合ト稱スヘシ

第三條 組合員ハ左ノ各項ヲ遵守スヘシ

第一項 繭ハ春夏秋ノ種類又ハ太陽殺蒸燥殺等混淆シタルモノヲ賣買セサルコト

第二項 製絲ニ最モ良好ナル種類ヲ育養スルコト



第三項 繭ノ貯藏法ヲ完全ナラシムルコト

第四項 蠶卵ノ検査法ヲ設ケ蠶病ヲ豫防スルコト

但第四條ニ該當スルモノハ此限リニアラス

第五項 繭及生絲荷造ノ上ハ其組合ノ名稱及製造者若シクハ取扱人ノ姓名ヲ記入

シタル標章ヲ付シ賣買スルコト

第六項 一捆ハ勿論一總若クハ一把中良否混淆等ノモノヲ販賣セサルコト

但等級ヲ区分シテ一捆トナシタルモノハ此限リニアラス

第七項 生絲製造及結束ニ不正ノ重量ヲ付シ賣買セサルコト

第八項 繰取アル揚婁ヲ用ヒ尺度ヲ一樣ナラシムルコト

第九項 生絲ノ結束及紐ノ量目ヲ一樣ナラシムルコト

第十項 生絲検査法ヲ設ケ其精粗ヲ監別シ及製造上ノ弊害ヲ矯正スルコト

第十一項 蠶卵絲種ノ掃殻ハ春夏秋ヲ問ハス掃立后一ケ年間保存スルコト

第十二項 提造嶋田折返造等ノ生糸ヲ揚返サスマテ其儘改造賣買セサルコト

第四條 製絲用ニ供スル蠶種ハ縣ノ内外産ヲ問ハス當廳ノ検査ヲ受ケ検査証印ヲ押

捺シタル者ニアラザレハ賣買スルヲ得ス

但夏期及秋期ニ飼育スルモノハ此限リニアラス

第五條 各組合ニハ役員ヲ置キ組合中ノ事務ヲ擔任セシムヘシ

第六條 組合員ハ必ス其組合ノ証標ヲ携帯スヘシ

但証標ニハ當廳ノ検査ヲ受クヘシ

第七條 組合員ハ時々組合ノ實況ヲ検査スヘシ

第八條 縣下便宜ノ地ニ取締所ヲ置キ各組合ヲ統轄シ組合約ノ實施ヲ監督スヘシ

第九條 各組合役員ハ其組合員ノ互撰ニヨリ取締所役員ハ組合役員會ニ於テ之ヲ撰

舉スヘシ

第十條 組合及取締所ニ關スル費用收支ハ各組合員集議ヲ以テ之レヲ定ムヘシ

第十一條 右各條ノ外組合ニ於テ必要トナス事項ハ適宜ニ其規約ヲ設ケル事ヲ得

第十二條 本則第一條第三條中第五項第七項第十一項第四條第六條ニ違背シタルモ



ノハ一日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

茨城縣蠶糸業組合取締所規約

第一條 本所ハ茨城縣蠶糸業組合取締所ト稱シ各組合ヲ統轄ス

第二條 本所ハ水戸市ニ設置ス

第三條 本所ノ目的ハ各郡市規約ノ實施ヲ監督シ專ラ該業ノ改良發達ヲ計畫スルニアリ故ニ本所ニ於テハ左ノ事項ヲ舉行ス

- 一 各組作業務上ノ弊害ヲ矯正スルコト
- 一 蠶糸業ニ關スル事項ハ總テ見聞ニ從ヒ組合ヘ報導スルコト
- 一 桑樹栽培培蠶兒養法ヲ全良ナラシムルコト
- 一 蠶絲ノ檢査ヲ實施スルコト
- 一 生絲ハ合同販賣ヲ計リ品位束裝ヲ一定ナラシムルコト
- 一 蠶種及生絲ノ販路ヲ擴張スルコト

一 蠶糸業上ノ統計ヲ詳ラカニスルコト

一 蠶糸業上ノ利害得失ニ關スル事項ノ質問應答ヲナシ及ヒ之ヲ調査スルコト

一 蠶糸業上ニ關シ要件ト認ムルトキハ臨時役員ヲ橫濱其他ヘ派出セシムルコト

一 各府縣蠶絲業取締所ト氣脈ヲ通スルコト

第四條 蠶糸業ニ従事スル者ハ毎年就業前必ス組合証票ヲ受ク可シ其繼續者ト雖トモ前年度ノ証票ハ一切無効トス各組會員証票ハ本所ニ於テ調製シ縣廳ノ檢印ヲ受ケ交付ス

但証票雛形ヲ定ムルコト左ノ如シ

(雛形ハ略ス)

第五條 各組合ハ毎年七月三十日限リ蠶種製造人製造(框製)實數高及ヒ翌年度ニ於ル製造高ヲ取調ヘ本所ニ報告スヘシ

第六條 組長ハ毎年蠶種製造人ノ掃立原種ヲ見聞シ掃立前種類蛾數住所氏名ヲ本所ヘ報告スヘシ



第七條 本所ノ役員ヲ定ムル左ノ如シ

- 一所長 一名 一理事 一名
- 一常議員 四名 一書記 一名

第八條 所長ハ本所一切ノ事務ヲ總理シ及各組合ヲ監督ス

但事務繁忙ナル場合ニ於テハ臨時雇ヲ使用スルコトヲ得

第九條 理事ハ所長ヲ補佐シ事務ヲ整理スルモノトス

第十條 常議員ハ所長必要ノ事件ニ對シ臨時ノ召集ニ應シ其問題ヲ議決スル者トス

第十一條 書記ハ所長ノ指揮ヲ受ケ記事ヲ掌ル

第十二條 所長理事常議員ハ名譽職トシ各組合員中ヨリ會議ニ於テ之ヲ撰擧ス其任

期ハ二ケ年トス滿期再撰擧スルモ妨ケナシ

第十三條 書記ハ所長之レヲ撰任ス

第十四條 役員ヲ撰定シタルトキハ縣廳へ届出及各事務所へ通知スルモノトス

第十五條 取締所及各組合役員ハ身代限りノ處分ヲ受ケ其辨償ノ義務ヲ終ハラサル

モノ又ハ輕罪以上ノ罪ヲ受ケタルモノハ之ヲ撰擧スルヲ得ス

第十六條 取締所會議員及常議員旅費日當ハ本所經費ヲ以テ之ヲ支出ス

第十七條 夏期秋期ニ飼育スル蠶卵種ハ各事務所ノ認印ヲ受ケタルモノニ非サレハ

賣買スルコトヲ得ス

但認印手數料一枚ニ付金壹錢

第十八條 証票ノ種類及料金ヲ定ムル左ノ如シ

養蠶家	一等	七枚以上	金七十五錢
	二等	七枚未滿	金五十錢
	三等	三枚未滿	金三十錢
	四等	二枚未滿	金二十錢
	五等	一枚未滿	金拾錢
製糸家	器械工女	一名ニ付	金五錢
	坐 繰	一挺ニ付	金三錢



蠶種製造家	壹名ニ付	金壹圓
蠶種商	壹名ニ付	金壹圓
繭糸商	壹名ニ付	金壹圓

第十九條 本所ノ印章ハ左ノ如シ

(印章略ス)

第二十條 組台中ニ違約者アルトキハ其事務所ニ於テ始末書ヲ徴シ處分ノ上本所へ届出ツ可シ

但明治二十五年本縣令甲第一號ニ觸ル者アルトキハ警察署へ申報スヘシ

第二十一條 各組台事務所ニ於テハ組合員ノ姓名録ヲ編製シ其年十一月十日ヲ限リ本所へ届出ヘシ

第二十二條 本所ニ存在セル簿冊左ノ如シ

- 一 組合員及役員姓名録
- 一 公達編冊
- 一 官廳上申書
- 一 蠶糸業統計表

一 各組合性復録

一 証票元拂簿

一 商況通信録

一 違約者處分録

一 金錢出納録

一 會議録

一日誌

第二十三條 各組合ニ於テ役員及議員ヲ撰定シタルハ本所及郡市役所へ届出ヘシ

第二十四條 各組合ノ人員惣數及業務ノ種別桑園反別蠶卵種繭生糸ノ産額販賣高價格等詳細取調其年十一月限リ本所ニ届出ツヘシ

第二十五條 總テ費用ノ決算及蠶糸業ニ關スル事項ハ毎格格別ニ調査シ翌年二月限リ縣廳へ届出テ同時ニ各組合事務所へ報告スルモノトス

第二十六條 本所ニ於テハ毎年會議ヲ開キ蠶糸業ニ關スル利害得失並ニ組合維持ノ方法ヲ議定スルコト

- 一 役員進退ノ事
- 一 經費豫算ノ事
- 一 費用賦課法ノ事
- 一 蠶事ノ利害ニ關スルコト



一生絲檢査法ノコト

一生絲販賣上ノ事

一規約ニ關スルコト

第二十七條 議員ハ各組合ニ名トシ壹名ハ組合會議ニ於テ組合員ヨリ撰擧シ一名ハ組長ヲ以テ之レニ充ツ任期ハニケ年トス滿期再撰スルモ妨ケナシ

第二十八條 本所會議ハ通常臨時ノ二種トシ通常會ハ毎年十一月ニ於テ開會シ臨時會ハ議長ノ意見若クハ組合議員三分ノ二以上ノ發意ニヨリ開クモノトス

第二十九條 通常會ハ其日數七日以内トシ臨時會ハ其日數五日以内トス  
但議事ノ都合ニヨリ伸縮スルコトアルヘシ

第三十條 通常會ハ開會十日前所長ヨリ各組合事務所ニ報告シ且議員召集狀ヲ發ス  
ヘシ

第三十一條 議案ハ所長之レヲ提出ス  
第三十二條 會議ニ於テハ正副議長ヲ議員中ヨリ互撰シ議事ヲ整理セシム  
第三十三條 會議ノ書記ハ議長之レヲ撰定ス

第三十四條 議事規則ハ會議ノ意見ヲ以テ定ム

第三十五條 議事ハ議員出席半數ニ過キサレハ議事ヲ開クコトヲ得ス  
但議員半數以上ノ欠席二日ニ涉ルトキハ半數以内ト雖トモ開クコトヲ得

第三十六條 議事ハ多數ヲ以テ決ス若シ相半スルトキハ議長之レヲ決ス  
第三十七條 會議ヲ開クトキハ豫メ縣廳ヘ届出テ裁決シタル事項ハ認可ヲ得テ施行スルモノトス

第三十八條 會議ニ於テ議決シタル事項ハ組合員ニ於テ異議ヲ容ルヘコトヲ得ス

第三十九條 本所經費ハ第十八條証票料金ノ内左ノ歩合ニ依リ之レニ充ツルモノトス

但各組合ヘ証票交付ノ際納付セシム

- 一 養蠶家 一名ニ付 金二錢五厘
- 一 蠶種製造家 一名ニ付 金十錢
- 一 蠶種商 一名ニ付 金十錢



- 一 商 系 一名ニ付 金十錢
- 一 器械製絲家 一名ニ付 金五十錢
- 一 坐繰製絲家 一名ニ付 金五錢

第四十條 本所ニ係ル經費ハ前年十一月ヨリ其年十月迄ヲ以テ一周年度トシ決算ノ

上通常會ニ於テ報告スルモノトス

但費用ニ過不足アルトキハ翌年ニ繰越シ又ハ更ニ徵收スルコトアルヘシ

第四十一條 組員ニ於テ取締所ノ諸帳簿ヲ見閲センコトヲ乞フ者アルトキハ所長

ニ於テ之レヲ許可シ見閲セシム

第四十二條 各組合規約ハ本所ヲ經テ縣廳ノ認可ヲ受クヘシ

但本所規約ニ背戾スルコトヲ得ス

第四十三條 各郡市組長事故アリ辭職セントスルトキハ必ス後任者ヲ撰定ノ上ニ非

ラサレハ辭職スルコトヲ得ス

但滿期退職ト雖トモ本條ニ準ス

第四十四條 一郡内ニ於テ當業者滿員ノ上分割又ハ一組合ノ下ニ分業ノ組織ヲナシ

縣廳ニ出願セントスルトキハ其組合事務所及本所ノ承認ヲ經ヘシ

第四十五條 各組合ニ於テ万一不整理ト認ムルトキハ時宜ニヨリ本所ハ役員ヲ派出

シ整理セシム

但派出費ハ該組合負擔スヘシ

第四十六條 廢業又ハ其他ノ事故ヲ以テ組合ヲ退去シタル者ハ証票ヲ還納セシム

第四十七條 臨時會ニ於テハ議案外ニ涉ルコトヲ議スルコトヲ得ス

第四十八條 本則第四條第十七條ニ違犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ違約償金

ヲ出サシム



長野縣

●小縣郡

職	業	姓	名 (いろは順)	住	所
春蠶種製造販賣			濱村 與吉	全	上田町二千三百三十八番地
日本蚕業合資 會社業務担当 社員理事			花岡茂三郎	全	全千五百廿一番地
			箱山茂平太	全	全二百四十一番地
			西澤 辨吉	全	全二千百廿八番地
			西澤源三郎	全	全二千百六十二番地

小縣郡



全	全	春籾種製造販賣	春秋籾種製造販賣	春籾種製造販賣	春夏秋籾種製造販賣	全	春籾種製造販賣
田中	田村	田中英次郎	片岡庄藏	大塚喜三郎	保科	西澤	西澤
吉右衛門	武作	英次郎	庄藏	喜三郎	萬石衛門	兵藏	龜吉郎
全二千十六番地	全二千四百十一番地	全二千四百十九番地	全二千三百四番地	全千六百六十番地	全二千二百六十二番地	全二千四百四十七番地	上河町二千二百五番地

全	全	全	全	全	全	全	全
柳澤	矢島	安原久太郎	沓掛	塚田林太郎	中島	竹内半兵衛	瀧澤政五郎
德彌	宗六	久太郎	清右衛門	林太郎	宇右衛門	半兵衛	政五郎
全二千二百廿二番地	全二千五百三番地	全二千二百六十一番地	全千九百九十八番地	全郡糠尻村大字上糠尻上田町常盤城寄留	全二千四百十五番地	全千八十八番地	全二千二百五十一番地

小縣郡











春蠶種製造販賣

均業社々長

山崎 佐源 太

全郡鹽尻村字上鹽尻

藤本 善右衛門

全

小岩井 茂三郎

全

小岩井 文治郎

全

小岩井 萬作

全

佐藤八郎右衛門

全

佐藤尾之七

全

佐藤 園右衛門

全

信濃蠶種組合  
組長

佐藤 元兵衛

全

佐藤 三右衛門

全

清水 長左衛門

全

清水 喜左衛門

全

清水 直司

全

清水 官藏

全

田澤 儀作

全村下鹽尻

竹内 柳右衛門

全

小縣郡

九



春蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
橋	母	母	足	沓	沓	梅
誥	袋	袋	立	掛	掛	原
勘	延	忠	小	三	三	宅
十	吉	三	右	郎	郎	右
郎	全	郎	衛	全	全	衛
全		全	門	全	全	門
全		全	全			全
						伊
						右
						衛
						門
						全
						村
						下
						搦
						尻

十

全	全	全	全	全	全	全	全
工	中	中	中	中	瀧	瀧	瀧
藤	島	島	島	島	澤	澤	澤
太	與	宗	林	藏	源	紋	彥
沖	市	作	太	太	太	次	兵
全	全	全	助	郎	全	郎	衛
			全	全	全	全	全

小縣郡

十一



春籟種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
關	關	小林	小林	工藤	工藤	工藤
傳	與	重	幸右衛門	喜	莊	佐
三	四	吉	六	六	司	六
郎	郎	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全

全村秋和

全	全	全	全	全	全	全	全
田	竹	田	竹	田	田	田	橫
玉	內	子	內	子	玉	玉	關
仲	金	勇	勇	玄	逸	豐	藤
次	彌	平	作	誓	作	次	十
全	全	全	全	全	全	郎	郎
全	全	全	全	全	全	全	全

御下村大字御







春蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
細川吉次郎	細川吉郎	片岡榮作	堀内幸四郎	宮島造酒之	田中清太	坂下倉之助
<small>全村大字諏訪形</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全村大字小牧</small>	<small>全</small>	<small>泉田村大字福田</small>	<small>全</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
百瀬源治郎	百瀬清吉	松井半兵衛	小泉小藤太	上野角治	上野藤五郎	小泉甚兵衛	小泉新三郎
<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全村大字吉田</small>	<small>全村大字小泉字町</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全字日向</small>	<small>全</small>



春種種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
			榮壽堂			
倉澤金治郎	山浦今吉	山浦善右衛門	工藤國助	工藤佐太郎	片山德太郎	堀内半次郎
<small>今村大字築地</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>川邊村大字上田原</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
土屋茂次郎	玉井秋三郎	玉井甚平	玉井本藏	橋本成作	橋本熊五郎	倉澤富右衛門	倉澤常太郎
<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全村大字下ノ條</small>	<small>全</small>	<small>全</small>







春蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全	全
辰野義衛	工藤佐傳次	曲尾德太郎	關彌作	小野綱次	關勇輔	和田七郎右衛門	土屋文治郎
<small>東鹽田村大字下ノ郷</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全村大字鈴子</small>	<small>全</small>	<small>中掃田村大字上小嶋</small>	<small>全</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
中村銆太郎	北條五郎右衛門	遠藤嘉吉	保屋野小左衛門	石井冬太郎	石井九右衛門	小泉角七郎	小泉才治郎
<small>全</small>	<small>全村大字舞田</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全村大字保野</small>	<small>全</small>	<small>全</small>

大日本蠶業學會委員



奉蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
高野甚五兵衛	長谷川代右衛門	工藤泰治郎	若林直次郎	矢島利金太	若林末吉	宮澤新次郎
全	全村大字五加	全	全村大字中野	全	全村大字本郷	全

宮澤右京中鹽田村大字上小嶋

全	全	夏春蠶種製造販賣	全	全	全	全	全
竹内兼太郎	竹下犀右衛門	竹内時三郎	前嶋要右衛門	和田與一郎	和田鶴藏	和田留吉	和田源左衛門
全	全	西鹽田村大字山田	全村大字八木澤	全	全	全	全村大字小嶋



夏蠶種製造販賣

竹下友三郎

西鹽田村大字山田

全

齋藤九兵衛

全

賣 春夏秋蠶種製造販

武田繁太郎

全村大字十人

全

武田助左衛門

全

全

鹽田秋蠶改良  
組合組長

齋藤友治

全

全

齊藤與三郎

全

全

佐藤祐平

全

春蠶種製造販賣

市村藤作

全村大字手塚

全

市村榮作

全

全

瀧澤林松

全

全

小林新五郎

全

賣 春夏秋蠶種製造販

竹内千代松

別所村

全

南條吉左衛門

全

全

蠶種改良共全  
會社長

南條島太郎

全

全

倉澤善右衛門

全

全

倉澤育太郎

全



春夏秋蠶種製造販賣

倉澤運平 別所村

全 山極吉右衛門 全

全 山極嘉右衛門 全

全 增澤皆吉 全

全 鹽澤藤一郎 全

全 池田泰一郎 浦里村

全 生島彌作 全

全 小山與助 全

春蠶種製造

全 丸山君次郎 全

全 關谷彌市 全

全 瀨志本藤重郎 全

全 鈴木綱藏 全

全 柳澤岩太郎 神科村大字長嶋

全 大矢又五郎 全村大字大久保

全 六川常次郎 全

全 渡邊平太右衛門 全村大字金剛寺

春風穴秋種製造販賣



春秋蠶種製造販賣	瀧澤嘉太郎 <small>全村大字金剛寺</small>
春風穴蠶種製造販賣	倉島所右衛門 <small>全</small>
春秋蠶種製造販賣	倉嶋三代治 <small>全</small>
春蠶種製造販賣	倉嶋彦七 <small>全</small>
全	倉島新十郎 <small>全</small>
全	倉島源十郎 <small>全</small>
春秋蠶種製造販賣	小林金平 <small>全</small>
春夏秋風穴蠶種製造販賣	三井利右衛門 <small>全</small>

春蠶種製造  
蠶種改良同盟  
組合  
鶴 鳴 社  
神科村

全	塚原周八郎 <small>全</small>
全	塚原角太 <small>全</small>
春秋蠶種製造販賣	赤岡定五郎 <small>全</small>
全	中曾根武右衛門 <small>全村大字新屋</small>
春蠶種製造販賣	柴崎孝次郎 <small>殿城村下郷</small>
春蠶種製造販賣	柴崎清七 <small>全</small>
春夏蠶種製造販賣	柴崎關五郎 <small>全</small>



春秋蠶種製造販賣	瀧澤嘉太郎 <small>全村大字金剛寺</small>
春風穴蠶種製造販賣	倉島所右衛門 <small>全</small>
春秋蠶種製造販賣	倉嶋三代治 <small>全</small>
春蠶種製造販賣	倉嶋彦七 <small>全</small>
全	倉島新十郎 <small>全</small>
全	倉島源十郎 <small>全</small>
春秋蠶種製造販賣	小林金平 <small>全</small>
春夏秋風穴蠶種製造販賣	三井利右衛門 <small>全</small>

春蠶種製造販賣	小田中源五郎 <small>全村大字伊勢山</small>
全	塚原周八郎 <small>全</small>
全	塚原角太 <small>全</small>
全	赤岡定五郎 <small>全</small>
春秋蠶種製造販賣	中曾根武右衛門 <small>全村大字新屋</small>
春蠶種製造販賣	柴崎孝次郎 <small>殿城村下郷</small>
春蠶種製造販賣	柴崎清七 <small>全</small>
春夏蠶種製造販賣	柴崎關五郎 <small>全</small>







夏春秋蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
堀内次郎	堀内茂太郎	尾芦勇之助	尾蘆又吉	田中市之助	田中林之助	田中茂作
全	全	鹽川村	全	全	全	全
						柳澤德藏
						全

春蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
櫻井伊一郎	地田實之助	田中德兵衛	久保田甲子治	櫻井啓之助	金井良太	工藤善助
全	長瀬村	全	全	全	九子村大字上九子	全
						工藤柳助
						全



春蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
工藤林之助	工藤由郎	工藤藤五郎	工藤三郎	小林幸右衛門	土屋丈之助	中山仁右衛門
<small>九子村大字九子</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全村大字中九子</small>
中山兵吉						
<small>全</small>						

春夏秋蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
依田常太郎	依田孫兵衛	依田孫治	依田永治	柴田平治	石合壽伯	大澤三四郎
<small>全村下大字九子</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>全</small>	<small>長久保新町</small>	<small>全</small>
竹內勝作						
<small>全</small>						



春夏秋蠶種製造販賣

立岩盤千代長久保新町

櫻井德次郎全

宮島逸郎全

宮坂官吾大門村

石金金作和田村

羽田右司馬全

羽田三郎全

羽田德太郎全

秋蠶種製造販賣

泰隆館主

全 全 全 全 全 全 全 全

擴業館主

河西榮藏全

高木傳十郎全

長井權藏全

中村爲次郎全

長井喜左衛門全

長井龍郎全

遠藤虎次郎全

小合澤辨藏全



秋籍種製造販賣

春籍種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全	全
山浦爲三郎	山邊吉左衛門	山邊宗四郎	山浦甚四郎	土肥甫	池田慶助	池田藤右衛門	翠川廣見
全	全	全	全	全	全	神川村	和田村

四〇

全	全	全	全	全	全	全	全
所清七	橋本正三郎	出浦啓造	中澤藤十郎	山越元三郎	矢島周次郎	山邊文三郎	山崎善七郎
全	全	縣村大字元海野	全	全	全	全	全

小縣郡

四一



春蠶種製造販賣

全	全	全	全	全	全	全
武井佐太郎	矢嶋吉太郎	矢島貞三	佐藤郡三	宮坂友作	射手袈裟八	馬場祐右衛門
縣村大字海野	全	全	全	全	縣村大字田中	全
保科好太郎						
全						

全	全	全	全	全	全	全	全
保科嘉作	蓬田音五郎	大井源左衛門	小田中仙太郎	田中藤吉	武田浦次	高橋壽吉	柳澤廣八
全	全	全	全	全	全	全	全



春蠶種製造販賣

柳澤嘉作

縣村大字田中

矢嶋善三

全

柳澤元次郎

全

間下傳八

全

小林八郎

全

小林宗五郎

全

小林熊治郎

全

荒井和平

全

北澤源吾

全

岩下藤吉

全

小縣郡

四五

四四



●植科郡

職業	姓	名 (いろと順)	住	所
春夏秋蠶種製造販賣	瀧澤	漸	南條村	
全	瀧澤	隈平	全	
全	田中	津重	全	
春蠶種製造販賣	室賀	嘉右衛門	全	
全	室賀	助望	全	
全	山崎	善之輔	全	

植科郡

四七

四六



春種製販賣

全 全 全 全 全 全 全

赤池 七右衛門 南條村

宮下良太 全

鹽入藤五郎 全

竹内喜藤治 中ノ條村

柳澤淺吉 全

市川清雄 坂城村

富岡和三郎 全

片桐善藏 全

全 全 全 全 全 全 全 全

塚田周作 全

中曾根直作 全

中曾根伊兵衛 全

中澤四郎 全

天田重三郎 全

荒井直五郎 全

宮原生吉 全

清水和重郎 全

埔科郡



全	全	全	全	全	全	全	春蠶種製造販賣
宮入	村山	中村	中村	小出	柳澤	柳澤	鈴木
與右衛門	三郎兵衛	竹治	吉重郎	熊次郎	肇	勇	重太郎
全	全	全	五加村字上德間	全	全	戶倉村	坂城村

全	全	全	全	春蠶種製造販賣	春蠶種製造桑苗業	全	全
					余桑苗數十万本		
田中	寺澤	宮入	竹内	米澤	瀨在	宮入	宮入
俊司	源藏	森佐	孝太郎	熊重	金次郎	嘉右衛門	仲次郎
杭瀬下村	全村小船山	全	全	全村大字千本柳	全	全	全



春蠶種製造販賣	全	全	春夏秋三種製造販賣
上原 銀右衛門			
<small>杭瀬下村</small>			
小林 善之助			
<small>全</small>			
安達 元右衛門			
<small>全</small>			
石黒 金十郎			
<small>屋代町</small>			

●更級郡

職業	姓	名 (いろへ順)	住	所
掛合蠶種春蠶種製造販賣		若林 多吾作	山田村四百三十六番地 字上田	
全		小山 六兵衛	全三百五十六番地	
全		佐竹 巴	全四百十六番地	
全		宮原 喜右衛門	全四百三十六番地	
春蠶種製造販賣		中曾根 應助	力石村百番地	
全		中曾根 喜平次	全九十九番地	



春蠶種製造販賣

山崎治左衛門

力石村四十二番地

全

兒玉九馬平

全十三番地

東筑摩郡

秋蠶種製造	職 業	就業年限	蠶種製造高	姓 名 (いろは順)	住 所
全	秋蠶種製造	明治十四年	二千枚	飯沼相次郎	松本町
全		明治三年	七百	馬淵義一	全北深志區
全		明治廿二年	二百	林幸太郎	全
全		明治十年	五百	太田令司	全磯ヶ崎
全		蠶業二代	千三百	大澤長治	全
全		蠶業二代	千百	大澤太喜太郎	全



全	全	全	全	全	全	全	全
明治二十年	明治廿二年	明治三年	明治十年	明治十六年	明治廿二年	明治廿八年	
五百	五百	五百	八百	千五百	三百	六百	二百
松森久馬吉全	松森只吉 全字中條	松森忠藏 全字磯ヶ崎	山本文彌全	山本喜代藏 全字桐	草間始司 全字中條	草間宇喜藏全	草間八十雄全

全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治七年	明治二十年	蠶業二代	明治十六年	明治十三年	明治九年	明治十年	全
千五百	二百	二千	七百	三百	三千五百	七百	千五百 <small>枚</small>
草間傳七全	草間力太郎 全字中條區	栗田捨示 全磯ヶ崎	野々山義成 全字六九町	中山兼太郎 全字中條	中原半一郎 松本町	武井新三郎全	横山龜吉 松本町字磯ヶ崎



全	全	全	全	全	全	全	全
當時二代	明治二十年	當時二代	明治十年	明治十五年	明治廿一年		明治七年
五百	千二百	八百	五百	千	千	千	千
飯沼源吾	石川佐源太	須澤道太郎	須澤文吾	菅沼金十郎	森下孫吉	平林金次郎	宮下松五郎
全	本郷村大字淺間	全字桐	全	全	全字中ノ條	全字磯ヶ崎	全

全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治八年	明治七年	明治十年	未詳	明治八年	當時二代	當時二代	
	七百	千	三百	八百	千	二千	千枚
坂井龍次郎	青木吉之丞	赤羽佐次郎	小松七郎	小松勝久	小林千鶴太	小林十太郎	降矢角彌
全	全字中ノ條	全	全字磯ヶ崎	全桐區	全	全	全字桐區ノ内澤



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
慶應年間	明治元年	明治廿七年	明治元年	慶應二年	明治廿二年	明治元年	
四千	二千五百	二千五百	千	二千四百	千五百	三千	石川善司
柳原國松全	竹内伊代二郎全	中野昇一全	瀧澤瀧二郎全	瀧澤仙八郎全	竹内萬平全	寄藤謂二全	本郷村大字淺間

全	全	全	全	全	全	全	全
慶應二年	當時二代	明治十二年	明治元年	明治元年	當時二代 慶應元年	慶應年間	蠶業ハ祖先ヨ リ傳來秋蠶種 ハ近年
五千	四百	平年千	三千	四千	七千五百	七千五百	三千五百
赤羽彌門全	小岩井與一郎全	二木重平全	二木端午全	二木袈裟三全	藤岡喜代藏全	二木秀一全	降旗元太郎全



全	全	全	全	全	全	全	全
明治初年	明治年間	明治年間	全	明治三年	明治廿二年	明治年間	明治四年
千	二百	五百	五百	七百	二百	五百	三千
野口眞十郎	西原源十郎	原眞喜太	原吉十	原桂吉	原五郎次	原藤太郎	岩岡角太郎
全	全	全	全	全	全	全村字惣社	全

全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
	明治二十年		明治二十年	全	全	明治初年	明治二十年
三百	六百	五百	千二百	千	千六百	千五百	二千 <sup>枚</sup>
熊井令壽	保刈祐次	保刈金作	和合治太郎	鳥羽森彌	鳥羽林太	原源重	御子柴喜代十
全	全	全	全	全	全	全村字横田	本郷村大字淺間



全	全	全	全	全	全	全	全
明治二十四年	明治年間	當時二代	明治十八年	明治年間	明治十二年	二代	明治年間
一千	三百	二千	六百余	八百	五百	六百	一千
小澤榮吉全	上地六平全	金井齋作全	金井大太郎全	石川岸藏 <small>里山邊村</small>	小澤定吉全	小澤義佐全	小澤榮吉全

全	全	全	全	全	全	全	秋露種製造
明治八年		明治十三年	明治十三年	明治十五年	慶應三年	明治十年	明治初年
二千		五百	千	五百	七百	四百	五百 <small>枚</small>
上原瀧彌全	桑榮館	金井三津次全	金井嘉七 <small>全村字水汲</small>	酒井廣吉全	酒井喜代一郎全	荒井民次郎 <small>全村大字大村</small>	野口源内 <small>本鄉村字惣社</small>



全	全	全	全	全	全	全	秋種種製造
明治三年	明治二十年	明治二十年	明治二十七年	明治十五年	全	明治三年	明治年間
三百		六百	四百	三百	三百	二千五百枚	
赤羽九馬市 <small>全</small>	新井安次 <small>全</small>	古谷吉次郎 <small>全</small>	二木榮藏 <small>全</small>	矢崎八十吉 <small>全</small>	山崎善六 <small>全</small>	大和八郎 <small>全</small>	田村兵司 <small>里山邊村</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
	明治七年	全	全	未詳		明治八年	明治年間
	五百	五百	二百	二百		千八百	千五百
手塚重平 <small>全</small>	山崎梅次郎 <small>全</small>	中田群雄 <small>全</small>	上條仙次郎 <small>全</small>	太田平八 <small>全</small>	原田耕造 <small>全大字出川</small>	有賀近市 <small>全</small>	赤羽兵八郎 <small>松本村大字並柳</small>



全	全	全	全	全	全	全	全
明治三年	明治年間	明治廿六年	明治廿四年	明治廿五年	明治廿五年	明治廿六年	
五百		五百		未詳	三百	四百	
伊藤重次郎	中田貞吉	中田和市	中田島門	中田清之	中田米三郎	中田條吉	中田虎重
全大字鎌田區	全	全	全	全大字小嶋區	全	全	全

東筑摩郡

六九

全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治二十四年	明治七年	明治十年	明治七年				
八百	二千	五百	六百	三百			二百五十
中田六平	中田桂太郎	橫山岨一	橫山森市	宮澤彌五郎	赤羽登一郎	手塚眞意太郎	寺田代吉
全	全	全	全大字小嶋	全	全	全	未詳 <small>枚</small> 松本村大字出川

六八



全	全	全	全	全	全	全	秋露種製造
明治二十年	明治七年		明治廿四年	明治八年	明治十七年		明治十七年
二千	五百	五百	四百	二千	二千五百		六百枚
村山彦太郎 全	大澤利七 全	大澤源八 全大字笹部	吉澤源次郎 全	吉澤勝太郎 全	横内源太郎 全大字征矢野	地田要之 全	池田文太郎 松本村大字鎌田區

七〇

全	全	全	全	全	全	全	全
		明治十年	當時二代				明治十年
五百	四百	六百	一千	一千	五百	一千	二千
山崎源藏 全	牛山増彌 全	牛山順次郎 全	牛山善市 全	村山龜太郎 全	村山積次 全	村山高次郎 全	村山喜久次郎 全



秋籬種製造

全	全	全	全	全	全	全	全
	明治廿三年	明治二十年	明治十年	明治年間			
三百枚	一千	一千	一千	一千	七百	三百枚	
山崎瀧次郎	赤羽長作	赤羽壽滿次	赤羽篠一郎	赤羽八重三	降旗喜代三	山崎瀧次郎	
松木村大字笹部	全	全	全	全	全	全	

七二

全	全	全	全	全	全	全	全
明治年間	明治廿二年				明治十八年		
三百	六百	七百	七百	二千	六百	六百	五百
渡邊兼三郎	林和長治	伊藤市作	關鶴次郎	笹部笹衛	赤羽助次郎	赤羽庄一郎	赤羽豐藏
全	芳川村大字野溝	全大字高宮	全	全	全	全	全

東筑摩郡

七三



全	全	全	全	全	全	全	全
明治年間	當時二代	全	全	明治年間	全	明治七年	明治年間
五百	六百	未詳	未詳	三百	五百	一千	四百
永田吉郎次全	田中辰十郎全	田中僧七全	田中多傳次全	田中善次全	田中半藏全	田中清十郎全	田中銀三全

全	全	全	全	全	全	全	秋瀧種製造
明治十五年	全	全	全	全	全	全	明治年間
二百	三百	五百	七百	八百	五百	八百	三百 <small>枚</small>
田中鶴吉全	加藤政一郎全	加藤儀十全	加藤嘉重全	加藤九一郎全	加藤關太郎全	加藤勇一全	渡邊武七郎 芳川村大字野溝



秋蠶種製造	全	全	全	全	全	全	全
明治年間	全	全	明治七年	明治十九年	全	全	明治元年
五百 <small>枚</small>	五百	一千	五百	二百	四百	六百	千二百
窪田和助	久保田佐次松 <small>全</small>	關勘平 <small>全</small>	關七郎次 <small>全</small>	手塚治郎七 <small>全</small>	淺川茂次郎 <small>全</small>	宮島傳 <small>全</small>	上條甚三郎 <small>全</small>
芳川村大字野溝							全大字小屋區

全	全	全	全	全	全	全	全
明治二十年		明治九年	明治十一年	安政年間	明治元年	明治十年	明治年間
三百	四百	五百	一千	一千	一千五百	三百	六百
中嶋熊三郎 <small>全</small>	中澤勘十 <small>全</small>	橫山治比藏 <small>全</small>	馬場啓助 <small>片丘村大字北内田</small>	小澤吉十郎 <small>全</small>	小原勘五郎 <small>全</small>	犬飼犬吉 <small>精良館 嶋内村</small>	宮島傳 <small>全</small>



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
全	明治八年	明治十五年	明治十五年	明治九年	明治年間	明治八年	明治八年
三百	一千	三百	五百	二百	三百	一千	五百 <small>枚</small>
百瀨濱藏全	百瀨助之丞全	百瀨今朝吉全	小澤五七全	小澤權三郎全	藤森與三郎全	中島田多治全	中嶋今朝太郎 <small>片丘村大字北内田</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
明治八年	全	明治元年		全	全	明治年間	明治十一年
五百	三百	二千		二百	三百	二百五十	二百
横山艶次郎 <small>全大字南内田</small>	小松元吉全	白木周之進 <small>白木殖産館</small> 全	安藤爲之助全	小松義重全	小松又助全	中澤長藏全	中澤助右衛門 <small>全大字北熊井</small>



全	全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治廿六年	明治八年		明治十四年					明治元年
四百	一千二百		一千	春蠶一千 秋蠶千番	一千	二百	三百枚	
小野米藏全	荻上兵五郎全	保高庄三郎 搦尻村	坂野廣吉全	田中右一全	米久保枝八郎 全大字南熊井	村上信夫全	横山七左衛門 片丘村大字南内田	

全	全	全	全	全	全	全	全
明治十二年	明治元年	明治十七年	明治廿七年	明治二十年	明治十七年	當時三代	明治十四年
	一千	二百余	二百	四百五十	四百	三百	二百
高津磯二郎全	竹原太伊造全	古旗喜代太郎全	山田喜十郎全	中嶋禎一郎全	中原與一右衛門全	米久保元一全	米窪周三郎全



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治廿一年	明治廿九年	明治廿六年	明治二十年	明治十四年	明治廿六年	明治八年	明治元年
六百					三百	四百	五百枚
波場源一郎	池上千代吉	石田廣吉	石田吉太郎	石田六郎治	平林兼	佐倉由藏	有賀幸内
全	全	全	全	中川手村	全	全	攝尻村

全	全	全	全	全	全	全	全
明治廿四年	明治十八年	明治二十年	明治廿八年	明治廿七年	明治十八年		明治十五年
千二百	二百五十				八百五十		
望月周治	岩林辨彌	岩淵延藏	青木才二郎	小林友太郎	内川金一郎	竹内千代吉	横内善十
全	全	全	全	全	全	全	全



全	全	全	全	全	全	全	全
全	明治年間	明治七年	明治三年	明治二十九年	明治二十年	明治廿三年	
五百	二百	三百	三百				
大野田	入山	市川	市川	二木	藤松	二木松	山崎
留太郎	啓重	彦重	秀作	良作	嘉市	太郎	兵吉
全	全	全	宗賀村	全	全	全	全

全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治廿六年		明治七年	明治十年	明治十五年	明治廿八年	明治廿九年	明治廿八年
二百							
川上	市川	關八重	關房	宮澤秀五	小山田新十郎	等々力喜知	石井岩次郎
淺吉	隣内	藏全	吉全	郎全	郎全	全	東川手村
全	上川手村	全	全	全	全	全	全



全	全	全	全	全	全	全	秋露種製造
全	明治廿六年	慶應年間	明治十五年	全	全	全	明治年間
全	二百	三百	六百	四千	三百	二百	三百 <small>枚</small>
中神四郎治 <small>全</small>	奈良井末五郎 <small>全</small>	奈良井貞治 <small>全</small>	中野折彌 <small>全</small>	奈良井勘治 <small>全</small>	田中柰彌 <small>全</small>	武居又重 <small>全</small>	金森宇太郎 <small>宗賀村</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	明治年間	全	明治年間	全	慶應年間
一千	五百	五百	二百	二百	二百	二千	五百
矢澤與平 <small>全</small>	野々山莊太郎 <small>全</small>	上野勇治郎 <small>全</small>	上野彌藏 <small>全</small>	長瀬良吉 <small>全</small>	奈良井重三郎 <small>全</small>	長瀬彌七 <small>全</small>	中神芳朗 <small>全</small>



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
全	全	全	全			全	明治年間
五百	三百	二百五十	一千	五百	八百	三百	五百枚
百瀨隣一全	日野初太郎全	清水文造全	田中參四郎全	中野耕作全	藤森清市全	丸山庄平全	丸山勝彌宗賀村

全	全	全	全	全	全	全	全
明治廿八年	明治三年	明治廿七年	明治廿九年	明治十年	安政年間	明治十二年	全
四百	六百	三百	三百	五百		八百	五百
村上保十郎全	大島金治郎全	稻村軍三全	伊藤寅治 <small>笹賀村大字二子</small>	北原慶次郎全	中澤彌惣衛全	中澤要作 <small>鍋部村</small>	關為一郎全



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治廿七年	明治廿七年	當時二代	明治八年	當時二代	明治廿九年	慶應二年	明治廿八年
五百	五百	三百	五百	一千	東筑蠶業 三百	二百	三百 <small>枚</small>
平林英一郎 <small>全</small>	平林清一郎 <small>全</small>	赤羽利喜十 <small>全</small>	赤羽米太郎 <small>全</small>	赤羽彌平次 <small>全</small>	草間合名會社 <small>全</small>	上杉誠七 <small>全</small>	上杉壽作 <small>笹貫村大字二子</small>

九〇

全	全	全	全	全	全	全	全
明治年間	明治十年	明治二十年	明治十年	明治十五年	明治廿五年	全	全
二百	二百	二百	一千	三百	三百	二百	三百
三澤猿三 <small>全</small>	丸山角平 <small>全</small>	金井茂一 <small>全</small>	木村喜子太郎 <small>全</small>	赤羽關藏 <small>全</small>	金井千仞 <small>全</small>	原九十郎 <small>全</small>	原銀次郎 <small>全大字初戸</small>

東筑摩郡

九一



全	全	全	全	全	全	全	秋露種製造
明治二十年	明治五年		全	明治三十年	全	明治廿七年	明治二年
三百	八百	三百	二百	二百五十	三百	二百	五百 <small>枚</small>
高山藤四郎	上條喜源太	大槻茂寶	清澤勝治	鹽原力藏	嶋崎又次郎	清澤清市	清澤小市
全	全	全大字小侯	全	全	全	全	征賀村大字初戸

全	全	全	全	全	全	全	全
全	明治年間	明治十六年	明治廿九年	明治十五年	明治十八年	明治五年	
未詳	未詳	二百	三百	五百	三百	八百	二百
藤森三代吉	藤森正生	中島斧吉	小林磯松	梅村豊作	小原河嘉平次	鹽原砒重郎	岩垂字一全
全	全	廣丘村大字高出	全	全	岡田村	全	



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治六年	明治元年	當時三代	弘化年間	當時二代	明治元年	全	明治六年
五百	二百五十	一千五百	三百	五百	五百	二百	一千枚
御子柴	小松代五郎	郷原研司	赤羽德衛	郷原六衛	郷原廣男	樋口民次郎	小穴常彌
全大字吉田	全大字原新田	全大字東堅石	全	全	全大字郷原	全	廣丘村大字高出

全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	文久年間	當時二代	當時二代	當時二代	全
三百	三百	三百	五百	三百	五百	一千	五百
大槻伊藏	石井八六	石井文七	石井六郎治	清水吉十郎	御子柴眞澄	御子柴惣吾	御子柴金作
全三百三十四番地	全六百六番地	全五百七十七番地	洗馬村大字本洗馬	全大字野村三百八十四番地	全六百三十九番地	全六百三十八番地	全四百七十五番地



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
全	全	明治年間	明治元年	全	全	明治年間	安政年間
二百	三百	三百	一千	未詳	二百	三百	三百 <small>枚</small>
塚原小八	塚原牛太郎	塚原清五郎	塚原又三郎	征矢野龍治郎	高橋乙彌	大槻孫次	小幡穀藏
全五百五十八番地	全六百十二番地	全五百四十七番地	全五百九十六番地	全二百八十一番地	全三百五十七番地	全三百八番地	洗馬村大字本洗馬百八十六番地

全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	明治年間	明治元年	全	全	全
五百	二百	未詳	三百	三百	三百	三百	三百
熊谷泰治	長瀬穀次郎	中野曉一郎	中村喜滿太	中野茂次郎	都筑俊治	都筑治	續木常彌
全四百七番地	全五百九十八番地	全二百八十一番地	全大字本洗馬	全六百三十八番地	全六百五十一番地	全六百五十二番地	全大字岩垂六百四十八番地



全	全	全	全	全	全	全	全
全	明治元年	明治廿五年	全	全	全	全	全
五百	未詳	未詳	三百	三百	二百	百五十	三百
中村彌源治	三村伎四郎	上條漢一郎	鈴木角次郎	鈴木源十郎	清水菅一	清水勝次郎	鹽原駒三郎
朝日村西洗馬	全	金井村二百四十二番地	全六百五十三番地	全大字岩垂	全四百八十二番地	全四百七十五番地	全三百十六番地

全	全	全	全	全	全	全	秋露種製造
明治年間	全	明治三年	明治元年	全	全	全	明治年間
三百	五百	一千	三百	三百五十	五百	二百	三 <small>枚</small>
鹽原久米藏	鹽原鐵藏	鹽原八太郎	酒井五郎十	寺澤仲藏	熊谷竹次郎	熊谷	熊谷是藏
全六百番地	全五百二十二番地	全大字本洗馬四百廿七番地	全大字岩垂七百七十四番地	全六百三番地	全三百七十九番地	全四百七十三番地	洗馬村大字本洗馬三百六十七番地



全	全	全	全	全	全	全
明治元年	明治七年	明治十八年	明治廿七年	明治廿五年	明治五年	明治五年
一千	三百	五百	二百五十	四百	三百	五百
瀨	百瀨	近藤	近藤	御子柴	酒井喜傳	長澤直作
黑庄	勘一郎	多吉	正之	彦太郎	次全	作全
平	全大字上瀨黑	全大字百瀨原	全大字百瀨	全	全	全

全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治五年	全	明治廿年	明治二十五年	全	明治元年	明治廿七年	明治元年
三百	八百	一千	三百	八百	四百	未詳	四百枚
武田文吾	河西福吉	河西大彌	荻原洲作	三村茂十	中村六郎	中村市彌	中村富十
全	全	全	壽村大字竹淵	全	全四百八十七番地	全百八十四番地	朝日村西洗馬四百八十四番地



●南安曇郡

職業	就業年限	蠶種製造高	姓	名(いろは順)	住	所
秋蠶種製造	明治八年	五百枚	井口	寅太郎	豊科村	
全	明治二十五年	三百	西澤	利兵衛	全	
全	明治二十九年	五百	西澤	儀重郎	全	
全	明治二十八年	二百	折井	卯市	全	
全	明治二十九年	五百	岡村	與一郎	全	
全	明治十年	八百	岡村	久吉	全	



全	秋蠶種製造	明治廿七年	二百	丸山玉藏 <small>全</small>
全	秋蠶種製造	明治廿五年	四百	丸山喜代太郎 <small>全</small>
春秋蠶種製造	元治元年祖父安右衛門創業明治廿八年再起業	明治二十年	四百	丸山卯吉 <small>全</small>
全	全	明治二十年	四百	丸山卯吉 <small>全</small>
全	全	明治三年	七百	丸山豐次郎 <small>全</small>
全	當時二代	當時二代	四百	丸山和藏 <small>全</small>
全	明治十二年	八百	松澤甚十 <small>全</small>	
秋蠶種製造	明治十九年	六百 <small>枚</small>	丸山光司 <small>豐科村</small>	

全	全	全	全	全	全	全	全
慶應二年	明治元年	當時二代	明治廿六年	明治元年	明治二十年	明治八年	明治二十五年
三千余	千五百余	四百余	六百余	四百余	四百余	千六百余	五百余
小松平三郎 <small>全</small>	小松岡衛 <small>明盛村大字中萱</small>	森本與一 <small>全</small>	水谷兵一 <small>全</small>	相野田梅吉 <small>全</small>	藤森長彌 <small>全</small>	藤森新吾 <small>全</small>	丸山丈吉 <small>全</small>



全	全	全	全	全	秋蠶種製造	春夏秋蠶種製 造販賣	秋蠶種製造
明治廿年	當時二代	明治十七年	明治元年	明治廿四年	明治五年	明治廿年	當時二代
七百餘	一千餘	秋原種三百 風穴習子	秋種千五百 風穴種三百	秋種七百 風穴種二百	一千餘	秋蠶二千五百 夏蠶二百 春蠶七百	一千餘 <small>枚</small>
小田原 龜 一 全	西澤 景 一 全 大字野澤	柴野 源次郎 全	中村 爲十郎 全	中村 佐吉 全 温村大字長瓦	三溝 彌平 全	佐々木 三壽造 全 一日市場	藤岡 嘉長 太 明盛村大字中萱

全	全	全	全	全	全	全	全
明治廿年	明治元年	明治十二年	明治廿年	蠶業五代 製種明治元年	明治元年	明治元年	明治十三年
八百餘	二千餘	一千五百	一千餘	一千五百	一千四百	二千五百	一千餘
降旗 惣 一 全	降旗 金 十 全	務臺 與三郎 全	務臺 儀平 全	務臺 量一 全 美蠶館主	務臺 量平 全 第一扶桑館主	中田 和人 治 全 農桑館主	塚田 今朝次郎 全 農桑館主

南安風習

七



秋蠶種製造	全	全	全	全	全	全	秋蠶種
明治廿一年	明治元年	明治廿年	明治元年	明治二十年	明治元年	明治三年	明治廿八年
八百余枚	夏秋原種 一千	一千余	一千余	五百余	一千余	製苗數 二十万本 秋種八百	三百余
小林 今朝太郎	水谷 善次郎	水谷 今朝五郎	樋口 文四郎	樋口 政吉	樋口 彌太郎	樋口 彦一	神谷 登一
温村大字野澤	全	全	全	全	全	全	全大字佳吉

一〇八

秋蠶種	全	全	全	全	秋蠶種製造	秋蠶種	全
明治廿二年	明治十九年	明治廿五年	明治廿五年	明治十年	明治二十二年	明治十八年	明治廿八年
秋蠶一千 風穴三百	五百金	五百余	五百余	五百余	一千余	千八百余	三百余
關 又 吉	野 本 金 藏	甕 源 四 郎	那須野 清 作	竹岡嘉一 郎	小 穴 喜 作	兒 島 勇 吾	降 旗 文 藏
實業館主	全	全	全	全	全大字楡	風穴取扱人	全

南安曇郡

一〇九



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治十一年	明治廿八年	明治廿五年	當時二代	明治八年	明治廿年	明治二十四年	明治十年
三百余	三百余	三百余	一千余	一千余	三百余	三百余	五百余 <small>枚</small>
三澤	青柳啓次郎	松澤五郎藏	太田郡彌	降旗五郎衛	田多井勘司	田多井和清	關關彌
全	全	全	全 <small>大字橫澤</small>	全	全	全 <small>倭村南大妻</small>	全 <small>温村大字楡</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
明治二十年	文久元年	明治廿年	當時二代	當時二代	全	明治年間	當時二代
未定	三百五十	秋蠶四百 夏蠶二百	五百余	七百余	七百余	四百	五百余
田多井	太田喜傳次	西牧長太郎	伊藤茂三郎	伊藤只吉	齋藤久米吾	中澤今朝次郎	中澤理平
全	全	全	全	全 <small>梓村大字立田</small>	全	全	全 <small>大字南大妻</small>



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治八年	明治廿年	明治廿三年	明治廿八年	明治二十二年	明治二十八年	明治年間	明治八年
五百余	五百余	三百余	二百余	二千余	五百余	五百余	百五十余 <small>枚</small>
岩原順一	倉田佐太郎	大池米彌	金井泰吉	宮坂兵重	倉科千代	上兼謙佐	野村茂市
井 <small>三田村大字小田々</small>	全	全	全大字木口	全	全	全大字下角影	梓村大字立田

一一三

全	全	全	全	全	全	全	全
明治廿五年	明治廿九年	明治十年	明治廿一年	全	明治九年	明治廿四年	明治廿八年
三百余	三百廿余	四百五十	五百余	一千余	一千余	三百余	三百余
山田和十	山田久市	山田寶太郎	塚田豊太郎	兩角團藏	丸山諫男	横山浦次郎	一志松太郎
全	全	鳥川村大字下堀	小倉村	全	全	全	全

南安縣郡

一一三



全	全	全	全	全	全	全	秋鹽種製造
明治元年	明治廿五年	明治二十年	明治年間	當時二代	明治十九年	明治二十年	明治十年
三百余	三百余	二百余	四百余	六百五十	一千余	六百余	四千余 <small>枚</small>
等々力 類治郎 <small>全</small>	等々力 利久次 <small>全</small>	等々力 金作 <small>全大字重柳</small>	山本富貴藏 <small>全</small>	齋藤兵次郎 <small>全 扶桑館主</small>	小穴運平 <small>全 南穂高村大字蹈入</small>	石川半十郎 <small>全大字中堀</small>	平倉甚吾 <small>全 鳥川村大字下堀</small>

全	全	全	全	全	全	全	全
明治元年	明治二十年	明治十九年	當時二代	明治廿二年	明治年間	全	全
四百余	三百余	二百余	六百五十	五百余	四百余	未詳	未詳
小穴只市 <small>全</small>	丸山村次郎 <small>全</small>	小林佐一郎 <small>全</small>	下里作一 <small>全</small>	岡村吉太郎 <small>全大字寺所</small>	飯沼甚藏 <small>全大字細萱</small>	飯沼新吉 <small>全</small>	飯沼多忠次 <small>全</small>



全	全	全	全	全	全	全	全
明治十年	明治八年	全	明治年間	明治八年	明治十年	明治九年	明治十年
七百餘	千餘 <small>穗高組合組長</small>	五百餘	六百餘	七百餘	八百餘	八百餘	七百餘
青柳重郎次 <small>全</small>	青柳豐秋 <small>全</small>	小平綠次 <small>全</small>	小平長次郎 <small>全</small>	小平最次郎 <small>全</small>	矢口豐藏 <small>全</small>	山地政一郎 <small>全</small>	村山榮策 <small>全</small>

全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治廿七年	明治九年	明治十一年	全	全	明治十年	明治九年	明治年間
一千餘	六百餘	一千三百	六百餘	五百餘	五百餘	一千餘	三百餘 <small>枚</small>
相馬愛藏 <small>全</small>	武田政太郎 <small>全</small>	岡村廣藏 <small>全</small>	荻原龜市 <small>全</small>	尾川喜十全	西牧繁藏 <small>東穗高村</small>	小口善朔 <small>全</small>	飯沼多與吉 <small>南穗高村大字細萱</small>



秋蠶種製造	明治十年	五百余枚	平川嘉一郎	東穂高
全	明治九年	千二百余	飯沼藤次郎	北穂高村
全	明治十年	六百余	林俊逸	全
全	全	五百余	丸山勝權	全

●北安曇郡

職業	就業年限	蠶種製造高	姓	名(いろは順)	住	所
秋蠶種製造	明治廿年	二千余枚	市川	清	池田町	
全	當時二代	三百余	伊藤	圓治	全	
全	明治二十年	千五百余	片瀬	顯藏	全	
全	明治二十年	五百余	桂川	久吉	全	
全	明治二十年	七百余	片瀬	登	全	
全	明治十九年	八百余	勝山	忠兵衛	全	



全	全	全	全	全	全	全	秋蠶種製造
明治十七年	當時二代	明治八年	當時二代	明治二十一年	明治九年	明治十八年	明治十九年
二百余	千六百余	五百余	八百余	一千余	五百余	二百余	二百余 <small>枚</small>
北澤幸七 <small>全</small>	淺原兵吉 <small>全</small>	矢口文造 <small>全</small>	山本藤左 <small>全</small>	窪田傳助 <small>全</small>	遠藤重吉 <small>全</small>	中山眞市 <small>全</small>	片瀨末次郎 <small>池田町</small>

全	全	全	秋蠶種製造
明治十年	當時三代	明治十七年	明治十五年
五百余	八百余	二千五百	七百余
蜜澤嘉文次 <small>全</small>	鹽原喜美治 <small>全</small>	鈴木長重 <small>全</small>	生田常一 <small>會染村</small>



長野縣 器械製糸家

●小縣郡

明治二十二年起業

七百釜

合名 依田社 九子村

社長

下村龜三郎

副社長

今井仁藏

社員

柴崎傳五郎

佐藤定藏

清水喜右衛門



中山勘次  
小林春藏  
土屋久米三郎

明治廿二年七月起業

信陽館 上田町

明治二十五年六月起業

上田社 全

明治二十三年五月起業

神川社 神川村

明治二十三年七月起業

國分社 全

●北佐久郡

明治二十七年起業

二百五十釜

佐久良社 岩村田町

社長

出澤千之助

副社長

篠原今藏

支配人

原國介

内譯

出澤製糸場

高榮製糸場

清水製糸場

信東製糸場



篠原製糸場  
東條製糸場  
中島製糸場

明治二十六年九月起業

純水社  
小諸町

明治二十六年九月起業

碓氷社  
三井村

明治十五年七月起業

御牧館  
本牧村

●南佐久郡

明治二十一年起業

九百五十益  
合資會社  
大成社  
白田町

社長

川村清造

副社長

土屋助作

明治二十三年七月起業

白田製糸場  
白田町

明治十一年七月起業

日向製糸場  
青沼村

明治二十六年八月起業

田村製糸場  
野澤村

明治二十六年七月起業

田中製糸場  
北牧村

●諏訪郡

南佐久郡 諏訪郡



明治十一年起業

千八百三十八益

社員

開

明

社

平野村

林 清 吉

小松崎勝左衛門

林 要 吉

林 瀨 平

林 利三郎

尾 澤 辰之助

林 繼次郎

尾 澤 金左衛門

二三八

諏訪郡

小口音次郎

林 市 十

橋 爪 卯之吉

林 源左衛門

林 國 藏

片 倉 兼太郎

橫 內 源右衛門

片 倉 角左衛門

片 倉 吉五郎

橫 內 龜三郎

二二九



花岡作太郎  
林 金左衛門  
花岡民藏

明治二十三年起業

千百五十三釜

龍

上

館

平野村

館長

小口善重

社員姓名

小口村吉

笠原房吉

小口吉太郎

小口傳吉

笠原嘉八郎

笠原唯次郎

陸河登喜治

濱八郎

笠原龜吉

小口留藏

山岡千代吉

山岡八十吉

山岡久兵衛



小口齊一郎  
小口伍介

明治十年六月起業

矢嶋德十郎 平野村

全

矢嶋清次郎 全

全

今井梅藏 全

明治十三年六月起業

增澤玉三郎 全

明治十年六月起業

今井要四郎 全

明治六年六月起業

林新一郎 全

明治十六年六月起業

林 仙右衛門 全

明治二十一年四月起業

吉田和藏 全

明治九年六月起業

笠原福太郎 全

明治十年四月起業

宮坂清之丞 全

明治九年六月起業

宮坂市郎兵衛 全

明治五年六月起業

宮坂嘉右衛門 全

明治九年六月起業

青木増太郎 全

明治八年六月起業

青木末太郎 全



明治二十年六月起業	小口次郎	<small>平野村</small>
明治二十一年四月起業	吉田嘉代藏	<small>全</small>
明治六年六月起業	武居國吉	<small>全</small>
明治十一年四月起業	宮坂久米之介	<small>全</small>
明治二十六年六月起業	林竹五郎	<small>全</small>
明治五年六月起業	小林常重	<small>全</small>
明治六年六月起業	濱視之介	<small>全</small>
明治二十三年六月起業	增澤三四郎	<small>全</small>

一三四

明治十年六月就業	增澤龜之介	<small>全</small>
明治廿四年六月起業	林增藏	<small>全</small>
明治二十一年六月起業	增澤伴三郎	<small>全</small>
明治十一年六月起業	兩角傳助	<small>全</small>
明治廿六年六月起業	宮坂金藏	<small>全</small>
明治二十五年六月起業	鮎澤久五郎	<small>長地村</small>
明治十一年六月起業	渡邊豊治	<small>全</small>
明治二十三年五月起業	今井半之介	<small>全</small>

職訪

一三五



明治二十六年七月起業

今井助四郎 長地村

明治九年六月起業

片倉兼太郎 川岸村

明治十一年六月起業

片倉幾太郎 全

明治九年六月起業

三井仁兵衛 下諏訪町

明治十一年六月起業

條遠兼藏 全

明治十一年六月起業

小河原繁藏 全

明治二十三年六月起業

小松幾三郎 全

明治二十六年六月起業

北辰館 全

明治十二年六月就業

永田國三郎 全

明治十八年六月起業

井上善次郎 全

明治二十四年六月起業

小口森藏 全

明治九年六月起業

茅根彌右衛門 上諏訪町

明治二十四年六月起業

九藏米作 全

明治二十二年六月起業

大和茂平治 全

明治十年六月起業

藤森源左衛門 全

明治二十二年八月起業

小川製糸場 永明村



明治三年六月起業	丸茂製糸場	永明村
明治二十三年六月起業	洲羽製糸場	全
明治二十三年六月起業	玉川社製糸場	全
明治二十三年六月起業	金龍社製糸場	金澤村
明治九年七月起業	岳旭館製糸場	宮川村
明治二十六年七月起業	富岡館製糸場	全
明治十年一月起業	歐米社製糸場	全
明治二十五年六月起業	府岳館製糸場	全

明治十二年六月起業	小池鯉鮒藏	中洲村
全	平林正邦	全
明治十一年六月起業	關伊助製糸場	湖南村
全	關利右衛門製糸場	全
明治二十三年五月起業	中道館製糸場	豊田村
明治二十七年四月起業	笠原保次郎製糸場	全
● 上伊那郡		
明治十一年七月起業	合名會社 明十社	高遠町



明治十四年七月起業	樋口太郎七	高遠町
明治五年四月起業	天龍社	東伊那村
明治二十三年六月起業	蠶業社	宮田村
明治十二年七月起業	新營館	全
明治二十年六月起業	伊那商社	西箕輪村
明治十七年六月起業	中伊那社	南向村
明治十五年六月起業	長信社	全
明治十八年三月起業	開睦社	川嶋村

明治十六年七月起業	唐澤權九郎	中箕輪村
明治八年五月就業	小村金六	全
明治八年六月就業	天龍社	中澤村
明治十九年六月起業	竹井寛太郎	伊那富村
明治二十七年六月起業	龍東社	朝日村
全	朝陽社	全
明治二十五年六月起業	小野社	小野村
明治十七年六月起業	大陽社	赤穂村



明治十一年七月起業

中伊那組  
赤穂村

● 下伊那郡

明治十二年七月起業

關川製糸場  
市田村

明治廿六年六月起業

下平製糸場  
全

明治十七年七月起業

木村製糸場  
全

明治十七年七月起業

長姫製糸場  
上飯田村

明治十九年六月起業

熊谷製糸場  
全

明治十一年七月起業

松葉軒  
鼎村

明治八年五月起業

窪田生糸製糸場  
松尾村

明治二十年四月起業

福島生糸製糸場  
全

明治十七年六月起業

菅沼製糸場  
下川路村

明治十六年八月起業

岡田製糸場  
秦阜村

明治六年六月起業

吉澤工場  
龍江村

明治九年六月起業

市瀬工場  
全

明治十二年四月起業

藤本工場  
全

● 東筑摩郡



明治二十三年六月起業	上條館	摺尾村
明治二十一年六月起業	島内工場	嶋内村
明治二十四年四月起業	養元社	洗馬村
明治二十五年四月起業	南養元社	全
明治二十三年六月起業	三村養元社	朝日村
明治二十三年六月起業	片倉製糸場	松本町
明治二十六年七月起業	犀上館	全
明治二十三年六月起業	信明館	全

明治二十四年六月就業

河野製糸場全

明治二十三年五月就業

桃井製糸場今井村

●北安曇郡

明治十四年七月就業

得信社大町

明治二十三年六月起業

倉科社常磐村

明治二十三年六月起業

上原製糸場池田町

明治十二年七月起業

山崎製糸工場會染村

●更級郡



明治二十六年七月起業	奎運館製糸場	力石村
明治二十七年七月起業	合資會社 更級社	上山田村
明治二十二年七月起業	信夫社	信田村
<b>埴科郡</b>		
明治七年六月起業	合資會社 六工社	松代町
明治二十六年三月起業	糸王館	全
明治二十一年七月起業	合資會社 松代製糸場	全
明治二十六年七月起業	合資會社 東埴科社	森村

明治二十一年七月起業	合資會社 松城館	東條村
明治廿一年七月起業	有明社	埴科村
明治二十六年六月起業	合資會社 埴科社	全
<b>● 上高井郡</b>		
明治十年八月起業	東行合資會社製糸場	須坂町
明治十八年五月起業	俊明合資會社製絲場	全
明治二十六年六月起業	牧新七	全
明治二十五年六月就業	救茂助	全



明治二十六年七月就業

北野館 保科村

明治二十六年七月就業

寶榮社 井上村

明治十年三月就業

大島貞助 全

● 下高井郡

明治二十年五月就業

日出松社 中野村

● 上水内郡

明治二十四年六月就業

岡本製糸場 長野町

明治二十五年七月就業

長野物産會社 芹田村

明治二十三年七月就業

北嶋 宇兵衛門 三輪村

上水内郡 下高井郡



群馬縣器械製糸家

碓氷郡

明治二十四年七月起業

千餘

內

譯

會社

碓

氷

社

東横野村

北

九

十

九

組

後園村

仙

流

組

細野村

源

泉

組

全

晃

明

組

原市町

盛

立

組

全

東

九

十

九

組

全



●西群馬郡

新	横	清	上	稻	春	白	藤	碓
堀	野	和	千	葉	日	精	卷	東
			鳥					
組	組	組	組	組	組	組	組	組
松田井町	全	全	全	磯部村	全	全	九十九村	白井町

明治二十六年六月起業

麗水社  
倉々野町

明治二十年九月起業

旭社  
高崎町

●前橋市

明治二十六年起業

昇龍社  
立川町

明治二十二年五月起業

串田製糸場  
前田代村

明治二十七年起業

桐華社  
本町

明治十八年六月起業

中嶋製糸場  
向町

明治二十六年起業

天原社  
新町



明治十一年八月起業

交水社  
一毛村

明治二十二年六月起業

笹原製糸場  
菟村

● 吾妻郡

明治十六年四月起業

田村製絲場  
岩島村

明治二十三年四月起業

富澤製絲場  
全

● 北甘樂郡

明治二十三年四月起業

馬山神戸製糸場  
馬山村

明治二十二年七月起業

共良社  
磐戸村

明治二十三年十月起業

檜澤社  
全

明治二十一年七月起業

大竹製糸場  
福嶋町

明治五年十月起業

富岡製糸場  
富岡町

座繰製糸家

● 前橋市

明治十年六月起業

富岡製糸場  
神明町

明治十三年六月起業

岡部製糸場  
向町

明治二十五年六月起業

五十嵐製糸場  
全



明治二十一年六月起業	荒井製糸場	小柳町
明治二十二年九月起業	中村製糸場	向町
明治二十三年六月起業	根岸製糸場	才川村
明治二十年六月起業	早川製糸場	全
明治二十年六月起業	松枝製糸場	萱町
全	松枝製糸場	芳町
明治二十一年起業	岩崎製糸場	岩神
明治十二年六月起業	大橋製糸場	立川町

明治二十一年六月起業	小川製糸場	一毛村
明治二十年六月起業	關口製糸場	全
明治二十二年六月起業	藤塚製糸場	細ヶ澤
明治二十年五月起業	内海製糸場	片貝町
明治十五年六月起業	山本製糸場	中川町
明治十八年六月起業	飯塚製糸場	全
明治二十五年六月起業	林製糸場	諏訪町
明治十八年六月起業	中村製糸場	紺屋町



明治二十三年六月起業

青木製糸場 紺屋町

明治廿四年六月起業

近藤製糸場 萱町

明治二十年六月起業

長谷川製糸場 細ヶ澤

明治廿四年六月起業

三品製糸場 相生町

●利根郡

明治二十三年七月起業

星野製糸場 沼田町

●北勢多郡

明治廿七年七月起業

加藤製糸場 糸ノ瀬村

蠶業家必携上編 終



明治三十年四月廿一日印刷  
明治三十年四月廿四日發行

編輯兼人  
茨城縣東茨城郡河和田村大字赤塚  
十番地  
兩貝誠一郎

印刷者  
茨城縣水戸市上市荒木町  
高木留吉

印刷所  
茨城縣水戸市上市荒木町  
高木印刷所



